
異世界の異常者 ~世界よ変われ~

ahahaha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の異常者 ～世界よ変われ～

【Nコード】

N2724V

【作者名】

ahahaha

【あらすじ】

過去の経験より、物事の見方が完全に屈折してしまった少年。突然異世界へと迷い込んだ彼は、その世界で己の野望の火を燃え上げます。

常人とはどこかずれながらも、決して人らしさを失わない男の異世界冒険記。

「都合主義があると思います。」

そういつたものが許せない人は・・・お任せします。

以前投稿しましたがすぐに消したのでほぼ初投稿＋処女作です。

至らぬところがあればご指摘お願いします。

おかげさまで投稿から90日で300万PV、45万ユニーク達成
しました！これからもよろしくお願いします！

これから更新は大学が始まるので、5日に1つを目標に投稿させて
もらおうと思います。理由がありそれ以上間が開くときはここ
で言います。

11/23 文化祭、テストに
より時間が取れず・・・更新は25か26の0時になりそうです

1話 異世界？ or あの世？

うつそうと茂る森の中。

地面へと到達する光が露を照らし、その反射光が幻想的な雰囲気醸し出している。

豊かな生態系を作り上げている多くの生命に溢れた美しい光景。

奴らさえいなければこの世の楽園と呼んでも差し支えないだろう。

そんな森の中に1人の少年が倒れていた。

年齢は十代半ばから後半

身長175cm程のやせ型の体形

日本人らしい黒髪黒瞳

服装は黒のジャージにプリントTシャツといったラフなもの

顔立ちは一際立つてとは言えないまでも、端正と言っても問題ない程度には整っている

そんな彼、しるみねい白峰令が目を覚ます。

「……………」

令は仰向けのままぼんやりと空を見つめる。
そして今自分が置かれた状況に気が付くと、

「なんでこんなところにいるんだろ？」

緊張感の欠片もなさそうな声で呟いていた。

「なんで森の中なんかにいるのかな。こんなとこに足を踏み入れた記憶は」

そこで令はふと気づいた。自分の頭の中の変化に。

「記憶はない、な。」

ついでに何故か他にもいろいろと大事な記憶まで逝っちゃってやがるが。」

彼は途方に暮れたように溜息を吐いた。

そう、令は目を覚ます直前の記憶を文字通り失っていた。故になぜ自分がここにいるのかも分からない。

そして彼が失った記憶はそれだけではなかった。

「無くなったもので今浮かぶのはとりあえず、ここに来る直前の記憶。」

そして、家族を含めた他人のすべての交友関係・・・

なんかまるで大企業の陰謀に巻き込まれて記憶を消された企業スパイみたいだな。」

令は苦笑交じりに呟き、近くの木に寄り掛かった。

もちろん彼も本気でそんなことを考えているわけではない。

しかし彼が失ったのは、親友と心から呼べると断言できるほど仲の良かった者たちをも含めた、すべての「他人」についての記憶。

「あいつ」「や」「こいつ」、そして「あの人」たちとどんなことをし

て遊んだのか、どんなことで喧嘩したのか。つまりその人と何をしたのかは覚えている。

令が失ったのはそれが誰とのものなのか、それらが誰なのかというものであった。

それらの記憶は当然、令にとって大事なものだだったので、そんなろくに笑えない冗談でも言わなきゃやってられなかったのだ。

「ふう、愚痴つてもしょうがない。

とりあえず自分の状況を把握しないと。」

そついい彼はまず自分の体を確かめてみる。

「少なくとも見たところ自分の体に異常はなし。

どこかが骨折してたりといったこともなく、筋肉を傷めたりもしてない。

頭の中も割とすっきりしていて、状況の把握に対しての問題にならないだろう。

つまり、俺自身はいつも通りだと。」

令は自分の体をよく観察する。

詳しいことはそれこそ精密検査でもしないと分からないが、外見上問題ない。

自分の体に異常がないことを彼は素直に喜んでいた。

だが彼はそこで、先ほどの自分の発言の、そして自分自身の異常さに気が付き愕然とする。

(いつも通り?)

そついえば何故俺はここまで冷静でいられるんだ?

ここが何処なのか、何故ここにいるのかも分からないこの理解不能な事態に。

普通なら間違はなくパニックになるし、下手したら発狂したって不思議じゃない筈だ。」

人は理解できないことに直面した時、無理やりつじつまを合わせて自分を納得させようとする。

そうして、それが余程荒唐無稽なことでない限りは、その認識に多少の齟齬があつたとしても勝手に自己完結させてしまふのだ。

と言つてもこれはおかしなことではなく単なる自己防衛であり、まったくおかしいことではない。

人はこれにより、「余程のこと」がない限りは自己＝精神 ころを保つことができている。

しかし皮肉なことに、普段そうして守られているからこそ、人の精神はその「余程のこと」が起きると信じられないほど脆くなる。

いくら考えても納得できず、事態を受け入れられない。

それにより現実を受け入れられなくなった精神は自分の中に閉じこもることを選び、緩やかな破滅への道を突き進むことになる。

そして今の令の状況は間違いなくこれに当てはまる。

にも関わらず彼は、慌てるどころか動揺すらしておらず、淡々と自らを省みている。

その理由を彼はしばらく考えていたが、答えは出ない。

その答えを彼が知つたのは、自分のポケットのふくらみに気づき、中身を改めた瞬間だった。

「ハハハッ！」

「なんだ答えなんて最初から分かり切つてたじゃないか。」

疑問が氷解しすつきりした令は中身を取り出し、心から愉快そうに笑う。

彼が取り出したもの、それは、

「俺は、最初っから、異常だったんだ。」

紛う事なき、銃だった。

もちろん日本では高校生だった令が持ってたもの、当然実銃ではない。

だが、彼が自身で調べられるだけの知識とエゴを持って造られたそれは、実銃に限りなく近い威力を誇る。

言うまでもなく違法であり、もし他人に見られようものなら、問答無用で確実に少年院行き+取り返しのつかない程の社会的地位の失墜を招く。

彼はそんなものを普段から護身用に持ち歩いていた。

(いくら『あの事件』に遭ったからといって、こんなものを持ち歩くような奴がまともな精神の持ち主であるはずがない。

まあ、自分で言うようなことじゃないかな。

それにしても、友人は忘れたのに『あの事件』は覚えてるなんて俺って薄情な奴だったんだな。)

自分の薄情さ、そしてこんな事態になっても『あの事件』を鮮明に覚えてたままの自分の頭に対し、令は苦笑する。

しかしいつまでも反省しては事態が好転する筈もないので、気を取り直して状況の把握に戻る。

「これが一緒だったのは望外の幸運だな。

下手な猛獣ならこれ一発で終わりだ。

弾は弾室含め装填済み9発、マガジン3つの計33発。

大事に使うとしよう。」

令は銃をポケットにしまう。

いくら落ち着いていても、決して不安がないわけではなかったのだ

ろう。

明確な武器を手に入れたことにより、令には先ほどまでにはない安心感を得ていた。

そうして、ようやく令は周囲に目を向ける。

「森の中か・・・」

食糧についての心配がなさそうなのはいいのだが、毒虫や植物については気をつけないと。

幸い、中学の時に一時期そんなにはまったことが有るから多少知識はあるから何とかなるだろ。」

この男、多少などと言ってはいるが、その知識の量は下手をしたら専門の学者に匹敵するほどである。

令は自分の興味のあることに対してはあり得ないほどの集中力を発揮し、まるでスポンジのように知識を吸収することができる。

それにより、植物学についてもかなり詳しく、毒草の特徴といったものをほぼ完全に把握できていた。

しかし、そこで彼は重要なことに気づいた。

「ん？」

なんだこの森の植物。

なんでこんな不自然なんだ？」

この森の植物はいろんな意味で奇妙だった。

「あの木は表皮がどう見ても光沢帯びてるし、あの花は絶対に日が当たらない場所なのに満開だ。

あの木に至ってはどう見ても岩から生えていやがる。」

通常、植物の表皮はセルロースというものでできている。

これは当然有機物で、骨のない植物が形を保つためにそれなりの硬

さを持つているが、決して金属のような光沢をもつことはない。さらにこれまた当然のことだが、一部を除いて植物は成長に日光が必要だ。

無くても生きることとはできる場合もあるが、それでも満開の花を咲かせることはないはずだ。

岩から生える木に至ってはそもそも木が岩以上の硬さを持っていないければ無理である。

それ以外にも、今の周りには不自然が目白押しだった。

「ひとつふたつならともかく、これだけ奇妙なことが存在するなんてありえないんだが……」

そういつて黙考するために今は空を見上げる。

そこで彼は今の自分がどんな場所にいるのか、それを正確に把握する力ギをみつけた。

「ジーザス……」

それに気づいた令は、自分でも受け入れるのが難しいその状況に、うめくようにそう呟く。

最初ぼんやりと眺めていた時は気づかなかったが、

そこには太陽が、ふたつあった。

「異世界、もしくは死んであの世か・・・？
俺は小説の主人公じゃないぞ・・・」

2話 魔獣

令はしばらく空を見上げて呆けていた。

自分が異世界にいるなど、さすがの彼でも受け入れるのに少しの時間を要した。（普通なら少しで済む訳がないのだが）

とりあえずこのふざけた事態を受け入れることに成功した彼は、落ち着くまでの間、どうでもいいようなことを考えることで間を繋ぐことにした。

（少なくとも地球ではないな。

しかし恒星ががふたつあるのに今のところ気温は地球・・・いや日本とそう変わらない。

むしろ快適そのものだ。

見たところ大きさからして、この星にそそぐひとつの太陽（便宜上そう呼ぶことにする）からの光線量は地球と変わらないはずなのになんでだ？）

太陽がふたつある以上、単純に考えて地球よりも気温が高くなってはおかしい。それなのに少なくとも今は快適であることに令は疑問を覚える。

「太陽がふたつあるとなるとこの星の暦は地球とまったく違ってるだろうな。慣れるまでが大変そうだ。」

暦はその星の公転と自転の周期で変わる。

そしてその周期は星同士で働く引力で変わる。ということは恒星がふたつもこの星の周期は、まず間違いなく地球とは違っているはずなのだ。

・・・少なくとも地球の常識で考えるならば、だが。

「しかしこの世界はどっちなのかね？」

あの世なのか、異世界なのか？

ああ、いや、あの世というのは異世界のカテゴリに含まれてしま
いそうだから、どっちにしても異世界かな。

お、よし。

そろそろ落ち着いてきたし次を考え・・・！？」

適当に考え事をする事で今は落ち着くことができたので、頭を切
り替え建設的なことを考えようとした。

「な、んだ、これ？」

しかし、すぐに彼はある感情が暴力的なほどの勢いで自分を支配し
ていくのを感じ、思考を中断した。

それは自分自身が困惑してしまうほどの、感情の津波とも呼ぶべき
もの。

それはありきたりな人間が感じるような、故郷から連れ去られたこ
とによる望郷の念などではない。

令を満たしたものの、それは『喜び』

「ああ。

そう、そうなんだ。

俺はこんな出来事を求めている。

心のどこかで非日常の世界を欲していたんだ！」

だれも見えていないというのに両手で顔を覆い隠す。

しかしそれでも、令の溢れんばかりの喜びを隠すことなど微塵も出来ていなかった。

彼は何も、以前の世界の生活に不満があったわけではない。

数少ないとはいえ、（今は忘れてしまっているが）友人と過ごす日々は楽しく、それなりの波乱に満ちていて、幸福ですらあった。

だが同時に、満足していたわけでもなかったのだ。

彼はいつも、他人との間に認識の「ずれ」を感じていた。

他人にとっての常識が、自分にはどうしても受け入れられないといったことがままあったのだ。

それは我慢できる程度の「ずれ」でしかなかったのだが、それでもやはり彼の中には漠然とした不満のようなものが溜まっていった。

『あの事件』により、令は非日常の世界を知った。

『あの事件』により、令は自分の常識がいかに簡単に崩れるかを知った。

今の令の性格を、木と表現するとすれば『あの事件』は、その木を育てる土と呼べるほどに彼の根幹を成していた。

これを原因としたその「ずれ」は、やがて彼の非日常を求める願いへと昇華していた。

そうした経緯もあり、今の状況は彼にとって歓迎すべき事態なのだった。

かなりの時間を要したが、その喜びを抑え込むことができた令はようやく行動を開始することにした。

（何よりもまず食糧と水をなんとかしないと。見たことがない植物ばかりだが、元の世界の毒草の知識を使えばなんとかならないだろうか。）

元の世界では植物の知識により、大抵の毒のあるものとそうでないものの区別をつけることができていた。といってもこの異世界でその知識がどこまで通用するかが分からない以上、それに頼り切ることはできない。

（下手したら間違いなく死ぬ。

しかしなにも食わないで生きていられるわけもない。

一か八か、一番大丈夫そうなものを食べてみようか？

だがな・・・）

生きるか死ぬかの問題だけに、令は深く悩みこんだ。

なにか見極める方法がないかと思いを巡らす、そうそう都合のいい手が有るはずもなく、途方に暮れる。

仕方なく先ほどの考えを実行しようと動き始めた時、

彼はとうとう、奴らと出会う

令は後ろの茂みからガサガサという物音を聞いた。

彼の背中に冷や汗が流れる。

音は明らかに風などの自然現象ではなく、生き物が動いた時に出るものだった。

「そういえば以前トリップものの小説を読んだっけ。

たしかその手の話ではこういう場合大きく分けてふたつのパターンがあったな。

ひとつは、現地住民との接触。

そしてもうひとつが

「

茂みの中の生き物が姿を現す。

」

その世界での敵との遭遇、と。

それは大きな、小型トラック程もあらずなサイズの虎のような存在だった。

ようなというのは、普通虎は腕に刃物など付けていないからである。その刃物は忍者が腕に付けるような、手鎌のような形状をしていた。そして何故か、それは血に塗れている。

この存在の呼び名こそが、この世界の敵である奴ら、魔獣である。

3話 魔法

「グルルルル……」

目の前の虎は血走った目で令を見る。

4本の脚はそれぞれ子供のお胸ほどの太さを誇り、その顎は令の頭なごひと口だ噛み砕けるだろう。

そして一番の存在感を誇るその刃は、間違いなく人ひとりぐらいなら真つ二つにできると確信できるほどの鋭い輝きを放っている。

しかし彼はそれを見ても怖くはなかった。

いや、恐怖よりもある感情のほうが勝っているためそう感じていた。それは困惑。

「手負い……?」

その獣は誰がどう見ても重傷と断言できるほどの傷を負っていた。

常ならば光を反射して白銀に輝いているであろうその毛皮は血でまみれている。

そして腹は大きく裂け、細かいが、それなりに深いと思われる傷が全身に刻まれていた。

（どういうことだ?)

まさかこの森にはこんな化け物をスタスタにできるような生物がうようよいるのか?)

目の前に在る存在が間違いなく自分よりも強大であるにも関わらず、その存在が今にも倒れそうなほど弱っている事実、令は動揺を隠せずにいる。

猛獣を前にして彼が無駄な思考をできる余裕があるのは、銃がある

からだ。

武器さえあれば、ただでさえ死にかけの目の前の存在などどうともなると考えてしまった。

「とにかく今はこいつをなんとかしないと。
いやはや、これがあってホントによかった。」

そう言い今は軽い気持ちで銃を構え引き金を弾く。彼は忘れていた、ここが異世界だということを。的が大きい分、狙いをつけるのは容易かった。銃口から放たれた凶弾はまっすぐに虎へ向かう。

そして、甲高い音を響かせて容易く弾かれた。

「んなッ!?!」

想定しなかった結果を前にし、思考が一瞬止まる。それは敵を前にやっつてはいけない一番の愚行。

「ゴガアアツアアツア!!!」

虎は銃弾を意に反さず、令へと飛びかかって来る。

集中してさえいれば令でも何とか避けられる速さだったが、思考が止まっていた彼には脅威でしかない。

幸いにも刃の部分は当たらず、咄嗟にしゃがみ込むことで直撃は避けられた。

だが、服が爪に絡め捕られ数メートルの距離を弾き飛ばされる。

「がはッ、ごほごほ・・・」

強かと木に叩き付けられ、思わず咳き込む。

今の一撃でＴシャツはぼろ雑巾のようになってしまった。
そんな状況でも銃を手放さなかったのは流石といえる。

(これじゃあ駄目だな。

何とか距離を取り時間を稼がねば・・・)

正直距離を取ったところでどうしようもないのは百も承知だ。

だが、ここで無様に痛み悶えているよりはましだろう。

令はそのようなことを考え、動いた。

立ちあがり、激痛にしびれる体に鞭打ち駆け出す。

「向かうならあっちだな・・・!」

令はそう言い、下り坂となっている方へ向かう。

何故下り坂?と思う方がいるかもしれないが、虎といった四足動物は重心の関係上、総じて下り坂を苦手とするのである。

追い詰められた状況でよくここまで冷静でいられるものだ。

令はただ走る。

生き延びるために。

「ガアアアアッアアア!!!」

虎もまた走る。

生きる糧を得るために。

「はあ、はあ、ああくそ・・・

なんであの傷であんなに動けるんだあいつは。」

令はひとりごちる。

今彼は逃げる途中で見つけた横穴へと逃げ込んでいた。

入口は草に隠れていて外からは見えず、穴の大きさも虎は入ってこない程度という都合のいいものだった。

その奥で荒い息を落ち着けようと努めている。

「非日常の住人になれたという事実には浮かれすぎていた・・・

こんな状況になることくらい予想して然るべきだというのに。

まったく情けないものだ。」

皮肉げな笑みを浮かべるが、頭を振り現状の打破を目指す。

「これが通じないとはな・・・

結構な自信作だったんだが。

そして現在これが俺の持ちこたえる最強の駒である以上、残るは素手か。

でも人間が素手で対抗できるのは大型犬サイズまでの動物が限界って聞いたな。

あれはどう見ても大型車ぐらいのサイズがあるわ、そもそも銃弾弾くわで無理。

畏なんかも時間さえあれば何とかできる自信があるが、その時間がない。

「…………詰んでね？」

令は口ではそう言うが、その表情は緩み、笑みさえ浮かべる。当然、何か手が有るわけでも、気が狂ったわけでもない。だが、今のこの状況が彼には楽しかった。

（生きるか死ぬかを決める、最も根源的な争い！

元の世界ではまず味わえない、この極限状態にここまで心躍らせるとは！

俺って実は戦闘狂だったのか？

いや違うな、俺はただ、向こうで感じていた「ずれ」が解消されるかもしれないことを喜んでい るんだ。

いや、今はそんなことはない。

この世界を楽しむためには、あの虎をどうにかしないとまらないのだから。）

事実、今も横穴の外では虎が令を探して歩きまわっている。

先ほどの一撃で血を流していたので、遠からず匂いで見つかったしまうだろう。

「結論としては、今の俺ではどうしようもできない。

そう、「今」の俺では生き延びれない…………」

令は獰猛な笑みを浮かべると、自分のこれからの行動を口にする。

「簡単なことだ。

「今」の俺に不可能ならば、これからあいつに対抗できるだけの「もの」を身につければいい。」

この夢物語を聞けば、多くの者が正気を疑うであろう。どうしようもない、ただ死を待つしかない状況になったせいで、狂ったのだと。

そんな「もの」が都合よく在れば、誰も苦労しないのだから。しかし、彼には確信があった。

この世界に來た時から、感じていた身体の違和感、まるで自分の中に新たな命が芽生えたような感覚。

始めは無視してしまえる程の僅かな感覚でしかなく、異世界に來たことによるものだと思っただけだったので気づかなかった。

だがそれは、時間が経ち、今が命の危機を強く感じるようになるほど大きくなっていた。

まるで自分を使えと叫ぶかのように。

「使えというなら使ってやる。」

それでどうにかなるといふのなら、な。」

普通ならそんな曖昧な感覚を信用するなどありえない。

しかも、自分の命がかかっているのだからなおさらだ。

それでも今は自分の感覚を信じ、その違和感が命じるままに、穴の入口へ銃を構え念じる。

「願うのは槍。」

すべてを貫く槍。

命を奪い取る槍。

己の敵を消すための槍！」

令は無意識の内にそんな言葉をつぶやく。

それは自身の創造をより鮮明にするための儀式。
彼は知る筈もないが、今彼が使おうとしている「もの」はイメージ
が何よりも重要だった。

使用者が望むことを、使用者のイメージの強さに応じて引き起こす
奇跡

その技術はこの世界の者たちにはそう認識されている。

その認識は、厳密に言えば細かい間違いがあるが、大筋としては間
違ってはいない。

彼は無意識の内に、その技術を行使するために最適な方法を探っ
ていた。

「グルアアアアアア！」

虎が横穴を見つけ、令を捕まえようと穴に頭と腕を入れてきた。

後わずかに届かないところにまで爪が届き、凄まじい威圧感と殺気
を放ってくる。

だが令はそれを意に介さない。

今彼は、まるで自身が人間よりも上位の存在になったかのような不
思議な全能感に満たされていた。

自分に敵はいない

まして、目の前の死にかけの存在に遅れをとるなどあり得ない

俺は今、世界の中心にいる

そんなとてつもなく分不相応で不遜な考えが、彼の頭を過ぎる。

彼は自分な中から溢れる感じたことのない力に、冷静さを失ってい
た。

虎の眉間に照準を合わせ、引き金を弾く。

とたんに彼の中から「何か」が吸い取られていく。

先ほど虎に放ったときとはくらべものにならない程の轟音と閃光。

そしてこれが、この世界で令が初めて「生き物」を殺した瞬間であり、

魔法を手に入れた瞬間だった。

4話 旅立ち

「ふい〜」。

とりあえず当面の危機が去ったことで令は緊張を解く。

脱力した令の前に、さっきまで彼の脅威だった存在が転がっている。先ほどの一撃は、この生物の眉間を打ち抜き、そのまま何の抵抗も無いかのように貫いていった。

期待していた以上の、過剰とも言える破壊力であった。

そしてその代償もまた。

「だるい・・・」

まるで体のやる気が全部持ってかれたかのようなだ。

なんもやる気になれん・・・」

今の令にとって、いる場所が横穴であることはこの上ない僥倖だった。

今ならたとえ、ネズミにでも殺されてしまうのではないかと思うほど彼には覇気がない。

そのまましばらく全身の力を抜き、ぐて〜とニートのように寝転がる。

しばらく、時間にして30分ほどそうしているとようやく気力が回復し、穴から出る。

そして、虎の体を調べ始める。

「この腹の傷・・・、何かの牙の痕だな。

これくらい歯型の大きさだと、身体の大きさはおおよそ2〜3メートルはあるな。

・・・おいおいなんだここ、巨大動物の巣窟か？

問題はその生物の強さか。

そういえばこいつは、初め手の刃に血を付けていたな。

そいつのものだったのか？

だとするなら、そいつは大体こいつと同じくらいの強さということか。

まあ、この血の持ち主はこの傷を付けた奴とは限らんし、相性というものもあるから参考程度にしか役には立たん考察だな。」

令は考察を一通り終わると、次は役に立ちそうなものを「某大人気狩猟ゲーム」の如くはぎ取ることにした。

「よつと。

まあこんなものだな。

毛皮、爪、牙、肉、そして刃・・・

なかなかの量が採れた。

苦労した甲斐があったな。」

令は他のものはぎ取りやすいようにまず、刃を採ろうとしたのだが、これが面倒だった。

刃そのものは硬いので、付け根部分からへし折ろうとしても果たせず、仕方なく尖ったナイフ状の石を見つけたり、石を割って造ったりしたのだが、如何せん毛がとてつもなく頑丈で、石では一本も切

れない。

伊達に銃弾を弾いたわけではなかったようだ。

仕方なく毛をより分け、皮に直接石を突き立て、ひっかくようにして地道に切るしかなかった。

そんなやり方なのだから時間がかかって仕方がなく、刃を採れたあとはそれを使うことでスムーズにいったが、終わったところには日が暮れてしまっていた。

「もう辺りが暗くなるな。

とりあえず都合がいいし、この穴を生活拠点にしよう。

しかし、急いで水場を見つけないとまずい……」

虎の肉を手に入れられたことで当分の食糧の心配は無くなったが、水はどうしようもない。

令は完全に暗くなる前にと、川か湧水を探しに駆け出した。

幸い、川が穴からそう遠くない場所で見つけることができ、令は近くに生えていた竹のような木を刃で切り、節と節の間の空洞を用いて水筒を作り水を汲んできた。

今彼はたき火で枝の串に刺した肉を焼いていた。

ちなみにこの火は、あんなことができたんだから念じれば火も出るだろうという予想に基づきやってみたら簡単に出せた。

(まったく便利なものだ、完全に魔法だな。

しかしこれにも何か法則のようなものがあるのだろうか？

もしあるなら、もっと簡単に魔法を使えるようになる筈だ。

今までのことからして、魔法、もしくは魔法に匹敵する何かを習得することが俺がここで生きていくための必須事項であり生命線。

地道に調べていくしかないか・・・

お、もうよさそうだな。)

魔法について考えていたが、結局のところ地道に検証をしていくしかないという結論に落ち着き、焼けた肉に関心を移す。

その肉はほどよくサシが入り見た目にもうまそうだったのが、焼かれることで漂う香ばしい匂いが凄まじい誘惑を空きっ腹に送ってくる。

朝からなにも食べていない令がその誘惑に抗えるはずもない。逸る気持ちを抑え、食べたことのない肉なので、もしダメなときはすぐに吐き出せるように覚悟して口に運ぶ。

「つつつ！！??」

だがその心配は杞憂だったらしい。

噛んだ瞬間に肉汁が口に広がり、濃密な肉の味が舌を直撃する。

何の味付けも必要としない、大自然の豊かさを感じる。

飽食の向こうでも食べたことがないほどの極上の味だった。

しばらくの間令は無心で肉を頬張っていた。

そして空腹も満たされ、水を飲み深く息を吐く。

「まさかここまでのものとは・・・

もしかしたら高級食材だったりするんだろうか？」

火が消えないように、拾った枝を投げ入れる。

そして、なし崩し的とはいえ、危険ではあるがこの森で生活することも不可能ではないということを理解した令は、もっとも重要な決断を迫られていた。

すなわち、この森を出るか、この森で暮らすかだ

(森を出ることの利点は、出さえすれば化け物に襲われる心配はないだろうということ。)

そして、他の人と関係を結び、協力することで生活が楽になる可能性があること。)

令はそれぞれの利点と欠点を挙げていく。

(そして欠点は、森を出るまでにのたれ死ぬかもしれない、それ以前にどの方角に人が住んでいるか分からない。)

たとえ人に会えたとしても、今特に力もなく、この世界の常識もない俺は余程のお人よしでもない限り利用されるだけになる可能性が高いこと。)

(森で過ごすことの利点は、食糧には困らないだろうということ。)

誰かを気にする必要もなく、力を付けることに集中できるということ。)

(そして欠点は、言うまでもなくあらゆる動植物による多大な生命の危機。)

まったくどれも散々じゃないか。)

あまりと言えばあまりの状況に笑いすら浮かぶ。

爽快感とはかけ離れた笑みであったが。

しかし、生きるためにはどちらかを選ばなくてはならない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして、令は決断する

向こうの暦で半年後、令は森の中にいた。

死に瀕したことは両手足の指の数では足りない程。

だが彼は生き延びた。

そして彼はそれだけの目に合った価値に見合う様々な恩恵を得た。

物、薬、知識、そして力

彼は生き延びるために、魔法を最も重要視していた。魔獣に対抗するためにはまず、即戦力となる力が必要だったからだ。彼は毎日、暇さえあれば魔法を独自に研究していた。

彼は向こうでも成績は良かったものの、決して天才という努力を超越できる存在ではなかった。

故に彼はひたすら検証を繰り返した。

ただひたすら、愚直とすら言えるほどの真摯さで。

どれだけ遠回りだと思われても、ほとんど無駄のような些細なことでも。

その結果、彼は独自の魔法理論を確立することに成功した。

そして、この世界でも強大な魔獣がひしめくこの森（本人は知らないが）においても、彼を殺せる存在はいなくなっていた。

「もう十分だな。」

今の令の服装は、牛のような魔獣の皮をなめして作った、黒のレザージャケットとズボン

そして、蚕のような魔獣の糸から作ったＴシャツと下着を身に着けている

どれも一流の戦士数人でしか対抗できないような奴らであり、売ればひと財産になる。

もちろんその性能も凄まじいの一言の代物だ。

彼の体もそれを身に着けるのにふさわしいものとなっていた。

身長は約１８０センチメートル

そして太くはないが、極限にまで引き締められた筋肉を手に入れていた。

強靱な肉体を得たことによる、魔法に匹敵する技術もまた。

「そろそろ次に進もう。」

半年前に彼が建てた計画は、計画とも呼べないような単純なもので、ここで満足できるだけの力を身に着けた後に、森を出ていくというもの。

そして彼は、自覚していないが過剰ともいえる程の力を手に入れ、その計画を実行しようとしていた。

「さあ、この世界はどんなものなんだろうな・・・」

好奇心を抑えきれずうずうずした様子で逸る気持ちを抑え、彼はゆつくりと歩を進める。

彼はまだ知らない

自分の構築した魔法理論が、この世界において革命にも等しいほどの画期的なものであることも

そして、望む望まずに関わらず、これから世界の動きに大きく係わっていくことも

彼はまだ何も知らない

こうして、元の世界でもこの世界においても『異常』である者の物語は幕を開ける・・・

5話 初接触（前書き）

ようやく今の魔法が出ますが、詳しい描写は次回です
どうかお待ちください

5話 初接触

「あっちみきたいだな。」

焦ることもないし、のんびり行くとしよう。」

今令は、空中に立っている。

その高さは大体ビル20階分ほどで、彼はその位置から周囲に何かしらの人工物がないか探していた。

そして眼下の広大な森を抜けたところに、明らかに人の手が加わったと見られる街道があった。

直線距離にしておよそ7キロメートル。

今の令ならばその気になれば息も切らさず3分で着けるが、いままで生き急いで来たので、ゆっくりと普通のペースで向かうことにした。

2時間後、令はまだ歩いている。

そろそろ4分の3ほどを来ただろうか。

彼は久しぶりに見るであろう、人の手が加わったものに思いを馳せていた。

何しろ半年も引き籠りと化していたのだ。

いくら彼と言えども、たかが街道とはいえ懐かしく思うのは無理もない。

「しかしな、我ながら随分と規格外な存在になったものだ・・・」

そっぴい苦笑する令の周りには、魔獣の山ができていた。

すでに一体残らず真っ二つになっていて、息のあるものはいないが、倒れ伏しているのは一般的な大型犬ほどの大きさの狼の群れ。

今なお魔獣という呼称すら知らない彼は知る由もないが、その魔獣

は「餓狼」と呼ばれている。

単体の戦闘能力はそれほど高くはない（それでも一般人や二流の間ではかなわない）が、群れを成したときその危険度は跳ね上がる。その卓越した連携と統率性は、どんなに腕が有ろうと群れに出会ったら逃げて戦うな。

そしておとなしく援軍を待て。

そのようにこの世界では徹底して教え込まれるほどだった。

そんな存在も彼の障害にはならない。

（袋も一杯だからはぎ取れんし、ただ殺しただけになってしまった。悪いことしたな。）

令は多少の罪悪感に囚われていた。

自分の命を狙ってくるならば迷いなく殺す、というスタンスをとっているし、戦いが好きなのところがあるのも認めるが、令は決して殺しが好きなのではない。

ただ生きるために襲いかかる存在には悪意がない。

そんな存在に対しては、どうしても殺したことに罪悪感を抱いてしまふのだ。

彼は肩に担いだ袋を担ぎ直し、歩く。

そうしてしばらくして、もう少しで森を出るところで令の耳に妙な音が届く。

それは、令にとって本当に久しぶりに聞く人の声。

もっとも、穏やかとは絶対に言えない類の声だったが。

（怒号に悲鳴、それに金属音、か？

この先は単なる街道だったはずだが？）

訝しく思いながらも、令はその目で見ようと思ひ、駆け出す。

そして森を抜けだすと、そこで行われていたのは殺し合いだった。

片方は馬車を守るようにして戦う5人ほどの鎧を着けている男たち。もしかしてどこかの正規兵かという思いが過ぎるが、よく見れば動きが雑で、豪華な鎧に着られているようにしか見えなく、日ごろ訓練している人間の動きでないのが一目で分かる。

（馬車もなにやらゴテゴテしてて品性の欠片もない。

恐らく、金が全てと思っ込んでいる馬鹿な成り上がり商人か・・・

）

令はまるで汚物でも見たかのような苦々しい表情をする。

そういった人間は令の最も嫌いな人間の一種だからだ。

もう一方に目を向けると、そこには10人ほどのバラバラの服装の男たち。

（そしてもう一方は、どう見ても盗賊。

しかも荒々しいがどこか洗練された動きをしている。

間違はなくこれが初犯ではないな。

なんだ、どっちもクズか。）

事態を推測した令は、見た人間が氷つくような気配を放っていた。

目を閉じ考え込む。

（だが所詮は推測だ。

実際は違うのかもしれないシ、とりあえず話を聞いてみましょうカネ。）

自分の予想がほぼ確実だと思うが、それでも事情ぐらいは聞くべきだと思い、気配を落ち着けて、やる気がなく心の声が片言になりながらも彼らに目を向けると、

「あれ？」

皆さんの視線がこちらに向いていることに気が付く。

しかも全員がこちらを友好的とは言い難い表情でにらんでいる。なんでかな〜と思ったら、親切にも盗賊の1人が教えてくれた。

「てめえ・・・好き勝手言ってくるじゃねえか。」

語調は荒くなっていないがその実怒り狂っているのだろう、なかなかの威圧感を放つ。

令にとつてはそよ風ほどの効果も無かったが。

「あらら。」

口に出しちゃってましたか・・・」

どうやらそういうことらしい。

さて、どうやってこの事態を收拾しようかと考えを巡らすがあることに気が付く。

）ああ。

よく考えたらこれ絶好の機会だわ。

相手は盗賊、殺しても恐らく問題ない。

それに略奪に慣れているということは少なくともこの世界の一般的な人間よりは強いということ。

自分がどれくらいの強さを測るのに都合がいいな。(

争った結果自分が死ぬということを令は微塵も考えていない。

感じる気配が間違はなく森の化け物たちより弱いということを教えてください。

恐らくこの程度の連中なら文字通り千人切りできるという確信すらある。

正直、自分の方が強いと確信できている時点で、こいつらと戦うこと自体には意味がない。

よって、ここで彼が得たいのは情報。

こいつらの反応から、果たして自分がこの世界の常識的な強さと照らし合わせてどれだけの強さなのかを推し量ることにあった。

なので、挑発することにした。

「いやはや、申し訳ございません。」

私、昔から思ったことをそのまま口にしてしまうのです。

この人通りの少なそうな街道で馬鹿な成金商人を襲うなど、並みの凶太さではありますまい、普通であれば恥ずかしさから悶死しても不思議ではございません。

そのことに素直に驚嘆させて頂いた次第です。」

とりあえず、思いつく限りの言葉を用いて慇懃無礼に詰ってみた。

日本人でない連中にこの物言いが通用するだろうかという疑問が頭を過ぎるが、どうやら杞憂だったらしい。

誰一人の例外なく、きれいに同時にあつという間に顔を真っ赤にさせた。

そのあまりの見事さは、こいつらは実は芸人ではないだろうかと素直に疑ってしまうほどだった。

「俺らをここまで馬鹿にして、死ぬ覚悟はできてんだろっな!？」

「さつきから未熟だクズだと好き勝手言いやがって!

「我らが成り上がりだど!

わしが大商人グッゾと知っての暴言か!」

「うわあ。

なんだこのテンプレ通りの反応。

もう少し語彙増やせよ馬鹿ども。

いや、一番出てきやすいのをテンプレと呼ぶからこれが正しい反応なのか?」

あまりに予想通りの反応に笑いすらこみあげてくる。

連中もテンプレという意味が分からずとも、馬鹿にされてることを肌で感じとったのだろう。

とうとう盗賊の一人が飛び出してきて手の剣を振り上げる。

令はその待ち望んでいた状況に笑みをこぼし、

手を気だるげに振る、ただそれだけ。

そして男は業火につつまれた

6話 殲滅

side 盗賊(頭)

俺たちは強い。

今までそう確信して生きてきた。

始まりはただ、楽をして生きたいという願望から始まった。

そうしてただ殺し、奪い、犯し、生きていたら気がつけば周りには
たくさんの子分ができ、大盗賊団の頭だ。

そうするとますます強気になった。

今では王国の騎士の奴らも俺たちを恐れて迂闊に手を出さない。
まったく軟弱な奴らだ。

もう俺たちに逆らう奴らはいない、何もかも俺たちのものだ。

誰も逆らわず、口答えもしない。

そんな状況だったからそんなことを心から信じ込んでいた。

この日までは

グッズは合法、違法を問わずあらゆる商売に手を伸ばし、莫大な資
産を持っていた。

その額は一国の王でも無視ができない程のもの。
そんな奴が、愚かにも極上の「品」を運ぶために俺たちの縄張りを
通ろうとしていると聞いた。

俺たちは狂喜した。

グッズほどの商人が極上という「品」は一体どれほどの価値を持つ
ものなのか、学の無い俺たちには想像もつかない。

だが一生遊んで暮らせる程の額になるのは確実だ。

そんなチャンスを逃す手はない。

満場一致で襲撃することを決定した。

見通しのいい街道から、いくつにも分けた隊を休みなくぶつけ、「
魔の森」が近くにあることで誰も近づかない寂れた街道へと追い込
んだ。

そして仕上げに腕利きを集めた10人ほどの隊を率いた俺がとどめ
をさす。

作戦は容易く功を奏し、成功は最早時間の問題だ。

そいつが現れたのは、そんな時だった。

見たこともない服装をした、黒髪の小僧。

背はあるが、その若々しさから20歳に届いていないことは容易に
想像がつく。

普通なら無視してしまうところだが、そいつが放つ妙な威圧感と、
何より「魔の森」から出てきたという事実がそれを躊躇させた。

「魔の森」はAランクの冒険者でもなければ、一度入ってしまったら
確実に死ぬと言われる世界でも有数の魔境。

たとえ迷い込んだただけだろうがそんな化け物の巣窟から出てきたこ
とが、俺たちの、そして商人どもの警戒を招かないはずがなかった。

「頭、あの小僧どうします？」

そっくり、俺の片腕の男が近寄ってくる。

こいつも、あれをどう扱えばいいか判断しかねているようだった。

そうして悩んでいるよ、

「馬車もなにやらゴテゴテしてて品性の欠片もない。

恐らく、金が全てと思いついて入っている馬鹿な成り上がり商人か・・・

」

それを聞き、商人どもが怒りを露わにする。

さらに、

「そしてもう一方は、どう見ても盗賊。

しかも荒々しいがどこか洗練された動きをしている。

間違いなくこれが初犯ではないな。

なんだ、どっちもクズか。」

そんなことを言い出す。

当然これに子分どもが怒る。

ここで小僧は自分が睨まれていることに気づく。

「てめえ・・・好き勝手言ってくれるじゃねえか。」

俺の片腕が怒気を孕ませて言う。

どうやらこの男は自分の発言に気づいてはいなかったようだが、そんなこと俺たちには関係がない。

この盗賊という職業は面子が大事で、一度舐められたままにしておくと他の盗賊から馬鹿にされる。

よって、この時点でこの小僧の死は確定した。

すぐにも動こうとする子分がいたが、奴が何かを言おうとしていることに気づき、遺言程度なら聞いてやるうと思いい、止める。

「いやはや、申し訳ございません。

私、昔から思ったことをそのまま口にしてしまうのです。

この人通りの少なそうな街道で馬鹿な成金商人を襲うなど、並みの凶太さではありますまい、普通であれば恥ずかしさから悶死しても不思議ではございません。

そのことに素直に驚嘆させて頂いた次第です。」

そして返ってきた発言がこれだ。

俺の片腕が我慢できず走り出す。

俺たちは全員、この生意気な小僧が血に塗れる瞬間を見ようと目を向ける。

何が起きたのか分からなかった

奴が軽く手を振っただけで、男はとんでもない炎に包まれた

常識である、魔法陣も、詠唱もなく、手を振る

そんなそよ風しか生まないような動作が生み出したのは、過去に一度だけ見た上級魔法には一歩及ばないだろうが、その域に近い業火気が付けばそこに炎が、いや、膨大な熱さそのものが存在していたあとには、唯一男が存在していた証と言える、炭だけが残された

俺は知った

自分がどれだけ抗っても何にもならない存在が存在することを

令は盗賊どもの驚き様に逆に驚いていた。

この反応からして、今の一撃には連中の常識から大きく外れている何かがあったことは理解できた。

だが、ここまで驚かれるのは流石にどうかと思ってしまう。
全員が腰を抜かしてしまっている。

(どうやら俺はこの世界でも異常なようだな。

まあ正直誰に目を付けられようともいいが、率先して厄介ごとを引き受ける必要もないか。

早めにこの世界の常識を知って、何処までなら力を使えるか考えよう。

しかしこれでこの反応なら切り札使ったらどうなんだろう?)

「お、お前、何だ今の魔法の炎は・・・」

盗賊の1人が呆然と聞いてくる。

(炎、ね。

厳密に言えば魔法で起こしたのは火ではないんだが。

しかしこんな聞き方をしてくるってことは、予想していたが魔法についてはまったく理解が進んでないんだな。

向こうの知識が無かったら俺も分からなかっただろうから無理ないか。)

これまでの会話から、こいつらでは自分の強さをこれ以上測れないことが分かったので事情を聞くことにする。

「あんたらは一体どういう事情で争ってたんだ？

予想はついてるが一応教えてくれ。」

それは形式としてはお願いの形であったが、問われた本人たちにとっては完全に命令であった。

嘘をつこうものなら即座に殺されてしまおうと感ずるほどの威圧感を放っている。

商人はすぐに事情を話す。

襲われていた立場で、同情を得やすい立場なのだから当然だ。

「わ、僕は商人のグッズというものだ！

この街道の先にある「ルツソの街」へ、王都へと「品」を運ぶ途中に寄ろうとしていたらこいつらに襲われたのだ。

お前、僕に雇われんか！

金ならいくらでも払うし先ほどの暴言も取り消しにしてやる。

それだけでなく領主や有力者への仲介もしてやるぞ！」

上からのもの言いにイラツと来ないわけでもないが、渡りに船ともいえる申し出に心が揺れた。

今令にとって最も優先すべきことは、この世界での常識を身に着けること。

それが有力者と繋がりを持てれば一気に解決する。

本気で受けようか迷っていたのだが、彼は次の質問の答えを聞くと悩むのをやめた。

「それで、その「品」とやらは何なんです？」

これから雇われるかもしれないので、敬語で聞く。

その質問に対し、グッゾは何の抵抗も見せずに、当然のことにように話す。

「ああ、奴隷だ。」

この瞬間、この男の運命は決まった。

令は無表情になり、もう一方へ聞く。

「それで、あんたらに聞きたいことは2つだけだ。

本当に盗賊で、この男の言っていることは本当か？」

「な！？

無礼な！

僕は嘘は言つとらんぞ！」

令の言葉にグッゾはいきりたつが、無視する。

そして盗賊を睨む。

嘘を見逃すまいとするように。

その視線を受けた頭は嘘が通じないことを正確に察し、正直に話す。まるで絞首台に向かうような悲壮感に包まれていたが。

「そいつの言っていたことは本当だし、俺たちは確かに盗賊だ……」

「ふむ、じゃあもういいな。」

その発言は盗賊たちにとって処刑宣告として受け取られた。

「待ってくれ！」

見逃してくれないか！

金ならいくらでも払うし、もうこの仕事からは足を洗うと約束する！

もう誰も傷つけたりはしないから頼む！」

頭、そして盗賊たちは口ぐちに情けを請う。

さっきまで面子を気にしていたとは思えない程の変わり様だが、それも仕方ないだろう。

生命の危機というのはいつも、その人物に根源的な恐怖を与える。

そしてその恐怖に抗えるものはほとんどいない。

まして、楽をするために他者を虐げてきた弱い心の持ち主に抗えるはずもない。

令がそんな人間のいうことを気にするはずもまたない。

とりあえず最後に、先ほどの発言の勘違いを正しておく。

「最後に言っておくが、お前たちはどうも勘違いしているようだから訂正しておく。」

俺は決して正義感や義侠心なんてくだらないものから、お前たちの行動を許せないと考えて殺す訳じゃない。

楽をしたいから何かを犠牲にするというのも、生物としての本能の働きであって悪いとは思わん。」

そして今はこれからの行動の理由を告げる。

「俺がお前らを殺すのは、単純にお前らが気に食わないからだ。」

あまりに自分勝手な理由に誰もが絶句する。

「じゃあサヨナラ。」

盗賊団を炎の渦が襲う

7話 美貌の奴隷（前書き）

いままで三人称でやってましたが、書いてるうちに一人称とごっちゃになるので、次話からは基本令の一人称でやってみようと思います。

これからもお願いします。

7話 美貌の奴隷

恐らく痛みを感じる暇もなかったろう。

令の火炎魔法（厳密には違うが便宜上そう呼ぶことにする）は、有機物が一瞬で炭化するほどの熱を生み出す。

彼がこの戦闘において火炎魔法しか使わないのは、単純に最も威力があるからだ。

といっても、火炎魔法は威力大というわけではない。

彼が使う火炎魔法が高い威力を誇るのは、彼が火に対して持つイメージによる。

彼は火というのは、人類の最も身近に存在する一番の脅威だと考えている。

日常生活において火は不可欠、そして身近な存在であるが故に、人間は火の脅威にも詳しい。

人が火に恐怖、そして畏怖抱いていることは、神話からも伺える。

神話には度々、何かが減びるといふ描写が出てくるが、その時それを滅ぼす役目を火が担当していることが多い。

これは人が火を脅威に感じている証拠と言える。

そんなわけで令は火に、最も暴力的なイメージを抱いている。

そのイメージが魔法の威力を、最大限に引き立てているのである。

そしてその結果が目の前の光景。

そこには、かつて人であった大量の炭があった。

（人を殺したわけだが、驚くほど何の感慨も湧かないな。
果たして元からこんな人間だったのだろうか？
それとも、こっちに來てから変わったのか？）

自分の引き起こした惨劇を、まるで他人事のような心境で眺める。
そうしてしばらく佇んでいると、後ろから声が聞こえた。

「おおおおお！！」

まさしく凄まじいの一言に尽きるな、火の魔導士よ！

儂も長く生きて來たが今までおぬし程の使い手にだったことはないぞ。

どうだ、雇われるなどともつたいないことは言わん、儂に仕えぬか。

報酬は月に金貨20枚払おう！

どうだ！？」

何かをほざいているが、その発言を聞き令が思ったことはひとつ。

（ああ、まだヤルことが残っていたな。）

そついいグツゾを見る。

最早グツゾと会話をする意志の無かった令は、さつさと要件を済ますことにする。

手を振る。

次の瞬間、護衛の五人が真っ二つになり、辺りが血の海と化した。
火炎魔法で焼かなかつたのは、ある理由による。

「なっ!？」

風魔法だと、貴様は火の魔導士ではないのか!？」

いや、それ以前に一体何を

皆まで言わずにその首を締め上げる。

言葉をしゃべれない程度に強く、死なない程度に弱く、実に巧みな力加減だ。

そしてまるで能面のような無表情で耳元に囁く。

「何を勘違いしていたんだ？」

俺はただ目障りな存在を消しただけで、お前らを助けると言った覚えはないぞ。」

その瞳の冷たさにグッゾは怯え、抵抗しなくなった。

そして告げる。

「盗賊の前ではあんなことを言ったけどさ、人を虐げる行動って俺は確かに否定はしないけど嫌いなんだよね。」

そんなわけで、当然奴隷商人なんかも嫌いなわけ。」

その発言にグッゾははつきりと恐怖を見せる。

恐らく自分も殺されると思ったのだろう。

怯えのせいで焦点が合わなくなっている。

この様子なら問題なく取引できるだろう。

「正直、ここでさっさと殺してもいいんだが流石にそれは忍びない。

だから、ここで今馬車の中の奴隷の所有権を譲れ。

そうすれば、俺はお前を殺さない。」

余程余裕がないのだろう。

その令の妙な言い回しに気づかない。
一も二もなく頷いた。

「こ、これが奴隷の所有証明書です。
これを持ってさえいれば、問題なくこの馬車の奴隷を所持できま
す。」

そう言い、複雑な模様と名前が書かれた紙が手渡される。
見たことがないのに何故か字が読める。

(これは・・・魔法陣なのか？)

俺はこんなものは必要としないが、こっちの人間はこれがないと
魔法が使えなかったりするんだらうか？

やはりこの世界について早急に理解を深める必要があるな。

しかし言葉は通じる、見たことのない字は読める。

一体どうなってるんだか。(

紙に描かれた模様について考えを巡らす、すぐに止める。

言葉と字に関する疑問も、答えの無い問いなので何らかの翻訳機能
が働いているのだろうと強引に納得する。

そして今度は力ギを4本渡される。

「お分かりとは思いますが、これが「隷属の鍵」です。

これで奴隷を飼殺すも解放するもあなたの自由です。
それで、その、もう宜しいでしょうか？」

先ほどまでの傲慢な態度とは打って変わり、今は小動物のように震えている。

まったくかわいらしくないが。

「ああ。

そうだな。」

そう言うとホッとして、逃げ出そうとする。
令はそんなグッゾの足の腱を切断した。

「うぎゃあああああああ！！？？」

わ、私は言うとおりにしたのに何故！？」

「また勘違いしてたんだな。

俺はただ殺さないと言っただけだ。

まあ、これから頑張ってくれ。」

そう言い、令はグッゾの馬車に乗り込む。

こんな強欲そうな奴が奴隷という財産をとられて黙ってるはずがない。

間違いなく無事に返したら何らかの仕事を仕掛けてくる。

そんなことが分かってるのだから、もとより生かして返す気はなかった。

約束だから直接手を下したりはしないが。

そして最後の仕上げにグッゾを奈落へとけり落とす。

「そうそう、そういえばこの辺りは狼の棲家だったな。

さつきうつかり、火炎魔法じゃなく風魔法で切り殺したから血の匂いに誘われて出てくるかもしれないぞ。

まあ逃げられない今のお前ではどうしようもないよな。

もし出会ったら運が悪かったと諦めてくれ。」

いけしゃあしゃあとそう言い残し、ぎこちない手つきで馬を走らせる。

後ろから狂ったような聞くに堪えない雑音が聞こえてくるが知らないふり。

そして5分後、森の生活で鍛えられた令の耳が男の絶叫を捉えた。

しばらく街道を進むとようやく森を抜けた。

とりあえず襲われる危険が無くなったことで、奴隷の人たちに挨拶することにする。

馬車の荷台の鍵をこじ開け、扉を開ける。

（さてどんな人たちなんだろ？

まともな話の通じる人だといいたがな。）

令が奴隷をグッゾから取り上げたのは、ちゃんと自分の利益を考えた末のことである。

奴隷ならば、気は進まないが最悪命令という形で情報を聞き出せると考えたからだ。

・・・本人は認めないが、単純に人助けの為という側面もちゃんあった。

そして馬車の中にいたのは、4人だった。

男女それぞれ2人ずつ

男は片方は精悍で落ち着いた雰囲気、10代後半の銀髪の青年、もう片方は端正で活発そうな10代半ばの金髪の少年。

そして女のほうは、美しいという言葉がぴったりと当てはまりそうな10代後半の腰まで届きそうな長い金髪を持つ女性に、美しいというよりは可愛らしいと言えるだろう肩口で切りそろえた銀髪をもつ少女。

髪の色からして、金髪の姉弟、そして銀髪の兄妹なのだろう。

なんとなく、まるで鏡を見ているかのような不思議な一体感がある。

全員が街にいれば間違いなく衆目を引き付けるだろう容姿を持っている。

そして、令に敵意と恐怖、警戒をたつぷりと含んだ視線を送っている。

(はあ、ここまで容姿整った人間っているんだな・・・)

そして凄まじいまでに嫌われているな、さっきの戦闘(というより虐殺?)を聞いてただろうから当然か。

さて、どうやって打ち解けようか・・・ん?)

どう攻めて目的を果たそうか思案していると、1人の視線に他とは

違う感情が混ざっていることに気が付く。
金髪の少年だ。

さっきの3つの感情以外に、なにか明るいような感情が視線に含まれている。

令はその予想外の行動に、不覚にも少し気後れしてしまった。
しかし、気を取り直してとりあえず基本から行くことにした。
馬車から4人を外に出している。

「恐らく知っているとは思いますが、ついさっき君らの所有権を奪った
もので名前は令という。」

はじめに君らの名前を教えてくださいませんか？」

その質問に全員どうしたらいいのか迷うような表情を浮かべるが、
少年が意を決した様子
で自己紹介すると皆後に続いた。

「僕の名前は……クルスといます！」

「……俺の名はレオンだ。」

「私はエルスです。」

「ルル、で、す……」

上から少年、青年、女性、少女の発言。

令はその名前に小さな違和感を感じた。

答えるのに不自然な間があったし、まるで愛称のような名前が多か
ったのだ。

それだけなら流してしまいそうだったが、見た目の不自然なまでの
綺麗さと合わせると、ある仮説が生まれた。

当たってたら幸いだし、外れていても特に問題もなさそうなので力マをかけることにした。

生物の警戒心を煽るような顔を作り、語りかける。

「そんなに警戒しなくても、別に取って食ったりしないって。

たとえ、どこかの国の高貴な身分の方でも・・・ね？」

予想は大当たりだったようで、顔が一齐に強張った。
ルルなど今にも泣きだしそうになっている。

「・・・頼みがある。」

もう隠せないと踏んだのか、レオンが自分から話してきた。

「お前の言うとおり、俺たちは貴族だ。

・・・国はもう滅んでしまったがな。

俺たちは逃げ延びたが、10日前に捕まり売られるところだった。
・
・

頼みだが、どうか他の3人は見逃して欲しい、そうなれば俺はど
うなっても構わない。」

「な、兄さん！

やめてください！」

「そうですよレオンさん！」

「もっと自分を大切にしてください！」

ルル、クルス、エルスがレオンの発言に驚き、考え直させようとする。
る。

しかしそれに対する令の反応は素っ気ないものだった。

「そうだな・・・」

レオンだったな？

「1つ聞いていいか。」

無表情になり言う。

「お前の立場で取引などできると思っているのか？」

その発言に怒りを露わにするが、令の表情を見るとそれが恐怖に変わる。

「覚えておくといい。」

取引というのはそもそも相手との立場がある程度近くないとできないものなんだよ。

大国の要求を無理やり飲まされた小国とかを知らないのか？

ましてや、今は奴隷とその主人という構図だ。

どうして取引が成立すると思うんだ？」

レオンは悔しそうに唇を噛み頂垂れるが、正論だと分かっているのだろう。

何も言い返さない。

（自己犠牲の精神か。

まったく反吐がでる、それで喜ぶのはお前だけだというのに。

しかもこいつ、ここでこんな提案するってことは・・・）

「お前、いや、君ら全員か。」

そんな提案するってことは世間での身の処し方を全く知らないだ

る。

もしかするとそもそも世間に出たことすらほとんどないんじゃないか？

大方、奴隷になったのだから簡単な畏にあっさり引っ掛かって捕まっただら？」

これも凶星らしく、もう全員死んだように頂垂れる。

(まあ、こんなもんでいいか。
話をすすめよ。)

「んじゃ、取引しましょうか。」

「は？」

皆さんは一斉にぎょとんしました。

8話 交渉成立（前書き）

お気に入り登録が少しずつですが増えていてうれしい限りです。

さらに文章評価までして下さる人がいらっしやるとはありがたいです。ありがとうございます。

感想ありましたらご投稿ください。

励みになります。

今回から予告通り零の一人称です。

これからもよろしく願います。

8話 交渉成立

「は？」

え、ちょ、さ、さっきまでの流れは何だったんだ!？」

「と、取引……ですか？」

取引って、あの取引です、よね？」

「い、一体何を言っているのですかあなたは!？」

「え、えと。」

あの……その……なんでもないです……」

予想通り皆いい具合に混乱してくれたようだ。

さっきまでの怖がり、暗くなっていた様子が嘘のように皆騒ぎ出した。

「はいはい皆落ち着けて。」

レオンはちゃんと座りなさい。

クルス、取引という言葉がそれ以外にあるというなら是非教えてくれ。

エルス、それって主人に対する言葉づかいじゃないよな？

ルル、思ったことはちゃんと最後まで言おうな。」

さっきまでとは打って変わって微笑みすら浮かべ諭す。

俺がさっきまで取っていた態度はこの状況をつくるための布石。

人は結果が同じでも、落差がより激しかった時の方が喜びが増す傾向がある。

例えば、テストで50点から100点になるよりも、0点から10

0点になった時の方が嬉しいのと同じこと。
何を話すにしても、敵意や警戒心をどうにかしなくては話が上手く進まない。

だから俺はわざと責めるような物言いをしたあと、彼らが望んでいた、取引をこちらから持ちかけたのだ。

・・・まあ責めたのはレオンの馬鹿な発言にイラついたのもあったのだが。

そして結果はこの通り。

硬さが取れ、思い思いの言葉を話すようになった。

一度こうなってしまうえばもう話すことに気後れを感じることもないだろう。

「いや、だって近い立場じゃないと取引は成

「それは取引を持ちかける側が低い立場の時の話だ。

持ちかける側が高い立場の時は当てはまらない。

今この状況で話を持ちかけているのは、君らの主人である俺だ。

何か問題があるか？」

このレオンの問いは予想済みだったので、皆まで言う前に切っ捨ててる。

彼らはそれを聞いて唾然とし納得はしたようだが、あまりに急に状況が変わり過ぎたためかまだ混乱しているようだ。

なので落ち着くまで待つことにする。

ここで一気に畳み掛けて不公平な取引をするという手もあったが、そんなのは嫌いだし、今から持ちかける取引は間違いなく成立する自身が有ったので、混乱させてはただ会話が成り立たなくなり面倒なだけだ。

「それで、どんな取引なんです？」

一番早く立ち直ったエルスが警戒心を露わに尋ねる。
まあ、不平等な取引を警戒するのは当然だな。

「まあ、そう警戒するな。」

そっちが一方的に被害を被るようなものじゃないからさ。

世の中はギブアンドテイク、そちらが果たしてくれればちゃんと
相応の見返りを用意するよ。」

「ぎぶあんどてーく、ですか……？」

「ん？」

ああこれは通じないのか。

他の言葉で表すなら……御恩と奉公か？

いや、これも通じ」

「ああなるほど！」

大体分かりました。」

「なんで通じるんだよ、鎌倉時代の言葉だぞ！？」

クルスの疑問に答えようとしたら逆に驚かされた。

横文字通じなかったのにこれは通じるのかよ、翻訳機能テキスト過
ぎだろ……

気を取り直して話を進める。

「取引は2つ。」

1つ目はこちらはそちらの社会的な安全を保障する。

そしてそれに対する見返りとして、君らは自身が持つあらゆる情
報を提供すること。」

「？」

あの、おっしゃっている意味が、よく分からないのですが……」
ルルが相変わらずのおどおどした様子で聞いてきた。

そりゃあな。

むしろこれだけで察せたら驚きだよ。

「さっきの会話で君らは自分たちが身の処し方が下手だと自覚した
だろ？」

しかし、それは直ぐに覚えられるようなものではない。

だから、身に付くまでの間俺が君らの手伝いをしようというわけ
だ。

俺が少なくとも君らよりそういったことが得意なのは分かってる
はずだ。

悪い提案じゃないだろう？」

いや、悪い提案どころではなくまさに渡りに船だろうな。

このままではいずれまた騙されるのは目に見えてる。

それを助けてもらえるって言うんだから。

彼らはそのことを理解すると驚きと困惑を浮かべる。

「こちらとしては願ったり叶ったりな提案だが、お前の見返りが少
なすぎないか？」

俺たちは元貴族と言えども、所詮は家を継ぐこともなかったよう
な連中だ。

正直な話、平民よりはかなりましという程度の知識しかないぞ？」

「ふふふ。

それでいいんだよ。

俺が知りたいのは、流通貨幣や法律、制度などの一連の一般常識。そして貴族の人間なら少しは知ってるであろう世界情勢と各国のパワーバランスについてだからな。」

なんだか楽しいな。

思わず笑みが零れてしまう。

やはり、人との触れ合いというのはいいものだ。

・・・クズでなければ、な。

皆何故そんなことを知りたいのか気になるのだろう、疑問顔を浮かべる。

ただし、そこに警戒心は無く、単純な好奇心からの反応だ。

それに対して正直に答える。

「俺は今日あの森から出てきたばかりでね、常識を、なにも知らないんだ。」

「・・・はあああああ！！！？？」

自嘲しながら言つと絶叫で返された。

呆ける、もしくは何言つてんだこいつは？と言つた目で見られると、
いう反応は予想していたが、この反応は何なんだ？
今の言葉にそこまでのものがあつたのだろうか。

「あの森というのは、先ほどあった「魔の森」で合ってるんでしょうか？」

いえ、ありえないとは思いますが、僕はそれ以外思いつくものはありませんので……」

「あの場所に複数の森が存在していないというならそれだろ。しかし「魔の森」とは御大層な名前だな。

さらに言えば、あの森にいたのは半年、いや6か月間で、それまでのことは覚えていないというおまけ付きだ。」

「は、半年……？」

「魔の森」で、半年……そんなことが……」

クルスの反応がおかしかったので、少しふざけて答えるがそれに対する反応はなかった。

……冗談に対する反応が無いって、思ったより恥ずかしいものだな。

それに暦が違つかと思い、わざわざ言い換えた意味もなかったようだ。

「……そこまで動揺するような要素があつた森にはあるのか？」

若干不機嫌になり、無然としながら聞く。

それに応えたのは意外なことにルルだった。

「あの森は世界でも6か所しかない「危険域」に指定されてるんです。」

中に入れるのは一応Bランクからの冒険者となっておりますが、実際は少なくともAランク相当の力がなければ生きて帰るのが不可能

と言われています。

冒険者というのは、魔獣討伐を生業とする人たちの総称ですよ。魔獣の討伐のために世界中を渡り歩く人という意味でそう呼ばれています。

もつとも今は1つの街に定住する人も多いですが。」

いきなり饒舌になったルルに少々面食らいながらも、新たな疑問を聞く。

「その理論でいうと俺はAランクということか。

それはどのくらいの強さか目安はあるか？

それと何故いきなりそんなに饒舌になる、俺のこと怖いんだろ？」

「ただあなたが酷い人でないとわかったからですよ。

ランクはCランクで一流の冒険者、Bランクで一国の騎士団長クラスで、Aランクともなると魔獣の最強種である竜の下級種と単独で戦える程だと言われています。」

笑顔でそう説明してくれる。

だが、俺はその笑顔に凍り付いてしまい話を最後まで聞いていなかった。

似ていたのだ あいつに

『あの事件』で失った 大切なものに

「おい・・・
どうした、大丈夫か？」

その声で我に返るとレオンが俺の肩を掴みこちらを見ていた。
他の皆もまた見ている。

「何でもない・・・」

「いや、そんなわけが」

「何でもない！」

そう言っているんだ！！」

我ながら多少ヒステリックになっていると自覚している。

それでも心の整理がなかなかつかずこんな醜態を晒してしまった。
目を瞑り、彼らの視線から逃れるために右手を顔に当てひたすら黙
る、己の心を縛り上げる為に。

落ち着き、目を開けるとそこには戸惑った様子の彼らが。

だが、その視線には少しだが、確かに俺を心配する念が含まれてい
た。

（何故心配するんだ？

まだ助かると決まったわけでもないんだ。

敵意を向け、警戒するのが正しい反応なのに・・・）

そう疑問に思うが、その念に救われる思いのする自分がいることを
自覚する。

「それで2つ目の取引だが、こちらは君らを奴隷から解放する。」

このままではまともな思考ができなくなりそうなので、さっさと取引を済ませよう。

この言葉の意味に、自分たちが最も望んでいるものに、彼らは抑えきれない喜色を浮かべた。

要求に対する警戒を露わにしてはいるが、その喜びは隠せていない。そんな4人の前に、解放する証拠としてはめられている枷の鍵をそれぞれ置いていく。

「こちらの要求を呑むまえに触れば殺す。」

思わず手を伸ばそうとしたので釘を刺すのも忘れずに。そして、俺の要求はこれだ。

「君らは俺の従者になってくれ。」

「.....」

要求に対して反応が無かった。何故だ？と思っていると、

「え？

それだけですか（なのか）？」

一斉に、盛大に拍子抜けしたといった様子で聞いてきた。

「それだけって、もと貴族なんだろ。」

なら自分が従者になるのは嫌だと考えるのが普通ではないのか？」

いきなりそれまでと立場が逆転して自分が尽くす側に回るのだから、嫌なはずだと考えていた俺は不思議に思い尋ねる。

「私、いえ、私たちはてつきり慰み者になれと要求されると思っていましたので……」

「ねえ、ルル？」

顔を赤らめながらエルスはそう言い、ルルもまた顔を赤くして俯き、首肯する。

「俺たちは男娼にでもなつて稼いで来いと言われると思っていたからな。」

「なあ？」

こちらの連中も同じような意見だったようだ。

「君ら、俺をなんだと思ってるんだ？」

思わず聞いてしまうと返ってきた答えは、

「冷酷非道な殺人狂です（だな）。」

「……うん。」

「まったく否定できないな。」

至極納得できるものだった。

しかし認めたくないと思うのは人の業だろうか……
あとでちよつと意趣返ししておこう。

「それに、これらの取引であれば私たちはあなたに救われ、返しきれない程大きな御恩を背負うことになります。」

それを返せるのだと思えば、まったく苦になりませんよ。

記憶がないとか常識がないとか、たくさんの疑惑は残りますが些細なことです。」

エルスがそう言い、皆が当然だとばかりに頷く。
そんなものなのか？

「じゃ、交渉は成立ということだ。
文句はないな？」

「はいっ！」

そうして俺は旅のお供を得た

「ところでエルスにルル。」

「何でしょう？」

「何ですか？」

「さっきの取引でどんな情報も開示するようにといったのは覚えて

るな？」

「はい。」

頷く2人。

「じゃあちよつと聞きたいんだが・・・」

2人の耳元で囁く。
すると、

「ええつつ／／／！！！？？」

「つつつつ／／／！！！？？」

2人とも顔を真っ赤に染める。

「どうした？」

もう約束を破るつもりかな。

元貴族の誇りは約束を破るのをよしとするのか？」

ものすごく楽しそうな表情を浮かべ詰め寄る。

実際とても楽しい。

「え、え〜と。」

そういうわけでは・・・／／／／

「は、はい。」

お望みであれば、お、お、お話をします・・・／／／／

もういつ茹だつて倒れてもおかしくないその様子を見て俺は気がすんだ。

「くっくっく・・・」

「冗談冗談大丈夫だよ。」

さっき殺人狂なんて言われたから少し腹が立ってね。

さあ、出発しよう。

「馬車に乗ってくれ。」

宥めるように2人の頭を撫でた後、俺は馬車に向かう。

最後撫でた時、いっそう2人が赤くなつた気がしたが・・・気にしないことにした。

9話 この世界について（前書き）

皆様のご協力のおかげで総合評価が1000を突破しました！

これからもよろしくお願ひします。

それと、お時間があれば文章・ストーリー評価+感想をください！
励みになります。

今回で魔法の解説する予定だったんですが、次回に持ち越しになっ
てしまいました・・・

9話 この世界について

side クルス

クリミル王国は農作物を主要生産物とした自然豊かな国だった。

僕はその公爵家の長男として生まれた。

基本的にのどかで、国土の多くを平地に恵まれているため見通しが良く、魔獣が現れても対処しやすく平和そのものだった。

そんな国で育ったせいも、僕は争い事が嫌いでもいつもエルス姉さんに頼っていたと思う。

姉さんは王国の中で有数の水の魔導士で、とても強かった。

他の国から平和ボケと揶揄される国の人間にも関わらず、その強さから他国からの勧誘が、そしてその容姿から縁談が絶えない程で、僕の自慢であり憧れだった。

争い事は嫌いだけどその分、僕は勉学に興味を持ち、それに打ち込んだ。

誰よりも勉強して、いつも頑張って働いている領民の人たちにより良い暮らしをしてもらえるようにすることが僕の夢だった。

そして半年前、その夢は脆くも崩れ去った

隣国のデルト王国が、宣戦布告も無しにいきなり攻め込んできた。

デルト王国は、「危険域」である「魔の森」が国内にあるせいでも、普段から魔獣の出現が多い。

そのために、国の騎士団は戦い慣れているため精強で、練度もクリミル王国の騎士団とは桁違い。

初めから戦いになるはずが無い。

僕ら姉弟の故郷は瞬く間に全域が戦火に包まれる。

確か占領までにかかった時間はたったの10日。

「ただ僕はデルト王国に対して、当時も今も憎しみを抱いてはいない。」

本当に憎むべきだったのは、クリミル側の貴族

「デルト王国が攻め込んできた」

その報告を聞いた瞬間の貴族どもの反応には呆れるしかなかった。緊急会議で出てきた議題は、デルト王国がどれだけ礼儀知らずな行為をしたか、そしてどう「和解」するか、その2つだけ。

デルト王国への罵声、自身の身の安全をどう保障するのか、それだけが会議の机上を飛び交う。

その間にも兵は死んでいるというのに。

父様はその様子を見てもうこの国は終わりだと考えたのだろう。

いや、見る前からこうなることを予想していたのだ。

そうでなければ、逃亡の用意などあらかじめさせておかない。

「私はこの国の国民に対し、貴族として果たさなければならぬ義務がある。」

「だがそれはお前たちが背負うべきものではない、ゼフィールド殿のご子息と一緒に逃げなさい。」

何かを悟ったような様子で僕らをそう諭す。

当然僕らも抵抗したが強引に馬車に乗せられ、走り出す。

姉様と共に後ろを振り返り、父様を見る。

父様は最後に、

幸せに生きる

そう言っているように見えた。

ゼフィールド様のご子息で幼馴染のレオンさんとルルには直ぐに合流出来、父様と姉様は領民に慕われていて助けてもらえたので、割と楽にクリミルから逃げられた
そしてそんな僕らは、父様とゼフィールド様が死んだことを知る
デルトの兵にはない

息子たちをデルトに送り、情報を流した裏切り者として、クリミル側の貴族に処刑されたのだ

それからのことはよく覚えていない。
僕はただ漫然と日々を過ごしていた。
そして気が付けば奴隷商人の馬車の中。
レオンさんと姉様は何か抜け出せないか考えているようだった。
ルルもそんな2人を見て勇気づけられ、まだ希望を捨ててはいない。
そんな強い意志を持つ彼らに自分は何をしてあげられるのだろうか？
何もできはしないではないか。
なんて情けない話だ。

僕はただ願った

この世の不条理を打ち破る力を

この世の理不尽を乗り越える術を

何よりこの間違った世界で皆と生き抜くための強い意志を！

その瞬間爆音が響いた。

皆も何が起こってるのか分からず、困惑している。

この中では音しか聞こえないのだ。

だがその音だけでもある程度推測できた。

何かが、絶大な力を以って周囲の人間を殺戮しているのだ。

ここで僕は生氣を取り戻した。

力を望んだ瞬間にこのような事態。

何と都合がいいことか！

そしてしばらくして馬車の荷台の扉を開けた、その殺戮の主に、

僕は恐怖と警戒、そしてそれ以上のどこまでも深い「崇敬」の念を抱いた

s i d e o u t

馬車は街道をひた走る。

ちなみに御者は意外なことにクルスだ。

何でも昔から動物好きで、世話をよくしていたそうで、得意らしい。今俺は馬車の中でレオン、エルス、ルルの3人にいろいろ教えてもらっていた。

「へえ、レオンが19歳、エルスが17歳、ルルが15歳、それでクルスが14歳か。」

上と下で5歳差か、結構離れてるんだな。」

「ああ、それでも両親同士の仲がいいから俺たちは小さいころからよく遊んでいた。」

幼馴染という奴だな。

俺なんかクルスのおしめを取り換えたことが有るくらいだぞ?」

「ち、ちよつとレオンさん何をっ!?!」

レオンが意地悪げな表情を浮かべそう言うと、クルスが悲鳴を上げる。

「意外だ。」

レオンも人をからかうことが有るんだな。

珍しいものを見た。」

「まだ会って1時間も経ってないだろうに・・・
それにこの中で一番性格の悪いお前に言われたくない。」

「それもそうか。」

まあ最近人にまったく会ってないから忘れていたが、俺は基本人からかうのが好きだからな。

高校で友人についてやり過ぎて気まづくなったことが何度もあるくらいだ。

それにこの4人は世間慣れしてない分反応が面白いんだよな。

・・・やり過ぎないように気をつけねば。(止める気はない)

「そういえばあなたは何歳なのですか？

レイ様。」

「俺は18だ。」

「な!？」

「年下だと!？」

エルスの問いに答えると今度はレオンが大声を上げる。

「そこ、驚くことなのか？

「お前の方が身長高いだろうに。」

「所詮外見だろう。」

「お前の老練さと老獪さから年上だと思っても不思議ではないと思うが?」

「・・・好き勝手言ってくるな。」

後でなんかヤルとしよう。

身長だが、俺 約180 レオン 約185 エルス 約170

クルス 約150 ルル 約160 となっている。
ちなみにさっきのエルスの俺の呼び方だが、これにはひと悶着あつた。

それというのをはじめに俺を読んだときの呼び方が、

「ご主人様、少しよろしいでしょうか？」

これだったのだ。て、

「ルル！」

エルスをやつと矯正させたと思ったら今度はお前か！」

俺はそんな名前で呼ばれて悦に浸る趣味など断じてない！

「あ、すみません。」

従者と言うところの口調なのでつい……」

「はあ……」

次から気をつけてくれ。」

「分かりました。」

レイさん。」

ルルは素直で助かった。

エルスは何故かあの呼び名に執着を持っていてなかなか納得しなかった。

30分かけて話すはめになるとは……

「それでなんだ、ルル。」

「一般的な常識についてお話しなくてもいいのでしょうか？」

「あ……」

「おいおい。」

最初の目的忘れるなよ。」

「やかましい。」

「ご主人様なんて呼び名で人間としての尊厳を貶められるところだつたんだ。」

「そんなこと気にしてられるか。」

何だそりゃ、とレオンが呟くが無視する。

読者の皆様、先ほどの私の発言をご不快に思われたのであれば心から謝罪いたします。

どうかお許しください。

「さて、読者の皆様への謝罪も終わった。

教えてくれ。」

一斉に何を言ってるんだと訝しげに見てくるが、ちゃんと説明はしてくれだ。

それによると、

この世界の通貨は価値が低い順から鉄貨、銅貨、銀貨、金貨となっていて、それぞれ100枚で価値が1つ上の通貨と同じ価値を持つ。向こうに換算すると、鉄貨＝1円であることから、銅貨＝100円、銀貨＝1万円、金貨＝100万円というわけだ。平民の月収は大体銀貨10枚ほど。

・・・つまり強欲商人が言っていたひと月金貨20枚はとんでもない破格の待遇だったようだ。
知った今でも応じる気など微塵もないが。

冒険者が集まる施設はネスト（巢）と呼ばれている。

昔はギルド（組合）だったそうだが、冒険者が自由を重んじることから、ただ集まるだけの場所というイメージの強いネストに改名されたのだとか。

ネストの詳しい説明は、ネストで聞いた方が早いし分かりやすいということ由省かれた。

そして国だが、これは小さい国まで含めると数十にも及ぶらしいので、主だった5つの大国について教えてくれた。

まず、この世界の宗教の総本山であるスルス教国。

大国の中で最も版図が小さいが、宗教というものはやはり侮れなく、世界中に存在する信徒により、すべての国に対して発言権を得ている。

・・・宗教は絶大な権限を指導者に与える分それに溺れやすい。腐敗が始まってなければいいが。

次に、商業国家レティエンス共和国。

共和国だけに合議制を採っていて、その資本はその気になれば中規模の国を買い取れるほどだとか。

実際はそんな金があったとしても、様々な理由で不可能だからあくまで比喩だろう。

戦士の国、デルト王国。

その呼び名の通り、国の地理的条件から優秀な戦士を数多く抱えている。

Bランクの冒険者を2ケタ、Aランクでも片手の指の数だけ囲っているというつわさもある。

質だけなら最強だな。

そして今俺たちがいる国。

この話をするとき、レオンたちは苦い顔をしていた。

詳しく聞くことはしなかったが、その反応だけで大体予測がつく。

クルスだけがまったく平気そうな理由は分からなかったが・・・

魔導国家、エリュシオン公国。

魔法の研究の最先端国。

この国の貴族は全員が他国とは比べものにならない優秀な魔導士だとか。

戦争における瞬間的な突破力は最強だそうだ。

魔導国家という性質上スルスと仲がよく、デルトと仲が悪い。

最後に。最大の版図を持つベグニス帝国。

この国の特徴は何と言ってもその領地面積と比例した膨大な兵力で、なんでもこの世界中どの国が相手であっても、一国であれば飽和攻撃を仕掛けられるほどらしい。

つまり、この国を相手にした場合その時点ではほぼ負けが決定するということだ。

それなのにこの国の天下になっていないのは、他の大国同士が同盟を結んでいるからだ。

そのほか、法律や習慣についても教えてもらった。

「へえ。」

まあ大体わかったよ。

ありがとう。」

「いや、取引だからな。」

普通に感謝して、それに普通に答えてくれる。
馬車全体に和やかな空気が漂う。

「さて、あと聞きたいことは今のところひとつだな。
最後まで頼むよ。」

「ああ。」

「なんなんだ？」

「魔法についてだ。」

「それなら私がお答えします。」

「この中で本職の魔導士は私だけですから。」

さて、やっと自分の独自魔法との違いが分かるな。

10話 『恩寵式』と『究理式』、そして『闘気』（前書き）

日間ランキング22位

PV18000

ユニーク2500・・・

なんだかうまくいきすぎていて、落ちた時のことを考えると怖いですね

これからもよろしく願います

今回多分にご都合主義・チートが入っています

できる限り違和感のないように頑張ったのですが、その点を踏まえ
てお読みください

10話 『恩寵式』と『究理式』、そして『闘気』

エルスの説明は要点をしつかりと押さえていて、大変分かりやすかったので、俺はこの世界での一般的な魔法の仕組みを理解した。そう、理解してしまった。

「あ、あの・・・
レイ様？」

「どうなさいました？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

自分を心配してくれる言葉にも反応できない。

俺の目は虚ろになり、体からは完全に力が抜け、人なのか？と疑われてしまいそうなほどの腑抜けっぷりを晒している。

予想してた・・・

予想してはいたんだ！

彼らの魔法について聞いても、得るものが何もないかもしれないことくらい！

だがそれでも俺は、彼らの魔法から新たに得るものはないだろうか
と期待していた。

だからこそ俺はショックなのだ。

まさか、彼らの魔法がここまでただ不完全なだけのものだとは思
いもしなかった！！

この世界の魔法とは

魔法は神から与えられるもの

それぞれ、火の神、水の神、風の神、土の神が存在する

そして、神は自身を信仰することの見返りとして、人に魔法を行使することを許可するのだという

その威力はその神への信仰の度合いに比例する

その人物が信仰すべき魔法の属性は、魔力判別球とやらにより判別できる

その球の前に立ち、意識を集中すると色が変わり、赤なら火、青なら水、緑なら風、黄なら土と、それぞれ自分の信仰の対象とすべき神を教えてくれるそうだ

1人につき信仰できる神は1柱のみだと言われている

そして、魔法には魔法陣と、使用すべきものに応じた詠唱を必要とする

まれにそれらを必要としない者もいることはいるが、同じ方法でやろうとしても誰も出来ないことから、それは体質によるものと言われている

魔法とは絶大な威力を誇るが、この2つにより複雑化、高度化し、さらに時間もかかるため、戦士から決定的なアドバンテージを奪うには至っていない

エルスの話を纏めると、こういうことらしい。

そして現在に至る。

そうだな、今の心境を的確に表すなら、

「まるで完全科学主義の人間が、キリスト教の全盛期にタイムスリップした、というようなものか・・・」

そしてこの何ともいえないガツカリ感、昔、同級生が満面の笑みで難しい数式を解いたと自慢してきて、初めのほうの足し算です。で、間違えていて台無しだったときのものに近いな。」

といったものか。

当然周りは何のことを言っているのか分かってはいないが、一般魔法に何か気に入らないものがあつたということは察してくれたようだ。

「レイさん。

エルスさんがお話しした内容にお気に障るようなことがあつたのですか？」

ルルは戸惑いながら穏やかに尋ねてくる。

なんか和むな・・・

ちなみに話した張本人のエルスは、怒られるとでも思っているのか身を縮こまらせてじっとしている。

「ふう・・・

いや、違うんだよ。

そうじゃない。

ただ俺の使う魔法と比べると、君らの魔法はあまりに時代遅れ過ぎてね・・・」

「じ、時代遅れですか!？」

皆が驚愕し、こちらを見る。

そりゃそうだろう。

今まで自分たちがなんの疑問もなく使っていたものをいきなりそんな風に言われたのだから。

普通なら正気を疑われるのが落ちだ。

「ああ。

俺は君らの使う魔法を『恩籠式』、俺が使う魔法のことを『究理式』と呼んでいる。」

「『恩籠式』と『究理式』ですか？
聞いたことはありません・・・」

エルスが疑問の声を上げる。
そりゃそうだろう、何故なら、

「当然だ。

今考えたんだから。」

というわけだ。

「はあ！？

何ですかそれ！」

「おいおい当然じゃないか？

俺が君らの魔法の仕組みを知ったのはついさっきだ。
今以外にいつ考える暇があつたと言っただ？」

「うっ・・・」

そう言われればそうなんですけど・・・」

どうやら調子が戻ってきたようだ。

いつも通りにエルスをからかうことができた。

そのまま意地の悪い笑みを浮かべて言っ。

「まあ今即席で思いついたものだが、我ながらどちらの特徴もよく捉えた的確な表現だと思うぞ?」

「恩寵」とは神などの上位の存在から何らかの恵みを受け取る時に使う言葉

彼らの魔法は神から与えられるものと考えられている

故に、『恩寵式』

そして俺の場合だが、

「まあ言葉で説明をするよりも、まずは実際に見てもらった方が理解しやすいだろ。」

今から燃焼魔法使うから見ててくれ。」

「レイさん、「ねんしょう」ってなんですか?」

御者に集中していたクルスが我慢しきれなくなったのか聞いてくる。まあずつと話に参加できなかつたんだ、無理もない。

「詳しく説明したいのはやまやまだが、どう考えても君らに理解できるような話じゃないんだよな・・・」

簡単に君らの使う火炎魔法と同じと考えてくれて構わない。

それでおおよそ合ってる。」

そう説明し、頭の中でイメージを固め、『究理式』の魔法を発動させる。

そして出てきたのは直径5メートル程の火球
その熱量に真下の草がどんどん炭化していく
これで大体中の上ぐらいの威力

ちなみに盗賊1人に使ったのは下の中、全体に使ったのは中の下と
なっていた。

範囲だけでいえば火球よりも竜巻の方が広いのだが、火球は留めて
圧縮しているため、その威力は竜巻とは桁違いだ。
だがここで問題が発生した。

(どうしよう・・・これ。)

間抜けなことにつくったはいいが、これをどう処分したらいいかを
よく考えていなかった。

始めは適当に地面にぶつければいいと考えていたのだが、そんなこ
とをしたら後で自然環境に多大な被害が出てしまう。
敵がいれば気にならないのだがな。

そう思っていると天の采配が

「レオン、あれって盗賊か？」

「え！は！？」

あ、ああ。

たしかにそうだが・・・おまえ、それ・・・」

馬車の進行方向から服装のバラバラな20人ほどの男が馬で駆けて
きていたようだ。

火球を見て完全に活動を停止していたが。

その野卑な雰囲気から盗賊とアタリをつけてみたら、ドンピシャだ

った。

レオンたちはこちらが声をかけるまでただただ呆然としていた。クルスだけがものすごくキラキラした瞳でこちらを見ていたのだが、居心地が悪いからさっさとぶつけてしまおう。

火球が奴らをなんの抵抗も見せずに飲み込んだ

実を言うと、俺は森の中で燃焼魔法は下の力のものしか使っていない。

言うまでもなく大火災になってしまっからだ。

だからこの魔法の場合、俺はその威力を大雑把に推測することしかできず、実際どうなるかは分かっていなかった。

俺の予想としては、ぶつけると火が四方に拡散し広範囲に被害を与えるといったものだったのだ。

・・・「現実には小説より奇なり」とはよく言っものだ

魔法の結果、地面は火球がくり抜いたかのようなきれいな半球の形に陥没し、その膨大な熱量に炙られた表面は結晶化して、まるで大理石のような輝きを放っていた

「・・・（全員）」

誰も何も言わない、術者である俺自身でさえも。

・・・これから使える魔法を全て試しておかないとな

「さて、今のが『究理式』だ。
何か聞きたいことはあるか？」

「・・・とりあえず、その魔法の仕組みを教えてください。
先ほどの時代遅れという発言もこれなら納得できます。」

常識である魔法陣と詠唱はおるか、全くタイムラグも無しに発動
できるなんて・・・

恐らく、私たちの使う魔法とは何かが根本的に違うと思うのです
が。」

気にしない、というよりは今のを無かったことにして聞くと、予想
外に冷静そうなエルスの声が返って来た。

・・・いや、驚きが一周してまともそうに見えただけみたいだな。

「エルス、ルル、さっきの爆風でスカートがまくれてるぞ。」

動揺するのは分かるが、そのくらい自分で気づいて直してくれ。」

「ふえっ!?!」

「そ、そんな!?!」

まあ眼福ではあったがな。

赤くなり狼狽える2人をスルーし、どう説明したらいいのか考える。

『究理式』の魔法とは簡単に言えば、魔力を燃料としてあらゆる「
現象」を引き起こすものだ。

一見『恩寵式』と違いが無いように見えるが、ちゃんと存在する。

例えば『恩寵式』で火炎魔法を使うときは、術者は火の神に「火」を起こしたいと願う。

そして魔法陣と詠唱という「儀式」を経ることで魔法を発動させる。

しかし『究理式』では、「火」を起こす、と念じるのではなく「燃烧」という「現象」を起こしたいと願う、いやイメージする。

火がでるという結果は、あくまで「燃烧」という「現象」が起きた時の副産物に過ぎないのだ。

最終的にはどちらも火が発生するのだが、その威力は桁が違う。

ただ漠然と「火」を起こしたいと願うのと、「現象」というこの世の「理」を理解した上で、それに沿う形で魔法を行使するのでは、イメージのし易さという点でも引き起こされる現象の規模という点でも差がでるのが当然だ。

「理」を「究める」ことにより「現象」という魔法を引き起こす方式

すなわち『究理式』

そもそも俺の理論では、魔法に必要とされるのは明確なイメージのみであり、他に「ごちゃごちゃ」と付け加える必要は全くない。

つまり『恩寵式』で使われるという魔法陣と詠唱、不遜なようだが神ですら必要ないのだ。(というかそもそも信仰してない俺が魔法を使える時点で、各属性の神は実在するはずがない。)

・・・とはいえ、ややこしいことを言うようだが、「信仰」、「魔法陣」、「詠唱」は無意味なわけでもない。

そもそもイメージだけで魔法などという超常的な現象を引き起こせ

ると誰が思うだろうか。

自力で起こしたと思うよりは、誰かが起こしてくれたと考えるほうが自然だ。

つまり、神への「信仰」は魔法の不自然さを和らげてイメージを助長してくれるのだ。

他も同じこと。

「魔法陣」と「詠唱」という儀式を経ることで魔法を使いやすくなる。

恐らくそうだった意図からそれらは使われ始めたのだろう。

しかし長年それを通してきたために、いつの間にかそれらが無くてはならないものという固定観念を生んだのだろうな。

・・・話がずれていたな

当然『究理式』で起こせる現象は「燃烧」だけではない。

低気圧と高気圧による「大気の移動」の結果、風を。

土地の「隆起」の結果、土を。

水素と酸素の「化学反応」の結果、水を、それぞれ操ることができ

る。

他にも「振動」、「放電」、「発熱」、「冷却」などなど。

イメージの強度に左右されるが、「分解」なんて反則技も場合によっては可能なのだ。

一体そんな代物をどう説明したものか・・・

実を言うと教えることそのものにはさして抵抗はない。

この4人ならば身に着けても悪用はしないだろう。

付き合いは無いと言ってもいいほど短いが、そう「信用」出来るくらい俺は彼らを気に入っていた。

「信頼」はまだしていないが

では何を気にしているのかというと、聞いて混乱しないかということ。

『究理式』の理論は彼らの常識を真つ向から粉々にぶち壊してしまう。

普通はそんなことはあり得ないと切って捨ててしまえばいいが、生憎彼らは俺の魔法という証拠をみってしまった以上、それも出来ない。『究理式』をつかって見せたのは失敗だったか・・・

それまでの常識と新しい常識が混ざり混乱してしまえば、間違いなく『恩寵式』の魔法ですら使えなくなってしまう。

「・・・これは魔法を、手を離せば物が落ちるといった、さまざまな世界の法則に沿う形に造り換えたものなんだ。

早い話が、君らの魔法を単純に数百年単位で高度化したもので仕組みそのものは変わらない。

詳しいことはまだ教えられないが。」

とりあえず事実ともいえるし、嘘だともいえる発言をして躲すことにする。

何か事情があることを察してくれたのか、悩ましげな表情を皆浮かべはするが、それ以上は聞いてこない。

(気を遣わせてばかりだな・・・情けない。)

それでもやはり嬉しく思っているとクルスが困ったように言った。

「レ、レイさん・・・?」

「ん、どうした？」

「囲まれていますよ。」

「え？（レオン、エルス、ルル）」

「気にするな、問題ない。」

話に集中していて気づかなかったのか、3人は少々間が抜けた声を上げる。

馬車の周りを盗賊が囲んでいた。

その数約40人、なかなかの規模だ。

「てめえら、担当直入に聞く。」

俺らの仲間とお頭を見なかったか。

そうすれば男は見逃してやる。」

暗に女は見逃さないと言うこの男、そして好色そうな視線を2人に送るクスどもに嫌悪感を抱く。

身を竦ませる2人をさりげなく後ろに庇いながらレオンに聞く。

「レオン、どれぐらい戦える？」

「武器が有れば20人は固いが、素手ではな・・・

せいぜい5人といったところか。」

「おお！

そりゃ凄いな、じゃ俺の討ちもらし居たら対応してくれ。

無いと思うがな。」

「分かった。」

しかしかなり距離が近いが、魔法を使って大丈夫か？
俺たちを巻き込みそうだが。」

「体で止めるよ兄貴。」

「・・・俺はマゾヒストではない。」

いや、そもそもそんなことをすれば木端微塵だろうが!!」

「おい貴様ら！」

俺たちを無視するな！」

「ははは

相変わらずいい反応で嬉しい限りだ。

心配するな魔法は使わん。」

「はあっ!!?? (仲間たち)」

レオンで軽く遊びながら、フォローを頼む。

「ああ忘れてた。」

そういえばお頭とか呼ばれてた男なら俺が殺した。

よかったな。

これでお前たちはもう探す必要もないし、直ぐに憧れのお頭と会
えるぞ。」

「てめえ、一体何」

何かを言おうとしていたが、クルス、エルス、ルルを怖がらせた時
点でもうこいつらは終わりだ。

レオン？

年上の男なら自分の身は自分で守れなきゃだめだろ。

俺は今、話してた男の後ろで大型のお手製ナイフを持って立っている。

いや、後ろというのは間違いだろうか？

今男はこちらを見ているのだから。

・・・地面に落ちた生首で

「ひいあああああ！？！？！？！？」

突然上がった血潮に他のクズどもが恐慌状態に陥る。

・・・駄目だなこいつら、冷静さを失えば数の利を生かせないのに

そんなことを思いながら俺は、

死ぬ思いをして身に着けた『闘気』を再び行使した

10話 『恩寵式』と『究理式』、そして『闘気』（後書き）

感想・評価お待ちしております
余裕がありましたらどうか！

11話 誤算(前書き)

ランキング12位

PV30000突破

もう言葉にならないほど嬉しいです
これからもよろしく願います!

11話 誤算

『闘気』

それが俺が「魔の森」で身に着けた、いや、身に着けさせられた『魔法』に匹敵する技術。

「魔の森」は魔法だけで生きていけるような環境ではなかった。

森という性質上不意打ちなど日常茶飯事だし、接近されてしまえば魔法の余波で自分まで傷つってしまう。

今は他の魔法を併用し、その余波を抑え込むこと、もしくは散らしてしまうことなど容易いのだが、当時の未熟な俺には不可能だった。よって俺は、単純な身体能力を少なくとも不意打ちに対処できる程度までには引き上げる必要があった。

そして、「闘気」を手に入れた。

「魔法」が精神力である魔力を燃料とする「法則」であるのに対して、「闘気」は体力そのものを燃料とする「技術」。

魔力は精神をもとにしている以上、目にも見えず、「魔法」という形にしなければ何も影響を与えることはできない。

それに比べ「闘気」は、物質である肉体の体力をもととするために、物質的な干渉能力を持ち、光として目にもみえる。

具体的には、武器に通したり身体に循環させることで、あらゆる物質を強化できる。

さらに、瞬間的に体の外へ放出することで盾として機能させることも出来るのだ。

だが当然リスクもあった。

「魔法」のリスクは使いすぎによる気力の低下。

そして「闘気」のリスクは当然体力の低下だ。

「魔法」を使い魔獣を切り抜けると気力が無く、動く気になれない。

「闘気」を使い魔獣を切り抜けると体力が無く、動く事が出来ない。

切り抜けられる確率は跳ね上がったものの、死にそうになる確率もまた跳ね上がってしまった。
だが人とはしぶといもので、そのままの凄いペースで生き死にを繰り返しているうちに、「魔法」と「闘気」の精度、効率、その他様々な要素が急成長を遂げた。
これにより俺は基礎能力でも並みの魔獣に負けることの無い存在となった。

2分。

それですべて事足りた。
敵、いや、敵にすらなりえなかった「もの」がすべて等しく首をはねられていた。
切り口はすべて真っ直ぐで、まったく繊維をつぶしていない。
首以外は微塵も傷つけること無くことを進めた。
誰もが顔に恐怖といった感情を見せずに、不思議そうな顔をして転がっている。

首だけの無い死体
不思議そうな顔
絡み合った手足
そして、血のプール

見たものに絶大な恐怖と共に、背筋が凍るような暗く澄んだ美しさを与えてくれる、この世のモノとは思えない光景

引き起こしたのは俺の右手の、柄まですべてが血塗られたナイフ。これは、俺が最初に倒したあの虎の、別の個体の刃を加工したもの。向こうの軍用ナイフを遙かに超える切れ味をもつ。

いや、物のせいにしては駄目だな。引き起こしたのは俺だ。

全身を血に浸したかのようにして、死体のオブジェの中心で佇む俺なのだ。

しかし物に責任転嫁するとは、俺も罪悪感を感じてるんだろうか？

・・・まったく実感はしていないが。

魔法で水を生み出し、風を起こして洗濯機のように循環させて血を強引にこそぎ取る。

「闘気」による肉体の強化、強靱な魔物から造った衣服、そして「魔法」のすべてが揃わないとできない荒業だ。

戦闘前と同じ姿になって、覚悟をしてから仲間を振り返る。

驚きを隠せなかった

始めこそ彼らは怯えを見せたものの、それも一瞬のこと。

直ぐに仕方のない弟を見るかのような、呆れと微笑みを当分に混ぜた表情を見せた。

・・・クルスとルルにまでそう見られるのは納得できんが

何故？

これだけのことをした俺を、どうしてそんな表情で見られるんだ？

「まったく・・・」

何処までも規格外だなお前は。

今の闘気だろ？

あんなことができるなんて初めて知ったぞ。」

「まっつったくです。」

本当にレイさんは凄すぎですよ！

この分なら竜でも問題ないでしょうね。」

「私はそろそろ驚き疲れますね・・・」

魔力と闘気を同時に扱える人間なんて神話ぐらいでしか聞いたことがありません。

いえ、そもそも人間なんですよねレイ様は？」

「レイさんが規格外なのはもともとから分かってたではないですが、兄さん。」

今更そんなこと言わないでくださいな。

まあ、お気持ちはよく分かりますが。」

何故？

こんな冷酷な俺に、どうしてそんな声をかけられるんだ？

普通なら怯えて当然だろう？

蔑んで当然だろう？

罵声を浴びせて当然だろう？

避けて当然だろう？

分からない。

俺には分からない。

「そんなに怯えないでくださいレイさん。」

私たちは本当にあなたに対して恐れを抱いてなどいませんよ？」

そのルルの発言は俺に更なる衝撃を与えた。

怯えるだと？

君らではなく俺が。

この惨劇を見せられた者ではなく。

この惨劇を引き起こした張本人が。

だが言われて初めて気が付いたが、確かに俺は怯えていた、この想像外の事態に。

なんでこんなおかしな事態になってるんだ。

俺が首だけを狩るなどという猟奇的な殺害方法を選ったのは、今ここでこの4人を見極めておこうと考えたからだ。

俺は個人的にこの4人のことを気に入っている。

だがそれはあくまで俺個人の感情であり、あちらがどう思っているかは分からない。

俺の異常そのものの行動の数々に付き合いきれなくなることも十分に考えられる。

むしろ見限られる望みの方が多い。

この光景を見ても、直ぐに切り替えて先ほどまでと同じ態度で接し
てくれれば、そのままの関係で居よう、いや、居たい。

そして、動揺をいつまでも隠せないようであれば、適度に世間に慣
れるまでは一緒に居て、その後なにかしらの理由をつけて離れよう。
そう考えていたのだ。

自分勝手なようだが、分かり合えないまま一緒に居てもどちらも辛
いだけだ。

そう考えていたら、出てきた反応がこれだ。

彼らが見せた反応は俺の予想していた、「順応」でも「動揺」でも

ない。

俺の行動の異常性を十分知った上で、それを受け入れるという「理解」だった。

そんなことだれが予想できるというのか。

「ふう、まあ、戸惑うのも無理ないだろうがな。

お前、俺たちがこれを見て怯えると思ってたんだろ？

だから体を洗い、俺たちの方を向いたときあんな酷い顔をしてたんだよな……」

レオンが俺を悼むように言ってくる。

「これだけのことを平然と行えることについて、うすら寒さを覚えている面は確かにありますよ。

ですが、その冷酷さはあくまであなたの一面に過ぎません。

私たちを救ってくださいった、優しさがあることも理解しているんです。」

エルスは俺を励ますように笑顔で言う。

「僕の場合は、ちょっと不謹慎なようですがあなたのそんな面も含めて尊敬の対象なんです。

ですから僕は、最終的にあなたを拒絶するようなことは絶対に無いと断言できます。」

クルスが自信たっぷりと言う。

無理をしている様子が無いので本心なのだろう。

「私は人を見る目には自信があるんですよ。

あなたは確かに戦いを楽しむ面はあるんでしょうが、殺人に快樂

を覚えるような性格はしていませんよね？

今回わざわざこんな酷い殺し方をしたのは、何か意図があったの
ことだと思つのですがどうでしょう？」

ルルに至つては、俺が何かのために意識的に惨劇を起こしたことを
察していたようだった。

俺は何かを言おうと口を動かすのだが、言葉にならない。

今の心情をどう言葉にすればいいのだろうか・・・

その様子を見た彼らは、突然笑い出した。

代表してその理由を話したのはレオンだ。

「すまんすまん！」

だがお前でもそんな表情をするんだと思つてな！

俺らは会つてまだ1日なのに、今まで散々からかわれたからな。

仕返しが出来たという思いで愉快でたまらないんだよ。」

「本当ですね（3人）。」

レオンがそう言えば3人が笑いながらまったくだとばかりに頷く。

俺はその発言で理解した。

俺は勘違いしていたのだ。

そもそも俺が彼らを試そうとしたこと自体が身の程知らずだった。
いくら強くて世慣れていると言っても、所詮俺は人間に過ぎない。
人間が人間を試そうとした時点でおこがましいことだったのだ。

「あつははははは！！！！」

俺は笑った。

いつもの意地の悪い笑みではなく、心から。

楽しさ、爽快さが溢れてくる笑いだった。

こんなに笑ったのは『あの事件』以来初めてだ。

「全く、驚きだよ。」

君らを完全に舐めていた、本当に申し訳ない。

まさかこれだけのものを見せられて尚、俺を受け入れてくれるとは思ってなかった。」

彼らにそう語りかける。

何故かエルスとルルは、俺が笑っているときの顔を見て赤くなっていた。

だが気にせずそのまま語る。

「皆、俺の想像を軽く超えてくれたものだな。」

特にルルはすごいものだ。」

「はいっ!？」

す、すごいってどういうことですか!？」

「俺の行動に裏があったことを簡単に察してみせただろう?」

しかし、君がいれば騙されることなど無かったと思うのだが。

その時はサボっていたのか?」

「サ、サボってなんていません!

その時は逃亡生活で疲れていたんですよ!

それに普段の私はそんな深いところまで理解などできません。

今回できたのは、・・・が・・・からです・・・」

最後の言葉はしりすばみに小さくなったためにつまぐ聞こえなかった。

その発言にエルスが驚いたような、困惑したような表情を浮かべて

ルルを見ていた。

だが俺はそれも気にすることはなかった。
今回はいろんな意味で俺の完敗だな。
だが、この上なく気分がいい。

まったく。

この世界に来て初めて、そして最大の『誤算』だな。

だが、最高の『誤算』だ

11話 誤算（後書き）

余裕がありましたら、感想・評価をどうかお願いします

12話 ネスト（前書き）

日間ランキング4位！

ついに1桁です。

ご支援いただき誠にありがとうございます。
そして、これからもよろしく願います。

12話 ネスト

side エルス

私の人生は、幸せだと言えるものだった。

半年前に祖国が滅びるまでは。

それからの生活は酷いものだ。

愚かだった他の貴族ほどではなかったが、裕福な生活に慣れ切っていた私たちにとっては苦行の連続。

それでも弟を、家族と言える存在を助けようと必死になった。

何度もこの身売ってしまおうかと思っただが、父の最後の言葉に思い留まらせられた。

幸せに生きる

後で聞いてみたら、父の訃報で一言も喋らなくなってしまっていたクルスがその時だけ生気を取り戻してくれた。

どうやらクルスにも父がそう言っているように見えたらしい。

身体売ってしまえば、二度と幸せを感じることはないだろう。

そう思い、なんとかかまともをやっつけていこうと考えていた。

そんな思いも、捕まってしまった以上無意味になってしまったが。

疲れていたのだろう。

畏れろと思えない畏れに、あっさりと引掛かってしまった。

こんな簡単なことに引掛かってしまうのだから、元気だとしても遠からずこうなっていたらろうけど。

自慢じゃないけれども、私たちはかなり容姿が整っているという自覚がある。

だけど、今回はそれを恨んでしまう。

容姿がいい人間が奴隷になってしまつとどうなるのかなど、言つまでもない。

好色な貴族の玩具になるのが落ちだろう。

奴隷商人の馬車の中で思う。

悔しい。

他の人が見たら、私は脱出の術を練っているように見えたと思う。

でも私はそれしか考えられない。

父の願いを果たせなかつたことも。

弟を守れなかつたことも。

仲間の助けにほとんどなれなかつたことも。

ひたすら悔しかった。

心が静かに絶望に沈みそうになっていると

レイ様が全てを吹き飛ばしてくれた

始めは悪感情しか持たなかつたが、話しているうちにそんなものは消えていた。

切っ掛けはルルが心を開いたことだ。

ルルは人見知りか激しい分、人の本質を見極めることに長けていた。それで警戒心が緩んだことから気づいたが、彼はいつも私たちのことを考えてくれていた。

言葉が辛辣なせいで分かり難かったが、言っていることは忠告や私たちの身の安全を考えてのことが多い。そんな人に悪感情を抱けるはずもない。奴隷ではなく、従者として行動をともしてほしいと言われた時は、喜びに飛び上がりそうだったくらいに彼に好感を抱いていた。馬車の中で何の違和感もなく従者としての主人の呼び名が出てきたくらいだ。

「ご主人様、まずは何からお話ししましょうか？」

「ぶふお!？」

何故そんな呼び名で呼ぶ・・・!」

「え？」

従者なのだから当然ではないですか。」

「今すぐ止めて、名前で呼べ。」

「何故ですか？」

「俺がその呼ばれ方にいい印象を抱いていないからだ。」

「・・・嫌です。」

「なんで!？」

「従者ですから当然です。」

「従者なら主人の意向に従うというのが当然の選択だろうが!！」

こんなやり取りがしばらく続き、結局はレイ様という呼び方に落ち着いてしまった。

でも何故私はあんなにむきになってこだわったのだろうか？

今でも分らない・・・

レイ様はある種、浮世離れした存在だった。

世間の常識を知らないかと思えば、誰も知らないようなことに対して深い造詣を持っている。

全く新しい魔法（本人の談ではただ発展させただけらしいけど、どうしてもそうは思えない）を独自に創り上げている。

同時に使うことが不可能だと考えられていた、「魔法」と「闘気」をどちらも扱える。

性格はどうも捉えどころがなく、冷酷な面が目立つけれども、どこか優しさや暖かき、安心感を与えてくれる。

そんな奇妙で、どこか絶対的な存在。

レイ様が闘気を常識外の用い方をして引き起こした光景には、彼に語った通りうすら寒さを感じた。

芸術品のような美しさを放つ死体たちの中心に立ち尽くす、真紅の死神

人の身では辿り着けない極致へと行き着いた人外

私が抱いた思いはそんなところ。

負の思いを微塵も抱かないはずが無い。

だが彼が振り向いた時の表情を見てそれが勘違いと分かった。

その表情からは何も読み取れない。
と言っても無表情だからではない。

数えきれないほどの感情が同時に存在しているせいで、どの思いが大きいのか分からなかったのだ。

だが、彼がとても酷い心境でいることだけは理解できる。

レイ様にとつては心外だろうけど、私たちはその表情に安心した。
人でなければそんな表情はできないのだから。

それまではあまりにもかけ離れた存在だと思っていたせいで、心のどこかで遠慮が生まれていた。

だが、この人も私たちと同じ人なのだと分かると私は新しい感情を抱いた。

「親近感」と「好感」、そしてこの人の力になりたいという「欲求」。

そんな思いを皆も抱いたのだろう。

いつの間にか、彼をからかうような物言いをしてしまっていた。

彼の何とも言えないような表情は私たちにさらに親近感を与え、愉快になってしまう。

そうしていると彼が俯いていた。

流石にやり過ぎただろうかと思ひ、少し萎縮してしまう。

そして驚いたことに突然笑い出した。

いつもの影を含んだものでなく、ひたすら明るく、愉快そうに、満面の笑みで。

・・・それが私にはひどく魅力的に見えた

その後の彼の言葉、私たちを讃えるような物言いには心が浮き立つほど嬉しく感じた。

ルルのみを褒める言葉には正直嫉妬を抱いてしまったが。

そして、それを聞いた時のルルの反応にも。

今回できたのは、相手があなただったからです・・・

この言葉は恐らくレイ様には聞こえなかっただろう。だが、近くに居た私には聞こえてしまった。その時の自分の心境はうまく説明することができない。でも1つつ分かったことがある。この思いはレイ様を単なる主人と考えていては抱かないものだといふこと。

この思いはただの「好感」なのだろうか

それとも・・・

s i d e o u t

あれから1日。
あれ以外は襲撃を受けることもなく、あっさりと「ルッソの街」にたどり着いた。
そしてまず向かったのが、ネストだ。

その時の俺の様子はすごかったろう。
街だけあって人が多く、活気がある。

それを見て、かなり浮き足立っていたのだ。
と言っても、赤の他人では分からない程度のものでしかなかったの
だが、お供の4人は察することができたようで、一様に苦笑を浮か
べていた。

その4人は予想通りというか、衆目の視線を集めている。
まあ、無理もない。

ただでさえ容姿が良いのに、金と銀の髪が幻想的な美しさと一体感
を醸し出しているのだから。

そんな人たちと一緒に居る俺に対しては訝しげな視線が。

・・・他人がどう思おうが知ったことではないがな

ちなみに、今彼らが着ている服は修理用に大量にとっておいた例の
糸を俺が魔法で織り上げたもので、見栄えは質素であるもののそれ
が逆に素朴な美しさを感じさせる。

道中、火球と水の魔法で即席の風呂を作り入ったので、からだもき
れいだ。

始めは奴隷だったため酷かったからな。
まったく、魔法さまさまだ。

そうしてネストに到着。

その建物は目立つところにあつたため、迷うことはなかった。

質実剛健という言葉がぴったり当てはまる外見で、これだけでこの
街の冒険者に好感を覚えた。

こういったものには、利用する人間の好みが現れるものだ。

この外見が、見た目よりも実力を重視するものが多いということが
分かる。

そんなことを思いながらなかへ入る。

建物のなかには人に溢れ、酒場もあり、活気がある。
どこか粗暴な雰囲気があるが、冒険者は自由を重んじるらしいので
当然だろう。

こちらに視線が集まるが無視し、受付と思われる場所へ向かう。

「すみません。」

冒険者ってここでなれるんですか？」

受付には同年代、もしくは少し上に見える長い青い髪の毛、おとなし
そうな女性がいた。

始めはこちら、というよりは俺を見て、何故か驚いた表情を浮かべ
ていたのだが、あまりに基本的なことを聞いたためか不思議そうな
顔をする。

だが直ぐに応えてくれた。

「ええ。」

ここで冒険者としての登録が可能です。

登録をお望みですか？」

「はい。」

5人ですがどのくらいかかります？」

「そうですね・・・」

大体20分ほどでしょうか。

説明を一括でできるのでそれほど時間はかからないですね。
よろしいですか？」

「ええ、お願いします。」

「分かりました。」

まあ、説明といってもそれほどのものは無いんですが。

「ご存じとは思いますが、冒険者はランクがあり、G、F、E、D、C、B、Aの7段階になっています。」

当然初めはGランクからですね。

「と言ってもこれは、ほとんど強さの目安という意味しか持ちませ
ん。」

依頼にも推奨ランクが書かれてはいますが、望みさえすればGラ
ンクの間がAランクの依頼を受けることも可能です。

「・・・ほぼ間違いなく自殺と同義ですけどね。」

ランクが関係あるとしたら、「危険域」に入る時、もしくはネス
トが名指しで依頼を頼むときぐらいです。

ランクは自分より上の推奨ランクの依頼を5回成功すれば上がり
ます。」

そして、上がるまえに3回、推奨ランクにかかわらず依頼を失敗
すれば下がります。」

Gランクの場合は下がることはなく、銀貨5枚の罰金が科せられ
ます。」

さすがに何度も失敗するのを認めるわけにはいきませんからね。」

「・・・本当に自由なんですな、冒険者は。」

その分いかなることがあっても自己責任ということでしょうか？」

「お話が早くて助かります。」

その通りで、素行や依頼内容の不備などによるトラブル全てに対
して、ネストは一切干渉いたしません。」

どんな事情があるとしても、です。」

あと、これは関係があることなどないと思いますが、先ほどラン
クはAまでとご説明しましたね？」

「ええ。」

「ランクの上に位置するものが一応は存在するんですよ。それが『二つ名』です。」

「へえ、それは先ほどの条件でAランクから上がるんでしょうか？」

「いえ、『二つ名』はランクに関係なく、人としての枠を超えた存在に与えられる「称号」です。

今確認されているのは3人ですね。

・・・人で数えていいのかは分からないのですが。」

「ははは

物騒な方たちの方ですよ。

目の前にいたら私なら逃げ出してしまいますよ。」

「はあ・・・(仲間)」

俺がそう言うと雰囲気緊張して黙っていたはずの4人が、一斉に何を言ってるんだお前は、とばかりに溜息を吐く。文句でもあるのか君ら。

「説明はこんなところですね。

では、登録してもよろしいでしょうか。」

「はい。

何をすればいいの？」

「簡単ですよ。

これに血を垂らして、名前をご記入していただくだけで結構です。」

「

そう言い人数分のカードが手渡される。
見た目としてはクレジットカードのようなものだろうか。

「・・・本名でなければいけませんか？」

「・・・何か事情があるみたいですね。
偽名や愛称でも別に構いませんよ。
書かれた名前はあくまで人の判別程度にしか使いませんから。」

「分かりました。」

「じゃあみんな、各自書いてくれ。」

そして直ぐに書き終わる。

クルスとルルは血を流す時軽く泣きそうになっていたが、
ちなみに俺は馬車の中で名前程度はかけるようになってるので問題
ない。

読む、聞くはできても書くはできなかったのだ。

「はい。」

これで登録完了です。

カードは再発行に銀貨10枚かかりますのでお気をつけください。

「

わかりました。」

ちなみにこちらで魔獣の素材の売却は可能ですか？」

「はい、できますよ。」

俺はその言葉を聞き、担いでいた大きな袋をカウンターに置く。

「では、これをお願いします。」

「分かりました。」

では確認いたしますね。」

「お願いします。」

そして、袋を開けて固まった。

そのまましばらくして、

「あ……」

これは本物ですか？」

「それに関してはご想像のお任せします。」

まあ、そういう反応をするということは分かっているのでしょうか？」

「ええ、その通りです……」

ちよっとお待ちください。」

私には判断がつきかねますので。」

責任者をお呼びしてきます。」

そう言い奥へ走っていく。

そのやり取りに気が付いたのか、周りの視線が集まっていた。

ま、予想通りの反応だな

12話 ネスト(後書き)

余裕がありましたら、評価・感想を！

13話 利害関係成立(前書き)

とうとう日間1位達成!!

そして週間4位

月間38位

まさか初めて一週間でここまでいくとは

これからもよろしくお願いします!

書き直しました

できるだけ違和感ないように頑張ったんでよろしくお願いします

13話 利害関係成立

「セフィリアから聞いたぞ。

これを持って来たのはお主で間違いないのだな？」

責任者は、がっしりした体格で長身の老齢の人物だった。

青い長い髭をもち短髪で、年齢に合わせ鋭い眼光を持っている。
秀囲気で分かる。

強者、いや、古強者だな。

単純な強さだけでなく、長年の経験に裏打ちされた戦いの嗅覚までも持つ人物。

・・・警戒しておこう、俺の方が強さは上でも、同程度に重要な戦いの瞬間の判断力では劣る

「確かにこの素材を持って来たのは私です。

しかし、セフィリアとは？」

「この娘だ。

儂の孫娘で、このネストの幹部の一人でもある。

そして儂はディックという。

このネストの主、ネストキーパーを務めている。」

ほう、この人たちはそんな名前だったのか。

しかしこの老人の孫を見る目、一目で分かるな。

爺馬鹿だ。

まあ今は置いておこう。

しかし、ネストキーパー（巣の守り手）か、なかなか的確を射た命名だな。

「幹部の方でしたか。」

私は令、この4人の主人をやっています。

あなた方の右手から、レオン、ルル、エルス、クルスです。

お見知りおきください。

しかし幹部の方自らが何故受付を？」

「僕が気に入る人間でないとこのネストでは働けないようにしているのだよ。」

まったく、最近は何のある人間がいなくて人手が足りん……

「

口ではそう言っているが、これはあれだな。

「なるほど。」

私はてつきりあなたが孫娘に言い寄る人間から遠ざけるために幹部の地位を与え、さらに人員の削減をしているのかと思ってました。

まあそんな職権乱用をネストの長ともあろう方がするはずがありませんよね。」

不自然なまでに綺麗な笑顔をつくり語りかける。

そして老人は苦虫を噛み潰したような、女性は恥ずかしさを耐えるような表情を浮かべる。

周りでこちらの様子を伺っていたものも笑いをかみ殺しているし、やはり当たっていたか。

「食えん男よ……」

それで、いろいろと聞きたいことがある。

嘘を吐かず、正直に答える。」

老人の言葉に不機嫌の色が混じり威圧感が増した。

逆効果だったようだ。

ついからかいたくなってやってしまった。

だが反省はしていない。

「ははは

ただの戯れですよ、そんなに怒らないでください。

それに、別にそう威圧しなくても私は嘘など吐きませんよ?」

ディック殿と反対に俺は悪戯が成功した子供のような心境でご機嫌なのだ。

その程度の威圧では微動だにしない。

その代わりにさらに不機嫌になった人はいたが・・・

「ちつ、短刀直入に聞く。

何故今日冒険者になったばかりにも関わらず、「魔の森」の魔獣の素材を持っている?」

「何だと!?!」

「「危険域」から生きて帰ってきたというのか!?!」

「馬鹿を言うな、あの年で不可能だ。」

「そうだ、大方誰かが狩ったのを名声の為に買ったんだろうよ。」

「魔の森」の単語に周りの人間が1人残らず驚愕の声を上げる。

だがやはり懐疑的な意見ばかりだ。

まあいくら実力主義とはいえ、こんな若造を自分たちより強いと認めるのは難しいだろう。

「森の近くを通っているとき、この4人が盗賊に襲われているのを助けたんです。

その時にでた大量の血の匂いに惹かれて森の魔物が襲って来たん

ですよ。

あの時は正直死ぬかと思いましたね・・・」

遠い目をしてそう説明した。

嘘であるが事実も含まれている話である以上、表情を作るのも比較的楽だ。

「よくまあそんな底の浅い嘘を吐けるな。

魔獣を倒す實力があるのかという疑問もあるがこの際おいておこう。」

今の問題は、森の中に侵入したということだ。」

まあ、当然これで済むほど簡単な相手でないよ・・・

「侵入ですか？

冒険者は基本自由と聞きましたが、それなのにダメなので？

と言いますか、そもそも私はさっき森に入ったなんて言ってますんよ。」

「「危険域」に限っては国の管轄なので別なのだよ。

中の強大な魔獣が、馬鹿がちょっかいを出したせいで飛び出してきたらたまらんからな。

そして奥深くに入ったことに関しては、証拠があるので言い逃れはできんぞ。」

「ほう、証拠ですか。

それはいついたいなんでしょう。」

いつのまにか辺りには重い緊張感が漂っていた。

ネストのなかの人間はこの老人と俺が対等に話していることに、全

員が困惑を露わにした。

仲間衆はすらすらと流れるように嘘を吐き、そして臆することなく会話を続ける俺に感心しているようだ。

「簡単だ、この袋の中に「刃虎」^{ザンタイガー}の素材があつた。

あれは森の奥深くでしか確認されていないBランクの上位相当の魔獣であり、しかもあの森の固有種でそれ以外の場での目撃情報は存在しない。

お前か、もしくは誰かが中に侵入したことは確実だ。」

本人はこれで俺が落ちると考えているのだろう。

勝ち誇った笑みを浮かべる。

「ふふふ」

その発言に対して俺は微笑みを返す。

「何が可笑しい？」

「いえ、貴方は凄いなだと思ひまして。

魔獣について大変お詳しいようですね。」

「？、どういうことだ？」

「あなたの今の言葉は、魔獣について知り尽くしていないと出てこないものですから。」

何を言っているのか分からないという表情を浮かべるディック殿に、俺の意見を述べる。

「魔獣は今でも研究があまり進んでいなく、詳しい生態がわかっていません。」

そうであるのにあなたは「刃虎」の生態を断言することが出来た。魔獣の中でも強力で、特に謎の多い種であるにも関わらず、ね。」

「む・・・」

だが過去の例を見るに、お前の言うような状況になることはないはずだが？」

「過去はあくまで過去に過ぎませんよ。」

これから何が起るかなど、確実なことを言える人間はいません。ましてや「刃虎」は生き物で、自分の意志を持ち自由に動きます。偶然森の奥から出てきていて、濃い血の匂いに誘われて出てくる。ことが無いと断言することが出来ますか？」

もっともらしいことを言うてはいるが、俺の言葉は詭弁に過ぎない。もちろん、嘘などではなくむしろ真実であるが、これはあくまでそんなこともあるな、という程度のものしか相手に与えることはない。だが、そう思わせることは重要だ。

人は可能性を与えられると、いくらありえないことだと思っけてもそれを完全に否定することは難しい。

ディック殿の考えに、ほんの少しでも不信任を与えることが目的だ。どうやら成功したようで、少し迷いを浮かべた。

「なるほど、お主は頭も回るようだな。」

そんな返し方をされるとは思わなかったぞ。

だが、そこまで頭が回るのであれば分かっているだろう？それは俺の意見のほかに道があることを示す以上の意味はない。

しかも、その道は俺の意見と比べて前例という道しるべがなく遙かに狭い道だ。」

ああ、その通りだ。
だから俺はあなたに期待しているんですよ？

「儂の一存でお主が問題を起こしたかどうかが決まるわけだ・・・
まったく、初めはさっさと処断してしまおうかと思っていたのだ
がここまで有望そうな若造だとは思わなかった。

生意気にも儂の器量と人柄を試していたようだしの。」

そう言い、ディック殿は苦笑を浮かべた。

どうやら、俺がなにを欲しているのか正確に察してくれたようだ。
さすがネストキーパー、話が分かる。

俺は仲間の話から、「魔の森」で得た素材の処分が難しいことを知
った。

強力な個体から得られるものは当然珍しいので、市場に出れば騒ぎ
になる。

しかも立ち入ることが出来る人間が限られている「危険域」産であ
ればなおさらである上、ばれれば罪になることもありえる。

だが、俺たちは早めに資金を集めたかった。

それには素材を何とかして売るのが一番手っ取り早い。

そこで俺が考えたのが、ネストの主を頼ること。

そもそも俺の使う、武器、薬、その他のあらゆる所持品は「魔の森」
製なので隠すことは不可能だ。

ならばいつそのこと、自分からばらしてしまおうと考えた。

もちろん策が無かったわけでもない。

一施設の長ともあれば、その器量は高いだろう。

普通の施設であれば権力により腐った人間の可能性もあるが、自由

人気質の冒険者であればそんな人間を長と認めるはずがない。

俺たちが、捕まえるよりは事実を隠してしまい、利用する方が都合であることを示す

そのために、このようなやり取りを行ったのだ。

選択肢を増やし、罪とするか不問とするか自由に選べる状況を作り上げた。

これで、長は俺たちを不問にして警備などに追求されたとしても躲すことができる。

あり得ないと思っても完全に否定できない以上、高い地位もあり深く追求されることはない。

ここまでの会話で、この老人は俺の求めることを理解している。

そして、目の前の若造が頭の回る有用そうな存在であることも。

あとはこの人の器量と人柄次第。

器量が大きければ、誰も喜ばず何の意味もない罪を与えるよりも、

ここに喜ぶ人間のいる実利を優先するだろう。

自由人の冒険者らしい人柄であれば、罪を隠すことをそれほど気にすることはない。

まあ、もし都合の悪いようになったら逃げるだけだから、別にいいんだが……

そしてその結果は、

「くつくつく……」

お主は一体どのような人生を送ってきたのだか。

分かった、この件はなかったことにする。

素材に対する報酬を用意しよう。

まあ、想像してると思うが条件付きだな。」

そりゃそうだ。

有用だと考えれば利用するのが当然、それを承知したうえで持ちかけたのだからな。

「分かりました。

条件とは？」

「いきなり決めたことだ、まだ決めてはいない。

まあ恐らく、そのネスト直属の男たちとの共同依頼になるだろう。」

まずは実力を見なければどうしようもないからな。」

ディック殿が視線を向けた方には、3人の男がいた。すると、その男たちが色めき立つ。

「な、長！

それは困りますよ！」

「ああ、俺たちに初心者の手ほどきをしろというのか？」

「足手まといが増えるのはごめんだぞ。」

これまたテンプレだな・・・

あと、レオン以外の皆、そんな敵意をむき出しにするな。顔が怖いぞ。

済ました顔で立っているレオンを見習え。

その視線に気を悪くしたのか、3人が詰め寄る。

「どうした、従者と違いお前は何もやり返さないのか？」

そう言い睨みつけてきた男に対して、おれは俯く。男たちはこれを見て、俺が怖がっていると考えているようだ、気配に優越感が感じられる。だが、こいつらは気づくべきだった、俺の横顔を見た者が1人残らず身を引いていることに。

俺の口元は綺麗な三日月型に吊り上っていた

なんとまあ都合がいい。

ここで力を見せられる生贄を用意してくれるとは。こいつらと同じ考えをここにいるほとんどの人間が持っているはずだ。

ここで1つ、俺に恐怖を抱いてもらうとしよう。その意見を変えてもらうには、それが一番手っ取り早い。

俺が顔を上げると、男たちは顔に恐怖をのぞかせる。

「エルス、ルル、クルス、下がっててくれ。

これから使うのは目標以外に害を与えることはあり得ないが、念のためだ。」

「はい、分かりました。（レオン以外）」

「・・・ほんとお前は俺に厳しいよな。

前から聞いてみたかったんだが、お前は俺をどう思っているんだ？」

「リツパな漢。」

「すごいな。」

本来なら褒め言葉のはずなのに馬鹿にされているように感じられない。

「お前に会ってから俺はいつも言葉の奥深さに感心させられてるよ。」

「おお、成長したなレオン。」

無意識とはいえまさか、からかいに対して皮肉で返すという高度な技法を用いるとは思わなかったぞ。

「お、お前！」

「俺たちを無視してんじゃねえよ！」

まあ、いいじゃないか、話ぐらい。

それだけお前らの猶予が増えるんだから。

無視されたという事実と、俺の態度に混乱していたのか、男の一人がいきなり殴りかかって来たので、その力に逆らわずにその男を流れるような動きで捕まえて転ばす。

俺の行動と仲間がやられたことに反応し攻撃して来た他の2人もまた。

盗賊どもとは比べものにならないほど速かったが、さして問題にはならなかった。

「長、一応聞いておきますがここでやり返しても問題になったりしませんよね？」

「ああ、知っての通り自由人気質だからな。」

「当事者以外に被害を与えるようなことがなければ問題ない。」

「では、今からお返しさせていただきます。」

そう前置きして、男たちの方に向き直る。
そして俺は、こういつた時のために以前から用意していた魔法を使う。

「あがごヴあじゅぐででは！！??」

意味不明の音を口から垂れ流しながら崩れ落ちる2人の男。
白目を剥き、口から泡を吹き出し、痙攣を繰り返す。
そして残った男には、

「~~~~~!?!」

男の急所を蹴り上げて対処する。

潰してはいないが、痛みは相当だろう。

俺が作り上げた状況に恐怖する人々。

まあ、当然誰も死んではない。

未知の魔法により生み出された酷い有様の男
急所を躊躇いなく蹴り上げた容赦のなさ

それで恐怖を与えるに十分だからだ。

未知というのは怖いものだ、何が原因かも不明、引き起こされた結果も不明。

知らないという事実は様々な憶測、推測、妄想を呼び、恐怖をどんどん引き立ててくれる。

「では、ネストキーパー様、私たちはこれで。

明日また訪れさせていただきます。

それまでにはその人たちも回復するはずですので。

行こう、皆。」

「あ、ああ。」

分かった、それまでに何を依頼するのか考えておく・・・」

困惑しながら答えるディック殿を置き去りにして、顔を引きつらせる4人を連れてネストを後にする。

最後に見たのは、興味深そうにこちらを見ているセフィリアさんだった。

13話 利害関係成立（後書き）

いつも評価して頂きありがとうございます！
これからもお願いします

14話 恋とは？（前書き）

講習忙しい・・・

今回の終わり方、これでいいのか悩みましたがこれにしました
どうかよろしくお願いします

14話 恋とは？

side セフィリア

お爺様には困ったものだ。

普段はネストキーパーとしての役割を厳格に果たす尊敬すべき人物でも私のことになる途端に甘くなってしまう。

職権乱用で私の職場を勝手に都合のいいように造り換えてしまうなんて。

本当に困ったものだ・・・

お爺様も何も初めからこうだったわけではない。

始めはちゃんと私にも、そして両親にも厳しく接していた。

変わったのは1年前、両親が他界してしまっただからだ。

その事実はお爺様にとって相当なショックだったらしい。

それからしばらくは仕事も手に付いていなかった。

一週間ほどして、ようやく立ち直ったときにはすでにこうなっていた。

以前その理由を聞いてみると、あっさりと教えてくれた。

「僕はあの2人に厳しく接するばかりで何も与えてやることができなかった。

きっと僕のことを恨んでいるだろうよ・・・

それが心残りでならんだ。

誰もが想像できるような、単純な理由。

だけどそうであるからこそ、純粹な後悔の念を感じることが出来た。

その思いを代わりに向けられる私としてはたまったものではないの

だが・・・

といっても無碍に出来るようなものでもなく、その気持ちは嬉しいので、強くいうことはできない。

そんなわけで、この状況に適応することに決めた。

周りのネストの職員や、利用する人たちも同じ方向に決めたようで、徐々に気にする人はいなくなっていくた。

すると、新たな問題が起きた。

まあ、問題とも言えない些細なことだけれども。

退屈なのだ。

お爺様の過保護のせいでせっかくCランクにまでなっていたのに依頼は受けられなく、仮に受けられたとしても下位のランクのものばかり。

訓練は欠かさずに勘は鈍らないようにしていたが、それを活かす場がないことはつまらない。

受付の仕事もいろんな人と会えるから嫌いではないのだが、私としては体を動かす方が性に合っているし、このまま続くようなら流石に黙っていられないし直訴しよう。

そう決意しながら今日も受付をする。

すると、ネストに5人の男女が入ってきた。

長短の金銀の髪。

顔の造形も綺麗な一言しか出てこないほど端正で、不思議な一体感が漂う4人だった。

冒険者は比較的ではあるが粗暴な人間が多く、美形な人は少ない。そんな環境なのだから、この4人が注目を集めたのは当然だろう。容姿に自信のあった私でも少し見惚れてしまったくらいなのだから。だが最後の、中央にいる1人はよく分からない。

魔獣の皮から作ったと思われる見たことのない意匠の黒い服装。

顔は端正であるが周りの人たちほどではなく、普通なら目立たないはずだ。

しかし彼は埋もれてしまうことはなく、それどころかその服装が相まって独特の存在感を放ち、視線を集めてさえいる。

その存在感を一言で言うなら、『異質』

そこにいる存在が、自分たちと同じ存在であると感じながら、まるで違うものを見ているかのような『異質』さが同時に感じられる。彼ら、いや、彼は私の前まで来て質問をしてきた。

どうやら冒険者の登録をしに来たようだった。

それからは普通に受付としての対応をし、説明と手続きを済ませた。途中、する必要のない『二つ名』の説明を何故かしてしまったが、その程度であれば問題になることもない。

それからの展開は大問題だったが・・・

素材の売却をしたいと言って差し出してきた袋に入っていたのは、Bランクでもなければ倒せない強力な魔獣のものばかり。

それだけであればまだ良かったのだが、その中には例の「危険域」固有のものが少なからず含まれていた。

ここまでのこととなれば私の一存で決めるわけにはいかず、お爺・・・
・ネストキーパーを呼んできた。

私にとって驚愕のやり取りが始まった。

かなりの威圧感を放つ長を笑って受け流し、からかいさえする青年。長の追求を飄々と受け流し、自論を語り迷わせる。

拳句の果てに、話の内容から察するに暗に取引まで提案していたらしい。

ネストキーパー相手に信じられない胆力だ。

そして長の出した結論は、問題を問わないかわりにこちらの依頼を

受けてもらいたいというもの。

この青年は、自分の要求を認めさせてしまったのだ。それだけでもすごいことだが、その後の出来事は私の想像を超えていた。

長が依頼にネスト配下の冒険者を同伴させるといふ旨を言うと、話を聞いていた彼らが声を上げて反発してきた。

實力を見る為に間違いなく討伐系の依頼になるだろうから、よく知らない人間と組みたくないのは当然だろう。

そうして青年に詰め寄り始める彼ら。

次の瞬間に私の背中に悪寒が走った。

青年が邪悪そのものの笑みを浮かべていたのだ。

見た周りの人が1人残らず引くほどの恐怖を与える、そんな笑み。

その後の魔法と合わせて、青年への周りの人の恐怖はより強固なものとなる。

襲いかかって来た3人の男を容易く受け流し、前置きをしてから彼は魔法を使ったらしい。

らしいというのは、音も、光も、その他あらゆる前兆が無かったからだ。

それなのに男の内2人が突然奇声を上げて倒れ伏す。

なにもかもが不明の魔法だった。

そして残った1人は・・・あそこを蹴られて撃沈した。

女の身の私にはよく分からないが、その反応から相当の痛みらしいことが分かる。

周りの男たちも、長を含めて全員が思わずといった様子で股間を押えていた。

何をしたのか、何が起きたのかも分からないという恐怖
何をしたのかはつきりと分かる、容赦のなさへの恐怖

青年はネストの空気を完全に支配したまま、ネストを出て行った。

私は恐れを感じながらも、等分の興味を彼らへと抱いていた。

「長、先ほどの条件で本当によかったんですか？
確かに国に追求されたとしても言い逃れは容易いでしょうけど、
それでもしつこかった場合の迷惑は馬鹿に出来ませんよ？」

「問題ないさ。」

そもそも「危険域」の立ち入りを制限しているのは建前以上の意味はない。

あまり知られていないことだが、毎年資格のない人間が多く無断で侵入している。

まあ、帰ってくる者はないに等しいのだがな。

さつきあたかも問題であるかのように語ったのは、からかってきたあの若造が頭にきて脅かしてやろうと思ったからだ。

・・・まったく意味は無かったが。」

「それじゃあ、あの5人は結局のところほぼ無意味な依頼を引き受けさせられたということですか。」

世の中とはそういった騙しあいや蔓延るものだと分かってはいるが、
なんだかそういうにはやっぱり好きになれない。

「まあ結果としてはそう見えるか。」

だがあやつはそれを知ったとしても気にすることはないだろうよ。
あやつはこの依頼を受けることで、自分たちの有用性を証明しこ
れからの活動を進めたいという思惑もあったようだからの。

まったく、ここまで深くものごとを考えられるだけで貴重な存在
だというのに、実力もありそう、敵にはしたくない男だ・・・。」

そう言い長は倒れている3人を見やる。
その意見には激しく同意だった。

「私もそう思います。」

「どんな魔法だったら人をこんな状態に出来るのでしょうか、少なくとも4属性魔法ではありえませんか。」

「恐らく、固有魔法だと思うのだが・・・
少なくとも僕の知識の中には存在しない代物だな。」

この言葉には驚かされた。

長・・・もういいや。

お爺様は長年の経験から、そこらの学者と比較にならないほどの知識を持つ。

この人に分らないとなると、王都の専門の学者でもない無理だろう。

「僕としてはその魔法以上にあの冷静さが恐ろしく感じたがな。」

あれだけの目・・・、恐らく尋常の人生を送ってはいないだろう。」

「ええ、私も肝が冷えました。」

人はあそこまで冷たくなれるのですね・・・

しかし、あんないろいろと奇妙な人が何故今まで誰にも知られることなく生きてこれたのでしょうか。

「普通なら間違いなく噂になりますよね？」

そう疑問を口にするが、それが答えの出ない問いであることは理解している。

「それに関しては、以前自分でもよく分からないと言っていたぞ。なんでも記憶が欠けているんだと。」

「ひゃう!？」

そう思っていたら突然答えが返ってきた。

驚いてそちらに顔を向けると、

「あ、あなた、帰ったんではなかったんですか？」

さつき見た、銀髪の青年が受付の前に立っていた。

お爺様も予想外だった、というか気づいていなかったようで驚いていた。

「いやあ、あいつに報酬受け取りに行ってくれて頼まれてな。

なんでも楽しんだせいで忘れていたとかで。

まったく、いい加減あいつには自重してほしいものだ。」

楽しんだというのはあの3人のことなのだろう。

しかしこの人、平然と主人の悪口を言っているがいいのだろうか。

「記憶がない・・・ですか、何とも嘘くさいですね。

まあ、それはおいとしまして、そんなに公然と主人の悪口を言っ
て聞かれたらどうするんですか？」

「どうもしないよ。

あいつがこの程度のことを気にするはずが無いからな。

・・・弄るネタにはされるだろうが。

なにより、あいつは人使いが俺限定で荒い。

この程度の愚痴ぐらい言わせてもらわないと割に合わん。」

そう言い溜息を吐く彼。

だがその顔には悲壮感は欠片も無く、むしろ楽しそうですらあった。

「おっしゃっていることと、表情がかみ合っていないようですが、
どういうことでしょうか？」

あなたは、あの人をどう思っているのですか？」

「人格破綻者。」

「.....」

あっさりと、微塵の躊躇いも見せず、人として最低ランクの汚名を着せる彼。

この場合、悪いのはそう思わせるあの人なのか、それともこんな酷い呼び方をしたこの男なのか。

「だが、そうでありながら俺たちの恩人でもある。

しかも、一生かかっても返せないような大きなものだ。

それだけのただ冷酷な人間なら話は早かったんだが、生憎とあいつはそんな簡単なやつじゃないからな。」

私が不思議そうな顔を見ると、彼は説明してくれた。

「あいつは確かに恐ろしい。

眉ひとつ動かさずに、まるで作業のように人を殺せるんだからなだが、同時に酷く義理堅く、仲間思いな一面もあつたりするんだ。俺たちはその面に救われた。

拳句、突然泣きそうなほど辛い顔をしたりする。

ただの人外かと思えば、いきなり弱った人間の顔をするんだぜ？

あんなことされて、あいつをただ冷酷だと思える人間は少ないだろうよ。

まあ、俺たち従者4人は例外なくあいつのことが好きだからそう思えるのかもしれないが。」

「そうなんですか・・・」

私たちを震え上がらせたあの人、彼をここまで信頼させるあの人、どちらが本物なのか・・・あるいは、どちらもだろうか。

「無駄話はそれぐらいにしておけ。」

お主は金を受け取りに来たのだろうか、本来の目的を疎かにするでない。」

お爺様に窘められてしまった。

確かに仕事だというのに相当話し込んでいた。

それだけ興味を抱いていたということだろうか。

それにたいして、彼が予想外の答えを返す。

「ああ、実はこれもついでで頼まれていたことだな。」

適当に会話して、あんたら2人の反応からあいつに対してどんな感情を抱いているのか見てきてくれってな。」

なんとまあ、まだ考えを巡らせていたとは。

「ここまできると、驚きよりも呆れが先に来ますね・・・」

「まったく・・・」

さっきの金をもらうのを忘れていたというのも、狙っていたよう

に思えてくるな。」

「まあそんな気にするなって。いちいち気にしていたら身が持たないぞ？」

それにおおよそ好意的な意見なようであつた。

もしなにかしらの陰謀でも巡らせているようであつたら……」

そこで彼は言葉を切つた。

氣になつて仕方がない。

「ようであつたら？」

「こつ言えつて言われた。

『ご想像にお任せします。』」

「……分かつた。

あやつに、儂らがお前と敵対することはない。と伝えてくれ。

セフィリア、金の支払いを。」

「はい。」

苦笑しながらそう答える彼に、お爺様はそう返した。

どうするかを明確にせず、相手に想像させることで不安を煽る。

効果的な手段だ。

私がお金を渡すと彼は礼を言い、今度こそネストを去つていった。

それからしばらくするとお爺様がいきなり笑い出した。

「くつくつく、はははははははは！！」

まったく面白い若造だ！

久しぶりの見込みのある新人だ、出来れば徹底的に鍛えてやり

たいものよ!」

「お、お爺様・・・?」

どうやらあの人のことが気に入ってしまったらしい。
最近しなくなった地獄の特訓メニューを呟いている。

ここまでお爺様が誰かを気に入るのは数年振りだ。
かくいう私も、彼に対する興味が膨らんでいるのを感じていた。

side out

「お、帰ってきたな。」

レオンがこちらに走ってくる。

今俺たちは通路の端で適当に談笑していた。

「待たせた。」

それなりに話が弾んでしまったな。

ほら、これが金だ。」

そう言いながら、袋を手渡してくる。

「ありがとう。」

お、結構重いな、入っているのは・・・金貨5枚に銀貨50枚か。
なかなかのものになったな。」

向こう換算で約550万。
普通に暮らすなら平民が月銀貨10枚だとして、4年は暮らせる額だ。
といっても、

「確かにそうだが、冒険者なら武器なんか要るからな。
高いものは金貨数枚するものもあるから油断したら直ぐにスツカラカンだ。」

だろうな。

まあ、これだけあれば準備資金として足りるだろうからいいだろう。

「それで、長とセフィリアさんの反応はどうだった？」

「おおよそ好意的だな。」

ネストキーパーからは「儂らはお前と敵対することはない。」という言葉までくれたぞ。

セフィリアさんはお前に対する興味を深めている様子だった。」

「ほう、それは上々。」

これで目的が達成できたな。」

これで当面の問題が無くなった。
そう考えていると2人が不機嫌になっていた。

「レイ様、ネストキーパー様はともかく何故セフィリアさんまで気にするのですか……？」

「本当です……」

あの人が気になるのですか？」

言葉は落ち着いているが、トゲが見え隠れしている。

「まあ気にはなるな。」

そう答えると2人の顔が目に見えて青くなった。

この反応ってやっぱりそういうことなのか・・・？
深刻な事態になる前にフォローを入れる。

「あくまで興味の対象としてだがな。

あれだけの振る舞いをしたのに終始こちらに興味を向けていたんだ。

「気になったっておかしくないだろ。」

「うう、そうかもしれませんが・・・」

「分かりましたよ、納得します・・・」

「でも、何故あんなことをしたんですか？

下手をしたら敵に回る人がいるかもしれないし、確実にあそこの人たちの心象を悪くしましたよ。

「レイ様は気になさらないでしょうか。」

納得したと口では言っても内心納得していないのだろう、まだ少々トゲを感じる。

「気にしない気にしない・・・」

「あの程度で敵対するような人間なら、俺のこの先の行動で間違はなく何かしら仕掛けて来るだろうさ。」

今の内に敵に回ってくれた方が、まだ俺たちのことについてほと

んど知られていないから対処もし易い。

それにあの場ではああした方が、後で楽になるからな。その分初めは面倒になるだろうが。」

「心象悪くした方が都合が良いんですか？」

「クルス、これは俺がよく使う手でな。

「落として上げる」ってのは結構効果的なんだ。その逆もな。」

皆が首を傾げている。

まあ、彼らにはまだ理解できまい。

「しかし、あの魔法は何だったんだ？」

まったく前兆がないだけならともかく、何が起きたのかも分からないってのはおかしいぞ。」

当然の疑問。

「それはこれからの用事が済んで、落ち着いてから説明するぞ。とりあえずまずはこの店な。」

俺たちの前にあるのは洋服店。

しかし俺たちは冒険者だ、一般の店で買えるような服では強度が足りない。

仲間が怪訝な顔をする。

「エルスとルルは下着とか必要なものを買ってくるといい。

俺ら男衆はここで邪魔にならないように待ってる。」

「つつつ!!?? (2人)」

そう言い、俺の直接的なもの言いに赤面する2人に銀貨20枚を渡す。

相場が分からないので大目に渡しておく。

「でもそんなものにお金をかけるわけには」

「俺にとっては2人がまともな服装をしてないって方が精神衛生上悪い。」

そんなこと気にしてないでさっさと行って必要なものを買ってこい。

主人としての命令。」

「・・・分かりました。」

それではお言葉に甘えさせていただきます。」

「はい！」

レイさん、いつもありがとうございます。」

皆まで言わせず強権を発動する。

そうすると2人は慣れてきたのか、素直に従ってくれた。

いくら口では言っても気になっただんだらうな。

そして男3人が取り残された。

「俺もああいう風に扱ってほしいものだな。」

「何を言っている。」

お前は今ああ扱われたら間違いなく気持ち悪いと感じるぞ。

もうこの扱いで慣れているからな。」

「・・・確かにその通りだな。
だがこうも扱いに差があるとやはりな。」

「お前は俺の中じゃ・・・いや、これは今言うべきではないか。
まあ扱いに関してはあの2人とクルスは大事だと思っっているから
な。」

「大事、ですか。」

レオンと話しているとクルスが呟いた。
そちらに顔を向けると真剣な顔をしていた。

「レイさん、前から気になってたことがあるんですがよろしいでし
ょうか?」

「奇遇だな、クルス。」

俺もこいつに聞きたいことがあったんだ。
恐らく内容も同じだろう。」

「・・・なんだ?」

ある程度予測をして置き、そう答える。

「お前は妹あなた(姉さん)のことをどう思ってるんだ(ですか)?」

ふむ、やはりそれが。

「仲間、と言いたいところだがそういう答えは望んでいないんだろ
うな。」

「ああ、正直な話いろいろと鋭いお前が気づいてないことがおかしく
くてならない。」

2人がお前のことを好きなのは明白だからな。」

「2人が自覚しているかは分かりませんがね、特に姉さんは。
しかし、あなたが気づかないふりをしているのには理由があるん
でしょうか。」

「おや、クルスは気づいていたのか。
なかなか巧妙に隠せてると思っていたんだが。」

「え、わかってたの?」

「お前、さっき自分で気づいてないのはおかしいと言っていただろ
うに。」

この馬鹿はともかく、クルスはすごい。
素直に賞賛した。

「・・・それで、何故誤魔化していたんだ?」

「そう不機嫌になるな。」

確かに始めは素直に分からなかったし、確信したのはその後少ししてからで、しかも隠そうとしていたからな。

気づかなくても無理ない。」

しかし、この2人に俺が誤魔化していた理由を説明して理解してもらえるだろうか。

「質問中に質問をするのはいいことじゃないが、今は勘弁してくれ。2人に聞きたいことがある。」

それを聞き、2人が顔を引き締める。

「「恋」って何なんだろうな。」

「へ？」

予想外の質問に間抜けな声を上げる。

「俺はさ、恋心が理解できないんだ。」

「親愛」は暖かい、「友愛」は大切だ、だが「恋愛」は理解できない。

それがどんなものなのか、どんな感情なのか・・・」

俺の問いかけに返答することなく、2人はただ聞いている。

「そんな人間がまともに恋愛をできると思っか？」

俺はそうは思わない。」

「つまり、お前はそれが理由で気づかない振りをしていたのか？」

「そういうことだ。」

こんな人間を好きになっても無意味だと思ってな。

気づかない振りをしていればいつか新しい恋を見つけられるだろうし。」

そう言い俺はこの話を終わらせる。

クルスは何を言っているのか分からないのだろう。

あたふたとするばかりで言葉になっていない。

そして俺は中に入った2人を待つべく立っていると、

レオンに渾身の力で殴られた

15話 ありがとう(前書き)

総合評価5500突破!

500で喜んでいただけ日々が夢のようです

これからもよろしくです

今回はコメディ大目です

少なくとも個人的にはそう思っているんです

15話 ありがとう

「な!？」

レオンさん何をするんですか!」

クルスの驚愕の声が上がる。

俺はというとこの程度の不意打ちならば慣れきっているため、殴り飛ばされながら即座に体制を立て直し着地していた。

考えて行動したというよりもはや条件反射に近い。

心底驚いたせいで考えることが出来なかったただけでもあるが。

「随分なことをするな、レオン。」

お前がここまで喧嘩っ早いとは思わなかった。

俺がそこまで気に入らなかったのか?」

思考がまとまらず、そんな言葉しか出せなかった。

こんな問いかけの答えなど分かり切っているというのに。

俺の心は今動揺で一杯だった。

レオンが何故こんなことをしたのか、それを考えることのみで頭が集中している。

分かっていることはただ1つ。

さっきの俺の答えが、奴の逆鱗に触れてしまったのだ。

しかも、それはレオンにとって絶対に認められないことだったのだろう。

でなければこいつが手を挙げる訳がない。

「そんなことはないさ、俺、いや、俺たちは皆主人であるお前を気に入っているよ。」

だが、だからこそ今の発言を認める訳にはいかないんだよ……

「

「やはりさっきの言葉が原因か。
俺にはさっぱり分からんが。」

「だろうよ。」

お前はいつも俺たちをからかってくるが、誰かを傷つけるようなことだけは絶対に言わないからな。
分かっていれば言うはずが無い。」

「・・・俺はそんな心優しい性格をしてはいない。」

だが、つまり俺はあの2人を傷つけるようなことを言ってしまったということか？」

意味の無い意地を張ることはできたが、驚きを隠せなかった。
そんなことを無意識の内に口走ったのか？俺は。

「・・・俺は今、お前の欠点を思い知ったよ。」

お前どんな人生を送ってきたんだ？

人の悪意にはどこまでも敏感なのに、人の好意への対応を知らなさすぎだ。」

「ぐう・・・」

それは否定できない。

思い当たる節が多すぎるからだ。

人が好意を向けてきても余程の人でないとまず疑ってかかってしま
うし、好意を信じられるような人の場合は俺と付き合っていてはダ
メになると思い、距離をおくようにしていた。

「お前の言うことは確かにその通りだ。

俺は純粋な好意を向けてきた人には極力深い関係を持たないよう
にしてきたからな。

だが、お前はそのことを間違ったことだと言うのか？

そんな良い人が、こんな人間と関係を持つことがいいことだと思
も言うのか？」

「それだよ。

俺が怒っているのはまさにその点だ。

お前の意見は確かに間違っではないのかもしれない。

だが、それには重大な欠陥がある。」

レオンの声は静かだ。

だが、それでも言葉に押し殺されたような怒気がはっきりと見られ
る。

手を挙げないのは理性が最後の砦となっているのだろう。

・・・次の瞬間には粉碎されてしまいそうな脆さではあったが

「お前の意見はお前の主観でのみ構成されている。

その結果として相手がどう感じるかを考えていないんだ。

お前は思いやった結果のつもりでも、相手がどう思つかは分から
ないのに・・・！」

「・・・・・・・・」

俺は黙って聞いている。

「特に、今回お前は自分に恋愛意識を向けてきた人間に対してそう
しようとしたんだ。

その結果、相手がどう感じるかお前が分からないはずがないと思

うが？」

「まあ、悲しむだろうと予測はつくが・・・
だが、それならお前は後々もつと悲しませると分かっているのに
付き合いを深めるといふのか？」

恋愛なんてものを理解できない人間に誰かを幸福にできるはずが
無いだろう。」

俺は少なくともそう信じる。

人は自分の知ることしか知らないし、理解していることしか行うこ
とはできない。

恋愛を理解できないものが、他人に愛情を注げられるわけがないの
だ。

それは絶対の真理だ。

それでも無理に行おうとすれば、何かが破綻してしまう。

俺は常識や倫理など、人間が作ってしまったものならいくら踏み躪
ろうとも自分の理念に背かない限りまったく構わないが、真理など
の絶対的なことまで否定するほど馬鹿ではない。

そのことをレオンとクルスに語る。

クルスは苦い顔をしていたが納得していた。

「お前、実は馬鹿だろ。」

こいつにはまったく効かなかったようだが・・・

なんだかものすごく馬鹿らしいことを聞いたという顔をして、呆れ
た声を出す。

あまりの呆れ具合に怒りまで治まったようだ。

「・・・まさか、お前にそう言われるとはな。

ちよつと殴つてやりたいが、その前に何故そう思っただんだ？」

つまらない理由だったらぶん殴ってやる。」

額に青筋を浮かべながらそう聞く。
本気でそうするつもりだった。

クルスもこの男が何を言いたいのか興味があるようで、聞く姿勢になっっている。

「お前の言葉を要約するとだ、今は「恋」を理解出来ないから遠ざけようとしていたんだろ？」

「ああ、その通り。」

「じゃあ、関係を深めながら理解できるようになればいいだけじゃん。」

「………は？（2人）」

「だから今はダメなら、遊んだりして仲良くなりながら「恋」って感情もいずれ理解できるようになればいいだけだろ？」

「いやいやいや、それは不誠実過ぎだろ!？」

それってつまり、付き合い持つても気持ちに对应えられないと確信してるのに遊んで仲良くなれってことだからな!

それでもし「恋」を理解出来なかったら、俺はただの女っただらうが!？」

「そ、そうですね、レオンさん。」

それは男として、いや人としてどうかと……」

何を考えてるんだこいつは!？」

まさか俺にそんな好色な王みたいなことを望んでやがるのか！
クルスもこう言ってるし、どちらがおかしいかは明白だ。

「クルス、お前こいつに毒されてきてるな。」

俺の今の発言は全くおかしなものじゃないぞ？

そう感じるのはお前らがごちゃごちゃと物事を難しく考えているからだ。」

「え？」

「どづいつことだ？」

レオンの声は意外と落ち着いたもので、当然のことを言っただけという空気がある。

俺とクルスは、自分の考えの何がおかしいのか分からずポカンとしてしまった。

「お前ら、本当にわかっていなかったんだな・・・」

いいか、普通は人の感情なんてものは理解できるようなものじゃないんだよ。

恋愛だって最初はよく分からない段階から初めて、段々と深めていくものだろうが。

分からないのが普通で、最初から分かってる方がおかしいんだ。

そんなわけで、分からないからと言って好意を向けてきた人を遠ざけるなんて馬鹿馬鹿しいことだとおもわないか？」

「あ・・・」

「・・・」

そのとおりだ。

あれ？

じゃあ俺が今までやってきたことは完全に無意味だったってことじゃないか？

いや、そもそもなんで俺はレオンでも気づけるこんな簡単な理屈に気づけなかったんだ？

「レオンでもって何だよ！おい！

なんでもなにも、お前がこんなに単純なことを無駄に難しく考えていたからだろ。」

こういうのは理屈ではなく感性で測るものなのに、お前はなまじ人の悪意に敏感なせいで感情を理屈で考えられるものだと思ってしまったんじゃないか？

だから分からないとダメだと思ってしまい、こんなずれた考えになったんだと思うぞ。」

どうやらあまりのショックに口に出ていたらしい。

そんな簡単なことだったのに俺は・・・

だが一番ショックなのは、

「ああ、何もかもお前の言うとおりだ・・・

ま、まさかレオンに諭される日が来るなんて・・・」

絶望のあまり地面に両手を付いて頂垂れる。

「レイさんこんな日もありますよ！

ですからそんなに落ち込まないでください。

レオンさんがこんなにも分かりがいいことなんて、僕でも見たことがないんですからよほど運が悪かったんですよ！」

そんな俺をクルスが慰めてくれた。
だがクルスよ、ありがたくはあるんだが余計みじめになるからやめてくれ。

「ク、クルス、お前まで!？」

幼馴染にまで罵倒される俺っていつたい・・・」

落ち込む俺、慰めるクルス、さめざめと涙を流すレオン。
周りの通行人が変なものを見る目で見えてくるなか、俺たちはしばらくそのまま動けなかった。

「とにかく、今回は俺が完全に馬鹿だったということだ。

本当にすまなかった2人とも・・・」

落ち着くことができた俺がまずしたことは、謝ること。

ここまでの大失態を演じてしまっていた以上は当然だ。

「まあ、僕はそもそもあなたの意見を認めてしまっていましたから別に僕には謝る必要はありませんよ。」

「・・・いろいろと言いたいことはあるんだが、とにかくこれから
はちゃんとあいつらと向き合ってやってくれればそれでいい・・・」

クルスは笑顔で、レオンは渋い顔で言ってくる。

「そうか。」

まあこれからは遠ざけようとせず、誰ともちゃんとまともに向き合うから大丈夫だ。

それとレオン、ありがとな。」

「はい？」

「何だその信じられないものを見たって顔は。」

実際、お前の言葉が無ければ俺はこれからもずっと親切な人間を遠ざける寂しい奴でいただろうし。

そんな大事なことを教えてくれた相手に感謝をしないほど恥知らずではないぞ。」

「ん、ああ・・・そうか。」

じゃあたっぷりと感謝してくれたまえレイくん！

ハッハッハッハ！」

いらっ

素直にありがたかったから感謝したが、ここまで調子に乗った反応をされるとは思わなかった。

やはりいくら感謝しているとはいえ、イラつかないわけがない。

仕返しの方策を頭を高速回転して考えていると、あるものが見えたのでどうするか決めた。

「レオン、お詫びとしちゃなんだが、一発殴ってくれないかさつきみたいに。」

なんか悪いことをしていたと自覚したことで後ろめたさが拭えな

くとな。

殴られることですよっきりしたいんだ。」

「え、いや、いくらなんでも殴れと言われて、はい分かりましたといくわけにも……。」

「本人がいつて言ってるんだからいいだろ。」

さっきの怒りを思い出して、思いつきりやってくれ。」

「……分かった、じゃ、いくぞ。」

そう言い、レオンは真剣な表情に切り替えると、腕を振りかぶる。意外とあっさりと乗ってきたな、それだけ怒りが強かったということか。

そして思いつきり殴りかかって来た。

俺はそれを素直に受け入れ、吹き飛ぶ。

と言っても、吹き飛んだのは軽く風の魔法を使ったからだし、地面に叩き付けられたときも一見派手に見えるがちゃんと受け身をとったので問題ない。

レオンは自分の想像以上の結果に啞然としていた。

「お、おいレイ！」

大丈夫なのか、今とんでもなく派手な音がしたぞ!？」

「何を言っている。」

お前が起こした結果だろう、お前が、な。」

レオンがやったということ強調して、周りにも届く声でそう言う。これで準備良し。

あとは勝手にことが進んでくれる。

「じゃ、レオン後は頑張ってくれ。
死なないとは思ってから大丈夫だろ。」

その言葉にレオンは不思議そうな顔をするが、

「兄さん？」

「何をしておいでですか？」

「ええ、本当に。」

「いったい何をしたのか説明して頂戴？」

そう言い両肩を掴まれると顔が一瞬で青くなる。
レオンの背後に般若がいた。

「ル、ルルにエルスか？」

「こ、これにはちゃんとした理由があるんだ。」

「だから離してくれ！」

レオンの必死さに思わず笑いがこみ上げてくる。

「へえ、どんな理由があったら主人を殴り飛ばす理由になるのですか？」

「私たちにはあなたが酷いことをしたようにしか見えないのだけじゃ。」

「説明するから聞いてくれ！
いいか、俺たちは……」

そこでレオンは気づいたのだろう、俺に凶つたな！という恨めし気な視線を送ってくる。

俺はそれに肯定の意味を込めて晴れやかな笑みを返してやった。俺に殴り掛かった理由を説明するには、さっきの会話の内容を話す必要がある。

つまり、2人の恋心に関する話をしていたということだ。

そんなことを本人に、しかも女性に話すには相当の無遠慮さが必要だ。

当然、レオンには無い。

仮に言えたとしても、余計に怒らせるだけかも知れんし。

「俺たちは？（般若2人）」

「・・・い、言えない。」

「こっちに来てください。」

ゆっくり「お話」しましょう？兄さん。」

「レイ様とクルスはどこかに寄っていてください。」

恐らく30分ほどで「お話」が終わると思いますので。」

「レ、レイ！」

この2人を止めてくれ！

もとはと言えばお前のせいなんだぞおお！！？？」

「何をいう。」

俺はお前が振ってきた女の話で殴られた哀れな被害者さ・・・
しくしくしく。」

必死の叫びを嘘泣きで躲しつつ、さらに爆弾を投下する。

女性陣の形相がランクアップした。
無表情になり、殺気が噴出し始めたのだ。

「兄さん？」

私の気持ちを知っていていてくれると思いましたが、レイさんに女性の話を持ちかけたのですか・・・？」

「そんな下世話な話をした拳句レイ様に手を挙げたというの？
救いようが無いわね。」

私たちが教育してあげるからいらっしやい。」

「レ、レイイイイイイイイ！！??？」

俺が悪かった、調子に乗りました！

だからどうか助けてくださ・・・って居ない!？」

あの野郎があああ！

覚えてやがれ、夢枕に毎日たつてやるからなああああああ！

！！????」

俺とクルスはそんな叫びを背に浴びながら街を歩いていく。

「夢枕って、あいつ生き残ることは諦めたのか？」

俺が思ったのはそんな疑問だけだが。

「レイさん。」

さすがにレオンさんでもあれは気の毒です・・・

もしかしたら本当に死んでしまいかもしれませんよ？

僕でもあんな2人初めて見ましたもん。」

「クルス、良かったな。」

今日は初めてのことがたくさんじゃないか。

これでお前の人生はますます豊かなものとなったぞ！」

いい笑顔でそう言うのと泣きそうな顔をしてしまったので、さすがにここまでにしておく。

というかこいつ今、自然にレオンさん「でも」って言ったな。

だいぶ染まってきたているようだ。

「冗談だ。」

ちよつと調子に乗ってたからな。

これから俺がやるうとして、ことをすれば、ますます付け上がりそうだったから釘を刺しておこうと思つてな。」

「?、これから何をしに行くんですか？」

「なに、さつき言った通りあの2人とこれからはちゃんと向き合おうと思つてるんだが、その前にちゃんといままで遠ざけていた埋め合わせをしておこうと思つてな。」

今レオンは評価が地の底まで下がってるが、これが終わればちゃんと元に、いや、いままで以上のものになるからその辺も大丈夫だ。」

「レイさん、僕の反応で遊んでないで考えをちゃんと教えてくださ
い。」

おお、ばれてたか。

「お前はどんどん悪意に敏感になっていくな。しかも驚きの速さで。」

「あなたの弟子のつもりですから。」

「はは、嬉しいことを言ってくれ。」

「では弟子クルスよ、1つ聞きたいんだが。」

「はい、なんでしょう師匠。」

お互い笑顔の、和やかなやり取り。

「この辺にアクセサリーショップはありそうか？」

「!、はい、あの店なんかよさそうですね。」

「品もいいですし、良品が置いてそうです。」

「早く行きましょう、あの2人がとどめをさす前に渡してあげないと。」

この一言で理解してくれたクルスが、冗談をもらしながら笑顔で先に走っていく。

やり過ぎはしないだろうと分かってるだろうに、あいつらはお互いに仲間なのだから。

走っている姿を苦笑して眺めながら俺は呟く。

「ありがとうレオン。」

お前のおかげで俺は大事な何かを取り戻せそうだ。

ただ、俺はひねくれてるからこんな形でしか感謝を示せないんでね。

まあ許してくれ。」

穏やかな昼下がりに、ルツソの街に男の叫びが轟いた

15話 ありがとう(後書き)

お暇でしたら評価お願いします！

16話 プレゼント（前書き）

だめですね、自分が考えたより進行が遅すぎる・・・

本当なら今回で以前の魔法の解説をしようと思いましたが。

それと、おそらくまたみなさんの予想通りのことしか起こせませんでした。

どうも日常の描写はテンプレに頼り気味です・・・

何とかせねば

どうか、生暖かい目で見守ってください

16話 プレゼント

「ここで昼にしますか。」

レオンそろそろ帰って来たか？」

「すみませんごめんなさいもうしわけないもうしませんゆるしてくださいもうむりですおうちにかえしてください………」

「ダメみたいだな。」

2人とも少しやり過ぎだよ、これじゃあ会話もままならんじゃないか。」

「うう、すみません……」

で、でも兄さんをこんなにする原因になったのはあなたじゃないですか！」

「そ、そうですね！」

私たちはあなたの策略に嵌っただけです！

まあ、確かにやったのは私たちですが……」

「そうですねよレイさん。」

今回は結果的にここまでのことになってしまった元凶はあなたなんですからたまには反省してください。

まあ過ぎたことを言ってもしょうがないですけど。」

「それについてはすまん、正直ここまでするとは思わなかった。

だが、これは性分だからこれからも止める気はない。」

今俺たちは昼食を食べようとある店の前にいた。

いたのだが、まだレオンが帰還できずにいる。俺が想像していたよりもずっとハードに責められたようで、さつきから虚ろな瞳でぶつぶつと何かを呟いている。ちなみに、さつきのごとは適当にお茶を濁してごまかしておいた。話の内容については一切触れていない。

「仕方ない、ちょっと強引にでも目を覚ましてもらおう。」

そついい、俺は袋から丸薬を取り出し、レオンの口に放り込んだ。瞬間、レオンは覚醒した。

「げほつごほつ！」

なんだ、口の中がすごいことに!？」

これは俺が森の植物でつくった気付け薬で、魔法を使い過ぎた時これを飲めば元氣とまではいかないまでも動ける程度には氣力が回復する代物だ。

これをつくれるようになってからは魔法の使いすぎによる命の危機が減った。

いや、氣力が回復というよりは、味で気を紛らわすというのが正しいか。

効き目の分、味もすごいからな。

「レイ、お前さつきはよくも・・・!!！」

意識がはっきりした途端に、当然のことだが怒りを向けてくる。

「まあ、落ち着け。」

ほら水だ、しっかり口の中を濯いでおけよ。

これから昼食だからな。」

「ん、ああ、ありがとう。」

素直に受け取るレオン。

もともと恨みを根に持つような性格ではないからなこいつは。

「さっきは悪かったな、いくら煽ったからとはいえここまでするとは思わなかった。」

お前の言うとおり人の感情とは理屈ではなかったようだ、教えてくれてありがとう。

あとちゃんと誤解だと説明しておいたし、お前への埋め合わせも考えてあるから許してくれ。」

何か言われる前にあらかじめ怒りの原因になりそうな要素を潰し、さらに感謝の意まで伝える。

レオンもここまで言われれば何も言えないらしく、苦い顔をしている。

「分かった・・・」

その埋め合わせってのはちゃんと俺にとって良いことなんだろうな。

もう変なことになるのはごめんだぞ。」

どこか諦めたようにそう言って来た。

「正確に言えば、お前自身に何かをするわけではないんだがな。

だけどちゃんとお前も喜ぶことだから心配しなくていい。」

訳が分からないという表情をするなか、クルスは悪戯が成功するのを楽しみにする少年のような笑みを浮かべる。

そして全員で店の中に入る。

中は清潔で、それなりに繁盛している様子だ。あちこちで店員を呼ぶ声が聞こえる。

内装は向こうのレストランと似通っていて、魔法を使った照明らしきものもある。

俺たちは窓際の席に座り、それぞれ注文をした。

俺は名前ではどんなものか分からないので、適当に無難なものをクルスに頼んでもらった。

2分ほどで料理がきた。

早ええ。

どう料理したのか非常に気になるが、気にしてもしょうがない。料理を食べながら、マナー違反でない程度に会話をする。

「今更だが、ルルとクルスは戦えるのか？」

それと君らの武器は何なんだ？」

明日の依頼前に武器買わんといけないし。」

「僕らもそれなりには戦えますよ。

ランクでいえばDの上位ぐらいです。

僕は戦いは嫌いでしたが、家の方針として仕込まれてるんです。」

「もともと私たちの家は武官として栄えていた家ですから、戦えるように教え込まれるんですよ。

並みの冒険者には引けをとらない自信があります。」

ほう、新しい事実が尽きないな。

それにしてもこの年で大人と渡り合えるのか、よく考えたらCで一流だから普通の冒険者はDがせいぜいだよな。

しかしクルスの今のセリフ、今は戦いは嫌いじゃないのか？」

「武器なら普通の場合、レオンが大剣か槍、私が剣かナイフ、ルルがレイピアを2本、クルスが弓を使います。」

「補足するなら俺は母国で一部隊の隊長を務めていたし、エルスに至っては平和ボケしてた国とはいえ最強の魔導士の1人だったからな。」

ランクではこの上位とBの中位といったところだ。

どちらが上かは言わなくても分かるだろ？」

レオン、本当に気のいいやつだ。

自分より上のものを素直にたてることができるとはね、簡単なようで難しいことなのに。

とうがかかなり強いんじゃないかこの一団は？

武器もばらけてるし、ランクも上の方だ、これはかなり運が良かった。

「俺たちは言ったわけだが、お前は何なんだ？」

「まあ待て、ここで血腥い話をしなくてもいいだろ、自分で振っておいてなんだがな。」

今は来たものを冷めないうちに食べる方を優先しよう。」

俺の戦い方の説明は少なからずきついものになるので、そう言っただけでいいから切上げる。

「そうですね、せっかくの出来立てなんですから。」

レイさんこのパンにこのスープをつけて食べるとおいしいですよ。」

「

へえ、そういう食べ方か。」

教えてくれてありがとうクルス。
ん、なんかカレーみたいな味だな、普通にうまい。
・・・色は青だが。」

青って自然界にあまりない色だから、向ここの人間には食欲がなくなる色だって聞いたな。

なんとなく毒が入っているようなイメージを受けるらしい。
こっちでは違うようで、みんな普通に食べてる。
そう言う俺も何故かそんなに抵抗なく食べれてるが。

「レイ様、こちらの炒め物もおいしいですよ。
召し上がってくださいな。」

「いや、それは君が注文したものだろつ。
俺の料理もちゃんとあるから自分で食べてくれ。」

「む、レイさん、それだけでは栄養バランスが悪いですからこちらのサラダも食べてください。」

「人の話を聞いていたのか・・・？
それにサラダではないがちゃんと野菜も」

「むむ、レイ様の注文したものは量が少ないんです。
男性ならばもっと食べないとダメですよ。」

「この目の前に大皿が4皿もある状態でそんなことを言われるとは思わなかった。」

同じ男のレオンが大皿2皿の状態で俺に言うのは」

「いいですから食べなさい！（女性）」

「さつきから何なんだ2人とも！
性格が変わってないか!？」

「どういうことだ!？」

「なんか性格が変わるような要素があったのか!？」

「いや、この2人少しずつだが元に戻りつつあるようだな、クル
ス。」

「俺は嬉しいよ。」

「ええ、敗戦してからは2人とも元気がなくなっていましたからね。
レイさんに会ってからは元気にはなっただんですが、元のお転婆っ
ぷりはありませんでしたし。」

「今回は感情的になったが故の一時的なものでしょうが、それでも
元の2人を見たのはとても嬉しいものですね。」

「・・・あなるほど、元からこうだったんだな。」

「つまりこれから段々慣れていけばこういうことがどんどん増えてい
くというわけか。」

「はっはっは、」

「・・・逃げたい」

そうして食事を終えた。

なかなか味は良かったし、料理の見た目も良く、これからも通おうと思えるほどだった。

・・・量が適量であればな。

まあ、これは店の責任ではなく女性陣のせいだから筋違いか。

結果として俺は2人の押しに耐え切れず、言われるがままに勧められたものを食べる羽目になってしまった。

俺って実は押しに弱かったんだな、新発見だ。

「いやはや、よく持ったなお前、俺なら途中で確実にトイレに直行してたぞ。

それに傍から見れば痴話喧嘩にしか見えなかったからな、周りの男の敵意も浴びてたし、俺の溜飲も下げさせてもらったよ。

本当にご苦労だった。」

そうにやけながら話しかけてくるレオン。

・・・今回はいいか、さっきのしっぺ返しだと思えば腹も立たないし。

「闘気」を腹の部分に集中させて内臓機能を強化、さらに「魔法」で食べ物「消化」、「吸収」を促進させる。

改めてこの世界特有の力をありがたく思う。

「ルルにエルス、これどうぞ。」

だいぶ調子が良くなってから、2つの包装された包みを手渡す。

2人は不思議そうにしながらも受け取った。

「も、申し訳ありませんでした！（女性）」

「・・・・・・・・・・は？」

何故謝る、2人とも。

「さっきの是一時の気の迷いだっただんです！」

レイ様があんなことになるなんて思いませんでした、ですからどうがお許しください！」

「今更言い訳するのも見苦しいと思われるかもしれませんが私もです！」

ですからこのような恐ろしいものをお渡しにならないでください！」

「どんな勘違いをしてるんだ君らは！？」

仕返しという意味でのプレゼントでは断じてなく、あくまで一般的な意味でのプレゼントだ！

だから落ち着いてくれ！」

まさかそんな意味で取られるとは。

そんな風に取りられるような行動をしたことは・・・・たくさんあるな、うん。

だが実際にやったのはレオンだけだな、それ以外の人間にも普通にやるとでも思われているんだだろうか？

だとしたら結構くるな・・・

2人はしばらく時間を要したが、なんとか落ち着いてくれた。

「プ、プレゼントですか？」

しかし私は何か感謝されるようなことをした覚えはありませんが・

・
ルルは何か思い当たる？」

「いえ、私にも覚えがありません。

レイさん何故いきなりこんなものを私たちに？」

不思議そうにそう言われたので、素直に説明する。

「今まで俺は親切な人で親しくなりそうな人間は遠ざけるようにしてたんで、君たちにも同じようにしてたんだよ。

けどさつきそれが間違いだとか誰かさんに気づかされたんでね。

それに伴って、今までの行動が君らを傷つけてしまったんじゃないかと思っただ。

それのお詫びだよ。」

そう説明すると2人が色めき立つ。

「そんなことはありませんよ！」

そもそも私はそのことに気づいて居ませんでしたから、あなたに傷つけられたなんてことは全くありませんでした！」

「私もです。

というか私はむしろその考えの方に傷つきました。

私たちはあなたに救われてこの上なく感謝してるんです。

その程度で私たちが傷つくと思われていたなんて心外です。」

エルスが声を荒げて、ルルが頬を膨らませて、怒ったような声音で言う。

まったく、本当にいい人たちだな、俺なんかと一緒にいいのかと思っってしまうね・・・

さっきのレオンのおかげで本気でそう思ったりはしないが。
でも、これは俺の個人的なけじめなので、受け取ってもらわないと
困る。

「おや？」

それではそれは要らなかつたか。

俺なんかの贈り物はどうやらお呼びでなかつたようだな、悪いこ
とをした。」

「え！？

い、いえそんなことは絶対に、断じて、完膚なきまでにないです！
ですが、特に何かしたわけでもないのにこんなものをもらうわけ
にはいきません！」

「えと、レイさんから何かを直接頂けるなんて嬉しくてたまらない
ことですが、エルスさんの言うとおりです！」

こういうのは何かをした見返りとして頂くものですので、おいそ
れともらうわけには参りませんよ！」

ニヤニヤと笑いながら意地悪く言ってやると、2人は慌てた様子で
あたふたし始める。

予想通りの可愛らしい反応をしてくれる。

言葉にしたら事態の收拾がつかなくなるから言わないが。

そこで俺は微笑みながら、柔らかく告げる。

「君らがどう思おうと俺の知ったことじゃない。

これは俺がやりたいからやるんだ、誰にも文句な言わせはしない。

だから、俺の為だと思っておとなしく貰ってくれ。

てか貰え、拒否権はない。」

予想通り遠慮してきたので、声音とは真逆の横暴そのものの言葉で強制的に従わせる。

2人は喜びと戸惑いが等分に窺える妙な表情を浮かべていた。喜びの方が大きいようだからいいだろ。

「一応2人に合いそうなものを選びはしたんだがな、実際どうなのかは分からないんだ。」

「ちょっと開けて着けてみてくれ。」

「え、ここですか？」

「ああ、早い段階なら一応返品が効くそうだ。」

「万が一似合わなかったらさっさと返したいんでね。」

「そんなこと私たちは気にしない、と言っても無駄なんでしょうね。分かりました。」

うん、この2人も段々と俺の性格が分かってきたようで何よりだ。そうしてそれぞれがネックレスを身に着ける。

エルスに渡したのは、十字架型の宝石があしらわれた美しさが際立つデザインのもの

ルルに渡したのは、複雑な花の形をした宝石があしらわれた可愛らしさが際立つデザインのもの

どちらも2人の雰囲気に合わせて、思わずため息が出そうなどても絵になる光景だった。

「はあく、予想してはいたが実際に見るとここまで違うものなんだな。」

「こんなに似合うとは思わなかった。」

「そうですね、姉様もルルも良くお似合いですよ。
僕もレイさんに何か頂きたいものです。」

思わず感嘆の溜息をもらすと、満面の笑みを湛えたクルスが追従してくる。

隠し事が成功したということも手伝っているのだろう、本当に嬉しそうだ。

ちなみにレオンは事態の進行についていけずポケットとしていた。

ホントに普段は役に立たねえなこの馬鹿。

そしてネックレスを付けた2人は言葉では言い表せないほどの喜色
を顕わし、

「ありがとうございます!」

赤面しながら満開の花のような笑みでそう言った。

16話 プレゼント(後書き)

余裕がありましたら評価をお願いします！

17話 武器屋（前書き）

はい、進行が遅いので更新速度を次話だけ上げることになりました
次は今日の夜、遅くとも明日には投稿します
それですよやく物語の下準備が終わりますので
今回さらっと4人の名前が出てきますが、なんか考えすぎてルルと
レオンが変な名前になってるかもしれません
これは変だと思いましたがすぐに無難な名前に変えますのでご指摘
願います

17話 武器屋

「お礼ならその誰かさんにも言ってくれ。

そいつが気づかせてくれなかったらそれを贈ることも、ましてやまともに君らと向き合うことも無かつたろうから。」

そう説明した後で、2人から感謝されたレオンはものすごく締まらない笑みを浮かべて喜びを現していた。

この時気づいたことだがこいつは兄馬鹿だったようだ。

もっと説明すべきことはあったのだが、レオンのことをあまりグダグダと言ってもしょうがないので割愛。

そして食事を終えた俺たちは装備を整えるために武器屋を探すことにした。

したのだが、

「たくさんあるな・・・」

思わずそう呟く俺。

この通りは冒険者たちのための店が多くあるようだが、あまりにも多すぎる。

どれがいい店なのかさっぱりだ。

「迷ってもしょうがないしテキトウなところに入ればいいだろ。」

「馬鹿は黙ってる、喋るな。」

あまりにも考え無しの発言に対して、つい脊髄反射で暴言を吐いてしまった。

傷ついているレオンが見えたが、さっきまでの浮かれようが今の言

葉でやっと治まったようなのでむしろ助かった。
だが説明ぐらいはしておこう。

「武器ってというのは総じて単価が高いだろ。
そういったものを扱う店は、儲けの方を優先しようとする人間が
多くなりやすい。」

例えば偽物を売りつけるとか、無駄にぼったくられるとかな。
俺は武器については詳しくないから、良心的な店主がいる店でない
いとまずいんだよ。」

説明すると皆納得していた。

まあしかし、悩んでいるだけでは何も変わらないのも事実、レオンの
言うとおり適当に入るのもいいか。
騙そうとしてきたら出ればいいだけだし。」

「だが悩むだけでもしょうがないのも確かだし、テキトウに入るか。」

「おい、お前さっきの俺に対する言葉は何だったんだ？」

「お前はただ漠然と何処でも同じだと思って言ったんだろうが。」

俺の話を聞いた後で、そんなことしたらどうなるか分からないと
でも言うのか？」

「すみませんでした。」

「分かればいい。」

「じゃ、まずはあそこに行ってみるか。」

そして行動を始めた。

3時間後

「想像以上に強欲な野郎が多いな。」

そういう結果だった。

「本当ですね・・・」

僕はまた人の醜さを思い知らされました。」

「俺でも分かるぐらいに金を寄越せって全身で叫んでる奴らだったな。」

よくあれで商売が成り立つものだ、逆に感心させられたぞ。」

「・・・・・・・・・・（女性陣）」

本当にな。

女性2人に至っては疲れ切って言葉もないようだ。

大体の連中に粘つくような視線で見られていたから仕方ない。

そういう輩はさつと今後に噂になるなどの支障がでない程度に脅しておいた。

ちなみにさっきのレオンの疑問はある意味では当然のこととも言えるんだよな。

「すまないな、考えが足りなかったようだ。少し休もうか？、2人とも。」

「いえ、これぐらいなら大丈夫です。」

逃げてる最中はもつと酷い時もあつたんですから。」

「そうですよ。」

慣れるものではありませんが、問題はありません。」

強がりなんだろうが、本人がこう言ってる以上他人がとやかく言う問題ではないか。

その言葉に甘えさせてもらって、まだ動くでしょう。

「そうか・・・」

しかしこれ以上無駄に時間をかけるわけにもいかんよな。

どうしたものか。」

もう夕方だからな、そろそろ宿も探さなくてはならない。

「ネストの人、いつそのことネストキーパー様に聞いてみたらどうでしょう？」

レイ様なら情報を聞き出せると思いますが。」

「それも考えたんだが、まだ「魔の森」の件の借りが残ってる段階でまた借りをつくるのは好ましくないんだよ。」

負い目があるといういと面倒だ。」

あの人はあくどい要求をしないとは思うが、まだ会って数時間でしかないのだ、良好な関係が築けないうちは、警戒を緩めてこちらか

ら歩み寄るべきではない。
そんなことを考えていると、レオンがどこか一点を凝視しているこ
とに気づく。

「どうしたレオン、美人でもいたのか？」

「ん、最初はそうだったんだが今はあの店が、ってすまなかつた謝
るからそんな目で見ないでくれルル！」

冗談で言ってみたら本当にそうだった。

そんなレオンを蔑むような目でみるルル。

しかし、呆れながらも俺はさっきのあの店という言葉の方が気にな
った。

「レオン、気になることがあるなら言ってくれ。」

「え？」

いや、だがただふつと気になっただけだから別に……」

「お前の場合は頭で考えてもろくな考えが出るわけがないんだ。
その勘のほうがいつもの猿知恵よりもよっぽど頼りになる。」

「猿知恵……」

俺のいつもの発言は猿知恵……」

ショックを受けてしまった、今回はからかう気はなかったんだが。
そっちの方が酷いか。

「あんなレオン、それと皆、別に自分が薦めた店の中に入って店主
が強欲だったときのことは気にしなくていいんだよ。」

ある意味ではああいう反応されて当たり前なんだから。」

「?、どういうことですか?」

「レオン、お前さつきこれでよく商売が成り立つな、て疑問に思ってただろ。」

「そうだが?」

「別にあれらの店の店主は誰も彼もからあんなぼったくろうとして
いるわけではない。」

その手のことに詳しくそうな人間に対してはちゃんと真面目に商売
しているだろうさ。」

別に根は悪い人間ではないんだよ。」

エルスやルルに嫌らしい目を向けてきた奴らは別だが。」

「え?」

ですが私たちは現にこうなってますが?」

「店からすれば生計を成り立たせるための商売なんだぞ。」

そんな彼らにとつて俺たちは相場もよく分からない格好の獲物だ。
そんな連中を見て、蓄えを少しでも得る為に騙そうとするのは人
として当然の心理だよ。」

これは別に人として悪いとか良いとかいう以前での問題なんだ。」

そう説明すると、皆は納得の色を浮かべるが同時に苦い顔になった。

「そういうことですか・・・」

しかしそうなりますと、私たちが良心的な店主の方に巡り合う確
率はかなり低いことになりますね・・・」

「ルルの言うとおり。」

「だからレオン、その勘でこれと思ったという店を教えてくれ。」

「は!？」

「何故そこでその話に戻るんだ?」

「こつというのは勘で行動した方がいろいろと上手くいくものなんだよ。」

「特にお前のような感性が鋭い人間ではその傾向が強いからな。」

「・・・あれだ。」

どこか釈然としない様子を見せるが、素直に教えてくれた。

その店は目立たないところに建っている、真新しい店舗だった。小さめで、建てられてから1年も経っていないと見える。

店の前には植え込みがあり、花が咲いている。

素朴な美しさが感じられる白い花だ。

「へえ、武器屋で花を植えてるなんて珍しいな。」

「女性が経営してるのかね?」

俺が抱いた印象はその程度だったのだが、皆は違ったようだ。

「姉様、あの花はもしかして・・・?」

「ええ、恐らくは間違いないわね、なぜデルトに・・・」

この姉弟は驚いたように、

「エミリヤの花、ですね。」

「やはりそうなのか。」

その手に疎い俺でもあれは分かるぞ。」

この兄妹は不思議そうに花を見ていた。

どうやら彼らには馴染みの深い花らしい。

「ふむ、どういう花なんだ？」

興味を引かれたので聞いてみる。

「私たちの国で国花だったものなんです。」

と言っても今ではもうだいぶ減ってしまったっていて、もう一部の貴族の家でしか育てられていなかったんですが。」

「私たちの家でもあの花は育てていました。」

占領されてしまった今では、もう残っていないと思いますが・・・

「

「名前に人名が付いているのは、あの花が建国した人物にちなんで名付けられたからだそうだ。」

建国者がエミリヤと言う名前だったらしい。」

なるほどな、確かにそんな花がこの街にあるのはおかしい。

詳しくは聞いてないが恐らくこの国が彼らの国を潰したのだろうか
らな。

どうやらレオンがこの店が気になったのは、そのせいもあったよう
だ。

しかしそんな数少ない花が今ここにあるということとは、

「まさか、君らに係わりのある者が経営しているのか？」

少ないながらも、決してありえない話ではない。

そう思つてうっかり喋ってしまったのだが、意外と皆の反応は薄かった。

もしかしたら希望を持った彼らが突撃してしまうのではないかと思つたが、杞憂だったようだ。

ある馬鹿は違つたようだが

「ちよつとレオンさん、落ち着いてください！」

「兄さん、そんなことはまずありえませんか！」

「ああもう、猪突猛進は変わってなかったのね！」

はい、皆さんの発言から分かりますように、馬鹿が突進して行きま
した。

「追いかけるぞ、冷静さが欠けた今のあいつでは問題を起こしかね
ん。」

またしても元凶の俺が言うことではないのだが。」

「気にしないでくださいあれが馬鹿なだけですから。（3人）」

そんな言葉を交わしながら全員で店へ走る。

奴はとうとう、クルス、ルル、エルスにも馬鹿と公式認定された。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（4人）」

何だこれは。

今俺たちの前には驚いて固まっているレオンと、土下座している老人がいる。

老人は必死に何かを喋っているが、涙と驚きのせいで言葉になっていない。

レオンはそれをただ呆然と眺めている。

もう一度言おう、何なんだこれは。

「レオン、その人は誰なんだ？」

一番の疑問をとりあえず尋ねる。

だが硬直しているこの状態では何も答えられないようだ。

仕方ないので他の仲間に聞こうと顔を向けると、こちらも固まっていた。

「なんだこの店。」

客が石化する魔法でも仕掛けられてるのか？」

俺が半ばそんなことを本気で信じかけっていると、我を取り戻したルルが叫んだ。

「マーカスさん、何故こんなところに!？」

クリミルで構えていた店はどうしたんですか!？」

「ルルライン様!？」

それにエルセルス様にクルセルス様まで!

ああ、レオステッド様だけではなくあなた方も生きておられたのですか……!」

こちらの面々に気づいた老人がさらに号泣し始める。

人ってこんなに涙を流せるんだ、と思うくらいの泣きっぷりだ。

「君らが隠してた本名、思いつきり喋っちゃってるなこのご老人。」

そんな俺の呟きは、泣き声にかき消されて誰の耳にも届かなかった。

動揺の極致にいた皆がようやく落ち着いてから、状況の整理を始めた。

「私はマーカスといい、レオステッド様とエルセルス様たちの家に武器を卸していた者です。」

それに加え、皆様の訓練教官も務めていましたのでよくお会いし

ていました。」

そうマーカス殿が語る。

ちなみに俺と彼らの関係はすでにレオンたちが教えてある。

かなり嬉しそうに皆で仲良く話していた。

奴隷にされかけたというところで泣き、俺に助けられたというところで嬉しくて泣き、とかなり骨が折れたようだが。

感情を素直に表す人なんだな。

俺は邪魔をしないように枠から外れて、微笑みながらそれを眺めていた。

話を纏めるところこういうことらしい。

マーカス殿は彼らの父、アルセル殿とゼフィールド殿が処刑されたことを知った。

大恩ある彼らを母国の貴族に殺されたこの人は散々泣いた果てに、そのような国で生きていく気を無くし、あてつけのような気持ちで敵国であるデルトへ向かったのだという。

そしてこの街に流れ着き、持ってきていた品と財産を使って武器屋を開いたのだそうだ。

花については、皆の家にそのままにしているのは滅茶苦茶にされてしまいかもしれないので、密かに持ち出したのだそうだ。

よくこの国が受け入れたな、と聞いたら、どうもデルトという国は宣戦布告無しで戦争を仕掛けた割りに略奪などの非人道的な行為を行わず、避難民の受け入れにも寛容だったらしい。

戦後の内政も圧政を行うこともなく、民はむしろデルトに感謝すらしているようだ。

支配したにも関わらず、民と僅か半年で信頼関係すら築きあげているとは、デルトの王とはどんな人間なのかかなり興味が湧いた。

「ところで、この国で彼らの正体がばれるのはやはり不味いことな

のだろうか？」

レオンたちを見ながら聞く。

それに対する答えは意外にもかなり都合のいいものだった。

「いえ、レオン様方は父君たちの善政の甲斐もあり、元領民からの信頼が厚いためデルトの粛清の対象外となっています。

仮に正体が知れても騒ぎにはなるでしょうが命に係わるようなこととははいはずです。

件の奴隷商人についても、恐らく表沙汰にならないように売ろうとしていたのでしょう。

まったく、あなたが殺していなければ私が八つ裂きにしましたものを……」

かなり本気の殺意を込めながらそう教えてくれた。

恐らく冗談でもなんでもなく、ただの事実を語っているだけなのだろうな。

目に迷いが一切ない。

それにしても、これはアルセル殿とゼフィールド殿には感謝しなくてはな……

これでこれからの最大の不安要素が消えた。

だが、それを過信したりはしない方がいいか、これからもなるべく隠すようにしよう。

それと、花のことだがそもそも知っている人間がほとんどいないので、店の前に植えてても問題無いのだそうだ。

しかし、いきなり皆の情報がこんなに手に入るとはな。

これからゆっくり聞いていこうと思っただけだ。
まあむしろありがたいからいいか。

「ありがとうマークス殿、貴重な情報が得られた。

それとここにきた目的何だが、彼らに合う武器が欲しいんだ。
見繕ってくれないか？」

彼らの戦い方を知らない俺が手伝うよりも、戦い方を教えたこの人が手伝ったほうがいいだろう。

そう言うと、マーカス殿は心底嬉しそうに微笑んだ。

「この店に来られたからにはそうでしょうね。

分かりました、お安いご用です。

まさかまた、皆さまに私の店の装備を使っただけとは……
！」

「マーカス、いい加減に泣くのは止めてくれ……」

また泣きそうになったのでレオンが呆れたように言った。
他の皆も苦笑している。

「と言いましても、皆さまがお扱いになる武器についてはアルセル様とゼフィールド様からお預かりしているものがありますので、私の店の武器は必要ないのですけどね。」

「んなっ！？」

「父がそのようなものを？」

「初耳です、父様は僕が戦いが嫌いなのを分かってくれていましたから今までもそういうことはあ

りませんでしたし。」

「私たちに渡すよう言われていたのですか？」

「そうです。」

あの御二方が処刑される寸前に、もしも会うようなことがあったら渡して欲しい、と。

最後まで皆さまのことをご心配されていました……」

その言葉に皆が涙ぐむ。

そしてマーカス殿は店の奥に引つ込むと、袋を4つ持ってやって来た。

「これらです。」

ざっと見てみましたが、どれもいいものでしたよ。」

そして袋から出てきたのは、昼に皆が言っていた自分の得意とする武器たち。

全長がレオンの身長ほどもある、鋭い輝きを放つ銀色の大剣

軽さを重視し、だがその分の威力を十分に補えるであろう切れ味を持つと一目で分かる剣とナイフ

美麗な装飾が施されているが、華美ではなく力強さが感じられる2本のレイピア

質素な外見であっても決して貧相には見えない強靱そうな弓

どれもが値打ちものだとすぐに分かる。

「それと、こちらも渡されました。」

恐らくは御2人とも、自分がああなることを理解していたのでしよう……」

そう言い2通の手紙を差し出す。
皆はそれを読むと、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も言わず、だが嗚咽を漏らし、静かに泣く。

まるで誰かを悼むように。

片や、奴隷から逃れ、漠然と逃げてきた結果。

片や、ただのあてつけで、テキトウに落ち延び先を探した結果。

そして奇跡的とも言える偶然の再会を果たし、父からの最期の贈り物を受け取ることが出来た。

人の、いや、家族の情とはこのような奇跡を起こす力があるのだろうか。

ただの偶然と言うには無理のあるこの状況を見て、俺は天井を、いや空を仰ぐ。

「・・・・・・・・家族、か。」

俺には二重の意味でもう絶対に手に入らないものだな。

なあ、『父』と『母』殿、そして・・・・よ。」

込められた感情が先ほどのものとはまったく違うその呟きは、今度も誰の耳に届くことはなかった

その言葉を向けた相手にも

その後、気を取り直して、防具やその他様々な旅に必要なものを揃えた。

武器屋と言つが、実際には旅に必要なものを大体扱っている総合商店のようなものみたいだな。

「これでいくらになりますか？」

「そんな、皆さまから御代を頂くわけには」

「マーカス殿、その言葉は思いやりではなく侮辱に等しいものだ。それ以上言つてはならない。」

俺の言葉に凍りつく。

「あなたの気持ちに嘘偽りなく彼らを心配しているのは分かる。

だが、もはや家が無くなった今、彼らは只のあなたと対等の人に過ぎない。

そうなった以上、世間の生活に慣れていかななくてはならないんだ。何かをもらう代わりにこちらからも何かを手渡す、そんな社会の基本中の基本を蔑ろにし、好意にただ甘えるようでは話にならない。預かっていた武器を渡してくれただけだからそちらはまだいいにしても、商品をただでもらうようなことがあつてはならないのです。」

マーカス殿は目を見開いて驚き、そして微笑みを返してくれた。

「ええ、ええ。」

まったくあなたの言うとおりで。

この度の私の無礼、どうかお許しください。

では、占めて金貨3枚になります。」

「これで。」

こちらも微笑みながら金貨3枚を手渡す。

これで今日の消費は、エルスとルルの衣類〓銀貨11枚、昼食〓銅貨40枚、贈り物〓金貨1枚、装備他〓金貨3枚、の占めて金4と銀11と銅40の向こう換算で411万4千円。

よって残金は金1と銀38と銅60の、138万6千円。

だいぶ使ったが、これでもう装備に金を使うことはあまりないだろうからいいだろ。

「ではマークス、またお会いしましょう。」

それまでに体調を崩したりしないでくださいね。」

「そうだぞ、もう年なんだから無理するなよ。」

「今度また、武器の指南をしてくださいね。」

あなたの教え方はお上手ですから。」

「その時は僕もお願いします。」

そう言い、出入り口に向かう。

「おや、エルセルス様とルルライン様はレイ殿に教えて頂いた方が宜しいのではないですか？」

「うっ……（女性陣）」

「ははは、痛いところを突かれたな2人とも。」

「まあ、かなり分かりやすいですから無理ないですね。」

マーカス殿からからかい交じりに痛撃を受けて赤面した2人が、レオンとクルスから笑われてさらに顔を赤くする。足早に店を出ていく2人を追いかけて彼らも出ていく。だが、俺は店を出る一歩手前で止まる。

「そんなに分かりやすいのですか、あの2人は？」

「ええ、その手に疎い私が断言できるほどに。

ですが、相手があなたのような人で良かったと私は思います。

安心して任せることが出来ますから。

恐らくはアルセル様とゼフィールド様も同じことをおっしゃるでしょう。」

「……俺にそんなことが出来ますかね。

実の家族すら救えなかった俺に。」

「！、……あなたがそのことを悔いてらっしゃるのでしたら必ずや。」

後ろ向きで会話を交わす俺。

後悔か、確かにしている。

だがその内容はあなたが思っているような高尚なものでは断じてない。

「前置きはこれくらいにしますよ。

本題に入ります。」

「決して前置きにできるほど軽い内容ではなかったと思いますが・

・
なんでしょう。」

「皆の父親たち、アルセル殿とゼフィールド殿ですが。」

「……はい。」

「実際に処刑される現場を見た者はいるのですか？」

「いえ、だれも見ていません。」

ある日いきなり処刑したという報告が国中に広まったのです。」

「……そうですか。」

また、装備が必要になったらここへ来ます。」

……誰も証人がいない処刑者、か

17話 武器屋（後書き）

気に入りましたら評価をどうか！

18話 決意（前書き）

これで2章は終わりです。

次でようやく依頼が始められます。

これからは元の基本3日で1つを目指します。

18話 決意

装備を整えるともう辺りが暗くなり始めていたので、急いで宿を探すことにする。

幸いにもその手の設備も充実しているらしく、こちらは楽に見つけられた。

名前は「暁亭」。

・・・何故に日本語？とは思ったが気にしない
中に入ると1人の少年が受付に居た。

内装は普通のホテルを質素にしたようなものだった。
和なのか洋なのかはつきりしろよ。

「宿泊をしたいのですが、部屋は空いていますか。」

「ご利用ありがとうございます。」

今空いていますのは1人部屋が2つ、2人部屋がいくつかと、4人部屋が1つですね。

値段の方は一泊の朝食付きで、それぞれ銅貨60枚、銀貨1枚、
銀貨1枚と銅貨80枚になります。

どういたしますか。」

「・・・では2人部屋を2つで頼みます。」

「おや、それではベッドが1つ足りませんかよろしいので？」

「ええ、ベッドを使うのは4人ですので大丈夫です。」

銀貨2枚ですよね、どうぞ。」

俺が笑顔でそう言うと全員の視線がレオンに向く。

どれにも憐憫の情が見て取れる。
レオン自身は涙目になっていた。
まあ、放っておこう。

「ではこちらの鍵をどうぞ、部屋は2階と3階になりますので。
朝食ですが、時間になりましたら街の鐘がなりますのでその時に
1階の食堂にいらしてください。」

「ありがとうございます。」

レオン泣いてないで行くぞ、エルス、こっこの部屋をルルと使っ
てくれ。

それと荷物を置いたらこっこの部屋に来てくれ、話があるから。」

「分かりました。」

ルル、行きましょう。」

「はい、それではレイさんまた。」

少年は気になったようだが、何も言わずにいてくれた。
エルスに2階の鍵を渡して、項垂れるレオンを掴みそれぞれ部屋に
向かう。

「それで話と言うのは何なんですか。」

男性陣の部屋に全員がそろったところでクルスが話を切り出す。

「いや、昼に俺の戦い方について説明するって言ったろ。」

それとネストで使ったあれについても。」

「ああ、そうだったな。」

気になって仕方なかったんだよあれ。」

他の皆も同じ気持ちらしく興味深々といった様子だ。

「まず、俺がネストで使った魔法は「振動」を応用したもので、結論から言えば相手の頭の中をかき回して気絶させることが出来るものなんだよ。」

「・・・相当極悪なものに聞こえますが。」

「ああ、人間に対して使用するものじゃないぞ・・・」

「改めてあなたの恐ろしさがよく分かりますね。」

「同感です。」

まあ、もうあまり驚けなくなってる自分にもちょっと怖くなりましたが。」

上からクルス、レオン、エルス、ルルの発言。

発言の割に皆の表情は若干呆れが入っている程度のようなのだ。

俺の行動に慣れてきているのだろうか。

「あれ？」

でもレイ様、それなら前兆も何もなかったのは何故ですか。

何も揺れたりしませんでしたが……」

流石に本職だけあってエルスは今の説明では不足していることに気づいたようだ。

だが説明面倒なんだよな、まあいいか。

「ちよつと長い説明になるが、いいか？」

皆が頷いたので解説を開始する。

あの魔法の肝は、まず振動魔法によりある特殊な振動数の音を作り出すことにある。

物体にはそれぞれに固有振動数というものがあり、その振動数の音を与えられ続けると「共振」もしくは「共鳴」により物体が揺れだし、その揺れはどんどん大きくなっていく。

そしてその揺れに物体が耐え切れなくなったとき、その物体は破壊される。

今回の場合、物体に当たるものを頭蓋骨の中の脳に設定して行った。もちろん揺らす程度の段階で止めたがそれでも脳が直接揺らされるのだから堪ったものじゃない。

しかし、これだけだと音というのは全方位に広がっていくので、使った途端に周囲の人間が全滅してしまう。

よってもう一段階、音を収束する工程を付け加えている。

音というのは収束することで、特定の人物のみに言葉を伝えるなどと言った芸当が可能だ。

スパイなんかがよく使っていそうなあれである。

前兆が無かったのは、そうして他の人間に影響を与えないよう気を使ったためなのだ。

この魔法は隠密性に優れ、周りになんの痕跡も残さないことから、極めて優秀な対人魔法と言える。

振動数などの言葉を分かりやすく噛み砕いた上で説明する。
説明を終えると皆が呆然としていた。

「本当に呆れますね・・・」

というか今の説明から判断するとあの人たち、いえ、あの時ネストに居た全ての人をあなたは気分ひとつで皆殺しにできたということですか。

「しかもなんの証拠も残さずに。」

「あなたを敵に回したら最後、何が起きたのかも分からない内に殺されてしまう、ということでもありますね。」

味方だと分かってもゾツとしてしまいます・・・」

これはクルスとエルスの言葉だ。
皆顔色を青くしている。

まあここだけ聞いたらそう思うよな。

「ところがそう簡単にはいかないんだよ。」

「この対抗策は意外と簡単なんだ。」

「ん？」

さっきの説明を聞いた限り欠点らしきものは無かったが。」

「・・・間にものを挟むこと、ですか？」

レオンも理解出来ていたか、まあこいつは馬鹿ではあるが別に頭が悪いわけではないからな。

そしてルル、また大正解だ。

「ルル大当たり。

この魔法は俺と相手の間に物体を介在させると簡単に防げるんだ。ちなみに音を収束させないようにしても、その時は俺もこの魔法の犠牲になるんでね。

さらに言えば闘気を集中させた場合でも防ぐことができる。

正体がばれない内は絶大な威力を誇るが、ばれてしまえば割と簡単に攻略されてしまうんだ。

だからばれたら困るから、おいそれと使えはしないんだなこれが。まあそうなつても相手に対するけん制にも使えるから無意味ではないんだが。」

「あう・・・」

「むう・・・」

ご褒美にルルを撫でながら言うと、エルスが微妙な顔をする。

「それは魔獣には使えるんですか？

人間とはいろいろと構造が違うと思うのですが。」

「はい、今度はエルスよくできました。

その通りでこれは事前の検証が必要だから魔獣にも使えん。

あくまで対人専用だな。」

「ふふ・・・」

今度はエルスを撫でてやる。

ルルは名残惜しそうにしていた。

なんかこの人たち本当にキャラ変わってきたよな。

だがレオンの話だともとに戻り始めてるだけのようだし、最終的にどうなるやら・・・

補足で、ここでは言わないが、この魔法を人間相手に使えるのは自分の脳で検証したからだ。

手近なところに人間は自分しかいないのだから仕方がなかった。

極めてゆっくりと音を調整していったのだが、音が合って脳が揺さぶられた瞬間の感覚はとんでもないの一言。

とても言葉では言い表せない酷い目に遭った。

苦労した分、今ではこの魔法は気に入ってるがな。

「この魔法についてはこんなところだな。」

「なるほどな、それでもう一つ、お前の戦い方はどういったものだ？」

マーカスのところでも、武器をいくら勧められても固辞してたよな。」

「俺の場合は基本はこれだな。」

そう言い、腰のナイフを2本抜く。

ナイフとは言うが、その刃は50cmほどもあり、剣と言っても通じそうだ。

「これに加えて俺は全身、必要なときであれば歯まで使って相手を殺す。」

魔法も使っし、俺の場合は決まった攻撃手段はないようなものだな。」

「歯、ですか・・・」

噛みついて魔獣を仕留めている様子を想像したのだろう、微妙な顔をする皆。

隠す意味もないのであえて殺すという直接的な表現をさせてもらっ
たし、しょうがないか。

「マーカス殿の店で武器を買わなかったのは、あの店のどの武器よりもこれの方がいいものだったからだ。」

伊達にBランクの魔獣ではなかったようだ。」

「そりゃそうだ。」

「刃虎」はランク付けの通り、Bランクの連中でも生きるか死ぬかの戦いになるような化け物だからな。

そいつの刃から造られたナイフなんて、金貨で数枚は余裕でいくぞ。」

「そんなものか。」

俺の説明はこれくらいだな。」

「それにしてもあなたの使う魔法は本当にすごいものですね。」

説明を聞いて仕組みが分かって、私では再現できませんよこれは。」

改めて感心したように、エルスが言う。

そしてしばらくして、決心を固めたようにして聞いてきた。

「レイさん、あなたのその魔法を私に教えて頂けませんか。」

「無理。」

決死の覚悟を固めて放ったエルスの頼みを、俺は微塵の迷いも間もなく切って捨てる。

「あ、あの、もう少し考えてくれても」

「別に意地悪とかでは無いよ。」

ただ純粹に、教えても君らに「究理式」を使いこなすのは無理なんだ。」

その俺の発言に、驚きと困惑を浮かべる皆。

そんな彼らに三度説明を開始する。

「究理式」も「恩寵式」も、想像することにより発動させるという仕組みは変わらず、以前説明した通り威力や発動速度などのほとんどの点で「究理式」の方が優れている。

だが、この方式は俺が使うことを前提として構築したために、普通の人間が使う場合には根本的な欠陥が存在する。

それは使用するとき「理性」が必要とされるということ

例えば、この方式で水を造り攻撃しようとする場合、これも以前説明したが、酸素と水素の科学反応という「理」をイメージし水を生成する。

平時ならば、知識さえあれば決して難しいことではないが、これが

使用される場面は争いごとなのだ。

一瞬の認識の遅れが死に繋がる状態では、状況の認識にすべての意識を割く必要がある。

そんな時にあーだこーだと、物事の「理」について考えられるはずもない。

そもそも元来争いごととは、争う生物が本性をさらけ出し、「本能」の赴くまま全身全霊で死力を尽くす場合がほとんどである。

そんなところに、「理性」を以って世界の「理」を考えるなどという方式が入り込む余地など是在るはずがない。

以前俺は「恩寵式」を時代遅れだという発言をしたことがある。だがそれは「俺が使用する」という前提がある場合でのことだ。

他の人間にとって「究理式」は、遙かに発展した最先端技術どころか、単なる「欠陥品」に過ぎないのである。

ここでついでにもう一つ、「恩寵式」の魔法についても補足しておく。

皆の話聞いたところ、この世界の魔導士の中には「固有魔法」と呼ばれる本人独自の現象を引き起こすことができる者がいるらしい。その中には普通では絶対にできそうもない、「奇跡」としか言いようの無い不可思議なことを起こせる者も居るのだとか。

これについては俺なりに考察を重ね、何故そんなことができるのかについての仮説を考えてみた。

簡単に言うやはり想像することで行っているのだろう。

人の感情とは複雑で、ただ漠然と火を起こそうと想像したとしてもその内容は十人十色、まったく同じ想像をする者など存在しない。

そしてその想像の「個性」が、奇妙な化学反応のようなものを起こし、初めに願っていたこととはまったく別の魔法へと変質したものが「固有魔法」となったのではないか。

「魔法陣」や「詠唱」といったものも、これに一役買っていると思われる。

これらは「究理式」にはまったく必要のない無駄な過程だが、その無駄が使用者の想像を深化、複雑化することがあるのだろう。

このような点を踏まえると、一から十まで使用者の考えたことに沿い、それを超えることの無い「究理式」よりも、想像次第で如何様にも形を変え、時には使用者の想像を超えた結果を引き起こすことも出来るだろう。「恩寵式」の方が優れている点も多いのである。

まあ単純な威力の点では、この世の理に従うことで莫大な威力を得ることに成功した俺の使う魔法に、ただの想像力のみでそれに打ち勝つ魔法を造ることなど人間には不可能であろうが

「とまあこういうわけだ。」

理解出来そうにない部分を省き、ようやく説明が終わる。

この説明を聞いたエルスは難しい顔をしていた。

「成程、それでは無理ですよね・・・」

もしかしたら今よりずっと強力な魔法を使えるようになるのでは、と期待していたのですが、やはりそんな都合の良い話なんかありませんよね。」

「姉様、精進あるのみです！」

残念そうに言うエルスをクルスが励ましている。
どうやら諦めてくれたようだ。
しかし結構話し込んでしまったな。

「レイさん、時間も遅いですし、今日はこれくらいにしませんか？
明日は依頼もこなさなくてはなりませんし。」

いいタイミングでルルが提案してくれた。
よくみたらレオン以外の皆は総じて眠そうにしていた。
まあ今日はかなり濃密な一日だったから無理ないか。

「そうだな、これぐらいでお開きにしよう。」

「分かった。」

じゃあ俺は下から毛布でももらってくるよ。
最近は暖かくなってきたが夜はまだ冷えるからな。」

そう言いレオンが部屋を出ていこうとする。

「待て、そんなことせんでいい。」

「な、お前は俺に着の身着のまままで過ごせというのか!？」

「レイさん、いくらレオンさんでもそれは酷いと思いますよ?？」

「はい、いくら兄さんでもそれはちょっと……」

「いくらレオンとは言え、服だけでは風をひくかもしれないし。」

「……君らもたいがい酷いことを言っていると思うがな。」

そうじゃなくて、ベッドを使わないのは俺だから普通にレオンは寝ればいいつてことだ。」

「ええっ!?(全員)」

皆驚いている。

いくら俺でも事前に何の通達も無しにそんなことはしないんだがな。

「それはそれで不味いだろ？」

従者の俺たちが主人を差し置いてベッドで寝るなんて。」

「そうですね。」

ここはやはり兄さんに床で寝て貰いましょう?」

「ルル・・・」

「レオンが泣くからそういうことは言っちゃるな。」

主人が言ってるんだから別にいいだろ。」

「ですが」

「それに。」

まだ言い募ろうとしたルルを黙らせ、続きを口にする。

「快適な環境に慣れてしまつともしもの時困るからな。」

『あの時』みたいに・・・」

そう口にした時の自分の表情を俺は知らない。

だが、皆は俺の表情を見ると息を呑み、何も言わなくなってしまう

た。

「俺は外で寝るよ、そっちのほうに慣れてしまったからな。近くにいたから何かあったら教えてくれ。」

そして俺は固まった皆を置いて部屋を後にする。

今、俺は木の上で作業をしている。

内容はあの銃の整備だ。

これはこっちに来て初めのひと月で弾を使い切ってしまったのだが、思いつきの品だったのでそのままとってあったのだ。

思いつきと言ふよりは自分の戒めと言えるのかもしれないが。

そうしたのは正解だったようで、後にこれは俺の『切り札』の核となった。

分解し、マーカス殿の店で買ったさび止めの油を塗り、余分な油を拭き取ってから組み立て直す。

そして出来上がった銃を眺める。

銃身部分に彫り込みがあり、こっちは彫られていた。

「R・S・よりR・S・へ」

名前は覚えていない『あいつ』が、幼いころの俺の誕生日に贈ってきたモデルガン。

町を歩いている時にかっこいいとぼやいていたところを聞かれました。たようで、その時覚えたてだったイニシャルを思いつきで彫ったのをプレゼントしてきた。

その理由はその方がかっこいいから、だったな。

そのモデルガンを『あれ』の後で俺が実戦にも使えるように改造したのがこれだ。

思えばとんでもない状況だよな。

いきなり異世界なんて訳の分からんところに飛ばされて、記憶は人物の名前だけがピンポイントでなくて、何度も命の危機に遭って、とんでもない力を手に入れて、

人間を、殺した

そして仲間を得た。

果たして、今の俺を見たら『あいつ』はどう思うだろう

うらやましいと思うだろうか

人でなしだと苦笑するだろうか

大変だったと同情するだろうか

すごいと褒めるだろうか

人殺しだと蔑むだろうか

俺がよく仲間をつくれたと感心するだろうか

恐らくどれも違う

『あいつ』の最期の言葉から想像できるのは1つだけ

「……『何で私は死んだのにあなたは生きているの?』、だろうな。」

最期の瞬間まで、「生」を望んでいたのだから

これについて考えすぎると抜け出せなくなりそうなので、これからに思いを馳せる。

俺は他の人間とは、常識、価値観、倫理、視点などいろいろとずれている。

それらは人間にとって根幹となる要素の一部だ。

それがずれているのだから、俺は自分を十分な『異常者』だと考えている。

このずれはこの世界の「魔法」を学ぶのに大いに役立ってくれたし、そのことを否定しようとは思わない。

そのおかげで、もしかしたらこの世界の人間の中で最強とも言える強さまで至ったかもしれないのだ。

だが、「異常者」の「者」という単語からも分かるとおり、所詮「人間」に過ぎない。

いくらずれてはいても、人としての「感情」の呪縛から逃れることなど出来はしなかった。

想像力だけで俺の魔法を超えることはまずできないとさっきは皆に説明したが、それはあくまで「人間」の話。

この世界には魔獣という存在がある。

俺の想像を超える力を持つ存在など、掃いて捨てるほどいるだろう。さらに、人の枠を超えたという「二つ名」持ち。

それらの存在に対して、「人間」である俺はどこまで対抗できるだろうか。

多少の恐怖は感じる。

だが、それらに出会うのがそれ以上に楽しみでならない。俺は知りたい。

自分がどこまでいけるのか。

弱さを思い知った存在が、自分の醜さを知ってしまった存在が、一体どこまで強くなれるのか。それをどうしても知りたい。その結果自分がどうなるかと。

「そんなところにいたのかよ。」

下から声が聞こえる。

「宿の近くではあるだろう。」

何か用か？」

気づいていたので普通に返事を返す。

その質問に対して、奴は率直に答えを返してきた。

「最後、なんであんな顔をしていたのか皆気になっていた。

あいつらは聞く勇気を持てなかったそうなので、俺が勝手に代表として聞きに来た。」

「うつとおしい、だがそれ以上にお節介な奴だな。」

本当に良いやつだよお前は。

その声音だけで、純粹に俺を心配しているのだと理解できる。だが。

「お前の過去になにがあったんだ？」

「応える必要はないな。」

突き放すように告げる。

その言葉に一瞬固まったが、直ぐに立ち直る。

「俺たちが信用できないのか？」

確かにまだ会って精々1日だが」

「俺はお前たちを「信用」はしている。

だが、「信頼」はしていない。」

「・・・それはどう違うんだ。」

「俺の場合は「信じて用いる」という意味と、「信じて頼る」という意味で使い分けている。」

要するに俺はお前たちに頼る気は今のところは無いということだ。俺の過去をお前たちに話すと、俺はお前たちを頼りたくなってしまうだろう。

だから、話すことはできない。」

「何故だ？」

別に頼ってくれてもいいだろうに。

仲間ならそれぐらいはできるだろ？」

「頼るといふのは結構無責任なことなんだぞ、レオン。」

失敗した時の責任が、頼られた相手にまで及ぶからな。

俺は皆にそういうことをしたくはない。

だから誰かを頼るようなことをせず、「信頼」することもないんだ。

別にお前たちが嫌いなわけではなく、これは俺のエゴみたいなものだが、変えるつもりもないんだ。

すまない。」

俺の頑固さが伝わったのか、レオンはそれ以上は言わず、苦笑した。

「まったく、謝るぐらいなら変えればいいものを。」

もしくはテキトウに嘘を吐くでもすればいいだろうに。」

「俺はこういう時に嘘をつかないようにしているからな。」

「お前も大概難儀な性格してるな・・・」

聞きたいんだが、つまりはこれから次第でお前が俺たちを「信頼」することもあるんだな。」

疑問ではなく確認だったので、無言でいることで肯定を示す。

それは伝わったようだ。

「それなら、今はこれでいいさ。」

そもそも会って1日で全面的に信用してほしいというのも無理な話なんだし。

お前がいろいろとおかしいせいでそんなことも忘れていたよ。

じゃあもう俺は寝る。

お前は頑固だからベッドを使いそうもないし、素直にありがたく使わせてもらっよう。」

「少し待て、レオン。」

最後に俺の話聞いていけ。」

宿に戻ろうとしていたレオンを、今度は俺が呼び止める。

「昼の俺がお前に殴られる前に、お前に何かを言いかけたことを覚えてるか？」

「ああ、たしか「お前は俺の中じゃ……」だったか。」

「その答えを今言っておく。」

「ちょうど誰も聞いていないからな。」

「……少し聞くのが怖いんだが、聞かなきゃだめか？」

「知ってる通り俺は人をからかうのが好きでね。」

「そのせいでレオンには結構な迷惑をかけているわけだが。」

「ああ、拒否権があるわけもなかったな。」

「もう慣れたさ。」

「どうぞ存分に語ってくださいな！」

レオンがやけくそ気味にそう言うのを聞きながら語り続ける。

「からかう時には実は俺なりのルールがあるんだ。」

「それは自分より立場が低い人間にはやり過ぎないようにすることだ。」

「立場が低いと弱いもの苛めみたいになってしまっからな。」

「ふーん。」

「ん？、じゃあ従者で立場が低いはずの俺は何故こんなにやられるんだ？」

「簡単なことだ。」

「俺はお前のことを従者だとは思ってはいない。」

「俺はお前のことを」

そう言い宿に向かおうとする。
俺はその背中にとどめをさす。

「ああ、最後にレオン。」

返事はない。

だが聞こえているはずだ。

「俺はこういう時に嘘をつかないようにしているからな。」

「うおおおお！」

グスツ、なんでそんなことを言うんだよ、グスツ、お前は！

本っ当に嫌な奴だ〜！！」

そう叫んで目を押えて走っていった。

静かになったところで、大分眠くなって鈍くなった頭で俺はあの4人を思い浮かべる。

あの4人は俺に救われたと思ってるようだが、俺はそうは思わない。
結果だけを見ればそうかもしれないが、終始自分の利益を考えた上
でのものだ。

それに、一人前にもなっていない俺が、自分のことで精いっぱい
の半人前の人間が、人を救うことが出来るはずがない。

だが

そこまで考えたところで俺は眠ってしまった

翌朝、俺はノックをしてから男部屋に入る。

「起きてるかー、野郎ども。」

「おはようございます、レイさん。」

今日は依頼ですから、昨日はなかなか寝られなくて大変でした。」
遠足前の小学生みたいなことを言うクルスの隣では、レオンが目の下に隈をつくって座っていた。

「おや、レオン君は一睡もできなかったのかね？
いかんよ体調管理はしっかりせんと。」

「分かってて言うんじゃないよ……
だが、これぐらいならお前の期待に応えることぐらいはちゃんと
できる。」

「だから問題ない。」

「そうか。」

「じゃあ期待してるよ。」

言葉以上に多くの気持ちが籠もった言葉のやり取りに、クルスは首

を傾げていた。

「ところでエルスたちなんだが、レオンお前起こしに行ってくれないか？」

「まああいつらは朝に弱いから、絶対にまだ寝てるよな。

だがそんなのはごめんだぞ、以前起こしに行ったら酷い目に会ったからな……」

「そりゃあの年で兄に寝顔を見せるのを恥ずかしいと思うのは当然だろうが、それを言うなら恋人でもない俺が行くのも相当まずいだろうが。」

クルスでは遠慮して起こせないだろうし、お前が行くのが一番だと思っぞ。」

「あっちはそんなの気にしないとっがな。」

「分かった、お互い行きたくない理由があるならば、これで決めよう。」

2本の木の棒を取り出す。

「この2本からお前が引いて、先端に色がついてるのを引いたらお前が、何もついていない方を引いたら俺が行く。」

「どうだ？」

「……分かった。」

後腐れもないしそうしよう。

「……これだ！」

引いたのは色付き。

「はい行ってらっしゃい。」

本当に期待を裏切らないでくれて何よりだ。」

「……逝ってくる。」

そうして部屋を出て行くレオン。

「なんか字が違ったような気がする。」

「……以前起こそうとした時、レオンさんは全治1か月の重傷を負ったんです。」

「……何をやらかしたんだ、あの馬鹿は？」

あの2人は理由もなくそんなことはしないだろ？」

「それについてはおそらくまたやると思いますのですぐに分かるでしょう。」

ところでレイさん、それなんですけど……」

「ああ、もちろんイカサマだ。」

俺は色付きと色無しの2本だなんて言っていないからな。」

クルスに見せながら言う。

棒はどちらも色付きだった。

「やはりそうですか。」

しかしレオンさんもそろそろこつこつというのに敏感になってもいいと思います。」

「なに、この素直さがあいつのいいところだろ。
このままで居てくれたほうが俺は嬉しいよ。」

苦笑いを浮かべるクルスにそういうと、今度は驚いた顔をする。
そして。

「兄さん、なぜノックをしないで入ってくるんですか！
以前言いましたよね!？」

「うお!？」

すまん、忘れてた!

いや、だが寝てるんだからしても聞こえないんじゃないか」

「それでもするのが礼儀というものでしょうが！
私たちが着替え途中だったらどうするのよ!」

「う、す、すまなかった!

急いで出るから!」

「て、兄さん足元をちゃんと見てください!

また前みたいに」

「うおあああ!？」

「て、言わんこっちゃない!

そして何でこっちに倒れて、きゃあああ!?!??」

そして何かをたたく湿った音と、女性の悲鳴、男性の懇願が連続して聞こえてくる。

しばらくすると、音は女性の嗚咽だけになり、もう1人の女性がそれを慰めているようだ。

「・・・すごいなあいつは。」

以前も同じようなものだったのか？」

「はい・・・」

その時はもう少し長かったんですけど、原因は聞こえた限りでは同じですね。」

「一種の才能かね、これも。」

だがなかなかにおもしろかったな。」

「本人たちにとっては笑いごとではないと思いますが。」

「まあいいじゃないか。」

とりあえずレオンを治してやって、謝らせるとしよう。

このままギクシャクされたら不味いし。

行くぞ、クルス。」

愉快的気持ちで微笑みながら、クルスを連れ歩き昨日の思考の続きをする。

俺には彼らを救うことなど出来ない

だが

手助けなら出来るだろう

俺に楽しさを与えてくれる、大切な仲間を助けることぐらい
なら

そして俺は、異世界での新たな人生を本格的に歩み始める

18話 決意（後書き）

余裕がありましたら評価をどうか！

19話 依頼（前書き）

今回は戦いません。

期待してくださった方、いらっしやいましたら申し訳ありません・

・
それと半分寝ながら書いたので、あとで大量改稿するかもしれませ

魔獣の名前、漢字で通した方がいいでしょうか。

それとも横文字の方が合いそうなときは横文字にした方がいいで
しょうか。

ご意見お願いします

19話 依頼

side レオステッド

ひでえ

酷過ぎるよあいつ

まさかあの場面であんなことを言ってくるなんて・・・
的確に俺の急所を狙い撃ちしてきやがった

今俺はベッドの中で泣いている。

いわゆる泣き寝入りという奴だ。

・・・少し意味が違うか？

まあそんなことはどうでもいい。

問題はいくら気持ち切り替えようとしても、心の奥から湧きあがってくる喜悦を抑えられないことだ。

まったく眠れやしねえ・・・

あいつ恋心が分らないとか絶対嘘だ。

でなけりゃこんなにも人の心を弄べる訳がない。

そういえば「落として上げるのは俺がよく使う手だ」とか以前言っていた。

あの時は意味が分からなかったが、今はとてもよく分かる。

その効果の程も、自分で身を以って思い知った。

最初にまたからかわれるだろうと決めつけてしまったのが失敗だった。

ああ考えるのもあいつの想定内だったに違いない。

そうして土台を造った後で、予想と真逆の言葉を飛ばしてくるとはな。

ただ落差をつけるだけで俺の心をここまで揺さぶることが出来るなんて、もう感心することしかできない。

最初にあいつから受けた印象は良いものでは無かった。

いや、はつきりと悪いと言えるだろう、目の前（実際に見てはいないが）で人間を殺して平然とされれば当然だ。

だが直ぐにその印象はよく分らないというものになった。

冷酷かと思えば辛そうな表情を見せ、かと思えば飄々と権力者と取引をする。

しかも、従者になれとか言っておきながら俺の言葉使いを窘めることも無かったし、そもそも俺たちへの接し方も対等の仲間と、いや家族と接するような感じでまったく偉ぶった様子がない。

そんな面も確かにその印象の変化に貢献しただろうが、俺にとって一番影響を与えたのがこれだ。

『友達』

あまりにもありきたりで簡単な言葉。

だが、レイという人間が言つとその言葉の深みが桁違いだ。

友達だとかその手のことを普段絶対に口にしない人間だということも原因だろうが、それ以上に今までからかわれ続けていた理由がそれだったというのが、最たるものだろう。

からかわれていたこと自体、あれだけされても不思議と傷つくようなことが無かった。

恐らく、その辺もあいつがコントロールしていたんだろうな。

そこであいつに対等の存在で、しかも『友達』だと言われてしまえば、もう怒る気も起きなくなってしまう。

・・・完全にあいつの掌の上で遊ばれてるな

しかもそれでもいいと思えてきているのだから恐ろしい。

あいつのすごいところは他にも、その言葉をなんの抵抗も無く信じ

込ませてしまえるところだろうな。

あいつが言うことなら、俺たちはどんな嘘でも信じ込まされてしま
いそうだな。

ホント、僅か2日でどうしてここまで信用することが出来てしまっ
たのか。

この半年、人の世の厳しさをあんなに思い知らされた。

それなのに俺たちは全員、あいつを信用、いやほとんど依存してし
まっている。

もはや、あいつが俺たちとともにいないことのほうが異常であるか
のようにすら感じる。

あいつは本当に、いろんな意味で、しかも良い意味でおかしすぎる。
だから俺たちも頼ってしまうのだろう。

だが、それでは駄目なんだ。

ああ言われてから、その思いは余計に強くなった。

あいつは本心で俺のことを友人だと思ってくれている、そう信じら
れる。

ならば、頼っては駄目とは言わないが、こちらも頼られるような存
在にならなくてはならない。

そう、過去を自分から語ってもらえるほどに。

あいつが部屋を出ていく前に見せた、悲しみと後悔をひたすら煮詰
めたかのような表情。

その原因であろうその話を。

そう決意を固めた時、ノックの音が聞こえた。

ふと周りを見ると明るい。

え、もう朝？

s i d e e n d

馬車に揺られながら街道を行く。

馬車の中には、俺たち5人とネストでノックアウトした3人の計8人、御者はクルス。

そして空気は重い。

クルスは御者を任せると喜んで席へと避難していき、彼を他の皆はネスト陣も含めて羨ましそうに見ていた。

俺はそんな空気も気にすること無く、チクチクとやっていた。

ネストの3人の視線は俺を向き、その中には恐怖が多く含まれていた。

目的が達成されていたことを確認し、満足する。

まあこれから一緒に戦うとなるとこのままは不味いので、なんとかする必要があるだろう。

ディック殿から依頼されたものは、「岩餓鬼」の討伐。

なんか大層な名だが特徴を聞いたところ、要するにただの岩場に生

息するゴブリンだった。

まあ、ファンタジーでの雑魚の定番だが、やはり一般人には脅威らしく、増え過ぎたら数を減らす必要があるらしい。

今回は、前回討伐を頼まれていた奴らが外せない理由によりすっぱかし、その報告を担当者が忘れ、さらにそれが判明したのが昨日、ほったらかしにされていた期間が安全とされている期間の3倍の6か月、という呆れる結果になっていたそうだった。

つうか2か月がリミットで前回の依頼が3か月前だったというし、その時点で管理が杜撰過ぎる。

それなりの理由があつたらしいのだがこれは流石に無い。

そして焦ったディック殿が丁度いいからと俺たちにお鉢を回してきた。

初心者に不確定要素が多い依頼を任せることに抗議の声も多かったのだが、長の鶴の一声で治まった。

なんか期待されているようで、婉曲ではあつたがかなり高く買われていることがこの時の発言から分かった。

今回の依頼での成功条件は「岩餓鬼」の数を脅威でない数、具体数で20ほどまで減らすこと。

ただし、あまりにもほったらかしにされていたために、現在何体生息しているのかさっぱりだそうだった。

改めて考えると相当ひどい状況だ、ネスト陣の空気が重いのはそのせいもあるのだろう。

それなのに形だけでも了承しているのは、もし対処できないようなものだった場合は、特別に逃走も許可されているためだろう。

普通は評判が下がるなどの弊害があるのだが、今回は周りからの同情的な意見も多かったのもそんなこともない。

つまり今回の件で失敗すると、実質損をするのは無茶なことを持ちかけたことになるディック殿だけ、ここまで期待されているのは失敗出来んな。

そして今馬車は目的地の岩場へと移動中。

距離はこの馬車で約1日だそうだが、明日の朝には着くだろう。

俺はまずはこの空気を何とかしなくてはならないのだがどうしたものか、と依然チクチクやりながら考えている。

そこでエルスが耐え切れなくなったというように言って来た。

「あの、レイ様、まずは自己紹介をしませんか。

お互いのことを全く知りませんよ私たち。」

「あれ、やってなかったっけ？」

「はい、やってませんよ。」

今朝に会った時も気まずい感じでもろくに会話しませんでしたし。

「

ん・・・

そういやそうだったな、不味いな、人として最低限の礼儀を忘れてしまっていた。」

昨日ネストでしたからすっかりやった気になっていた、だがこれで切っ掛けがつかれるな。

俺は作業を中断して話し出す。

「では皆さん、もしかしたら昨日ネストで聞いているかも知れませんが改めて紹介させていただきます。

まず、先ほどから御者を務めている金髪の少年がクルスといい、こちらの金髪の女性、エルの弟です。」

「よろしくお願いします。(2人)」

そう言うと2人は自分から挨拶した。

ネスト陣は突然の事態の変化に戸惑いながらも、曖昧な返事を返す。

「そしてこちらの銀髪の少女がルルでそっちの妹になりますね、血縁上は。」

「こん、にちは・・・」

消え入りそうな声で挨拶をする。

そういえば顔見知りなんだったなこの子は、俺の背から顔だけ出して言った。

だがこの小動物的な仕草がネスト陣に受けたらしく、和んだ様子を見せた。

後はこいつでこの空気を払拭できるだろう。

「おい、どういう意味だそれは。」

そして俺の紹介がないんだが。」

「これがレオン(笑)です。」

「(笑)ってなんだよ!？」

俺に何か笑う点があるってのか!」

「あるぞ。」

ノック無しで家族のような関係とはいえ女性の部屋に入り、ボロ雑巾にされただろ。

あれは爆笑ものだった。」

「・・・治してくれたのは感謝する。
だがあれを見て笑えるお前は間違いなく人でなしだ。」

「今更だな、レオン（哀）。」

「哀れnderのか!？」

哀れnderんだ俺のことを!

お前は本当に俺のことを昨日の言葉のように思ってくれているのか!？」

荒れていたエルスを落ち着かせるのに、ちょっとした約束をする必要まであったので、ちよつとここでこいつに犠牲になってもらおう。いや、あれが無くてもこうなっただろうか。

「そして私がこの3人と1頭の主人ということになっているレイです。」

以後よろしくお願いします。」

「頭つてなんだ、家畜かよ!

それが俺の問いに対する答えなのか!？」

「・・・」

「お、おい、何だそのなに当たり前のこと聞いてんだこいつ的な視線は？」

くっ、お前からかまもなにか・・・ってなんで目を逸らす!？」

誰も否定してくれない!？」

いや、目を逸らすということは肯定しているというのかお前たちは!？」

「ぶっ……！」

「くっく、はは……！」

「何をしてるんですか君らは……」

そうして、1人は笑いを堪え、1人は堪えられなくなり、1人は呆れたように、だが楽しそうにそう言った。

それにつられ皆も笑い出し、馬車の中は笑いで溢れていった。頂垂れている1人を除いて。

それからは無駄話をする余裕も生まれ、スムーズに話が進んでいく。

赤い髪の男は名前をサムスと言い、全身を鎧で包み腰に剣を差した騎士の格好をしていて、このチームのまとめ役をしているそうだ。

そして茶髪の大柄の男はライガン。

いかにも力持ちの戦士といった軽装の格好で、武器はハルバード。ちなみにこの人が俺の急所への一撃を受けた人。

最後にくすんだ金髪の少々やせ気味の男がフルート。

黒のローブを着こみ、杖を持っている姿から分かるように魔導士。

そして俺は作業を続けながら、サムスさんに今の内に言っておこう
と思っていたことを言っておく。

「今回私たちは初めての依頼なわけですから、今回の全体の指揮は
サムスさん、貴方をお願いしたいのですがよろしいでしょうか。」

そういうと全員が驚いた表情を浮かべる。

「いいのかそれで？」

俺たちはあっさり全滅させられたわけだから、てっきりお前が仕
切るのかと思っていたが。」

他全員もそう思っていたらしく、不思議そうにしている。

なるほど、この世界ではこういう時でも実力主義なんだな。
だが、それだといろいろと不味いこともある。

「ふむ、確かに私ははっきり言って貴方たち全員を合わせたより1
000倍は強いですし、そこらの一流よりもよっぽど戦闘経験もあ
ります。」

「て、てめえは本当にはっきり言いやがるな・・・。」

そうライガンさんが言う。

他2人も顔が引きつっているし、皆は苦笑を浮かべている。

「ですが、自分以外の人間が一緒での戦闘経験は皆無なんですよ。
ですから、指揮はそういうものに慣れてる方をお願いしようと思
うんです。」

そもそも個人がいくら強いといっても、それで油断しては予
想外の不意打ちで簡単に逝ってしまうこともありますし。

俺1人ならばそれでもいいのですが、それに誰かを巻き込むわけにもいきませんからね。

そんなわけで、どうかお願いできませんでしょうか。」

そう説明すると、しばらく考え込んでいたようだが納得してくれた。

「分かった、俺もこんなに大勢を仕切ったことはないんだが、何とかやってみるさ。」

まあ数があまりにも多いようだったら直ぐ逃げるから、こんな会話の意味も無いかもしれねえがな。」

そついい苦笑を浮かべる。

状況が状況だからそう思うのかもしれない。

「岩餓鬼」は単体でのランクはFでしかないそうだが、それでも数が多ければ馬鹿に出来ない。

だが俺はそんな彼らに笑いながら語る。

「ははは、そんな心配は要りませんよ皆さん。」

皆が首をかしげているようなので続きを話す。

「D以下の雑魚が何千匹いようと、殲滅するのは私にとっては、手で木の葉を払うのと手間は変わりません。」

もし貴方たちと皆に対処出来ないような数であれば、即座に私がこの世から消し去りますから問題なしです。」

俺にとっての当然の事実を、軽く口にする。

ネスト陣は、その嘘や虚飾がまったく含まれていない声音に本気だと分かってても、理性がそれを許さないのだろう、ただ困惑を浮かべていた。

それが事実だと今までの実績から否定しきれない皆は、改めて畏れを抱いているようだ。

あらかたの話し合いが終わったところで、また作業に移ってチクチクとやっていた俺にフルートさんが意を決したというふうに聞いてきた。

「と、ところであなたはさっきから何をやっているんですか？、レイ君。」

そう言うと他の全員も気になっていたようでそれぞれ反応を見せた。大分打ち解けたようだったが、まだ怯えがあったようで誰も聞いてこなかったのだろうな。

「見ての通り刺繍ですよ。」

今までずっと無地だったんで、ここらで一度心機一転しようと思っ
ています。」

俺はこの馬車に乗ってからずっとそれをやっていた。

牛のような魔物の皮からつくったこの服、今まではただ黒いだけだったのだが武器屋でなぜか染料が売っていたので、例の魔物の糸を染めて刺繍し模様をつけることにした。

と言っても、当然実用も兼ねている。

「ほう、これは魔法陣ですか。」

しかし見たことがまったくないものですな。」

そう、この世界ではそれを使うのが一般的なようなので、少しでも

違和感を消すためにそのような細工をすることにしたのだ。
つける模様は、向こうでの最もポピュラーな魔法陣である六芒星だ。
とりあえず自分が魔法と聞いて真っ先にイメージするモノにしてみ
た。
もしかしたら本当に効果がある凶形も存在するかもしれないので、
これからいろいろと試そうと思っっている。

「ええ、この辺りにこれを知っている人間はいないと思いますよ。
私の故郷にしか存在しないものですからね。」

そう言うと全員が六芒星を興味深そうに見てきた。
この世界の他の凶形とは違って、これはかなり簡単な形をしている
ので、珍しいのだろう。

「なんかかなり簡単な形してんな。
もっと複雑なものの方がいいんじゃないかねえのか？」

そう思っただらライガンさんがそのまま聞いてきた。

「まあ私にとってはこの方がやりやすいんですよいろいろと。」
なんか特に説明する意味を見いだせなかったんで、テキトウに答え
ておいた。
雑な扱いに意外にも少し傷ついたようだったが、何も言わないでい
てくれた。

「・・・お前が最初に話しかけてきた時から気になってたんだが、
何故敬語を使うんだ？」

俺たちをあっさりねじ伏せるような奴だからそのあたりのことを
気にしない奴だと思っただんだが。」

その疑問に答える。

「あの時はあなたたちはどちらかと言うと敵でしたからね。私は敵には徹底的に容赦しないようにしているんですよ。」

ですが今は仲間なんで普段通り目上の人に対する接し方をさせてもらっています。」

「・・・なるほどな。」

ということはお前たちの敵にさえならなければ良好な関係を築けるといふことだよな。」

これからは気を付けることにしよう。」

これは俺の基本方針の1つで、恐らくこれからもずっとこのまましていくことだろう。」

彼らはこの極めて分かりやすい方針を簡単に呑み込めたようで、サムさんはそういつてくれた。

それからはテキトウに全員で談笑しながら過ごし、ただ時間が経つのを待った。

そしてようやく目的地の到達し、行動を開始する。

「さて、まずは敵の所在を確かめなくてはな。」

「ここらを一周して搜索しよう。」

そうサムスさんが告げる。

確かに普通はそれしか手は無いだろつが、それではかなり時間がかかる。

「サムスさん、それでは時間がかかるので私のやり方で搜索してもいいでしょうか？」

「ん？、なにか良い手でもあるのか。」

まさかその手の特殊な魔法を使えるとかか？」

「いいえ、魔法は使いませんよ。」

ですが、テキトウに歩き回るより100倍手っ取りばやいです。」

困惑を浮かべるサムスさんたちネスト陣だが、手間が省けるといいうなら断る理由もないので了承する。

許可された俺は足を踏み出す。

地面ではなく空中に。

そしてそのまま階段を上がるように、空を駆け上がっていく。

その様子を全員が呆然と眺めている。

・・・ネスト陣はともかく、皆は俺がこういうことが出来ることを知ってるはずなんだがな

そして空中約40メートルという高所で立ち止まり、周りを見渡す。もともとはいい方だったのだが、闘気で視神経を強化すればこの距離でも地表の様子がはっきりと見ることが出来る。

しばらく探すと、今の全員がいる地点からそう遠くないところに醜悪な小人（小鬼？）が居た。

場所を記憶した後に、下へ一気に飛び降りる。

足の動きで衝撃を吸収し、あまり派手な音を立てることもなく着地

する。

そこでは俺の非常識さに慣れていない人たちが未だに呆けていた。

「エルス、水をかけてやってくれ。」

「はい。」

エルスが軽い詠唱をして3人に水球をぶつける。
すると息を吹き返した彼らが一気に捲し立ててきた。

「何なんだ今のは!？」

あんなことが魔法を使わないで出来るってのか!？」

「お前は一体何なんだよ・・・」

ネストでも俺たちを変なので気絶させやがったし。

・・・俺は急所の一撃だったが。」

「ですが、確かに風の魔法なんかではあんなふうになにかを踏んだよ
うな動作は出来ません。

ということとは私たちのまったく知らない魔法、そうでなければ闘
気を使っただんでしょうか?」

そんな風にそれぞれ好き勝手に言ってくる。

まあ答えられる範囲で答えておこう。

「フルートさん正解です。」

今のは足元に障壁をつくってそれを足場としたんですよ。

まあ誰でも考えつきそうなことですがね。」

そう、この程度のことは接近戦を行う人間ならば誰でも考え付くだ

ろっ。

であるのにここまで彼らが驚くには、おいそれとそれが出来ない理由がある。

「ホントかよ・・・」

お前、そんな体のどこにそんな化け物染みた体力があるんだ？

いや、それとも無いとは思うが、お前は体力の勘定も出来ないくらいパーなのか？」

そう、それがその理由。

闘気を使った障壁はかなりの体力を消費する。

具体的には手のひら大のもので、展開した秒数分だけ全力疾走しただぐらい消耗する。

そんなものを戦闘時以外に連発してるんだから、そう言われてもしようがない。

それに加えて足の裏に障壁を造るのがかなり難しいということもあり、より混乱させてしまったのだろう。

「おや、失礼ですなライガンさん、まあ当然の疑問ではありますが心配しなくても私はそれなりに頭もいと自負していますしそっちは問題ありません。」

私がこれができるのは独自に改良をすることで燃費の問題をクリアできたからです。」

その改良したというところでまた呆然とした表情を浮かべる。

こんな若造がそんな画期的なことをやってのけたのだから当然か。

「それでレイ、どこに敵がいたんだ。」

「ああ、この岩山を1つ超えた向こうだ。」

サムスさん指示をお願いします。」

「お、ああ、分かった。

それじゃあ行こう。

なるべく足音を立てないようにしろよ。」

その指示に従い動き始める。

と、俺はそこで1つ言い忘れていたことに気が付く。

「ああ、皆さん、それに皆。

言い忘れていたことがあるんですが。」

全員がこちらを見る。

「私がもし、これは皆さんでは駄目だと判断したら逃げるように指示しますので従ってください。

私の本気に巻き込んでしまいかねませんので。」

真剣な表情でそう言うと、今度は全員は畏怖を抱きながら頷いてくれた

19話 依頼（後書き）

出来ましたら評価を

20話 捕食者（前書き）

いろいろ考えたんですが、魔獣の名前は漢字に横文字のルビ振るとにしました。

振るのはその話での初出だけですが
ご意見くださった方ありがとうございます

20話 捕食者

そこは広場のようになっていて、周りを岩壁に覆われ、ところどころに人の身長ほどの大きさの岩が点在していた。

そして「岩餓鬼」ロックユブリンは、巣と思われる穴の前に数匹立っている。

「まだ気づかれていないようだな。

普通なら全員で連携し、リスクを抑える戦いをするところなんだが・

・・・」

サムスさんは困ったように続ける。

「組んで初めてでいきなり連携が出来るはずもないし、そもそもお前に至っては、規格外過ぎて周りに合わせた戦いが出来るとは思えん。

だからお前は単独で、それ以外は俺ら3人と君ら4人の組でやろうと思うんだが、どうだ？」

確かに、慣れてもないことをいきなりやれと言われても、出来るはずもなく、動きも悪くなり、ろくに戦うことなど出来ない。

敵が多いという苦境に流されることなく、現状を冷静に見極めて最善手を選べるのは流石だ。

「おっしゃる通り、私の戦い方は他人が助けに入るといったことを一切考慮しないものですので、1人の方が都合がいいですね。

それに無理に協力しようとしても非効率的でしょうし、それが最善だと思います。

君らはどうだ、不安だったりするか？」

「いやまったく。」

「私も。」

この4人ならば余程の数でない限り問題ないですし。」

皆にこれでいいか確認すると、予想通りの答えが返ってくる。

応えていない年少の2人も、頷いているので問題ない。

ネスト陣はもともと、サムスさんがこの手のことを考えているそうなので、反対があるはずもない。

「しかし、・・・?」

「ん?、気が変わりでもしたのか?」

「いえ、そうではありませんよサムスさん。」

・・・自分でもよく分かっていないので気にしないでください。」

「? (全員)」

何だろうな、岩場全体に漠然とした違和感がある。

だが何故かは分からないし、とりあえずはおいとこつ。

段取りが決まったところで乗り込むと、すぐさま奴らは気づき甲高

い叫びを上げる。

すると巢穴から続々と出るわでるわ、ざっと見ても50匹以上の群れ。

何処から手に入れたのか、それぞれがボロボロの剣やナイフなどの武器を持っている。

醜悪な面をした小さな鬼でも、ここまで揃うとなかなか威圧感がある。

「やはりかなりの数だな・・・」

それぞれのノルマでも決めておくか？」

ライガンさんが笑いながら言う。

ここで深刻になってもしょうがないし、むしろ空元気でも軽く思っていた方がいい。

本人が自覚しての発言かは分からないが、その言葉で固くなっていたクルスとルルの緊張が緩む。

まあ確かに多いし、母国で軍人だった兄弟と違って、実戦慣れしていないこの2人なら緊張してもしょうがない。

それじゃあ、こうしよう。

「私が7割を引き受けますよ。」

皆さんは余りをお願いします。」

「ちよっ、レイさんそれは無理が無いですか!？」

「そうです！」

先ほどはああ言っていました、やはり危険ですよ！」

驚いた様子の2人だけでなく、全員が何とも言えない顔をする。

さっきの俺の発言に一応の納得を示してはいたが、いざとなればや

はりそうくるよな。

「君ら、あの数に惑わされて冷静さを失ってるだろ。」

俺の魔法を見ておいて、今更あの程度の連中に後れを取ると本気で考えてるのか？」

「あ・・・」

「た、確かに、そうですね。」

「おいおい、お前らは何を見たんだ。」

あんな夢物語のような話を本気にできるほどの魔法って一体・・・

「

「同じ魔導士としては到底信じられる話ではありませんね・・・」

「お前にそう断言されると、俺たちがおかしいように感じられるよ・・・」

どんな数だろうとあの程度の敵であれば、俺の魔法ならば一発で炭の山にできる。

それを分かっているので、彼らは簡単に納得した。

ネスト陣は呆れた様子だったが。

その後もあれこれ言われたが、テキトウに受け流し、反論し、強引にねじ伏せる。

サムスさんに指揮を頼んでおいてこれはないと自分でも思うが、俺は彼ら全員の強さをよく知らないので、念のために出来るだけの安全措置を取っておきたいのでそこは譲らなかつた。

そうして反対する人間がいなくなつたので、そういう割り振りでいくことになる。

その間にもゴブリンたちはこちらへと向かって来ていた。かなり必死の形相になって走ってくる。

さつきよりも数が増えて、今は大体100といったところだ。

その戦力比、約13対1、半年前の俺だったら間違いなく逃げの一手を選んだことだろう。

「それでは始めますか。

よっ。」

今では羽虫程度の存在でしかないがな。

軽い掛け声とともに腕を振るう。

固まって押し寄せていた敵が、一瞬で現れた分厚い氷の壁で分断される。

その現象に敵味方双方の動きが止まる。

もう振り返らずとも気配からどんな反応をしているのか予想がついているので、さっさと戦闘を開始する。

「では私がこっちの多い方を担当するので、そちらはお任せします。

もし皆が苦戦しているようでしたら、お手数ですが手助けしてやってください。」

そう告げて返事を待たずに動き出す。

さて2日ぶりの対魔獣戦闘だ、楽しませてもらいますか。

・・・言うほど久しぶりでも無かったな

今回は相手もあの程度だし、魔法は無し、使っても下位で済まそう。身体全体へと闘気を巡らせ、一気に接敵する。

まだ100mほどあった距離が1秒ほどで無くなり、とりあえずはその勢いそのまま殴る。

ボシュッ

胴体はそのまま微動だにせず、頭だけがかき消えた。

ものつすごく脆い。

おいおい、この程度の一撃で爆散しちゃったよ。

「魔の森」ならこの程度では怯みもしない奴が大半だったのに。

しかしこれくらいが森の外では普通だと言うし、あそこの異常さを初めて思い知らされた気分だ。

いきなり仲間が屠られて、群れに動揺が広がる。

俺にはそんなことはどうでもいいので、そのまま次の行動を起こす。一体の頭を鷲掴みにし、全力で群れの中心部に向けて投げ捨てる。

「ギギヤアアアアアア！！！」

聞くに堪えない鳴き声を上げながら、10ほどのゴブリンが巻き込まれ吹き飛んだ。

そいつらは大地というおろし金に削られて、見るも無残な姿となる。

「想像以上に弱いなこいつら・・・」

武器を抜く必要すら無いとは。」

このまま一体ずつ投げていってゴブリンボウリングをやってもいいが、せつかくここまで数が居るんだから対集団戦でも練習してみようか。

そう考え、敵がまとまり向かってくるのを待ちながら、あつちはどうしているか見てみる。

「おお。」

思わず感嘆の声を漏らしてしまった。

こちらの余りとはいえ、その数約30の敵。それを相手に、彼らは完全に圧倒している。

ネスト陣は素晴らしい連携で相手の攻撃を完全に防ぎきっている。そのスタイルはまさしく堅実といったもので、3人で固まり、各々の欠点を埋めあっている。

一見、防御を主体とした戦い方をしているように見えるのだが、怪我を負わないことによりすべての行動が滑らかになり、結果的に敵をより早く倒している。

そして我が仲間たちは、ネスト陣ほどではないもののかなりの連携を見せ、単純なスペックでも相手を圧倒している。

エルス以外は全員闘気主体で戦っているようで、体の一部や武器が発光している。

ちなみに俺も今は闘気を使っているが、彼らとは違った使い方をしているため光ってはいない。

レオンが大剣で敵を切り開き、大振りな動作で生じた隙をルルがレイピアの流麗な動きで補う。

この2人、背中合わせでもお互いの位置が見えているかのように動いてやがる。

その2人により守られたエルスとクルスが、距離の離れた敵を火力のある魔法と弓の精密射撃により殲滅している。

エルスが火力優先の濁流を生み出して敵を押しつぶす。

そしてそれでも生き残った幸運な、いや不運な奴は、クルスの急所を狙う、弓とは思えない正確さと連射速度により息絶える。

（実力がある程度予測できていたレオンとエルスは戦えるのは分かっていたが、クルスとルルも明らかに、自己申告の一般レベルであるDを逸脱していないか？）

そう思ったが、よく見ると年少の2人は年長と比べて確かにまだ動きに無駄が多いし、一撃の威力も低いようだ。

それを年長の2人が補っているのだな、ホントにびつたりりの4人だ。

あっちはまったく問題ない。

と、そのまま眺めているうちに、驚く発見をいくつか見つけた。

エルスの剣には魔法陣が刻まれているのだが、魔法を使う時にそれが発光していたのだ。

どう見ても、明らかに何らかの働きをしていることが分かる。

予想を裏切り、本当に効果があったようだ。

これはこれから本格的に調べねばなるまい。

思い込みで効果が無いと信じ込んでいた自分を反省する。

そして彼らが使っている武器だが、闘気の通り方が俺のナイフと違って極めて滑らかだし、エルスのナイフはどうやら魔力を込めると簡単な魔法が発生する代物のようだ。

どうやらそういった特殊な材質らしい、後で聞くことにしよう。

最後にこれが一番気になったことなのだが、ルルがおかしかった。と言っても拳動がおかしかったわけではない。

まだ実力が未熟なためか、一度攻撃を受けそうになるときがあったのだが、その時相手の動きが不自然に止まったのだ。

魔法でも使ったのかと思っただ、魔力が感じられるなど、ルルが魔法を使ったような様子は一切なかった。

よく思い出すとそれが起きたのは、皆がルルから注意を逸らしている、さらに関係あるかは分からないが、誰からも顔が見えない時だった。

（ふむ、何かまだ隠していることがあったんかな？

しかし見たのは一度だけだったし、不自然ではあったが偶然にかあっただけかも分からんから、とりあえず放っておくか・・・、

て、おお。）

単なる勘違いの可能性も高いのでこれについては放っておくことにした時、まとまって押し寄せて来ていたゴブリンから斬撃をくらう。しかし今の俺には生半可な攻撃は通じなく、精々皮を切る程度の意味しかないので、驚く以上の効果はなかったのだが。

「すまん、忘れてた。

では相手してもらおうか、小鬼諸君。」

残り60ほどの敵に向かってそう言い、切りつけてきた奴の首を手刀で落とす。

このまま素手でこいつらを片づけてもいいのだが、より実践的な対集団戦のシミュレートのために武器を使うことにする。

ナイフを抜き、手当り次第に切り捨てる。

敵の攻撃は、闘気の足場を使った高速の三次元運動ですべて回避する。

上に飛び、障壁を天井のような足場として真上から切りおろす。

着地した瞬間に一齐に襲いかかって来たが、体をほぼ地面と水平にして飛び、体を回転させながら弾丸のようにそのまま8ほどの敵を一気に切り捨てる。

闘気の障壁を移動手段として用いれるようになったことで、俺は人間が想像できるあらゆる動きをほぼすべて実行に移せるようになった。

盗賊を狩った時のように、地面も天井も無く、縦横無尽に暴れまわる俺にゴブリンどもは手も足も出ないようだ。

切って潰して狩って裂いて割って千切っておろして・・・、ひたすら暴れ続ける。

そのまま己の狂気の赴くままに、敵を狩り続けた。

ほんの十分ほどで残りが20ほどになり、向こうももう残り3分の1ほどまでには片付いているようだった。

しかし、俺にはもう敵を蹂躪することに喜びを感じる余裕はない。

無論、敵に負けそうとかそんなことではない。

ただ困惑していたのだ。

向こうも同じらしく、誰もまともな手傷を負っていないのに表情に余裕がない。

とりあえず、向こうの意見を聞くために氷を力づくで壊して合流する。

「サムスさん。

「岩餓鬼」ってのはこんなに闘争本能が強いものなんですか？」

「んなわけあるか！

奴らは基本、生きること一番に優先するもんだ！

こんな腕の2、3本失っても襲ってくるほど凶暴な「岩餓鬼」なんて知らねえよ！」

つまりはそういうことだ。

こいつら、両腕をもちで攻撃手段を失っても、両足を切り落として動けなくしてもお構いなしに襲ってくる。

ここまで必死に來られるとどうしても多少威圧されてしまうようで、こっちの面々にも余裕は感じられない。

「レオンさん！」

後ろから来てますよ、気をつけて！」

「ああ、まったく！」

「こんなやりづらい戦い初めてだぞ、人間の軍人だってこんな殺意丸出しで向かって来ねえよ！」

「兄さん、喋ってる暇が有ったらさっさとそっちの敵を掻っ捌いてください！」

「4体もまとまっけていては、私より兄さんの大剣の方が適してます！」

「レオン、ルル、大きいの使うから少し下がって！」

「落ち着け。」

「焦っても状況は変わらんし、まともな判断も出来なくなるぞ。」

「焦りが見え始めていたので、静かな声で窘める。そう言つと答えはしなかったが、皆多少は冷静さを取り戻してくれた。」

「先ほどまでよりも目に見えて無駄が少なくなる。」

「しかし確かにこりやおかしいぜ。」

「なにがあつたらこんなになつちまうんだ……」

「まあ考えても仕方がないことです。」

「今はここを切り抜けることを考えましょう。」

「ライガンさんとフルートさんが言う。」

確かにその通りだ、しかしこのままだと不確定要素が多いので、皆には悪いがもう終わらせてしまおう。

幸いというか大本の目的であった、実力を見せるというのは達成できてるし。

「全員私の半径3m以内から外に出ないください。

もう終わらせます。」

「終わらせるっていったい何だよ！ってお前そう言えばあの数をほぼ片づけたのか・・・

てつきり対処できなくなって逃げてきたのかと思っただぜ。」

「・・・なかなか失礼なことをおっしゃいますネ。

氷漬けにして差し上げましょう力。」

「すまなかった！

お願いだから許してくれ、言うことには従うから！

ほら、お前らも早くこっち来い！」

「わ、分かった！、今行く！」

「は、はい！」

サムスさんが慌てて仲間2人を呼ぶ。

思いがけず脅迫のような形になってしまったが、とりあえずは従ってくれるようなのでいいか。

皆は俺の言うことに今更逆らうはずもないので、全員が安全圏へと入ってくる。

そして再び、今回は氷の茨を自分たちの周囲に作り上げる。

入って来ようものなら、全身をズタズタにされて確実に息絶えるだ

ろう代物。

直接凍らせなかったのは、実験したかったからだ。そして、実験結果は直ぐに分かった。

「う……」

「こいつら、正気か……?」

「自殺願望でもあるのでしょうか……」

「2人は見るなよ。」

まともなもんじゃない。

クルス、大丈夫か?」

「だ、大丈夫です。」

この程度、レイさんの盗賊にした仕打ちに比べれば……」

「その考えかたは複雑だが、否定できんしいや。」

だがクルス、レオンの言つとおり無理するなよ。」

俺以外の全員の顔が恐怖に引きつる。

エルスとルルは見ないようにして黙ってはいたが、それでも目に入ったのだらう、顔を青くしている。

ゴブリンたちは茨に覆われた俺たちに尚も向かって来た。

そして、当然のごとく全身を切り刻まれる。

それでもすべてが、這ってでも、血で全身を浸しても、トゲに腹を破られて内臓がはみ出ても前進を止めなかった。

どんな子供でも分かるほどの、生物としての常軌を逸した行動だ。

そして数分もすると動くものはいなくなっていた。

その死体を俺は焼き尽くす、さすがにここまでのものを見せられ

ば不快だったのだ。

ここまでの結果になるとは俺も正直考えていなかった。

「エルス、ルル、もう目を開けてもいいぞ。

しかしこいつらには一体なにがあったんだろうな。」

ここまでいかれた事態が続くと、何がまともなのか分からないな。

いや、そもそもまともなことなどあるのか？

「サムスさん、あなたはこの依頼を過去に受けたことはありませんか？」

「あー、そういや1回だけあったな。

それがどうした？」

「その時はどれくらいの数がいたんですか？」

「・・・確か、60といったところだったな。

その時はこっちは20くらい居たからまったく問題無かった。

・・・これ思い出して見ると、今回の依頼とお前の非常識さが改めて分かるな。」

「！、その時は前の依頼からどれくらいの期間が経ってましたか？」

「1月半と行ったところだ。
なにか気になることがあるのか？」

「・・・ええ、非常に、ね。」

そう言った俺に、全員から聞きたそうな視線が送られるのを感じるが、思考に夢中になっている俺に、それに応える余裕は無かった。

1月半で60、それが平均かは分からないが、1つの尺度として問題無いだろう。

それに比べて今回は6か月にも関わらず、精々100ほど。

繁殖には問題がつきまとうため、個体数の上昇には限度があるだろうが、この数は不自然だ。

4倍もの期間があったのだからもっと数が居なくてはおかしい。

そして実際に来て見た、狂氣的としか言えない異常な行動の数々。

いくら殺されても一切引かず、結局全滅するまで戦い続けた。

まるで、もう後が無いかのよう。

(後が無い、か・・・)

もしかしてその通りだったのか？)

始め見た時から思っていたが、こいつらはどう見ても栄養が足りているからだ付きをしていない。

見渡すと、どの個体もガリガリに痩せているのだ。

思えば、この依頼は始めからおかしかった。

安全期間の3倍もの時間、ネストがそれほどの期間放っておいたと

いう事実。

いくら職員がサボっていたとはいえ、普通に考えてそんなことが起こるわけがない。

人命がかかる事態であるのだから尚更だ。

となると、そんなことになった考えられる理由は

いや、脱線していたな、考えを戻そう。

考えつく痩せてしまう理由は、当然エサが足りないことだろう。

だが、さっきも言った通り奴らはエサが無くなったらまず人を襲うはずなのにそんなこともない。

つまり、ここから出られない理由が存在するのか。

思いつくものはただ1つ。

それは、圧倒的な捕食者の存在

だが、これまでの道程でそんなものは見つからなかった。

ゴブリンを岩場に閉じ込めておくためには、この近くに居なければならぬはずなのだがな。

待てよ、そういえばあの違和感の正体は何だったんだ？

今もまだ感じているあの違和感。

いや、今ではむしろ強くなって焦燥感と化している。

それでも依然として何が原因かは分からない。

周りにあるのは、地面と岸壁と岩だけ。

・・・岩？

最初に上に昇った時でも見えていたな、あれらは。というかここらにはそもそもそれしか物が存在しない。

・・・まさか、そういうことなのか？

信じられない気持ちがあったが、上に昇った時の光景、初めにここに着いた時の光景、そして今の光景を思い浮かべ、比較する。そしてその結果は、

「そういうことかよ・・・」

ホントに何でもありだなこの世界は。」

結論がでたところで、全員に警告するために顔を上げる。しかし、ネスト陣の姿が見えなくなっていた。

「レオン、彼らは？」

「ん、お前が考えこんでしまっただけで話しかけても反応がないし、ここに居てもしょうがないって言って馬車の馬が心配だから様子を見てくるってさ。」

残党がいて襲われてるかもしれないし、尤もな意見だったからここは俺たちに任せて貰って先に行ってもらったよ。」

「んなつ!？」

それはいつの話だ!」

「きゃっつ、ついさっきですよ。」

ほら、あそこにまだ見えますし。」

そう言いエルスが指差したところには、3人が来た道に戻っている

背中が見えた。

そして行先には、来た時は無かった岩が存在している。

「その岩に近づくな！！！！」

今日初めての大声を出す。

その言葉に皆は驚いていたが、それを気にする余裕はない。
叫びながら駆け出す。

闘気を使った全開での速さだ。

3人はこちらの言葉に気づいたようで立ち止まるがもう遅い。

次の瞬間、彼らのいた、岩の近くの地面が砕けた

20話 捕食者（後書き）

お暇であれば評価をどうか！

あれっぽいですよ〜

自分でも一応わかってますが、擬態生物やってみたかったです
どうかお許しください

21話 親（前書き）

自分でも引っ張っていると自覚しています

次話に続いてしまいました

飽きずに付き合っていたら嬉しそうです・・・

21話 親

地面が砕けた

いや、実際には岩とその付近の地面が、魔獣が擬態した姿だったのだ。

経験豊富な彼らと言えど、依頼が終わった後での油断を突かれては対処のしようがなかったのだろう、突然の事態にネスト陣は呆然と立ち尽くす。

魔獣はその鋭い牙が並んだ巨大な顎で、彼らを食い千切ろうと襲いかかる。

（ここから「奴」までの距離およそ200m、襲われているのは彼ら）

そんな中、俺は自分がむかつくほど冷静に状況を分析する。

（今までの抑えた身体強化では襲撃前に到達は不可能）

何かしらの魔法を使ったわけでもないのに、周囲の光景が止まって見え、その中でゆっくりと思考を重ねる。

（わざわざ他人を助ける必要などない

自分の責任でもなく、ネストで追求されたとしても、言い逃れは容易）

これがネストに知られても、これは完全に想定外の事態であり、それで責任を負わされるのはネストマスターただ1人。

そのマスターもこのような理由があれば、こちらへ責任転嫁など出来ない。

死人を出したパーティーの一員として悪評もでるだろうが、魔獣との戦闘を生業とする以上、死者など日常茶飯事だ、そう遠くない内に治まるだろうし、そもそもあの街に長居する必要もないので

そうならば出て行けばいい。

ならばここで無理に本気を出して体力を消耗し、これから始まるであろう俺たちと「奴」との戦闘を不利にする必要もない。

よって下される結論は、見捨てるのが最善

彼らが他人であれば、の話だが

思わず使ってしまったっていた全力での強化を維持したまま、停止のことを考えず突っ込む。

1秒足らずで奴の眼前に躍り出た。

無理に停止したために、膝にとんでも無い負荷がかかる。

その痛みに耐え、「奴」の前に右手を翳す。

後ろで驚愕する気配を感じるが、例によって無視する。

そしてその鼻先に向けて「点」の障壁を展開、その突進を受け止める。

衝撃で周りに局地的な突風が発生し、信じがたいことに障壁が悲鳴

を上げたが、何とか耐え切った。

(こいつとんでもない力だ、障壁を破られそうになるとは！)

「引くぞ！

いつまでもボケツとしてんじゃねえ！」

俺の突然の豹変振りに彼らの硬直が解け、全力でレオンたちの方へと走り出す。

止められるとは思っていなかったのか、意志があるのか分からないがどこか唾然とした様子で止まる「奴」、その急所と思われる眼球を強化した素手の手刀で抉り出す。

「ブオオオオオオオ！！！」

痛みでのたうち絶叫を上げている内に、さっきよりも抑えた強化で自分も同じ方向へ走る。

あそこまで強化すると、体力が一気に持ってかれるので普段は使えない。

その途中で振り返り、初めて「奴」の全身を視界に収めた。

一言で言えば恐竜、灰色のティラノサウルスそのもの。

その身体が全て岩で出来ていることを除けば。

全長は7〜8m、顎に並んだ牙と2本の腕に生えたかぎづめは、こちらの刃物より余程鋭そうだ。

しかもさつき触った感じでは、こちらの岩石と比べて遥かに硬く、大理石のように滑らかな手触りだった。

あれでは刃を立てることは困難だろう、刃が接触しても滑ってしま

それだけでも厄介であるが、何より恐ろしいのはその巧妙な擬態能力
あの森にも一応、擬態して襲ってくる魔獣は居た。
だがこいつのはその遙かに上、一種の特殊能力と言ってもいいほ
どだ。

森での生活により、不意打ちや洞察力には絶対の自信を持っていた
俺が、擬態中に移動していたにも関わらず一切気づけなかった。

岩という不動のものになることで、動かないだろうという先入観が
無意識に生まれてしまっていたのかもしれないが、それだけではな
いだろう。

常に相手の裏をかき、密かに近づくことが出来るだけの知能も兼ね
備えているはずだ。

そんなことを一瞬で考えて、合流を果たす。

「サムスさん、あれは何か分かりますか。」

また元の年長に対する丁寧な口ぶりに戻ったことに相当混乱してい
たようだが、質問には答えてくれた。

「あれは「フレイクリサード岩砕竜」だ。」

その硬さと力だけで言えば、俺が知る限り最強の部類に入る化け
物だよ。

まあ実際は小回りが効かず、動きも鈍くて対処しやすいからこの
上位に指定されてる。

畜生、何でここにこんな奴が、繁殖地はもっと南のはずなのに・
」

「C？」

そんなにランクが低いとは思えないのですが？」

その俺の問いにはライガンさんが答えてくれた。

「サムスが言った通り、あいつは小回りが効かないうえに動きが鈍い。」

並の武器では刃がたたない硬さだが、専門の兵器と闘気を使えば討伐はそれほど難しくはねえ。

ランクが高くないのはそういうことだ。」

なるほど、それなら納得だな。

あの硬さに対抗する術があるのなら、動きが鈍くては格好の標的になる。

しかし、その言葉の意味に気づいたルルが言う。

「あ、あの・・・」

それってつまり、えと、今はあれを倒すことって・・・」

「そういうことですね。」

そういった道具が無い今の私たちには、あれに対処する術がありません。

ここは逃げるしかないでしょう。」

フルートさんが答えた。

だがその言葉には少し諦めが滲んでいる。

周りも逃げるといふ対処がほぼ不可能であることに気づいていたので、誰もがそれを咎めることもなく、表情を硬くする。

今あいつはこの岩壁に囲まれた広場の、唯一の出口に陣取っている。さっき俺が片目を潰しはしたが、あいつは擬態で潜ったまま、獲物を仕留めるのに最適なポジションをとることが出来る、目にはあまり頼っていないだろう。

むしろ怒り狂っている分、逆効果だったと言える。
そんな奴の傍を通り過ぎることなど、出来るとは思えない。
絶望が頭を掠めるのは当然と言える。

「じゃ、私があれを潰して来ます。

あ、何も言わないでくださいね、君らもな。

あいつを誰かが何とかしなくてはならないんですから。」

そんな空気を読めない俺は何でもない風に言う。

実際にあの程度であれば何でもないので。

反論をあらかじめ封じる発言としては居たのだが、面倒なことに喋ってくる奴がいた。

「おいおい、お前1人の問題じゃないんだから俺たちもやるって、数は多い方がいいだろ。

それにランクで言えば俺とネスト連中は奴と同じだし、エルスに至っては上のBだぞ。

十分手伝える。」

笑みを浮かべてレオンがそう言う、どうやらなんか吹っ切れたようだ。
だが俺はこいつがまったく現状を理解していないことを理解した。

「お前、本当にそう思ってるのか？」

イラつきを含んだ、冷淡な口調でそう言う。

レオンだけでなく全員が俺の放つ空気に一歩引いた。

「奴の身体は硬い上に、表面は極めて滑りやすくなってる。

お前とネスト陣の斬撃系統の攻撃はすべて受け流されるだろうさ。

武器の腹を使って殴ったとしても一切効きやしねえし、お前らの武装強化じゃ武器が折れるだけだ。

フルートの風じゃ火力不足。

エルスは確かにB相当の力を持つてはいるが、火力ではなく水の手数で敵を圧倒するスタイルだ、当然こつちも火力が足らん。

要するにお前らはあいつに対するまともな攻撃手段を持ってないんだよ。

それでどうやって対抗するんだ？」

「だ、だがお前への注意を逸らすことくらいは」

「それこそ文字通り足手まといだ。

お前らが近くに居ては俺は思い切り戦えん。

それに忘れたか？」

俺はここに来る時に、お前らで対処できないような敵が出てきたら、俺が相手するからすぐ下がれと言ったはずだ。

そしてお前らはそれに異を唱えなかった、大人しく従え。」

レオンは尚も粘ったが、非情とも取れる言葉で黙らせる。

そして誰も何も言わなくなった。

「別に心配せんでもあの程度の前座に後れを取ることにはあり得ん。

さっさと終わらせて本命と闘やらせてもらおうか。」

「どづいいうこと」

全速で再び奴のもとに走る、というか跳ぶ。

そしてその勢いを載せて、蹴りを繰り出す。

先ほどのゴブリンの時とは比べものにならない、小さな岩山程度ならば粉碎できるほどの威力の打撃。

凄まじい音が辺りに響き、奴、もとい岩トカゲがたたらを踏む。だがそれだけ。

直ぐに体勢を立て直し、体当たりをかましてくる。

それを今度は「線」の障壁がきしみながら受け止める。

再び衝撃が巻き起こり砂煙が舞う。

（普通ならこれに突っ込んだら真つ二つになるんだが、こいつ本当にとんでもない硬さだ。

下手したら並の金属より硬い、どんな身体してんだ・・・）

冷静にトカゲの戦力を分析していく。

俺の使う闘気を用いた障壁は3種類、「点」「線」「面」の3つ。初めて闘気を使えるようになった時、自分の身体を覆うように壁のようなものがつくれないかと思い、テキトウに障壁を展開してみた。その時は数秒ですべての体力を持ってかれ、数時間身動き1つ取れなかった。

安全をある程度確保した拠点の中でなかったらと思うと、今でも背筋が寒くなる。

そんなわけで改良する必要があるわけだが、どうしても上手いはず何度も諦めようかと思っただものだ。

闘気の障壁は魔法のように使用者の意志に従うようなことはなく、形を制御することが不可能だったのだ。

それでも諦めの悪い俺は何か方法がないかと足掻き続けた。

そうしてある日、形で無いものをイメージしたらどうかという考えに至った。

形でないもの、つまりは「次元」

そして完成したのがこの3種の障壁だ。

0次元の「点」、1次元の「線」、2次元の「面」。

壁という言葉が似つかわしくないものもあるが、便宜上障壁と呼んでいる。

厚みを一切持たないこれらの障壁は、体力の消費効率を格段に下げてくれた。

「点」も「面」へと次元が進むほど体力の消費は著しく多くなるが、一番消費する「面」でもそれまでのものと比べて、数十倍燃費が向上しているのだから凄まじい。

あとで気づいたことだが、それまでの自分、そしてこの世界の他の人間が使っているのは3次元の「立体」の障壁だったようで、さっきの話で考えれば燃費が悪いのも当然だ。

ちなみに身体強化の方は、この世界の人間は殴って攻撃する時は「腕」や「足」を強化している。

それにくらべて俺の場合は、「筋肉」「骨格」「神経」などと言った最小限のものを強化する。

そうすることで強化に割く体力の量も少なくなり、余分を更なる強化や障壁に割くことが出来る。

さらに強化する時に発生する光も皮膚の下のものを強化するので見えなく、不意打ちにも使える実にすばらしいものとなった。

話を戻すが、今は「線」の障壁でこいつの身体を受け止めた。

その気になればダンパーの突進も止められるだろう代物にきしみを上げさせる力にも驚いたが、それ以上に驚きなのは身体が無事だったことだ。

厚みを持たない純粹な「線」の壁は、日本刀のような切れ味も誇る

大変都合のいいものなのだ。

それにぶつかるところか突撃して無事ということは、やはり斬撃は効かないと考えるのが妥当だろう。

(・・・魔法を併用すれば切れないわけではないし、使わなくても甲殻の間の隙間を狙えば造作もなく潰せる。

だが、せっかくここまで硬い敵が出てきてくれたんだ、肉体の打撃でどこまでの威力が出せるか試してみたい。)

「点」の障壁を足場に跳び、奴の頭上に移動、そのまま踵落とし。地面に落ちる前に真横に足場をつくってそれを蹴り、噛みつきを躲す。

助走のない、純粋な自分の力だけの打撃ではほとんどひるまないようだ。

(あの加速でも足りなかったから当然か、となると必要な威力は・・・)

まずまた距離をとる。

動きが鈍いというのは本当のようで、音で俺の場所は分かっているようだ。が体の動きが付いてこれていない。

森の生き物と比べると、あくびが出るほどのろい。

今度は脚を完全に曲げて、力を溜める。

「これでどう、だ！」

声と共に足元で爆発が起きたかのような音を響かせ、一歩で踏みこみ蹴り飛ばす！

言葉通りに、トカゲの巨体が数m吹き飛ばす。

盛大な土煙が舞い、結果を分からなくさせる。

「あいつ、本当に人間か・・・？」

「まあ一応、たぶん、本当は・・・」

サムスの失礼極まりない発言に、酷く曖昧な返事を返すレオン。

てかレオンその「本当は」の後に何を続けようとした。

まさか「化け物」とかじゃないだろうな。

そんなことを考えてる内に、土煙が晴れる。

「ホント硬すぎんぞ、お前。」

まあ流石に無事とはいかなかったみたいだが。」

思わず苦笑しながら、賞賛の言葉を吐いてしまう。

トカゲは蹴られた箇所、わき腹をひび割らせてこちらを怒り一色の表情で睨んでいた。

（この威力なら耐えられないんだな。

これが効かなかつたら肉弾戦は無理という結論になったから良かった良かった。）

そして突進してくるトカゲ。

だが笑いが出るほど単調な動きだ。

（恐らく戦い慣れてないんだろうな。

なるほど、そのためにゴブリンを残してたのか。子供思いなことだ。）

もう終わらせてしまおう。

そう考え、一瞬で再びトカゲの頭上に跳ぶ。

そして逆さになり、足の裏に足場をつくり膝を曲げ踏ん張る。恐らく周りには俺が空中で逆さのまま静止しているように見えただろう。

「さよなら、なかなか楽しかったよ「岩碎竜」。

黄泉へのよき旅路を・・・」

脚の筋肉がミシミシと悲鳴を上げるほど力を籠め、一気に爆發させる。

そして縦に回転しながら、隕石のような速度で脳天を蹴りつぶす！

強化した筋力による加速、重力による加速、回転による遠心力。

すべてを組み合わせた一撃は、文字通り頭を割った。

「ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！？？」

最初とは比べものにならないほどの絶叫が響き渡る。

トカゲは頭から血を噴き出させながら、数歩歩き続けたところで倒れた。

「・・・悪いことしたとは思わんよ。」

先に襲ってきたのはそっちだからな。」

・
（こつ発言している時点で、自分の心情を吐露してるも同然だな・

後悔するんならやるんじゃないやねえよ、まったく。）

自分の割り切っていて、こういう生きるためだけに襲ってくる敵に、関してはどこかで非情になり切れない面に、吐き気と怒りとイラつきを感じる。

この言葉は皆に聞こえていたようだ。

もっとも、俺の心情に気付いた人間は見た限りでは居なかったようだが。

「いろいろと言ってやりたいことはあるんだが、混乱しててどう聞いたらいいのか分からんな。」

とりあえず、襲われたのはお前じゃないだろ。」

「すぐくどうでもいいことを聞いてきますね。」

「……自分でもそう思う。」

相当混乱してるようだな。」

まあいいや。

サムスさんの問いに素直に答えよう。

「仲間が襲われたんです。」

当然でしょうに。」

「はっ！？（ネスト陣）」

「何ですかその反応は。」

「いや、お前、そりゃな……。」

「あそこまでやっておいて、俺たちを仲間だと思ってるとは思わんだろっに……。」

「私もそう思います。」

せいぜい行動をともしにするだけの他人程度にしか思っていないと
考えてました。」

「私は一時的であつても行動を共にする相手であれば、どんな人間
であつても仲間と思うことにしています。」

そういう人相手ならば全力で力になりますよ。」

たとえその相手が、嫌いな人間だろうと、敵だろうと、家族の敵
だろうとね。」

(まあ嫌いな人間と行動をともしにすることはまずないと思うが。
たぶん会つたらさっさと殺してしまうだろうからな。)

思わず最後の言葉に想像以上の力が籠もってしまったが、レオン以
外は特に気にしていないようだ。

「あー、それと皆さん、まだ終わってませんよ。」

「は？、あいつはどう見ても死んでるぞ。」

「ではライガンさん、何故あいつはゴブリンを残してたと思います
？」

「いや、分かん。」

「単純に食べきる時間が無かつたんじゃ？」

「フルートさん、普通なら奴らは安全期間からして3か月もしたら
人間を襲うようになってたと思いますよ。」

従って奴がきたのは恐らく3か月以上前、そんなに時間があつたらとつくに食い尽くしてます。」

「じゃあ何が理由だつてんだ？」

サムスさんが言うつと、皆が考え込む。

まあ材料が少なすぎるわな、分からなくて無理ない。

「まあ答えを言ってしまうつと、あれは狩りの練習用に親が残しておいた獲物なんですよ。」

「……………親あ!?(全員)」

言葉の意味を理解した途端に、全員が驚愕の声を上げる。

「ちょ、ちょっと待て、お前さっきあいつが前座つて言ったよな!？」

まさかあれが子供なのか!？」

「そういうことだレオン。」

さらに言えば子供を殺されたんだ、怒り狂つてそろそろ出てくると思つぞ。」

「そ、そんな冷静でいる場合ですか!？」

「そうですねレイ様、貴方でもあれだけ手こずつてた相手の親だなんてどれだけ強いのか分かりませんよ!」

「は、早く逃げませんと、……きゃあ!？」

クルスとエルスが焦り、ルルが急かそうつとすると、地響きが鳴つた。

「来た！！」

喜色を一杯に湛えた声音で俺はそれに答えた。

(子供でもそこそこの強さ、硬さと力に関しては満足出来るほどのものだった。

となると親はどれほど強いというのか！)

「お前ら、絶対に手出しするなよ！

足手まといだし、下手に手を出されたら逆効果になりかねんからな！」

その強さへの期待から言葉が荒くなり、凄絶な笑みを浮かべる。

揺れの強さに周りは聞くどころではなかったかもしれないが。

そして出てきたのは気配が段違いで強く感じられる、見た目はさっきのと変わらない魔獣だった。

「さっきと変わんなくねえか？」

ライガンが馬鹿なことを言う。

「いいや、ちゃんと違うねあれは。

感じられる強さが段違いだ。

それに外見だってな。」

魔法で大量の水を生み出し、それをぶっかける。攻撃の為でなく、その姿を目に焼き付ける為に。そしてその本当の姿を晒す。

「綺麗・・・」

思わずと言った様子でエルスが呟いた。

他にも同じ気持ちらしく、恐れを忘れ憧憬の表情を顔に現す。

その身体は、穢れを一切見せない、こちらが汚いものに思えてくるほどの美しい銀色だった

21話 親（後書き）

面白いと思ってくだされば、どうか評価を

22話 偶然（前書き）

とうとう累計ランキングに載りました！

みなさんどうもありがとうございます！！！！！！

・・・恩を仇で返すようで大変恐縮なのですが、まだ終わりませんでした。

次で終わらせますので、どうか見捨てないでください！
お願いします！

22話 偶然

『銀』

こちらの世界では分からないが、向こうでは最も神聖な物質と言っても過言ではない。

西洋では靈的な存在、怪異の存在、そのような異質なものに対して、絶対的な優位を持つ物質だと信じられていた。

有名な話では、狼男を倒すには銀の弾丸を使わないと倒せないといった言い伝えがある。

それだけ人にとって、昔から神聖視されているものなのだ。

これまではその考えを大げさなものと考えてきたが、これを見せられてはそう笑っても居られない。

今日の前にいる存在の外見、その魔獣という言葉がまったく似つかわしくない神聖さは、見る者を残らず魅了してやまない。

それでいながらこの相手することが途方もなく恥知らずな行為に思えてくる、巨大な山を前にしたかのような威圧感。

生命として一種の完成形といってもいいのでは、そんな思いすら頭を過ぎる。

「なあ、いつそのこと懇願してみたら見逃してもらえるんじゃないか？」

レオンが冷静な表情でとち狂ったことをほざく。
しかも呆れたことに、それに誰も異論を唱えない。
その様子に戦いに向けて高揚していた心が急速に冷めてしまった。
思わず溜息が漏れる。

（完全に全員吞まれてやがる。

だが、それもしょうがないか。

あれだけの存在感があったら、思わず話を通じるんじゃないかと
夢想してもおかしくない。）

だが、それはあり得ないことだ。

もし仮に話を通じたとしても子供が俺たちを殺そうとしても止めな
かったのだし、人間の生き死にに対して無関心であることは明白。
さらにその子供を殺されたのだ、俺たちを殺さない理由の方が存在
しない。

「阿呆、話を通じたとしてもあれだけ怒り狂ってるのにこちらの話
を聞くわけがないだろ。」

それに綺麗ではあるが行動に知性が感じられない。

つまりあれは本質はそこの魔獣と変わらんだ、正気に戻れ。」

窘め、冷静に奴、トカゲさん（仮）を観察する。

名前をサムスさんに聞いとこうかと思っただが、この様子からして知
ってるはずが無い。

見た目だけで言えば確かに魔獣ではなく、むしろ聖獣といった言葉
の方が適しているだろう。

しかしその怒りに燃え、足踏みと唸りを繰り返している姿は獣その
もの。

威圧感だって巨大ではあるものの、それは「強い敵」に対するもの
であり、神のような「上位の存在」に対して抱くものではない。

見た目に惑わされなければ、恐れは抱いても、決して畏れを抱くほどの存在ではないのだ。

「ですが、とても人間に倒せる存在には思えません・・・」

「私たちでは無理では・・・」

弱弱しい声でルルが、エルスが言う。

（駄目だ、弱気にもほどがある。

これはこれからの課題だな、この程度のことは人生において何度もあるんだ。

これで心が折れているようでは話にならない。）

だが感心なことに絶望から立ち直った者が居た。

「あなたなら、倒せるんですね。」

クルスだ。

出てきた言葉は昨日のレオンと同じ、疑問ではなく確認。この中で唯一折れた心を立て直していた。

それは恐らく俺の強さに依存した無責任なもの。

だがそれでも、立ち直ったという事実はこれからの人生で同じ場面に直面した時、自分を保ち続けることの一助となる尊く貴重なものだ。

「ああ。」

だから俺は、その言葉が嬉しかった。

今ここでこの少年が成長したという事実には、微笑みが漏れた。そしてそれを見たクルスの顔に安心と自信、そして悔しさが浮かぶ。

「では、ここはお願いしますね。」

出来れば僕も一緒にいたいのですが、足手まといであることぐらいは自覚しています。

・・・こんな無責任なお願ひしか出来ない自分が情けないです。」

悔しさが表情だけでなく言葉にも滲み出ている。

そしてそれも、俺が彼らに望んでいたものの1つだった。

だからその頭をわしゃわしゃと撫でまわす。

「うわわ。」

「合格。」

「え？」

きよとんとするクルスだが、次の言葉に呆然とし、そして。

「自分の今出来ることを理解し、模索すること。」

今俺が君らに求めていることはそれだった。

そして君は自分が出る最善の手、何もしないということを選んだ。

これは簡単なようで難しい。

目の前で命がけで自分たちの為に戦っている（実際はどうあれ）のにそれをただ見るというのは、途方もないストレスと罪悪感を生む。

それに耐えきれた者だけがこの選択をすることが出来る。

罪悪感もなく、守られるのが当然と考える輩には生きる価値が無

い。

レオンのように、身の丈に合わない行動をしようとする奴は悪意が無い分、そこらのクズより余程性質が悪い。

そのことを君は意識的であれ無意識であれ理解してくれた。

誓って言う、君は臆病者なんかじゃない、もっと自分に自信を持って。」

「……………」

「君は臆病者ではない、この中で一番俺のことを理解してくれている大切な仲間だ。」

「……………はい、はい！、ありがとうございます……………」

感極まったという風に涙を流した。

その様子に再び微笑みを漏らす。

「ご褒美に帰ったらお前の言う望みを出来る範囲で叶えてやるよ。だからそんな泣くな。」

「ちゃ、茶化さないでください！」

最後にはそう言いながらも喜んでいた。

周りにはこんな状況で和やかに会話している俺たちを呆然と見ていた。状況の整理が追いつかないんだろう。

そして俺は頭を闘争心で再び満たす。

「じゃあ行ってくる、いつまでも待たせては悪いしな。」

お前らは絶対に手出しするなよ、リズムが崩されたら堪らん。」

「えつと？」

とにかく手出ししなければいいんですね、分かりました。」

恐らく理解されていないだろう言葉を残して走る。

だがこれくらいのこととは分かり難くてもよく考えれば予想できてもらわないと困る。

「キュアアアアアア！」

改めて今甲高い声で叫んだトカゲさんを見る。

なぜか今まで攻撃して来なかったが今は動き始めていた、親切なことだ。

とりあえず小手調べと行こう。

そう考え、例によって速度を載せた蹴りを放つ。

こちらの動きに反応して尻尾をハンマーのような勢いで横に振るが、それを勢いを出る限り保てるように最少限の動きで避ける。

そして爆発したかのような甲高い音が響く。

「がつ！！？」

だがダメージを受けたのはこっちだった。

蹴った右脚が痺れを訴える。

強化が甘かったら間違はなく骨がいかれた。

トカゲさんは何事もなかったかのように微動だにせず、今度は尻尾を縦に振ってくる。

それを俺は障壁で受け止め　　ようとして止め、受け身を考えずに全力で後ろに跳ぶ。

天が落ちたかのような轟音が響き、地面が割れた

生じた罅はこの直径500mほどの広場の端から端までにおよび、爆心地では巨大なクレーターが出来ていた。

（洒落にならんぞこれは！

それに身体も硬いだけならまだしも、なんであんなに柔軟性があるんだ！？）

あいつらの方を見るが、慌ててはいたが被害はなかった。だが、こちらとしてはなかなか不味い。

さっきの一撃で、見た目は同じでもトカゲさんの身体はさっきと同じ方法では決して壊せないことが分かったのだ。

奴の身体は信じられないほど硬い金属で、しかも粘りがある。普通硬いものというのは、その分脆いものだ。

ダイヤモンドやルビーは向こうでは最も硬いと言われているものだが、それでも金槌を使えば割れてしまう。

しかしこいつの身体はそれらより遥かに硬くありながら、柔軟性、つまり粘りも十分という物質としての法則を無視した、金属として理想的な存在だった。

（あれじゃあ打撃を与えても衝撃を吸収されるから砕くのは不可能。そして斬撃も効かないから、残るは魔法か。）

とりあえず、思いつく限りの下位魔法を使う。

爆発、放電、火炎、氷、土、風、水、・・・驚くほどまったく効かなかった。

特に放電が効かないのは驚いた。

普通金属は電気を通すものだが、トカゲさんの身体はどうも絶縁体の不純物を適度に含んでいるようで、電気を通さなかった。

だが収穫は2つあった。

1つは奴に身体は恐ろしく重いということ。

さっきの蹴りでも、暴風を起こしても、地面を持ち上げようとしても、微動だにしなかった。

さっきの一撃の破壊力は身体の硬さ、筋力、そして重さが揃っていたがゆえだったようだ。

もう1つは、甲殻の間を縫った攻撃すら封じられてしまうこと。

何度か試したのだが、切れ味に相当の自信があったナイフが、隙間にあつたゴムのような柔軟性のある皮に阻まれた。

まるで「刃虎」^{ザンタイガー}の毛皮を相手にしているような感じだった。

・・・つまり、俺の収穫とはどれだけ自分が不利なのかということ
を再認識させるものだけだった

「キュアー!!」

声とともに丸太のような尻尾を振ってくる。

どうやらこいつの主な攻撃手段はこれのようで、何度も同じことを繰り返していた。

だが鉄壁の防御力がある以上、それ以上に有効な手は存在しない。

向こうはダメージを受けず、こちらだけが避けることで疲弊する状況。

向こうも動いてはいるが、人間と魔獣の体力差など考えるのも馬鹿馬鹿しいというものだ。

その状況ではただひたすら振るだけでいつかは

「まずっ!??」

避けられない時が来る。

空中で実験の魔法を使った直後を突かれた。

縦振りの一撃が直撃コースで迫る。
やけに周りの状況が鮮明に分かり、遠くであいつらが叫んでいるのが判る。
体勢が悪く避けることは不可能。
無情に時が過ぎていく。
そしてその一撃は、

ズドムツツツッ！！

もう何個目か分からないクレーターを創り上げた。
膨大な土が舞い、トカゲさんの視界を覆う。

「キュアアアアアアア！！！」

勝利の雄叫びを上げる奴は次の敵へと顔を向け

先ほど殺したはずの人間が目の前にいるのを目撃した。

その間抜け面に溜飲が下がる思いをする。

「あつぶねえ、もう少し判断が遅かったら手遅れだったぞ。
死んだらどうしてくれんだこの野郎。」

言葉ではそう言うが、さっきのは縦振りだったので正直それほど脅威ではなかった。

さっき俺は「線」の障壁を尻尾と垂直に、角度の急な滑り台のようになるように数枚配置し、尻尾の動きを逸らして自分の真横に打ち付けさせたのだ。

その衝撃で吹っ飛び転がったが、頑丈な服と闘気で強化した肉体には大して意味は無かった。

そして再び、戦闘が始まる。

蹴り、殴り、尻尾、体当たりを巧みに避けながら、頭の片隅で戦う算段を練る。

(これで基本的な攻撃手段はほとんど潰された。

となると残ったので一番手っ取り早いのは、さっきの様子を見るに中位魔法も効かないだろうから上位魔法。)

だがその選択肢はすぐさま脳から消去する。

効かないからではない、あれらはほとんどが仲間のいるような場面で使用できる代物ではなかったからだ。

下手したら周囲1kmは焦土と化すような戦術破壊級の代物もある。さらに俺の一般的な敵に対する切り札でもあるので、おいそれと使いたくも無かった。

(となると、やはりこれか。)

こんなところで早くも使うことになるとは思わなかったが、試して見たくもあつたので丁度いい。

ナイフを両方抜き、闘気を纏わせ、「振動」魔法を起動する。

「全員耳をふさげ！」

広場全体に、黒板を引っ掻いた音を数百倍不快にしたかのようなノイズが響き渡った

全員顔をしかめていたが、遠いし叫びが聞こえていて耳を塞いだため特に問題ない。
だがトカゲさんは違う。

「キイイ、アアアアアア、キュウウウウ!!??」

明らかに悶え苦しんでいる。

この至近距離な上、こいつらは地面に潜って擬態したまま動くために恐らく聴覚が相当発達しているはずだ、地獄の苦しみだろう。だが、当然ただ雑音をまき散らすだけのものではない。

「せあッ!!」

気合を入れ、苦しみ動きが鈍っていたトカゲさんに切りかかる。

こちらの様子を見ていたが、特に動きを見せない。
自分の装甲に絶対の自信を持っているのだろう。

だがその余裕は、直ぐに味わったことの無い苦しみ、痛みへと変わる。

トカゲさんに触れた俺のナイフは、バターのように易々とその身体を切り裂いた。

「キアアアアアアアア!!??」

その叫びには困惑が多く含まれていた。

なぜこうも容易く切られたのか理解できていないのだろう。

切られた箇所、右腕が地面に落ち、トカゲさんは数歩後ろに引いた。俺のナイフはよく見ないと分からないほど高速で震えている。

『魔闘技』、しんめいじん震鳴刃

普通ならば武器に上乗せできる魔法は、せいぜい全体を軽い火で覆う程度のものしかない。

これは武器そのものの性能が魔法という超常的な力に耐え切れないからだ。

それは「刃虎」の刃から造られた武器といえど例外ではない。

そこらの魔導士であれば問題ないだろうが、俺の魔法は出力が強すぎてこれでも耐え切れなかった。

だがそれも、闘気を通わせればある程度解消できる。

上位は無理だったが、中位の中までなら何とか耐えられることがこれまでの実験結果から分かっている。

・・・この実験のために貴重な「刃虎」の刃がいくつ犠牲になったか

そしてこの、魔法と闘気を組み合わせた近接戦闘用の技術を俺は『魔闘技』と呼んでいる。

今回は闘気で強化したナイフを、「振動」魔法で超高速振動させた。これにより物体であれば、理論上はどんなものでも切り裂くことが出来る。

さらに振動により凄まじいノイズが発生し、それだけで相手の集中力を削ぐことが、上手くいけば倒してしまうことが可能というほどだ。

ただ今回は相手が相手でどうなるか分からなかったので、かなりホツとした。

これで、この「魔闘技」の有用性が再確認できた。

ちなみに「振動」は中位の中なので、震鳴刃は「魔闘技」とし

ては最上位のものだ。

これほどの隙が出来て放っておくほど御人好しでも無いので、怒涛の勢いで切り付ける。

何度も何度もナイフを振り、その度に鮮血が舞う。

といつてもどれも浅いもので、しかも急所への攻撃は経験の差か、巧みに避けられる。

その最少限の動きでこちらの攻撃の結果を、的確にこちらの予想より小さくするその知能には、素直に感嘆した。

だが、状況は完全に俺に有利なものとなっていた。

ノイズで動きが鈍ったトカゲさんには、俺の攻撃を避けることしか出来ず攻撃する余裕などない。

そして、とうとう決定的な隙が出来た。

たたらを踏み、奴のわき腹がから空きになったのだ。

それを見逃さず、すぐさま奴の脇へと向かい、到達する。

「魔闘技」まで使わされるとは思っていなかったが、それももう終わり。

結果から言えば俺の圧勝に見えるかもしれないが、かなり手こずったし、実は危ない場面もそれなりにあったのだ。

十分満足のいく戦いだっただ。

感謝の思いを込めて、全力でこの戦いの幕を引こうとした。

後で思えば俺は油断していたのだろう

いや、余りに1人での戦いに慣れすぎて忘れていたのだ

この場にいるのは俺だけではないということ

人の感情の複雑さを

ドゴオオオオン！！

「なッ！？？」

トカゲさんの身体が衝撃を受け、ずれた。

そしてその動きにより、俺の渾身の一撃は奴の身体を浅く切り付けただけに留まった。

奴の身体を動かしたものは、
大量の水だった。

（エルスっつっ！！！！！）

初めて憎しみとも言えるほどの負の思いを込めて犯人の名を想う。

その量は明らかに彼女が全力を出して、そして時間をかけなければ生み出せるものではなかった。

恐らくさつきから準備していて、つい先ほど完成した魔法なのだろう。

本人は俺の危機を見ていていてもたったも居られず思わずやってし

まったのだろうか、何もかもが悪すぎる。

俺がトドメの一撃を放った瞬間というタイミング
ちよつと奴の身体を動かすだけの絶妙な威力
その身体を動かした向き

どれもが悪魔のイタズラのような最悪の偶然。
そして最悪の結果を生み出してしまった。

トカゲさんは、俺の渾身の一撃を放った直後の大きな隙を見逃さな
かった。

切り方が浅かったためにほとんど怯まなかった奴は、直ぐに攻撃の
モーションに入っていた。

だが俺は冷静だった。

正直な話、先ほどのような障壁を使った防御法は得意中の得意で、
針の穴を通すような偶然であるやり方で攻撃して来ない限り、確実
に防ぎきる自信があったからだ。

そして直ぐにもう一度トドメの一撃を見舞ってしまおうと考え、身
構える。

悪い偶然は重なるものだということを忘れて

「!!!!!!!!!!!!!!」

トカゲさんの動作を、そして繰り出された一撃を見た途端、頭が警鐘を全力で打ち鳴らす。

それは、俺が唯一恐れていた攻撃手段そのもの。今までの戦いで一度も使って来なかった戦法。

槍のように尖った尻尾の先端を使った刺突

俺の障壁は、3種で耐久力は変わらない。

それなのに消耗の少ない「点」の障壁だけにしないのは、「面」の障壁以外は防御不可能な攻撃方法があるからだ。

「面」の障壁は基本的にすべての攻撃を防げる万能の型だ。

だが、「線」の障壁は槍の刺突などの「点」の攻撃を、「点」の障壁は「点」の攻撃に加えて斬撃などの「線」の攻撃も防ぐことが出来ないのだ。

消耗を抑えるための、厚みの無いがゆえの欠点が発生していると言ってもいい。

「点」ならば30枚の障壁が張れ、どんな攻撃も防げる自信がある。「線」でも、14枚は張れるのでこの場は防ぐことが出来ただろう。だが、「面」では3枚しか張ることが出来ない。果たして、それでこの攻撃を防げるだろうか。

無駄な思考を止め、直ぐに3枚の「面」の障壁を張る。

さらに、風の魔法で体勢を立て直す間も惜しんで自分を吹き飛ばそうとする。

必勝を確信してしまった瞬間を突かれ、思考に余裕の無かった俺にできたのはそれらと小さな悪あがきだけ。

紙のように障壁が破られ、腹に獣の獠猛な槍が突き刺さった

22話 偶然（後書き）

面白いと思っていただけましたらどうか評価を！

23話 嵐(前書き)

総合10000突破・・・

ほんと、ここまで行けるとは思いませんでしたよ。

みなさんありがとうございます！

やっと戦闘終了！

今回、とんでもなく書き方に迷いました

どうも女性の心情は書きにくいです

主人公は書きやすいのにな・・・

23話 嵐

side エルセルス

頭が真つ白になった

何故私は手をだしたの？

自分でもまったく分らない

褒められているクルスを見て、羨ましいと思ってしまったのはある。頭でそんなことを気にすることは無いと分かっているのに、感情が制御できなかった。

時間が経てば経つほど負の思いが強くなり、焦りが増していった。自分でこんなに嫌な性格だったのかと驚いたほどだ。

だけどこんな迂闊な行動を起こすほどのものではなかったはず。

彼は高速で縦横無尽に戦うので、迂闊に魔法を使うと巻き込んでしまふ。

迂闊に手を出せば、今拮抗している状況が一気に悪い方向へ流れか

ねない。

あの魔獣と戦い始める前に言っていた、リズムが崩れるというのはそういうことなのだろう。

それを理解していたので、戦いに手をだすという選択肢は考えられなかった。

なので加勢したいという甘美な欲求を抑え、私は黙って見ていた。レイ様が危機に陥りそうになる度に心が張り裂けそうになるのを何とか抑えていると、急に状況が変わり始める。

恐らくは専用の兵器や魔法を使っても壊せないであろう魔獣の身体を易々と切り裂く、私たちにはどんなものか想像もつかない技術で一気に優勢に戦い始めた。

魔獣の苦しみ方からして、恐らくあれは音に弱かったのだろう。

地中に潜む生態を持っているからなのだろうか、理由は何にせよそれをこの短い時間で把握してしまい、弱点を的確に突く戦法を採った。

今までの心配がまったくの杞憂だったのだと私たちは理解した。

あの人はいつも必ず切り札を隠していて、もし苦戦しているように見えるとしたらそれは余程のことでない限り全て偽りのものなのだろう。

あまりの非常識ぶりにもう呆れることしか出来なかった。

それから今までの不安から解放され、安心して戦いの行く末を見ていられた。

・・・嫉妬は相変わらずあったのだけれど

そのはずなのに

気が付いたら、私は魔法を使っていた

その時のことはまったく覚えていない、どんな魔法を使ったのかすらも。

結果が結果だったために、自己防衛で心を閉ざしてしまったのだからうか。

分かっているのは、私の行動で取り返しのつかない事態を招いてしまったということだけ。

私の最大威力と思われる水の魔法が激突した。

だけど妙な軌道を描いて、見事なほどあの人の攻撃を邪魔する結果になってしまった。

しかも魔獣はダメージを受けた様子がない。

自分の行動の結果に私が気づいた時にはもう手遅れだった。

魔獣の攻撃を受けてレイ様がとんでもない速さで吹き飛んだ。

それを引き起こしたのは私

「あ……」

(ワタシハイットイナニヲシタ?)

自分で自分の行動が信じられなかった。
気が付くと周りの人が信じられないものを見るような目でこちらを
見ていた。
それにより一気に現実に引き戻される。

「ね、姉様……？」

えと、一体何を……？」

状況を受け止め切れてないクルスの引きつった笑みが、心に突き刺
さる。

ルルがこちらを見ながら口を両手で押さえているのが印象的だった。

「あ、あああ……」

言葉が発せない。

頭がまともに働かず、取りとめのないどうでもいいことしか考えら
れない。

醜くも、いくつもの言い訳の言葉が頭を過ぎる。

そしてそれすらも言葉にならない。

いや、そもそも私にはなにも言う資格なんてない。

記憶が曖昧だということなど理由にはならない。

私があの人を死んでもおかしくない事態に陥らせてしまったという
絶対的な事実が周りの皆のすべてなのだから。

こんな事態を引き起こした張本人がなにを言えるというのか。

もうダメ

あの子の信用を裏切ってしまった

手を出さない方がいいと言っていた理由を十分に理解していたは
ずなのにこんな真似をしてしまった

こんな私に生きてる資格なんてない

負の思考の連鎖にどんどん引き込まれていく。
そしてもう引き返せないところまで堕ちて

「エルス、呆けてる暇があるならどうしたらいいかを考える。」

いく寸前で、冷静な声に引き戻された。

レオンが真剣な表情で私の両肩を掴み、こちらを見ていた。

何故こんな表情が出来るんだろう

「お前らも、過ぎたことを気にしても責めてもしょうがないだろ。

あんたらもそんな表情をすんな、あいつがやられたから次は俺ら
なんだぞ。」

「・・・お前、主人がやられたつてのに薄情すぎやしないか？」

「兄さん、こんな時に自分の心配ですか・・・!？」

サムスさんとルルが怒りを滲ませて責めるように言う。

ルルは好きな人があんなことになってる時に言われたからか、言葉
には憎しみすら混じっている。

私が言えたことではないけど同感だった。

あの人の心配より、自分の心配を優先する発言をしたレオンに反発
心が湧いた。

溺愛しているルルにこんなことを言われたら、レオンなら絶望するはず。
なのに。

「なに、朝にあいつに「期待に応える」って言っちゃったからな。
こんなことぐらいで望みを捨てるわけにはいかんさ。」

まったく気にせず飄々と受け流して見せた。
なんのことを言ってるのか分からないけど、なにやら今までは無かった信念のようなものが感じられた。
ルルの驚きは私よりも顕著で、怒りが霧散していた。

「クルス、ここからあいつを射って注意を引いてくれないか？」

「そうですね、先ほどの戦いで消耗してはいますがあのくらいであれば問題ないです。」

「さっさとレイさんを救出しましょうか。」

いつの間にかクルスも立ち直っていた。
さっきまでは私に劣らず混乱していたのに。

「え、クルス？」

「それってどういうこと？」

「落ち着いてくださいルル、怒らずに冷静に考えれば直ぐ分かることですよ。」

レオンさんはこちらに注意を引いているうちに誰かが回り込んで、レイさんを助けようって言ってるんです。

そうですね、僕が矢を射って注意を引き、レオンさんが攪乱するので、姉様とルルは回り込んでくれませんか。

サムスさん方は自由になさってください。」

「え、あ、わ、分かった。

・・・ておい！、それじゃあお前らが危険過ぎだろ！？」

一瞬勢いに吞まれそうになったが、直ぐにその考えの問題点に気づいてサムスさんが反論した。

「いえいえ、これは僕たちが引き起こした事態ですので僕らで何とかしないとイケませんよ。

あなたたちが危険な仕事を担う必要はありません。」

「っ！？」

クルスそれは違うわ！

あなたたちは何も悪くなんか無い！

私が、勝手なことをしたから・・・！」

私が勝手な事さえしなければこうはならなかった。

もうこの短い間で何度この言葉を念じたことか。

いくら自分の行動を悔いても罪が消えはしないのに。

あの人を傷つけてしまったという事実が辛くて仕方がない・・・

本当になんで、何を考えて、私はあんな真似をしてしまったのだろう。

間違いを犯した記憶すらないことが、さらに私の罪悪感を加速させる。

それでも他の人、ましてや弟に罪をなすりつけるなんて最低な真似をするほど落ちぶれてはいない。

だからその言葉だけは受け入れられなかった。

「姉様、いまさら一人で抱え込まなくてもいいですよ・・・」

「ホントにな。」

この半年でどれだけ俺たちがお前に苦勞をかけたと思っていやがる。

「こんな時に支えになれんでどうする？」

「・・・ふう、そうですね。」

それにレイさんがあれで死ぬとは思えませんし、ここは協力して早くお助けしませんと。

エルスさん、気にしないでとは言いません。

あの人を傷つけたことは腹立たしいですし、間違ったことをしたのは事実ですから。

でも、それを挽回できないわけではありません。

辛いのでしたら誰よりも頑張つてさっさと挽回してくださいな。」

クルスが呆れたように、レオンが怒ったように言う。

この中で一番私を許せないであろうルルまでそう言ってくれる。

クルスとレオンも、今までとは違ってどこか頼りになるような存在になっていた。

確かに国を出てから半年の間、私が皆を指揮って行動していたから苦勞をしなかったわけではなかったのだが。

クルスは私に守られることが多かったのに、いつの間にか私を守れるほどにまでなっている。

皆、この短期間で成長してるんだ

私はやっと負の思考の連鎖から抜け出した。

そうだ、気にしてる暇なんて無かったんだ。

後悔してるなら、どんなことをしてでも自分の何を犠牲にしてもそれをこれから償えばいい。
皆が成長してる、私だけ取り残されたくはない。

そして、後悔するのを止めて前を見る。

彼らに私はたった一言を、あらゆる感謝の思いを込めて言う。
後ろを見て後悔するのではなく、前を見ることを教えてくれたこと
に対して。

「ありがとう、みんな・・・！」

まずはあの人を助ける。

償いになるはずもないけど、何もしないよりはずっとまし。
不思議なことに決心をすると心が急に楽になった。
罪の意識が消えたわけではなく、未だ罪悪感に押しつぶされそうな
のに。

私はこの罪を背負って、これからを生きる決心をした。

「キュアアアアアア！！！！」

魔獣がこちらを睨んできた。

今までは勝利の余韻に浸ってたのか、こちらには関心を払っていなかった。

（お前がレイ様に勝ったわけじゃない！）

その様子に自分のせいだというのに理不尽な怒りを感じたが、直ぐに気を取り直す。

余計なことを考えていては魔法は使えない。

「サムスさん、ライガンさん、フルートさん。」

こんなお願い恥知らずとは思いますが、どうかお力をお貸しいただけないでしょうか。」

頭を下げて、頼み込む。

私が引き起こした事態なのに、助力を頼むなんて恥知らずにもほどがある。

「いやいや、さっきのお前たちの絆を見ておいて助けられないなんて選択肢があるわけがないだろ。」

「まっただ。」

なかなかいいものだったぜ？、たった1人をみんなが励ます光景ってのは。

しかも全員が美形だから金を払ってもいいようなもんだった。」

「ええ、皆さん、エルスさんだけの責任なのに誰も責めないものですから。」

「まったく、そんなことを話してる場合？」

サムスさん、貴方たちにはレイ様の救助を頼んでいいですか？」

そう言うが、私も初めはあれだけ怖がっていた存在だったのに、何故か今はそれほど怖くは無かった。

ネストの方々が頷いたのを確認する。

そして、全員が攪乱やレイ様の救助のために走りだす。

そして、彼らが急に吹き飛んだ

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？（私たち）」

あまりの事態に皆言葉が出ない。

魔獣の仕業かと思ったが、彼（彼女？）も目を真ん丸にして驚いていた。

・・・意外と可愛らしい

では一体だれが？

そう思った瞬間。

（ツツツ！！??）

辺りに莫大な魔力が吹き荒れた。

たとえ魔導士100人が束になっても出せないような、大瀑布にも等しい量。

その魔力の噴き出す場所に目を向けると、

「テンペスト」

魔神が佇んでいた

side out

岩壁に叩き付けられる。

勢いも相まってとんでもない衝撃が襲う。

肺の中の空気が全て吐き出された。

（あー、折れた。）

他人事のようにそう思う。

何が？というとき具体的には左腕と肋骨、そして……ナイフが。

(悪あがきは成功。

だけどまさか、これまで折られるとは・・・)

俺が行った悪あがきとは尻尾が来た時に、2本のナイフを交差させて尻尾を受け止めた、というもの。

(ここまでやってなお貰かれるとはな。

いや、内臓にはほとんど影響がないからまだましか?)

障壁を3枚破り、後ろへ風で跳び速度衝撃を弱めたのにそれでもナイフを2本折られた。

武器は失い、障壁の無理な使用により体力の消耗も激しい。

だが、そのおかげで腹に突き刺さったのに内臓が潰れるのを防ぐことが出来た。

(まったく、エルスの奴)

この状況を引き起こした張本人のことを想う。
まったくあいつは本当に、

(面白いことをしてくれるものだ・・・!)

こんな目に遭ってるにも関わらず、俺には怒りがまったく湧かない。
むしろこの予想外の状況を作り上げてくれたことに関して、感謝すらしていた。

思わず笑みが浮かぶ。

(やっぱり人とはこうでないか。

こういうことをしてくれるからこそ連れてきたかいたったというものだ!)

俺が仲間をつくった理由。

それは情報を得るためという面も当然ある。だが、それ以上に自分には想像もつかないことを仕出かしてくれないかという期待のほうが大部分を占めていた。

この半年、森での始めに4か月は危険があつたがその分俺にとってかなり楽しかった。

生きているという実感が得られたがために。

だが残りの2か月になると、もう死角からの不意打ちすら予想の範囲となつてつまらないことの上なかつた。

生きる上で、快樂を得られないというのは生物にとって耐えがたいことだ。

この2か月、俺は半分死んでいるようなものだったのだ。

それでも満足できる強さまで到達できるまで、我慢していたのだが。

そんなことを考えていた俺にとって、他人という不確定要素は求めて止まなかつた厄介事の火種だ、元貴族で世間知らずというのだから尚更だ。

だから従者として彼らと行動しようと考えた。

そして今、エルスは予想通り予想外を引き起こしてくれた、嬉しくて当然だ。

・・・まず間違はなく他人には理解されない考え方だと自覚している

まあ、さっき彼女に対して戦いを邪魔されたことに怒りを抱いていたので、結果としてはプラスマイナスゼロか。

ちなみに怪我をしたことについては、骨折などは俺にとってありふれ過ぎていて怪我の内には入らないので問題にならない。

だが

（なぜエルスなのか、それは疑問だな。）

衝突した土煙が晴れてきて彼らの様子が見えた。

エルスが顔色が悪いどころか顔色が無くなっているのが分かる。誰もこちらをみてはいなかった。

エルスは、あの中で一番頭がいい。

普段の行動を見ているとクルスの方が頭が良いように思えるかもしれないが、クルスが察しが良くなるのは基本俺に関してだけだ。

それに比べてエルスは、人の心情を読み測ることは不得手だが、どんなことにも並以上の考察を展開することが出来る。

ルルは反対に人の心情を読み取ることに長けているので、なかなかバランスがいい4人なのだ。

ちなみに一番頭が悪いのは、・・・言うまでもないか。

だから、俺が戦いに手出しして欲しくない理由をエルスは間違い無く理解していたはずなのだ。

レオンが暴走するよりも100倍くらいはあり得ない確率だった、まあもとが無いに等しい確率ではあったが。

（しかし事実、エルスは魔法を使ってしまったわけだ。

ふむ、人の心が複雑で読み取るとは難しいと分かっている以上、あり得ないとは言えないんだが・・・）

しかし、どうしても違和感があるというか不可解だ。

頭がいいはずの人間がこんな真似をしたことだけではない、それを行ったのが俺に対して好意を抱いている人だというのが。確かに手柄を立てることが出来れば褒められるとか考えたりするだろうが、失敗した時のことを考えて、嫌われるかもしれないという考えに至ればふつうは行動したりしない。人間とは無理に危険を冒そうとしないものだからだ。

(考えられるのは3つだな。)

1つ、すべては俺の考えすぎで、本当にエルスだけの責任だという可能性。

2つ、エルスが誰かに唆された可能性。

そして最後は・・・

(これであつてほしくだけはないな。

・・・欲しくは無いのだが、状況からしてはこれが一番あり得る話ではある。)

そして、常識で考えればこれが一番あり得ない話でもある。

(いくらありえない可能性であつても念のため注意だけはしておかなくてはならないか。)

過去の教訓から、俺は常識というものがどれだけ脆いものかを知っている。

いくら注意してもし過ぎということはないだろう。

これからどうするかを考える。

このことは後でエルスに話を聞いたうえでもう一度考えることにする。

いままでは無視していたが、相当の痛みが身体を蝕んでいる。肋骨も折れているので、さっきまでのような機敏な動きは出来ない。そして、考え事をするには問題無いが、頭の働きもそれなりに鈍っている。

これじゃあ頭の演算領域をすべて使う必要がある上位魔法は使えない。

だが上位魔法以外ではあの装甲を破れない。

・・・手詰まりになってしまった

そんな時、向こうでの展開が目に入り度胆を抜かれた。

さっきまで圧倒されて怯えていたのに、立ち向かおうとしているのが見える。

（本当に人とは読めないものだな。

変わるの早すぎるだろ・・・）

呆れと、それ以上の感心が芽生える。

エルスですら、未だ罪悪感に囚われているが行動しようとしていた。前を向き、勝てそうもない存在に立ち向かうほどに、この僅かな時間で全員成長していた。

（すごいな今日は、予想外がたくさんだ。）

それがとても楽しく、嬉しい。

彼らはどうやら戦いを避けて、生き残ることを優先しているようだ。それならば、上手く立ち回ればどうとでもなるだろう。

俺の考えてる可能性が無ければ

なんとか行動を起こす前に俺が奴を何とかしなければ不味いことになるかもしれない。
だが、その手段が

(あ。)

思いつかなかったのだが、あることを思い出した。
まだ上級魔法とかの区別をつくる前に思いついた、ある魔法。
あれも一応上級と言えるだけの威力を持っていた。
あれならば今の頭でも使うことが出来る。

一瞬、始めに上級魔法を使わないようにしたことが頭を過ぎるが、
(馬鹿馬鹿しい、予想外の事態なのにないつまでも過去のことにとらわれてどうする。)

自分のそんな考えを鼻で笑って一蹴する。
そして準備を始める。
まずは風の魔法で顎を思い切り打ち上げて、ネスト陣を気絶させる。
念のためだ。

苦勞して立ち上がり、今の自分で出来る限りの魔力を練り上げる。
頭の働きが鈍ってるだけでは魔力が弱まるようなことはない、魔力に必要なのはあくまで精神力だからだ。
辺り一帯を不可視で無害の、それでいて明確な異常が包み込む。
そして瞑目し、イメージする。

無限の手数

大自然の力

抵抗すらできない脅威

洪水のごとくすべてを呑みこむ災害

折れていない右手を、上に挙げてかざす。

そして、その想像を具現化するキーを口にする。

「
テンベスト
魔嵐
」

名前というのは、イメージを明確にするのに非常に役立つ。

なのに俺は、普段使うような魔法には名前を付けてはいない。

それは、名前を付けるものを限定することで、限定したものの効果をより高めるためだ。

その限定したものが上位魔法なのだ。

・・・決して名前を考えるのが面倒だったからではない

そうすることで生まれる上位魔法たちの威力は、俺の想像を超える結果を生むことも珍しくない。

広場全体が暗くなる
太陽の光が遮られたためだ

空を覆う魔法の槍によって

何百、いや何千の、一発一発が岩を貫く威力を持つ下位魔法により
構成される殺戮の雲

トカゲさんが呆然と上を見ている。
気絶していない仲間も。

そんな彼らを何の感慨も無く見ながら、右手を無造作に振り下ろす。

途端に火の、氷の、風の、土の、電気 of 槍が降る
避けることなどできない

地上では暴風が荒れ狂い、あらゆる生あるものの動きを阻害している
動きが鈍ったトカゲさんに、さっきまではただ真っ直ぐ落ちるだけ
だった槍が方向を変え襲いかかる

「~~~~~!!!!!!」

トカゲさんが何かを叫んでいるように見える。

だがまるで空襲のような轟音に掻き消されてまったく聞こえない。これはこの魔法に利点の1つだ。

苦悶の声も断末魔の声も一切聞かずに済む。

いつもなら感じる後味の悪さが小さくて済むのだ。

予想できた展開が前に広がっている。

(やっぱりか・・・)

トカゲさんには、あまり効いていない。

(呆れる硬さだよまったく。)

予想できたことだ。

岩を割る俺の蹴りが効かなかったのだから。

(これはあまりやりたくなかったんだがな。

惨いから。)

出来ればやりたくなかったがしょうがない。

全ての槍を、奴の頭にぶつける。

「~~~~~!!!!!!」

苦悶の顔が、さらにキツクなった。

頭がまるで、ドリブル中のバスケットボールのように前後左右に跳ね回る。

かなりキツイものがある、動物愛護団体が見たら確実に非難の嵐だ。

(いやはやホントキツイし惨いな。
だけど、だから、オモシロい。)

思わず凄惨な笑みを浮かべてしまう。

これがしたくなかった理由。

どうも俺は、終わって冷静になったら後悔するくせに、こっぴいっ
とが大好きなのだ。

普段は嫌に思う、苦悶の叫びも聞きたくなくなってしまっ

かなり歪んだ人間だよな。

そんなことを考えてると、トカゲさんがこちらに一步一步近づいて
くる。

最後に一矢を報いろうとしているのか、健気なことだ。

だが、数の暴力には敵わない

一本がとうとう、金属疲労して脆くなった装甲を割る。

血が噴き出す。

他の場所でまた一本刺さる。

血が噴き出す。

それを繰り返す。

どんどんその数が、地面を濡らす血の量が増えていく。
刺さっていない頭の面積の方が少なくなる。

それでもまだ歩く。

そしてとうとう俺の目前にたどり着いた。

槍の雨に晒されながらも、ここまで耐え切ったのだ。
嵐が止む。

もう、必要が無いから

トカゲさんが、頭の大部分を失いながらも尻尾を振り上げる。
俺は動かない。
奴の数少ない残った箇所、口が、笑ったように見えた。

そして、地響きを上げながら倒れる

俺は戦いの余韻に、目を閉ざした。
既に冷静になってしまった俺に、凄惨な勝利を喜ぶ気持ちはなかった。

23話 嵐（後書き）

面白いと思っていただければどうか評価を！

24話 罪と罰(前書き)

レオンでまた遊んでしまいました(笑)
楽しんでいただけると幸いです

それと、今回出てくるのはあくまで私個人の考えです
それを踏まえた上でお読みください

次回更新は予定があるので、一週間ほど間が開くかもしれませんが、ご了承ください
出来るだけ頑張ってみますが、ご了承ください

24話 罪と罰

馬車に揺られて街道を行く

俺は馬車の中には乗らず屋根の上に陣取り、戦利品を弄っていた。なんとなく気になって馬車の中を覗く。

暗い。

まるで行きの際の再現のように気まずい空気に包まれていた。

その空気の中はエルス。

険しい表情で必死に何かを考え込んでいる。

我が従者たちはその様子を心配そうに、ネスト陣は困ったように眺めている。

ネスト陣はそもそも何故こんな空気になってるのかすら分かってないのだから当然の反応か。

何もしてないのにあんな針のむしろのような状況に立たされてるんだから、同情を禁じ得ない。

まあ、その原因は俺なわけだが。

この様子に、あの時のことが思い出される。

目の前に血の池が広がっている。

とても一体の魔獣から出たとは思えない量だ。

濃密な鉄の匂いに心がざわついてしまったが、何とか抑える。

「あーうー・・・」

魔力の使いすぎで頭が働かないということもあったのだが。

さっきの魔法ははつきり言ってしまえば、ただ下位魔法をひたすら繋ぎあわせただけのもの。

しかし、無数に組み上げた魔法を嵐という1つのイメージに纏め上げること、魔法1つ1つの威力の底上げと発動を簡略化することが出来るのでまったく意味が無いわけではない。

それに加えて、使われる魔法はあくまでも下位なので、頭が痛みや眠気などで鈍っている時でも使用することが出来る。

今回は相手が悪く効果はいまいちだったが、これは本来なら対軍勢用のモノで畑違いだったのだから仕方がない。

舞台が戦場であれば、この一発で趨勢が決することもあり得るだろう。

数という最も原始的で効果的な力を象徴した魔法として開発してみたのだから、そうでないで困る。

これだけ聞けばいいことだらけだが、当然デメリットもある。

魔力の消耗が夥しいのだ。

下位魔法をいくつも並列使用して上位魔法分の威力を持たせるといふのは、例えるなら乾電池で家の消費電力を賄おうとするようなもので、効率が悪すぎる。

今の俺ではこれ一発でスツカラカンになってしまうほどだ。

そんなものが実戦で使える訳がないので頭のゴミ捨て場に放り込んでいたのだけれど、今回はこれを考えておいて助かったわけだから、世の中分らんものだ。

頭を強引に働かせて、何とか腰の袋の中から例の丸薬を取り出し口に入れる。

途端に口いっぱい広がる青臭さ、苦み、渋み。

人の味覚で感じられるあらゆる不快さが、これ1つで味わえる。

「うぐおおお・・・」

思わず悶絶してしまったが、これで普通に動けるようになった。

これには気付いただけではなく人の身体の治癒力を高める効果もあり、もともと生命力の高い俺が使えば回復魔法無しでも、この程度の骨折なら2日ほどで治るはずだ。

折れてしまったナイフを添え木代わりにして左腕を固定、肋骨は身体の筋肉を器用に動かして強引に元の位置に戻した。

あまりにも骨がポキポキ逝くものだから、いつの間にかこんなことが出来るようになってしまった。

そして、さっきの魔法でそこら中に飛散したトカゲさんの装甲を回収する。

出来れば残った胴体から採取したいのだが、今の俺たちには回収しても運ぶ術がない。

馬車ではあそこまででかいものは必要部位だけでも入りきらんなからな。

装甲の欠片と切り裂いた両腕を、ある発見に驚きながらも淡々と集め袋に入れて担ぎ、満足しながら彼らの方を向く。

まだ呆けていた

（ちょっと常識を壊し過ぎたかね？

今更だが。)

少しの罪悪感を覚えたが、このままでは話が進まないのでテキストウな石を拾い、投げる。

コツッ

「あいたツ!?!」

コツッ

「きゃうっ!?!」

コツッ

「ひゃあっ!?!」

ドゴオツツッ

「げふおおっ!?!?!」

最後のは当然我らがレオン君。

数m吹き飛んでピクピクと痙攣しています。

クルス、エルス、ルルの3人は可愛らしい反応をしてくれました。そして、エルスがこちらに気づく。

「れ、レイ様・・・」

言い訳はしません、私は取り返しのつかないことをしました。

「ご自由にお裁きください・・・」

震えながらそう言ってきた。

「あの、レイさん。」

どうかエルスさんにお慈悲をお与えいただけませんかでしょうか。結果はああなあってしまいましたが、悪気はなかったはずですよ。私たちはいままですつとエルスさんのお世話になってきました。ですから、どうか……！」

「僕からもお願いします、レイさん。」

真剣な表情で、懇願するように弁護する2人。見様によつてはとても美しい光景だろう。なのだが。

（何で誰もレオンのことを心配しないんだよ……）

地面に倒れ伏し、頭から血を流して地面を濡らし始めたレオンの姿が、それを台無しにしていた。

そのせいで本来なら美しく見えたかもしれない2人の姿が、悪魔のようにしか感じられない。

自分のせいだということを棚に上げて、レオンのことを心の中で励ました。

励ますだけに留めて、気にしないことにしたが。

「ルル、君はさっきはエルスに対して苛立ちを感じていたようだったがもういいのか？」

ちよつと意地の悪い笑みを浮かべてそう言つてやる。ルルは狼狽し、顔を赤くしながら答えた。

「ふえ!？」

あの会話を聞いてたんですか!？」

あ、あの、それについてはあなたが傷ついたことに冷静さを失ってしまってますね!？」

本当はあんなことを言いたかったわけでもなくて、ついキツイ言い方をしてしまったというわけですし、えと、その……」

「落ち着いて、自分の考えを言ってみる。」

十分楽しんだので、これくらいにして真剣に聞いてみる。

「……さつきはあんな言い方をしてしまいました。私はエルスさんが好きなのであまり酷いことはして欲しくないんです。」

「うん、極めて分かりやすい言い方をしてくれて助かるよ。」

ホントに君は俺の考え方を読むのが上手いな。」

俺に対して意見を言いたいならば、余計なことをきっぱりと取り払って要点のみを伝えるのが一番だ。

それをこの子はしっかりと理解していた。

「ルル、ありがとう、……でも気を遣わなくてもいいわ。」

私はどんなことをされても文句の言えないようなことをしてしまっただから。

きちんと罰を受けて、罪を償いたい。」

「エルスさん……」

そのルルの発言にエルスは何かを悟ったかのように答えた。ルルは悲しそうに顔を俯けた。

クルスは何も言わず、何かを考えている。
何とかこの場を切り抜ける方法を考えてるのだろうか。

「何ふざけたことをほざいている。」

その言葉に呆れを覚えて、つい言葉が荒くなってしまった俺には関係なかったが。

3人ともビクツと身を震わせた。

「罪を償う、だと？」

そんなことが出来ると思っっているのか？」

「え・・・」

「罰を受ければ罪が消えるなんてのは、罪人の救済のために社会が生み出した幻想にすぎん。」

子を殺された親が、親を殺された子が、殺害者が捕まって牢に入られて、何年が経ちました、あの人の罪は消えました、ですからあなたたちはもう彼を恨まないでくださいね、あ、復讐なんてしたらあなたたちが罪人ですからね、なんて言われて納得できるとでも？」

「えと、あの、そんなことは・・・」

「君の言っていることはそういうことだ。」

罰を受けてただ救われたいと願っているだけ。

覚えておけ、罪がその人間から離れることは無い。

一生その人間を苦しめ、苛み、侵しつづける。

それが罪であり、罪という名の罰だ。」

人にとっては罪そのものが罰であり、罪を軽くするための罰など存在しない。

あるとすればそれは全て偽り、幻想、妄想、罪を恐れる人間の心が生み出した人間の弱さ。

それが俺の罪に対する考え方。

「あ……、その……、私は……」

エルスは顔を真っ青にして何も言えなくなってしまった。

(ふむ、少し言い過ぎたか。

だがこれは間違いを正すために言わなければならなかったからな。

これ以上穏便な言い方は俺には出来なかったし、しょうがない。)

悪いとは思ったが、仕方ないことだと思い割り切る。

こんな空気では話もままならないので、換気することにする。

「エルス、落ち着いてくれ。」

両肩に手を置き、真正面から見つめる。

ちよつと卑怯なやり方かもしれないが、これが一番手っ取り早い。

「あう……!？」

案の定、エルスは顔色の悪さが吹き飛び、身を震わせて顔を赤くした。

その様子に内心でほくそ笑む。

(……俺、ロクな死に方しないだろうな)

同時にそんなことを思ったりもしたが。

ちなみに周りでは、クルスが姉に激励するような目を向け、ルルが顔を赤くして羨ましそうにして、レオンが「花畑キレイだな・・・」とか「爺さん、迎えにきてくれたのか・・・？」とか呟いている。

・・・三途の川って世界変わっても共通なのか
とにかくさっきまでの深刻な空気をぶち壊すことに成功した。

「とりあえずいろいろと聞かせて欲しいんだがいいか？」

「え、はい。」

手を離すと名残惜しそうな顔をしたが素直に答えてくれたんで、さつさと聞きたいことを聞く。

「それじゃあ、さっきは何故魔法を使ったんだ？」

「君はそんなことをするほど馬鹿ではないと思ってたんだが。」

そう聞くとエルスは明らかに狼狽し、俯いた。

困ってるというよりは、言っているのか悩んでいるという様子だ。

「ふむ、俺が聞きたいのはあったことのあるまの姿だ。

言い難いこともあるだろうが正直に言っただけほしい。

別に言い訳じみたことを言っても怒ったりしないから頼む。」

そついうと顔を硬くし、何かを恐れながらも説明してくれた。
説明と呼べるか分からない内容だったが。

「・・・、何も、覚えていないんです・・・。」

「何？」

「本当に覚えていないんです。

レイ様が不可思議な技術で優勢に戦い初めたところまでは覚えて
います。」

ですが、その後の私が魔法を使った時のことは一切・・・

記憶がはっきりしてるのは、結果としてレイ様が吹き飛ばされた
ところからなんです・・・」

「・・・そうか。」

エルスの言葉にクルスとエルスは信じられないといった表情を見せ
る。

それも当然だ。

魔法を使う時は意識をはっきりさせ、イメージを明確にしなければ
ならない。

記憶が無くなるほどの意識が定まらないような状態で使えるような
ものではないのだ。

彼らにはエルスの言葉は単なる言い訳に聞こえたことだろう。

(そうになると、最後の可能性がますます濃厚になってくるな。)

ある可能性に思い至った時から、俺には大体予想できた内容であっ
たのだが。

次の質問をする。

「それじゃあ、まださっきの規模の魔法を使えるだけの魔力が残っ
てるか？」

「え、魔力ですか？」

「……大丈夫ですね。」

さっきの魔法は恐らく私の最大規模のものでしたが、今日はあまり魔法を使わなかったのでそれなりに残ってます。」

質問の意味が分からなかったのか一瞬キョトンとしたが、瞑目して自分の状態を確認した後そう答えた。

ゴブリンたちとの戦いでは小出しで間に合ったそう、あまり使わずに済んだそうだ。

「今、それを使ってみてくれないか？」

ただし、出来る限り小声で、さらに発動して水が集まるところでいったん止めてくれ。」

「……はい。」

不思議そうだったが負い目からか理由を聞いてくることはなかった。隣の人間に問題なく聞こえるくらいの声で、短い歌ほどの言葉を詠唱して、少し離れたところの上空に直径5mほどの水の立方体が完成する。

（……確かにあの時と同じくらいの量だ
しかしあのくらいの音量だと……）

顎に手を当てて考え込む。

「声をもう少し抑えることはできないのか？」

「えと、駄目だと思います。」

それなりに大きい声でないと魔法を使えるほどの集中力が得られないので。」

「ふむ、なるほど。」

君はその魔法を動かすことができるか？」

彼女は首を振る。

肯定ではなく否定の方向に。

「私の力では、これをただ単純に落とすぐらいしか出来ません。修行すれば自由に動かせるようになると思いますが・・・」

「そうか。」

じゃあ動かそうと頑張りながらそれを落としてみてくれ。」

「ふうふう・・・、ふっ！！」

目を閉じて動けと念じるエルス。

だが、水は僅かに軌道をずらしながら落ちただけだった。

滝のような音がし、落ちた場所に大穴が空く。

水が撥ねて体にかかる。

戦いで火照っていたので気持ちがいい。

「・・・それで限界なんだな？」

「は、はい・・・」

恐縮した様子で答える。

その様子に嘘は見られない。

表情を変えずに嘘を吐けるような性格ではないので、事実なのだろう。

(あれが限界か。)

「もう一度確認したいんだが、本当にあの時のことを覚えてはいないんだな？」

「お疑いになるのも尤もですが、私は本当に覚えていないのです．．．」

悲しそうに俯いてしまう。

(信じていないと思われてしまったか？)

「勘違いしないでくれ、傷つけてしまったのならすまない。少なくとも君が嘘を吐いていないことはよく分かった。」

「あ．．．」

頭を撫でて誤魔化す。

「．．．エルスさん、さっきから自分ばかりずるいです．．．」

「え！？、あの、これはあれよ！」

(どれだよ。)

ルルの拗ねたような発言に対するエルスの返答に、思わず苦笑して内心で突っ込みを入れる。

これでエルスから聞きたいことは終わった。

「うお？」

爺さんどこ行った？

俺に天国を見せてくれるんじゃないのかなかったのかよ。」

ここで都合よくレオンが復活した。

その発言に大量の言ってやりたい言葉が浮かんだが、必死に抑える。

「レオン、早くこっちに来い。

話がある。」

「・・・レイ、なんだかお前にすごく罵詈雑言を浴びせたくなくなったが、お前になんかされたっけ？」

「いや、お前は俺の戦いが終わった気の緩みで気絶していたんだ。

当然俺は何もしてないぞ。

なんかあったとしたらさっきの夢の中での話じゃないのか？」

これまた都合のいいことに、こいつも記憶が飛んでるようなので偽りの事実を刷り込むことにする。

「俺の爺さんが何をしたらお前に対して苛立ちを感じるようになるんだよ。」

「恐らくその爺さんは悪魔の仮の姿で、お前に対して俺についての悪い作り話を吹き込んだんだろう。

人にイタズラをするのが好きな、奴らの考えそうなことだ。

そうして俺たちが仲たがいするのを狙ってたんだろうが、生憎なことに俺たちの友情はそんなことでは揺るがないほど強固なものだ、運が悪かったな。」

「ゆ、友情だと・・・!？」

「何だ、友達ではないとでも言うのか？」

「いや、そんなことは・・・」

だがお前の俺との接し方を考えるとだな・・・」

「レオン。」

そこで優しい表情をつくって騙る。

「昨日言ったことを忘れたのか？」

嫌がらせは俺にとって愛情表現の一種なんだよ。

傷つけたのならすまない。

だがこれは、俺がお前を対等の存在と認めてる証なんだ。」

「お、お前は俺のことをそんな風に思ってくれてたのか。」

「ああ、これからもイロイロと迷惑をかけるだろうが期待してるぞ。」

「・・・ああ、ありがとう！」

そうして笑顔を浮かべて抱き合う俺たち。

一方は満面の無邪気な笑みを

一方は満面の邪悪な笑みを

それぞれ浮かべて、俺たちの絆は深まった

その様子を見て、俺に恐怖の視線を送る3人が居たが、折れた骨が痛んだが我慢した。

「それで聞きたいことってのは？」

「正確には、お前ひとりではなくエルスを除いた君ら全員に対してのものだ。」

「僕らにもですか。」

「なんででしょう？」

「君らはエルスが魔法を使う前に、どんなことを考えていた？」

「はあ？」

「どうしてそんなことを？」

「ええっ！？」

ちよつとルルの様子がおかしかったのに首をかしげたが、気にしないことにする。

「気になることがあるんでな。

包み隠さず教えてくれ。」

「まあいいんだが。

俺は確か・・・お前の動きを見てて自分でも真似できないかと考えてたな。

「・・・俺には無理だと分かっただけだったが。」

「僕は単純にあなたのことをすごいなあーと思ってただけでしたね。」

「あつう・・・」

レオンとクルスは直ぐに答えたのだが、ルルは顔を赤くして俯いてしまった。

何を考えてるのか大体想像が付き、悪いとは思ったが、詳しい内容が聞きたかったので聞き出すことにする。
近くに寄って顔を近づける。

「すまん、言いづらいことなんだろうが言ってくれないか。」

他の人間に聞こえないように小声で構わないから。」

そう言つて、耳を寄せる。

消え入りそうなほど恥ずかしそうにしていたが、そうすると話してくれた。

「あの、かつこいいな、と・・・」

（あーやっぱりね。

そりゃ言い難いわな。）

「ありがとう。」

無理に言わせてすまなかった。」

笑って頭を撫でてやると花のような笑みを浮かべた。

(さて、これで聞きたいことは無くなったな。)

手を離し、顎に手を当てて考え込む。

(こうなると、この可能性が一層現実味を帯びてきたな。
まったく、なんて面倒な。)

俺の中ではこの依頼とこの出来事から、ことの真相の予想と1つのシナリオが頭に浮かんでいた。
だが、それを決定付けるだけの知識が自分には無い。

(これは早急に何とかしなければな。

図書館でも探してみようか。

・・・いや、ネストキーパーを利用させてもらおうとしよう)

今回のことについての一定の考察とそれに対する対処、そしてネストキーパーから譲歩を引き出すまでの工程を頭に思い浮かべ、ほくそ笑む。

(・・・なんか段々自分が悪魔に思えて来るな)

気にしないことにして、目下の問題を考えることにする。

すなわち、エルスの処遇。

正直とても困っている。

ただの彼女の暴走であれば適切な処置がいくらでも浮かぶのだが、今回はそうはいかない。

彼女だけの責任ではない可能性がかなり濃厚なのだ。

さっきの話をきいて余計にそうなった。

と言っても、まだ確率としてはせいぜい6：4ほどで、エルスの線が完全に消えた訳でもない。

大抵の人間は、悩むくらいならば罰を与えなければいいと思うかもしれない。

だが、そういうわけにもいかない。

さつきはああ言ったものの、罪に対する罰というのは本質的には意味が無いが、心情面で言えばなかなか重要になってくるものなのだ。今回の場合、もし何もお咎めなしにすると、後々このことがしこりとなって必ず悪影響を及ぼす。

罰には一種の儀式のような意味もあり、罪人に自分は許されたという錯覚を与えることで、これからのことに前向きにさせる気分転換の意味もある。

それは必ずしもいいことであるわけではないのだが、今回はこれがかかり重要になる。

このままだとエルスはいっそう罪悪感に苛まれてしまうだろう。

そうさせないためにも形式としても罰を与えることで、吹っ切れて貰わないと困る。

だが。

(エルスだけの責任ではないなら軽い罰を。

完全にエルス個人の責任ならばそれなりに重い罰を。

それぞれ与える必要があるんだが2つの場合で対処の仕方が違い過ぎる、どうしたもんか・・・)

一方を立たせれば一方が立たず。

上手い対処の仕方が浮かばない。

そのまましばらく考え込み、

(・・・軽いが重い罰、これでいくか。)

どうするかをやっと思いついたので、いつの間にか瞑っていた目を開ける。

すると目の前にいたエルスがビクツと身を震わせた。他は息を呑んで見守っている。

「エルス。」

「は、はい！」

真剣な顔で言うと緊張した面持ちで答えた。

「君は、俺に言うべきことがあるんじゃないか？」

「え、あの・・・」

「間違っただことをした時に一番最初に言う言葉とか。」

「・・・あ！」

あの、謝って済む問題ではありませんが、このようなことを仕出かしてしまい真に申し訳ありませんでした！」

ことの大きさだけに、「謝る」という最も基本的なことを忘れてしまっていたエルスがそう言い頭を下げる。

（ん、まずは正解つと。）

といっても、これは次の為の布石に過ぎないが。

「それだけか？」

「え・・・？」

「まだ言つべきことは残つてゐるぞ。」

謝るといふのは、過去についての清算をしたい時に使うものだ。では、これからどうするかという言葉も述べるべきではないか？」

「う、その、これから、は……えと……」

「やっぱり分からんか。」

分かつてたらそれはそれで困つてたんで、狙い通りなのだが。

「い、いえ！」

そんなことは――」

「焦らんでもいいさ。」

これは宿題にするから。

仲間内でいくら相談しても構わない、だが、ネスト陣とはダメだ、普通の会話もな。

向こうの街に着いた時に改めて聞かせてくれ。

レオン、ネスト陣を馬車まで運ぶのを手伝ってくれ。」

「お、ああ。」

そう言つて俺はライガンさんとフルートさんを、レオンがサムスさんを運ぶことにする。

「あ、あの、レイ様。」

「なんだ？」

「……もし、答えられなかったらどうなるのでしょうか。」

待っていた予想通りの質問に冷淡に答える。

「何もしない。」

「え？」

「な、何も、ですか……？」

「そう、何も。」

「そ、それでは困りま」

「何も聞かず、話さず、言わず、ただ君をい……ないものとして扱……うにするだけだ。」

「……え？」

何を言われたのか分からないように、間抜けな声を漏らした。だが、言葉の意味を理解した途端、顔色が真っ白になる。口を開閉しているのだが、言葉になっていない。

「それが、俺が君に与える罰だ。

君らは先に馬車に戻ってくれ。

俺とレオンは、少ししてから向かう。」

そう言い、彼らに背を向けネスト陣を回収に向かう。

彼らは俺に何を言っても意志を変えないことを理解して、クルスとルルがエルスを支えながら歩いて行った。

この場に、俺とレオンだけが取り残される。

「おいレイ……!!」

怒りを抑えきれない様子でレオンが話しかけてきた。俺はそれを右手で抑える。

「レオン少し話をしてから行こうか。」

そう言うとレオンは氣勢を削がれてしまい怯んだ。

そして俺は今現在唯一の『友達』に、今回の件の仮説を含めて自分の考えを説明した

そして現在に至る。

今の空気は俺が意図して作り上げたものなんだが、流石に悪いことをした。

仲間にはそう思う。

わざと彼らとネスト陣の間で会話が進みにくいようにするためにそうしたんだが、こりゃ気が滅入る。

エルスはそんなことを気にする余裕もないようだが。

実を言うと俺はこの罰、エルスが答えられないとは微塵も考えていない。

今回なぜこのようなことになったのかを順番に考えていけば、直ぐに答えが出る。

難しいように感じるのは、失敗した時の罰が重すぎるから。

そのせいで、果たしてこんなに簡単な答えでいいのか、と疑心暗鬼になってしまふのだ。

答えは実に簡単で軽い、だが、失敗した時のことを考えた時、それが重いように感じてしまふ。

故に、軽いが重い罰。

（俺、性格悪いよな・・・）

自分の性格を再確認して、笑う。

もちろんエルスが失敗した時は、俺は宣言通りにするのだが。

一度発言してしまった以上、責任は取らねばならない。

だが、馬車の中にはあれがいる。

万が一にもエルスがそうなることはない。

（あいつは、勝手に行動して流れをいい方向に持ってくだらうな。

馬鹿は偉大なり、といったところか。）

苦笑を浮かべて、空を見上げる。

青空だった。

仰向けになり、改めて馬車の中を警戒する。

もし俺の仮説が正しくて、奴が動き出したらすぐに始末が出来るよ
うに

24話 罪と罰（後書き）

面白いと思ってくださればどうか評価を

25話 宣告（前書き）

長らくお待たせしました！

サークルでしばらくできないわ、物語最新作はやりたいわで忙しかったんです。

しかも今回は主人公視点が無いという異色の構成になっています。期待してくださいったださっていた方すみません！

25話 宣告

side ルルライン

重い空気の中、馬車の車輪が砂利を踏む音だけが響く。

その空気を中心の女性は難しい顔をして、必死というよりほかない様子で考え事をしている。

時々とても綺麗なその金色の髪を掻き毟ってしまうので、今は髪が乱れてしまっている。

その様子を私たちは心配しながら見ることはできない。

ネストの方々は困惑しながら何度か何故こんな様子になったのか聞いてきたのだが、私たちはレイさんに彼らと相談することを止められてしまっているために答えられない。

正確には止められているのはエルスさんであり、会話自体を止められたわけでもないのだが、彼女には彼らと話をしている余裕がなく、私たちもエルスさんの恥になりそうな話を率先して語る気にはなれなかった。自然とこんな空気になってしまった。

ただ、兄さんが予想外的に的確なフォローを入れてくれたので、険悪な空気にはだけはならず済んだのだが。

私は改めて彼女を見る。

普段は血色がよくて誰もが振り向かずにはいられない美貌を誇る彼女が、今は蒼白で何かを恐れるかのように小刻みに震えながら自分を堅く抱きしめていて、10は老いて見えてしまう。

それでも十分美しい姿なのだが、普段の姿を見慣れてしまっている私たちにはかなりの違和感がある。

「ね、姉様、そんなに気にしなくてもいいと思いますよ。
あの人がそんなことをするとは」

「クルス、そんな自分でも信じていないことを言ってもしょうがないですよ。」

声が揺れてしまってます・・・」

その様子に耐えかねたクルスが、思わず励ましの言葉を口にする。
この中でエルスさんと一番親しい人間なので、今の様子は受け入れられなかったのだろう。

だけど、その言葉には説得力が全くなかった。

確かにあの人は、どこかに思いやりを感じるような行動をとることが多いし、優しいと断言できると私、いや私たちは認識している。
しかし、甘くはない。

やると言ったらどんな恐ろしいことでも彼はやってのけるだろう、
それこそ何人人が死ぬ結果になるうとも躊躇わず。
そして、その業から目を背けず、すべてを背負って生きていく。
それはなんて強く、気高く、恐ろしく、そして

(なんて、悲しい生き方なんだろう・・・)

今回だってあの人はそうするはず。

もし答えが出なかったり間違ったりしたら、あの人の中では「エルセルス」という人間が消え、代わりに1人の人間を傷つけたという途方もない罪悪感が生まれる。

(誰もが何の得もしない、損しかしない結果。)

それでもやるのでしょうかね・・・)

そんなものは要らない

昨日の昼食や兄さんを弄つてた時みたいに、皆が笑顔の方がいい

クルスはバツが悪そうに黙り込んでしまっていた。

そして、他の人にも動きはない。

私はクルスの代わりにエルスさんと話すために、彼女の近くに移動して視線を合わせた。

迷子の子供のような顔で見つめられる。

「一緒に答えを考えましょうエルスさん。

私にも協力させてください。」

私が今の彼女の立場だと思つとぞつとする。

私たちの気持ちを理解した上で、容赦なく一番傷つく罰をあの人提示してきた。

それを酷いとは思わない。

従者の立場なのに主人を傷つけてしまう行動を取つたのだ、普通ならその場で切り捨てられてもおかしくなかった。

それなのに猶予をくださったのだから文句をつけられるはずがない。それで辛さがなくなるわけではないが。

(この人は強い。)

その辛さに押しつぶされながらも、答えを考えることで前に進むう
としていく。

私だったら、まったく身動きが出来なくなっていることだろう。

（そして私には、ここまでの強さは無い・・・）

拒絶を恐れていまだ皆に、兄さんにすらも知らせていない隠し事を
持っている私なんかより、比べものにならないほどこの人は強い。

それがとても悔しく、妬ましい

私は普段からずっとそう思っていた。

この人のようになりたい、強くなりたいと思っていた。

それはとても暗い感情だった。

あの時、その感情に引きずられてしまい、棘のある言い方をしてし
まう程に。

そう思っていたはずなのに、今は力になりたいと思っている。

それが何故かは分からない。

でも、この思いははずれ必ず私の糧となるという確信がある。

だから私はこの欲求に従う。

私が彼女に追いつくために。

「ありがとう、ルル・・・」

そう言って彼女は私を抱きしめてきた。

人とは思えないほど冷たい身体だったが、だんだん熱を取り戻して
いく。

さっきより幾分か落ち着いた状態になったエルスさんと私は会話を

重ねていった。

(勢いだけでは人生そうそう上手くいかないものなんですね・・・)

あれから数時間後の今、私たちは言葉の難しさを目の当たりにしてまた落ち込んでいた。

いくつかの答えのなりそうなものが出てきたものの、それと確信が持てるものは無かった。

「普通に考えれば一番あり得そうなのは、「もう二度と命令には逆らいません」という言葉でしょうか。」

そう独り言のように口にするエルスさん。

それは世間の価値観からすれば、このような場合に間違いなく聞く言葉。

一般人であれば、結果がどうであれそれで満点の正解だろう。でも。

「レイさんがそんな月並みな答えを期待しているわけがありませんよね・・・」

そのことを十分理解している私たちは同時に溜息をついた。

その言葉もあの人が相手であれば何の意味もなさないだろう。
一般の価値観からあそこまでかけ離れている人間を私は知らない。
普段はその面に助けられていたのだが、こういう時になると厄介極
まりない。

普通の答えがすべて間違いに感じられてしまうのだ。

(これでいっただいどうしろというのでしょうか・・・)

一瞬、本当に一瞬だけ、私はあの人に不信感を抱いてしまった
正解を出させる気はないんじゃないかと

本当は怒り狂っていて、ただ苦しませたいだけなんじゃないかと

(・・・バカですね、私は)

そんなことをしても、あの人に利点は何もありはしない。
もし怒ってたとしたら、ただ別れると言えればいいだけだ。

そもそもあれだけの目に会ったにも関わらず、彼は怒るところか気
にしてすらいそくに無かったのだ。

戦いの邪魔をされ、魔獣の渾身の一撃を受けたにも関わらず。

いつも暇つぶしにやっている、兄さん遊びをしていたのだから間違
いない。

「まあ、まだ時間はあります。

ゆっくり考えましょう。」

「・・・そうね。」

そう言って私はエルスさんを励ますと同時に愚かな思考を切り上げ、
相談を再開する。

クルスも仲間に入り、ここからは3人で話し合った。

依頼での異常事態の報告のために夜も走り続けるそうなので、残り
は10時間ほど、それまでに何としても答えを探し出す。
こちらの話し合いに参加せず、ネストの方々の相手ばかりしている
兄さんを訝しく思いながらも、私たちは話を続けた。

「もう我慢できるか————!!!!」

馬車の中に怒声が響く。

近くに居た私たちはその声に耳を痛くしながらも声の主を見る。
つまり、私の兄を。

「.....」

誰も何も言えない。

驚愕の表情で彼を見ている。

驚いているのは何もいきなり叫ばれたからではない、少しはあつた
だろうが。

残りの道程が残り2時間ほどになっても答えが出せず、すっかり葬
式のような雰囲気にもまれていた空気を、この馬鹿兄が一瞬で壊し
てしまったことに何よりも驚いたのだ。
そしてそのまま、まくしたててくる。

「お前らはさつきから何そんなことでぐちぐち悩んでんだよ！」

そんなに考えなくてもいいだろうが！」

その言葉にエルスさんが生氣を取り戻した。
そして兄さんに聞く。

「レオン、あなた答えが分かるの!？」

「分からん！」

「死になさい。」

その答えに怒りで自身の限界を超えたのだろうか、そう端的かつ明快な宣告を口にした途端、無詠唱なのに大馬鹿兄の顔が水に包まれる。

「・・・!!・・・?・・・!？」

必死に許しを請う姿を全員が冷徹な視線でたつぷりと眺めた後、水の戒めが解かれた。

「ゲホツ、ゴホツ・・・!!」

酷い目に会ったぜ・・・」

「酷いのはあなたの頭です。」

この大馬鹿兄。」

「る、ルル！」

頼む、もつとましな呼び方をしてくれ！」

この人は何を考えて生きているのだろうか。

さっきの空気であんなことを言い出してしまふ神経が信じられない。その上期待させるような発言をしておいて、まったく答えを考えていなかったのだからなおさら信じられない。

私は大馬鹿兄を氷のような視線で眺めながら、笑顔で言う。

「あの空気であんなことをしてぶち壊した上に、期待させといて何も考えていなかったあなたなんて大馬鹿兄で十分です。

いえ、これまで全く発言をしていなかったあなたに期待なんかした私たちが間違っていたようです。

申し訳ありません。」

「本当にルルの言うとおりですね。

すみません大馬鹿兄さん。」

「でもさっきので空気自体は軽くなったからまた考える余裕ができたわ。

それだけは大馬鹿兄さんに感謝してもいいと思うわよ、2人とも。」

こんな大馬鹿は放っておいて話を続けよう。

その方針で意見が一致した私たちは、この後で妙なことを聞いた。

「お、お前らまで・・・

しょうがないだろうが！

俺はあいつに街に近づくまでお前らと話をするなって言われてたんだから！」

「はあ？（3人）」

どういふことだろう。

あいつというのは考えるまでもなくレイさんだ。
何故あの人はこの人と会話をするのを禁じていたんだろうか。

(もしかして、何か答えに近づけそうなことを知っているのかな?)

「それでお前はずっと俺たちの相手をしていたのか?」

「そうだ。」

「何もしないってのは暇過ぎてな。」

私がそんなことを考えていると、こちらに今まで一切話しかけてこなかったサムスさんがそう聞き、兄さんは肯定した。
とりあえず私は話を聞いてみることにした。

「兄さん、レイさんには他に何か言われたんですか?」

「おお、呼び方を戻してくれたかッル!」

「・・・でもその質問には詳しく答えられない。」

ただ、「お前は時間になれば思うまま行動すればいい」とは言われたな。」

少し引つ掛かりを覚える言い方だったが、私の期待に沿うような答えは得られなかった。

でも、レイさんがそう言うってことは何かあるのだろう。

「兄さん、さっきは何故あんな神経を逆なでするようなことを言っ
たんですか?」

流石に兄さんでもああなりそうなことくらい分かると思います。

「

よく考えればいくらこの兄とはいえ、何の考えも無くあんな発言をするとは考え難い。

「いや、俺も答えは出してないんだが、そんなに悩むようなことだとは思えなかったんでな。」

「何故です？」

現に僕たちはこんなに悩んでいるのに。」

「そりゃあクルス、あいつは「宿題」って言ってたんだぞ。」

つまり必ず答えがあつて、俺たちにも答えられなければならぬはずだろ。」

「あ……」

エルスさんがそつえば、といった様子で反応を示す。

「それなのにお前らが3人で悩んでも関わらず答えを出せていなかったから、あんなことを言ってしまったわけだ。」

なるほど、確かにその通りだ。

もしかして私たちはすごく検討違いな考え方をしてしまったのかもかもしれない。

エルスさんも同感のようで、考えこんでいた。

そんなことを考えてると、さらに追撃をかけてくる。

「それにいくらあいつがひねくれてるとはいえ、俺は今回はかなり簡単な答えだと思っぞ?」

「どづいうこと?、レオン。」

「お前、あいつが本心からお前を無視したいと考えてるのか？」

「兄さん！、それは」

それはエルスさんが一番気にしていること。

もしかしたら自分をただ捨てただけで出した難題なのではないか、と彼女を蝕む非情な考え。

だから私はその言葉を咎めようとした。

「そんなことはありえない。」

だが、絶対の自信を滲ませた声音で彼は断言する。

それはこちらの否定の言葉を一切受け付けないほどの強固さを感じさせた。

「あいつはお前と離れたいなんて考えちゃいない。

今回のだって主人と従者って立场上仕方無く言ったただけだろうさ。

絶対に簡単で誰もが分かるような答えのはずだ。」

「・・・何故、そんなことが断言できるの？」

「勘だ。」

「……………（全員）」

再び沈黙が下りる。

（こ、この大馬鹿兄は・・・！）

私の心中は穏やかではなかったが。

「疑問ももつともだが、間違っではないない。
絶対に。」

だが、そう言われた途端に怒りが収まった。

何故か信じられるような気がしてしまったのだ。

他の2人も同様らしい。

「……姉さま、僕もそう思います。」

今までのあの人の行いからして間違いないと思いますよ。」

「……ありがとう。」

クルスもそう言うと、エルスさんの顔に自信の色が戻った。
もうさつきまでの自信のない様子は微塵も感じられない。

「実を言うとこれじゃないかというものはあつただけど、こんな
簡単な答えでいいのか自信が持てなかったの。」

でも、さつきの言葉のおかげで自信が持てたわ。

自分の考えにではなく、私自身に。

ちよっとは自分のことを信じてみるわね。」

笑顔でそう言う。

私はそれを見て、安心すると同時に悔しさを感じていた。

（私は、役に立てなかった……）

エルスさんに自信を取り戻させたのは私以外の2人、いや実際は兄
さん1人だろう。

最初にこの人の力になりたいと思っていながら、私は何もできなかった。

(なんて情けないんだろうな・・・)

と、そう考えていたら突然暖かいものに包まれた。

「え、エルスさん!？」

気が付くといつの間にかエルスさんに抱きしめられていた。そして笑顔で語りかけてくる。

「ありがとうルル。」

今回はあなたに一番助けられたわね。」

どうしたことだろう、私はむしろ一番役に立てなかったはず。その考えを見越したのか、言葉が続ける。

「あなたに最初に励まされるまで、私は結構限界だったのよ？」

もう少して何もかも諦めてしまっていたかもしれない。

でもそんなところをあなたに救われたの。

もしあれがなかったら私はさっきの2人の言葉も受け付けられなかったはず。

だから、あなたは私の恩人なの。

本当にありがとうね。」

そう言われた途端、私の心は温かさに包まれた。

(何故、最初に励ましていたはずの私が励まされてるんだろう・・・)

でも、悪い気なんかしない。
私はその暖かさにはばらくの間浸っていた。

そして、馬車は目的地に着いた。

s i d e o u t

s i d e エルセルス

街に着くとレイ様に連れられて、今は人どおりの少ない路地裏に居る。

そして、簡潔に聞いてくる。

「さ、宿題の答えを教えてくれ。」

冷静そのものの様子でそう聞いてくる。

「分かっているだろうが答えられなかった場合、その瞬間俺は宣言通り君をいないものとして扱うからそのつもりで。」

次に出てきたその言葉は、その様子にまったくそぐわない深刻なものだったが。

その様子に、さっきまでの自信がぐらつくのを感じる。

レオンの言っていた言葉は検討違いのことではないかと疑いを抱いてしまう。

だけどその考えを私は頭を振って飛ばす。

ここまで来てそんなことを考えてもしょうがない。

ならば、私の考えを自信を持って告げてしまえばいい。

それはきつとこの人にとって好ましい姿だろう。

これで終わりになるのなら、最後は毅然とした姿でいたほうがいいに決まっている。

（もし不正解だったら、ストーカーにでもなんでもなっけてやるんだから！）

そんな物凄く後ろ向きなことを考えたりもしていたが。

「・・・何か一瞬、身の危険を感じたんだが？」

「気のせいです。」

笑顔でそう言うのと納得していない様子だったが気を取り直し、こちらの答えを待っていることを態度で示してきた。

私は目を閉じる。

クルスは、肉親として親身になって相談に乗ってくれた

レオンは、私に自信を取り戻させてくれた
そして何よりルルは、恋敵のはずの私を負の思考から救い出してく
れた

これで、答えを間違えるわけにはいかない
まだ、この5人で一緒に居たいのだから

決心をして目を開ける。

「・・・決心はついたようだな。

答えを。」

深呼吸して、私は自分の答えを告げる。

「『強く』、なります。」

何故今回のようなことが起きたのか？

それは私が弱かったから。

あの魔獣に太刀打ちする術を持たなかったから。

自分の心を制御仕切る力がなかったから。

レイ様が私に力が無いと分かっていたから。

あれも、これも、それも。

今回のすべての負の出来事は、『強く』ありさえすれば回避できた
ことなのだ。

だから私は強くなる。

目の前の人物に自分の力を認めさせて、あんなことを絶対に起こさ

ないようにする。
それが私の答え。

「・・・そうか」

その私の答えに対して、彼は表情に満足の色を浮かべた。
同量の悲しみを含めて。

何故、そんな表情をするのですか

もしかして間違ってしまったのだろうか。

「れ、レイ様？」

もしかして、わ、私は・・・」

それ以上は言葉にならなかった。
自分の想像が、私にとって耐えられないものだったから。
しかし、彼はそれを否定した。

「違う。」

それでもいいよ。

不安にさせてしまつてすまなつたな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はふう・・・・」

その言葉に一気に力が抜けてしまい、崩れ落ちる。
すると、レイ様が一瞬で近づいて支えてくれた。

まるで抱きかかえるような恰好で

「ふえあ!？」

あ、あうう・・・」

その出来事にすごい声を出してしまった。
一気に身体に熱が戻ったのだが、腰が抜けてしまい動かすことができない。

「そのままにいるといい。

楽にいなさいな。」

そう言っつてレイ様は苦笑を浮かべる。

(そ、それはものすごく嬉しい提案ではあるのですが・・・!?)

この状況でいたら私は意識を失ってしまう自信がある。
もちろん嬉しさで。

そのため、必死になにか別のことを考えようとしたところで、都合よく気になることを思いついた。

「れ、レイ様!

ところでさっきの言い回しですと私の答えは満点ではなかったよ
うなのですが、いったいどのような答えならば正解だったの
でしょうか!？」

さっきこの人は「それでもいい」と言った。

まるでそれ以上の答えが存在するような言い回しだ。

「ああ、正解ね。」

だが、次の言葉に私は割と本気で殺意が湧いた。

「そんなもの無いぞ。」

「……………もう一度お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、正解ね。」

「そんなもの無いぞ。」

「一字一句変えずに答えてくださってありがとうございます。では死んでいただけないでしょうか？」

腰の剣を抜き、自分でも信じられない速さでその首を薙ぐ。だが、その手首をあっさりと抑えられた。

「危ないじゃないか。それにだなエルス、俺は確かに「宿題」だとも「答え」をだせとも言った。」

だが「正解」が存在する、なんて一言も言ってはいない。あのときだって、君は「答えられなかった」時のことを聞いてきただけだったろ。

俺は罰を与えるのは、「正解」でなかったら、「答え」が「間違

「い」だったら、という時だとは言っていないはずだが。」

思い返してみる。

確かにその通りだった。

でも。

「それなら、それなら・・・！！」

馬車での私の苦しさは全く意味がなかったということではありませんか！！؟؟」

あの苦しさが、あの辛さが、まったくの無意味だったなんて！

こんな酷い人だったなんて・・・！

私は悲しかった

この人が、こんなことをする人だったことが

「無意味なんかではない。」

でもその言葉に私は彼の顔を見た。

そこにはとても真剣な表情があった。

「君は「答えを出す」という前へと進む行動を起こした。

俺の出した罰の重圧に耐えてな。

それはとても尊いものなんだぞ？

これで君は、答えを出すまえより確実に強くなった。

それに「宿題」には、ちゃんとってはなんだが落第の条件もちゃんと存在する。」

ここでいったん言葉を切る。

「それは、「分からない」と答えることだ。」

その言葉に私は聞き入っていた。

「それは進歩を拒絶する考え。

すべてを諦めたものの言い訳。

前に進むことを忘れた愚か者の選択。

俺はそんな「もの」と一緒に行動しようなんて思うほど酔狂な人間ではない。」

ただ黙って聞いていた。

「君は前へと進むことで、俺に自分の素晴らしさを教えてくれた。

俺はそれを確かめたかったんだ。

傷つけてしまったならすまなかった。」

私にとって、重要なことのように思えたから。

「さて、君はこれでもまだ無意味だったと思うか？」

「いえ、納得とまではいきませんが、理解はしました。」

だから私は彼を許すことにした。

どこか釈然としない気持ちが残りはしたが。

そこまで口にしたところで、レイ様はいきなり私の頬に触れてきた。

「あ、あの!？」

「・・・こんな短期間でこんなになるまで悩んでいたんだな。
ここまで悩むとは思わなかったよ。」

そこで彼が何を気にしているのか気が付いた。
さっきまでのストレスで肌は荒れてしまい、髪はぼさぼさ、正直あまり見られたい姿ではなかった。
すると彼は目を閉じて、私の体を抱きしめてきた。

「ちよっ!？」

れ、レイ様!？」

戻っていた顔の赤みが一気に再発する。

(嬉しいのだけどこんなところでなんて!?)

そんな考えが頭をよぎるが、それも一瞬のこと。

「ん、んあああああ!?!?!」

身体をいきなり強烈な快樂が襲う。

まるで自分の中のあらゆる不純物が浄化されるかのような筆舌に尽くしがたい心地よさ。

収まった時、私は肩で息をしていた。

身体がすっかり熱くなり、まともに思考ができない。

ただ自分の身体がどうなったのかは理解した。

さっきまで荒れていた私の肌や髪、その他あらゆるものが元通り、いやそれ以上に張りや潤いを取り戻していた。
いったいどんな手品を使ったのだろうか。

「本当にすまなかった。」

謝って済むとも思わない。
だが、せめてこれだけはさせてくれ。」

（・・・ずるいです、レイ様。）

蕩けた思考の中で思う。

あそこまで徹底的に精神を痛めつけたあとに、こんな優しい言葉をかけてくるなんて。

そしてそれが不快なものだとは一切思えない。

もう、私はこの人から離れられないだろう

私は今のこの幸せに浸ることにした。

そのまま緩やかに時が進むのを待つ。

しかしそんな思考は抱きしめられたまま数分してからの、耳元で告げられた言葉に打ち消された。

「そのまま聞け、エルセルス。」

それは、一切の拒絶を許さない主人としての言葉。

私はさっきまでの浮ついた気分が吹き飛び、厳粛な思いで聞いた。

「強いというのは時にひどく理不尽なことだ。

強いということは、同時に弱いということでもある。

誰よりも強いものは誰よりも弱い存在。

そんな哀れなものなんだ。」

私にはその言葉の意味が全く分からなかった。でも、ひどく大事なことに思えたので黙っていた。

「弱いものは強さを求めるだろう。」

だが、強いものは弱さを求めるものだ。

この2つは似ていることのように思えるがまったく違う。弱いものは強くなることで弱さから逃げることができる。

だが、強いものはその強さから逃げることはできない。

たとえ筋肉を断ったとしても、腕をもいだとしても、自分の強さから逃げることはできない。」

まだ分からない。

「強くなるというのは簡単なことだ。

ただひたすら前に進み続ければいいのだから。

だが、いつか本当の強さが試される瞬間が必ず来る。

そしてその時こそ君の真価が問われることだろう。」

ここで私はようやく、これがさっきのこの人の、満足と悲しみの表情の原因なのだと気付いた。

よく分からないが、おそらく今私は忠告を、いや宣告をされているのだ。

「今はわからなくてもいい。

今の君では理解できる内容ではないのだから。

だがこの言葉を理解できたとき、君はすでに強さを得た後で、手遅れだろう。

そしてもうそれから逃れることはできない。」

私は何も言えない。

「今ならば君は「強くならない」という進歩を選ぶことができる。
言ってもしょうがないことだとは思う。
でももう一度、よく考えてみてくれ。」

そして、この話は終わりを迎えた
すべてを理解していた者と、なにも分かっていた者を残して

なにも分かっていた者、私が、この言葉の意味を思い知らされるのはまだ先の話だった

s i d e o u t

25話 宣告（後書き）

余裕があり面白いと思ってくだされば是非評価を

26話 交渉再び(前書き)

なんかだらだらとしてしまってますね。

でも、日常的な場面も書きたいんで、伸びますが勘弁してください。

26話 交渉再び

「待たせた。」

それだけを言いネスト前に居た他の3人と合流すると、全員一様に安堵と喜びの表情を見せる。

しかしエルスの様子を見ると、男性陣は不思議そうな顔をし、ルルは怪訝そうな顔で棘のある声で聞いてきた。

「・・・何があつたんですか、エルスさん。」

「あー、その・・・」

「なにやら行く前と比べものにならないほど血色が良くなってますし、さらにストレスで荒れていた身体が元通りを通り越して艶めいて見えます・・・」

本当に何があつたらほんの10分ほどでそんなに変わるんですか。」

なんと答えたらいいかわからないようで、顔を赤くして目を逸らす。その様子にさらに不機嫌になり、若干拗ねたような様子で言い募るルル。

とりあえず説明をすることにした。

「俺のせいで予想外に傷つけてしまったようだったから、少しサービスして身体の老廃物、汚れ、悪い部分を魔法で除去させてもらった。」

身体の構造と仕組みさえ理解していれば意外と簡単なんでね。

ま、そのために抱き締める、というか身体に触る必要があつたん

だが。

血色がいいのと艶があるのはそのためだな。」

「おおー！（男性陣）」

「レイ様！？」

い、言わないでください！」

素直にあつたことをそのまま伝えるとエルスがさらに顔を赤くして
絶るように言ってきた。

男性陣は歓声を上げ、ルルは顔を引き攣らせながらも無理に笑顔をつくっている。

「・・・そ、そうだったんですか・・・！」

それはとても羨ま・・・いえ、大層妬ましい展開でしたねええ、
エルスさん！」

「る、ルル・・・？」

言葉を言い換えた意味が全くない上に悪化しているようだけれど
？」

嫉妬でだろう、言葉の発音や高低がめちゃくちゃになりながらその
発言にエルスは一步引いた。

「落ち着けルル。」

あー、別に他意があつて抱きしめたわけじゃないし、言いにくいが
これには女性にはかなり恥ずかしい結果が生まれるものだから、
そう嫉妬に狂わないでやってくれ。」

「・・・すごく不安になる言葉が聞こえたのですが、どういづこと

でしょうか。」

ルルの怒りを抑えるために言ったその言葉に全員が動きを止め、エルスはこめかみに汗を垂らしながらそう聞いてくる。

さつきは良かれと思っつてついやってしまったんだが、冷静になってみると流石の俺でもかなり言いにくい。

だが、隠しても意味がないので正直に答える。

「詳しく説明するとあれは使う相手の身体に触れて、身体のあらゆる場所、毛細血管の一本に至るまでに存在する不要物をすべて体外に強制排出させるものだ。」

あと、肌や髪なんかの組織を最善の状態にすることなんかもできる。

しかし、それには身体情報を細かく分析しなければならないんだが……」

「……あ」

「……うわあ……」

そこまで説明すると、始めにルルが言葉の意味に気付いて顔を真っ赤にし、次にクルスがそれはないとばかりに片手で顔を押える。

エルスは始めはどういう意味なのか分かっていなかったようだが、段々と理解が追いついて来たようで無言のまま徐々に顔を赤くしていく。

「つまり、これを使うと使われた相手が知られたくない身体の情報が入って俺の頭の中に入ってくるわけだ……」

具体的にぶつちやけてしまえば、スリーサイズとか処女膜の有無とか、な……」

「・・・・・・・・」

俺が顔を背けながらそう言うと、言葉にすらなら無いようで、エルスが顔を赤一色にして崩れ落ちる。

それだけならまだしも、嗚咽を漏らしながらさめざめと涙まで流し初めてしまった。

その様子はまるで暴漢に襲われた乙女のように、周囲の通行人の憐憫と同情をこれでもかと集めていた。

そしてその周囲の感情と比例して、俺に膨大な敵意と義憤が集まる。それは俺でも冷や汗が流れるほどのもの。

とりあえず急いでエルスを抱えて路地裏へ引っ込む。

3分後

路地裏から出る。

エルスはさつきとは打って変わって、鼻歌など歌いながらご機嫌の様子で横を歩いている。

俺はまた面倒な約束ごとをする羽目になったので、軽く溜息を吐いているが。

（今回は俺の自業自得だからしょうがないか。）

「・・・今回は本当にエルスさんばかり役得ですよね。

明日の朝起きたら酷いことになってるかもしれないので、覚悟しておいてください。」

「ちょ!?!?」

「一体何をするつもりなのあなたは!？」

その様子からまたルルが嫉妬して、エルスが焦る。

(確かにルルには何もしてやれてないんだよな。

聞いたところでは今回が初の実戦だったのに、結構活躍していたにも関わらず。

しかも今回はエルスは失態を犯してしまったのにいい目ばかりみてるんだから当然か。)

これではアベコベなので後で何か埋め合わせしなければならぬと、そこで重要なことに気付いた。

(あれ？

いつの間に俺はこんな思考をする人間になってるんだ・・・?)

不味い。

なんか甘くなってる気がする。

普通の人間であればいい傾向かもしれないが俺には目的がある。

こんな生易しい考え方をしようでは不味い。

これではこれからの茨の道を生き抜くことなど出来ない。

今回はさっきのエルスに対しての行動に引きずられた結果だろうが、早急に何とかしなくては。

さしあたっては、

(デイツク殿には悪いが、今回の交渉で元に戻らせてもらおう。)

徹底的にやる決意をして、気を引き締める。

・・・ま、依頼で頑張ってくれた皆には何かしら喜んでもらえるようなことをしようと思ってるが

望んで主人となったからにはそういった面もしっかりしなくてはならないからな。

「ルル、あとでのご褒美をあげるから今は抑えてやってくれ。
レオン、ネスト陣はどこに？」

ルルはこの言葉でとりあえず納得してくれた。

「あいつらなら、先にネストに報告に行った。

だがそしたらセフィリアさんが出てきて、話を詳しく聞きたいから仕事有一段落して時間に余裕が出来るまで待って欲しいそうだ。」

「ふむ、具体的にはどれくらいと言っていた？」

「1時間。」

「そうか・・・」

少し時間ができた。

しかし何とも微妙な時間の空きだ、1時間で何ができるか・・・

（エルスとの以前の約束を果たすか？

だがそれには時間が少し足らんな。）

と、そこであることを思いだした。

（そういえば、あれからもう数日が経ってる。

そろそろ発見された頃合いか。

もしかしたら・・・

よし、やるか。)

予想が当たっても外れてもこれなら悪いようにはならないだろう。くくつ、と不気味な笑いを漏らした俺に皆が少し退いたが、気にせず提案する。

「エルス、君と以前した約束を今果たそうと思うんだがいいだろうか？」

「え？、でもそんな暇は・・・」

「せっかくだ、ネストキーパー様にも御相伴してもらおうじゃないか。」

これからそれなりに長い付き合いになるかも知れないから・・・
くははっ！」

「なんだその不安しか呼ばない笑い方は。」

お前、一体何を企んでる。」

「企むなんて人間きの悪い。」

俺はただの厚意から彼に御馳走したいだけだぞ？

まあ、あつちが余計なことを言ってきた場合はその限りではないがな。

じゃ、材料を集めてくるから。」

まったく説得力のない言葉を残して、材料を求め昨日見つけた市場に向かう。

皆何とも言えない表情をしていた。

「・・・何だこれは？」

仕事が終わって面会した時のディック殿の最初の言葉がこれだ。

「見ての通り食事ですが、何か？」

「何故ここに持って来ているのですか？」

別にわざわざ面会室に持って来なくても、受け付け前の広間は食堂も兼ねてますし、少し程度の時間ならばお待ちしますが・・・」

当然のことだとばかりにそう言うとセフィリアさんが、一般的な意見を言ってきた。

「いえ、ちょうど昼食時ですしあなた方もさっきまで仕事をしていましたからまだなのでしょう？」

「ちょうど以前この街から出る時に食事をつくる約束をしていたんで、せつかくだから御馳走しようと思ひまして。」

レオンに朝何かをされて泣きじゃくっていたエルス、それをなだめるために出した提案がこれ。

「・・・好きな相手の手料理を食べられるということ、あつという間に機嫌を直してくれました」

（・・・なんか気が付かないうちに自分がどんどん女っ誑しになっ

てる気がする

悪気や悪意でやったわけじゃないのが救い……いや、なお悪い
か。)

自覚無しでどんどん女を落とすなんて、どれだけ性質の悪い人間か
想像もつかない。

これからは気を付けるとしよう。

ここで俺はそう決心していたわけだが、無意識の行動故に抑
制できるわけもなく、このことは今後の頭痛の種となることになる

「ふん、若造、今度は何を企んでいるのだ？」

お主のことだ、ただの厚意だけではあるまい。」

言葉だけでは敵意と警戒しか伺うことができないが、その声音と表
情はどこか楽しげだ。

「失敬な。」

私はそんなに悪い子ではありませんよ？」

「齢70を数えこの道で30年生きてきた儂から、譲歩を引き出そ
うと虎視眈々と狙う者のそんな言葉を信じる者はおらんだらう。」

「くくつ……！」

まあそうでしょうね。

でも、本当に今回は純粹な厚意からですよ。

これから付き合いが長くなりそうですからここで親睦を深めておきたいと思ひまして。

依頼の話だつて長くなりそうなんですから先に何か腹に入れておいた方がいいですし。」

「……とても信用できる言葉ではないが、不思議と嘘の匂いが感じられんな。

面白い、警戒を解くわけではないがその提案に乗ってやろうじゃないか。

7人分ということは、こやつも同席して構わないのだろうか?。」

「ええ、食事は大勢いた方が楽しいですからねー。

というわけで皆、お代官様の許可が下りたぞ。

席に着けー。」

「誰がお代官様だ!」

まあいい、セフィリア、お前も座りなさい。」

「は、はい……(5人)」

棘だらけの言葉の応酬にも関わらず、お互いに楽しげな笑みを崩さないことに理解が及ばない様子だった皆を座らせる。

「しかしまあ、見事に儂の見たことのない料理ばかりだな。味は保障できるのか?」

「これは……何やらゼリーみたいなものです。でも甘くはなさそうです。」

ディック殿がそう言うと、セフィリアさんも不思議そうにそう言う。

「これって、普段は粉にして水に溶いて焼いて、って食べるものですよね？」

「わあ、水で茹でるところなるんですか。」

「こっちの肉、ずいぶん分厚いがかみ切れるのか？」

「クルスは興味深そうに、レオンは不安そうに。」

「このスープ、色が薄いですけど、不思議と味は薄くはなさそうです。すね。」

「透き通っていて綺麗です・・・。」

「野菜も一見茹でただけに見えましたが、味付けされてるんですか。」

「全体的に健康に良さそうですね。」

「ルルが目をキラキラさせながら、エルスは喜びを無理やり抑えてるかのようにつめて平静な声で、それぞれ感想を漏らしている。」

「死ねレオン。」

「まあ、俺はこれらを美味いとは思ってたが、味覚なんて人それぞれだからな。」

「食べてもらわないと分からんよ、うまいかどうかなんて。」

「さて、召し上がってくださいな。」

「そう言って促すと、ある者は恐る恐る、ある者は何でもなさそうに、またあるものは「何で俺だけ・・・。」とぼやきながら食べ始めた。」

そして食べ終わる。

特に誰もしゃべることもなく、しかし食べる速さが遅いということもなく、ゆったりとした時間が過ぎて行った。

「・・・不思議な味だったな。」

塩味だけで言えば間違いなく薄いのに、不思議と物足りなく感じない。

複雑ですつきりとしたものだった。

それに、心が落ち着く。」

「面倒な言い方しないで、はっきりと行ってください。」

「実に旨かった。」

「ちっ、自然に言いやがったこの爺さん。」

そこはもつと面白いリアクションしろよ。」

「聞こえてるぞ、小僧。」

他の皆もディック殿と同意見のようで、味に関してはしきりに頷いていた。

「すごいですね、これなんて言う料理なんですか？

というよりあなたは料理もできるんですね、欠点あるんでしょう

か・・・」

「その辺は面倒なんで、あとにしましょう。
いい加減依頼の件を進めないで。」

ちなみに今回作ったのは、御飯、お吸い物、豚の角煮、茶碗蒸し、
葉っぱのお浸しだった。

醤油とか味噌を使ったかったんだが、その辺は流石になかったので、
いろいろと手を尽くして近い味に仕上げた。

ただ、どれも色が混沌としたものになったのだが。
話を進めたかったので、セフィリアさんには悪いがそれは後回しに
させてもらう。

ただ、エルスとルルがなんか落ち込んでいた。

「どした？、2人とも。」

「いえ・・・」

「女として少しショックだったといいますが、何と言いますか・・・」

つまり、男の俺が料理ができるのに、女である自分たちが料理でき
ないことが複雑だったと。

「そんなに気にすることじゃないだろう。」

今までずっと貴族として暮らしてきていきなり没落したんだから。
これからゆっくり覚えていけばいいさ。」

「そ、そうですね。」

「はい、頑張ります！」

俺が食後のお茶を楽しみながらそう言うと、2人は元気にそう答えた。

しかし、俺のさっき言った言葉の意味を理解すると絶句してしまった。

「・・・お主、さらりとんでもないことを言いおったな・・・
儂らが聞いているにも関わらず。」

ディック殿が呆れたようにそう言ってくる。

セフィリアさんは口を手で押さえている。

他全員は慌てふためいて、どうしたらいいか分からなくなっている。

「はっ、貴方たちなら既に大まかな予想がついてたでしょうに。
まったく問題ありませんよ。」

俺はそう言い、なんでもないといい様子で悠然とお茶をたしなむ。

「そもそも、彼らほど特徴的な人間がいつまでも正体が隠し続けられるわけがないんです。

それでも普通の人間には明かそうとは思いませんが、貴方たちは権力者だ、しかも世界中から冒険者が集うネストの、ね。

そう遠くない内に間違いなく知られることになります。

それに確証が無かっただけで、貴方は彼らがその手の人間だったと気付いてたでしょう？

それならこっちから伝えたほうが色々都合がいい。」

「・・・確かにな。」

自分からばらしてしまえば、後々の交渉でいきなりそのことを言

われて動揺することもなくなる。

今回で言えばさらに、逆に儂らの動揺を誘う結果になったわけだ。そうしてこれからの主導権を握ろうとこのつかかか？」

「その通りですが何か？」

「何故そんな無邪気な笑みができるのだ。」

「それだけ腹黒い性格をしているのにも関わらず。」

「腹黒いからですよ。」

「・・・その通りだな。」

「もういい加減に依頼の話にいこうじゃありませんか？」

時間、なくなりますよ。」

俺が笑顔でそう言うと誰も何も言わなくなってしまった。

彼は深呼吸して気を落ち着けてから、真剣な表情になった。

「とりあえず連中の報告にあった、お主が採ってきたという素材を見せてくれ。」

無言で横に置いていた大人ほどもありそうな袋を投げる。

それを長は容易く受け止めて、中を確認すると呆れた表情になる。

「間違いなく「ストラリザード星銀竜」の一部だ・・・」

お主はどれだけ規格外なのだ、連中の話を聞いてもまったく信じられなかったぞ。」

「ふむ、何故でしょう？」

「簡単だ、単純に強い。」

ランクでもAに限りなく近いBであり、その硬さと力だけなら本物の竜にも劣らないほどだ。

Gランクでこれを仕留めた者など前代未聞だぞ……」

「へー。」

「気のない返事だな、つまりお主はAランカーに匹敵するということなのだぞ？」

人としての最高峰の強さの強者たちと。」

（確かにすごいことなんだろうな、周りでもうどんな顔をしているのか分からないでいる5人の反応を見ると。）

しかし。

「そんな分切り切ってたことを今更言われましても。」

「………（全員）」

俺としては「刃虎」の強さでBでと言われた時点で、Aより強いのは自分の中で確定されてたので驚きなんかはない。

あの化物と比べれば、分切り切ってたことだ。

「心外な反応ですね、皆さん。」

現に貴方がさつき自分で認めたわけじゃないですか、長。」

「……それでもそれだけ不遜な考えができることが私には信じられませんかよ。」

「まあいいじゃないですか、セフィリアさん。それより、報酬の件はどうなるんでしょう？確か、本来は金貨2枚でしたよね？」

「何を言っている。」

「始めの説明で言ったはずだが？」

「我らネストは依頼でどんなことがあると一切責任を負わんと。」

「

「ええそうですね、覚えています。」

「ですが、ネストが出した依頼の場合は別なのでしょう？」

「すまし顔で答える長だが、俺がそう言つたとその表情が崩れた。」

「ああ、やはりそうでしたか。」

「確証はありませんでしたが、予想通りでしたね。」

「……カマをかけたのか。」

「はい。」

「苦々しい表情をする彼に笑顔でそう言う。」

「普通の依頼であれば、何かあればその依頼主に不備があったということ追及を逃れられる。」

「しかし、この場合はそうはいかない。」

「ネストが出した依頼なのだから、その責は当然ネストへと向かわなければならぬ。」

「これでもし、知らぬ存ぜぬを貫くようであれば、信用は地に落ちる。よって、報酬の上乗せなどの謝罪が無ければ不味いのである。」

「そうだな、金貨10枚出そう。」

「じゅっ!?(仲間)」

「おじい様!？」

ほう、いきなり結構思い切ったものだな。

ざっと眺めた時の依頼の中で、Aランクのものは報酬が大体金貨数枚だったから妥当なところだ。

小出しにしては余計なことを言われかねんから、いきなり相場を出して文句を言わせたくない。

その金額なら文句もないし、すぐに飛びつかせてもらおう。

(・・・と、普通なら思うだろうな)

「じゃ、金貨13枚で。」

「ええっ!?(5人)」

「ふざけてるのか貴様は!？」

「10枚でも破格なのだぞ!」

周りは驚き、長は怒りを露わにする。

「それでも、貴方ほどの人間がいきなり渡せる金額のギリギリをいきなり出してくるわけがありません。

少しでも支出を控えようとするでしょう。

しかし、あまりに金額が少なすぎて怪しまれてしまう。

よって、貴方が出した金額は貴方が妥当だと思った金額の7割程

のほすです。」

「くっ！」

「おや、また当たったようですね。」

「どうします？」

どどん容赦なく追い詰めていく俺。

だが、ここで長が目に力を取り戻して睨みつけてきた。

その気迫はかなりのもので、俺以外の全員が息を飲んだ。

「小僧、少し世間話をしようじゃないか。」

皆いきなり何を言い出すのだろうか、と疑問顔をしている。

「どうぞ。」

そう促すと彼は語り始めた。

「儂はな、お主が「魔の森」の素材を大量に持ったことを不思議に思い、あの周辺に人を向かわせて調べさせたんだ。」

流石に森の中までは行かせなかったが。」

「正しい判断ですね。」

「それで何かわかりましたか？」

「いや、お主に繋がりそうなものは何も。」

当然だな。

「だが、その代りに妙なものを見つけた。」

「？（全員）」

「まだ新しい人の死体だ。」

ここで、この人が何を言いたいのかに気付き、仲間が顔を青くする。セフィリアさんはなんのことだかわかってなかったようだ。その様子に満足気な笑みを浮かべ続きを口にする。

「すべてで6体の死体。」

その中には現在行方不明であった、商人グッツの遺体も含まれていた。

ほとんどが魔獣に食い荒らされてたんで、特定には手間がかかったが。」

「な！？」

グッツというところの国で一番の商人であった、あの人物ですか！？」

セフィリアさんが驚いてそう言うと、エルスとルルが震え始める。

（無理もないか。）

思い出したくもないだろう、奴隷にされかけてたなんて。）

顔には出さず、心で2人を気に掛ける。

「それは大変だ。」

ところで何故そんなことを私に伝えるのです？」

まあ、もうわかっているんだが社交辞令的にそう聞く。

「予想される彼の死亡した時間と、お主が初めにこちらに着いた日
を考えると見事に一致するのだが。」

「気のせいでしょう。」

もしくは偶然ですね。」

証拠なんか何もないので、俺は余裕でそう答える。

いくら疑わしかろうと、証拠がなければ何もできないのだから。
しかし、次の言葉にその考えは崩される。

「そうか、それで俺が言いたいことはこの一言に集約されるわけだ
が。」

そう言うと、彼はいったん言葉を切って口にする。

「お主が彼を殺した場面を見たと言っ者がいる、と言ったらどうす
るかね？」

27話 負け、勝ち、分かり合っ(前書き)

ちよつと話が長くなりそうなので、切り上げて早めに投稿
次は、頑張って2日後くらいですかね

軽くグロイところがあります、ご了承ください

爺さんは、主人公の妙なスイッチを入れてしまいました
やりすぎてないか心配です・・・

27話 負け、勝ち、分かり合う

動揺を表情に出さなかった自分を褒めてやりたい。

ここでそんなことをしたらどう対処するかを決めていないのに、自白するようなものだ。

もしあらかじめ強欲商人の死体が発見されていることを予想してなかったら、ボロを出していたかもしれない。

ちなみに周りの4人はレオン以外少し危なかったが、ちょっとばれないように電撃で気つけしてやったら直ぐに立て直した。

レオンはこういう逆境に強いようで、表情が全くぶれていない。

(やはり、心が強いな。)

レオンの評価を上方修正しながらも、思考は止めない。考える。

冷静に考えれば、長が言ったことはまずありえない。

森での生活の影響から、俺は周囲の生物の存在を察知することが出来る。

そして、あの時は常に周囲に目撃者や残党がいないかどうか警戒し続けていたのだ。

居れば気付かないはずがない。

(だが、もしそういう類の魔法が存在するとしたら・・・)

ありえない話ではない。

この世界の知識の無さをこれほど悔やんだことはない、知識さえあればせめて、そのような魔法があり得るかどうかの目安にはなっていた。

とりあえずは情報が足りない、集めなくては。

「勘違いではないのですか？
そんなことをしていない以上、とても信じられる話ではありませんね。」

「目撃者は「魔の森」の近くの崖の上を通った商人だそうだ。
そこで彼は、レティエンスで手に入れた珍しい品を使って遊んでいたらしい。」

「珍しい品、ですか？」

「そうだ、望遠鏡といい遠くに景色が見えるものらしい。
最大で3キロ先のものまでよく見える代物と聞いた。
それで彼はお主の凶行を目の当たりにできたそうだ。」

いつぞやのように、自身の思考速度が急速に速まり、周囲の動きが止まるのを感じる。

その中でゆっくりと考える。

・・・まさか、魔法ですらなくただの望遠鏡とくるとは思わなかった
この世界にちょっと毒されすぎてたな、気を付けよう。

しかし、俺の気配感知の最大有効半径は2？。
十分人外の距離であったので油断していた、確かにそれならば俺に
ばれずに見ることが可能だ。

しかも、凶行なんて上手い言い方をしてきた。

これならば、俺の殺し方がどんな方法であったとしても問題ない。
もし明確な殺し方、例えば剣で切った、などと言っていれば、現実
との齟齬から嘘だと判断できたのだが。
俺が考えてることは1つ。

これが真実か、はったりか

どちらも考えられる。

明確に言い方をせずに、凶行などと言う曖昧な言い方をしてきたことから、はったりの可能性が高くはある。

だが、真実の可能性が消せない以上、まったく意味がない。

会話を重ねて、情報をさらに引き出すという手も考えられるが、下手に動けばそれで意外なところからボロが出る可能性があるので得策ではない。

喋れば喋るほどその可能性は高まる。

ならば、今できることはこれだけの情報から、これが嘘だろうと本当だろうと対応できる手段を導くこと。

恐らく彼は、この情報を盾にして報酬の削減と契約を焚き付けてくるだろう。

それだけならば俺は気にしないのだが、このことを持ち出されてはこれから先ずつとあらゆることで不利になってしまふ可能性がある以上、受け入れられるものではない。

とりあえず、今考えられる対処は5つ。

- 1、ネストキーパーを殺す
- 2、目撃者を消す
- 3、話を続けて嘘だとしたらボロを出すのを待つ
- 4、条件付きで受け入れる
- 5、しらを切り続ける

1と2は話にならない。

1はそんなことをしたら明確な罪状がついてくるだけだし、2はそもそも実在するかも疑わしい。

闇討ちしようとも、もっとも疑わしい人間は殺害前に会話を交わしていた俺だろう。

2にしたって仮に実在したとしても、この人が口を滑らすわけがな

い。

3はさつき言ったように、ボロが出る可能性があるから却下。

4、これも駄目だ。

今までの会話で俺が主導権を握れたのは、予想外の手で意表を突き、そうしてできた隙間につけ込むことが出来たからだ。

実際の交渉能力で言えば、経験不足の俺はこの人に圧倒的に劣る。

この人の土俵で戦ってしまえば、どれだけの不利な条件をつけられるか分かったものではない。

5、・・・賭けだなこれは

はったりならば問題なし、真実ならばドボン、何とも分かりやすい。

・・・どれも、ろくなものがない

(よくもまあ、あれだけ曖昧な言葉で人を翻弄できるものだ・・・)

ディック殿の言い回しの優れている点は、明確なことを一切口にしていないこと。

普通ならばしっかりと言葉の構成を考え、相手の反論する穴を埋めておくものなのに、彼の言葉は穴だらけだ。

だが、その穴には猛毒が仕込まれている。

しめた、と思つて飛びつかれたとしても、その中にはおいしいものは何もなく、いくつも探されているうちに相手の言質を取つてしまひ、自滅を誘つ。

言葉を尽くして穴をつかれていれば、いずれ自分からボロを出す可能性が高いことをよく知っている。

今、俺は追い詰められているのだ

目の前に2つの道があり、どちらも行きつく先は遠く、しかも行き止まりのようなもの。

そして、来た道に戻ることにすら出来ない。

いきなり顔を右手で押えて狂ったように、いや狂って笑い始めた俺に全員が驚き、そしてディック殿以外が怯えを含んだ視線を向けてくるのを感じる。
彼も冷や汗を流しているところを見ると、不気味に感じているようだ。

だが、今の俺にはそんなことを気にしている余裕がない。

楽しい

この人生のままならなさが
この人に敵わない自分が
そして自分を打ち負かしている彼自身が

そして、同時に悔しい

ならば、その悔しさを飲み込んでやる

まだまだだということつまり、成長の余地があるということ

ならば、前に進み続けてやる

たとえ目の前が真の暗闇だろうと！
這ってでももがいてでも足掻いてでも！

(そして必ずお前を超えてやる、^{オウ}爺！)

ああ、自分が抑えられない

歓喜と悔しさ、そして自身の将来への希望がどんどん膨らんでいく
駄目だ、話はまだ終わってないというのに

「・・・どうしたというのだ、いきなり。」

そう考えてると、俺にこの世界初めての敗北を与えてくれた人が声をかけてきた。

そのおかげで、ようやく少し落ち着くことが出来た。

「くくつ、楽しくありませんか？、ディック殿。」

まだ喜びの色が消えず、震える声でそう言う。

「楽しいだど？」

「ええ、私は楽しくて仕方ありませんよ。」

あなたに負けた自分が。

そしてその敗北を認めることで、これからまだ成長できることが分かったことが。」

「何を・・・言っているのだ・・・？」

「ああ、そうだ。」

人生とはこういうものだったんだ。

人は負けて、それを乗り越えることで強くなることが出来る。

すっかり忘れていたよ、最近では負けることは死ぬことだったから勝つことしかできなかった。

引き分けはあったんだがなああ。」

あー、くそ、まともに会話することも出来ない。

まだ時間がかかりそうだし、この感覚に浸っていたいんだが、何とかせねば。

「ネストキーパー様、少し、待ってください、クハはっ、もう少しで落ち着くと思いますから……！」

「あ、ああ、分かった……」

俺の豹変振りに誰もがついてこれてない中、俺はひたすら感情の津波を抑えることに尽力していた。

「ぶつうう……」

あー、やっと治まった。」

そう言いつと全員が安堵の息を吐く。

相当不気味だったらしいな、さっきの俺は。

「さっき、お主が負けを認める発言をしたと思うんだが、どうなのだ？」

困惑しながらも、しっかりと聞いていたらしい。

「ああ、そうですね。」

この交渉は貴方の勝ちです。
参りました。」

「そんなっ!?!？」

「れ、レイさん!?!？」

「それでは貴方が!?!？」

俺が交渉の負けを認めると、クルス、ルル、エルスが泣きそうな顔と声で言ってくる。

レオンは特に心配してなかったが。

「・・・そうか。」

ではグッゾの殺害の件で話があるのだが」

俺が素直に負けを認めたことに訝しげな顔をしたが、すぐに次に行こうとしてくるディック殿。

「何を言ってるんですか。」

私は殺してなんかいませんが?」

「は？（全員）」

そう言つと誰もが驚く。

「……お主は負けを認めたのだよな？」

「はい。」

「僕の勝ちだといったのだよな？」

「その通りですね。」

「ではお主が殺し」

「てませんよ。」

無言でお互いを見つめる。

「……ふざけておるのか？」

「いえいえ、私の負けは認めますよ？」

でも、それはあくまで「交渉」での負けであつてですね、その意見を確認するというわけではないのですよ。」

「言葉遊びをしているのではないのだぞ！」

「そんなの分かつてますつて。」

俺の態度に怒つて怒鳴り始める長。

そう仕向けるから無理もない。

「分かっているのなら」

だが、急に言葉に詰まる。

俺の発した異常な気迫と、邪悪な笑みに気圧されて。

周りの皆は顔色を青くする。

そして告げる。

「ここまでの「交渉」は、本当に貴方の勝ちですよ。

ですが、貴方の言うそれだけは認めるわけにはいきませんのでね。

これから始めるのは、「交渉」ではなくただの「力押し」です。

論理も理屈もない、ね。」

行く道が行き止まりならば、こじ開けて進めばいい

ただそれだけのことなのだ。

「さて、それではまずは状況の整理といきましょうか。」

それに対する答えはない。

この場の空気は完全に俺が支配した。

「貴方は、私があつ豚を殺したのではないかと言っているのですよね？」

「ぶ、豚だと？」

「ええ、あんな外見のやつは豚でしょう？」

「こ、小僧、分かっているのか？、その発言は」

「いいんですよ。」

私が言っているのはただの外見のことですから。いくら集めても証拠足りえませんでね。

それで、あの豚が馬車に乗って移動していたところを私が殺したと言いたいんですよね？」

「な！？、馬車とは言っていないのに何故いきなり自分からそんなことを言いだすのだ！？」

「おや、貴方が求めているのはこういうことを私が言うことのはずだと思っただんですが、違いましたか？」

ああ深読みしないでくださいね？、商人が馬車に乗るのはごく自然なことですからこれも証拠にはなりませんので。

そうだ、もしかして豚は王都に行こうとしてたのではないですか

？

「極上の品とやらを持って、ね。」

「貴様は、何を考えている……!?!?」

いきなり暴露大会を始めだした俺に完全に混乱するディック殿。自分の求めていた言葉を、自分の首を絞めると確実に理解しているはずの人間が次々と自白していることが信じられないらしい。

「自棄になつたのか!?!?」

そんなことを自分から言い出して、捕まったらどうする!?!?」

「おやあ?、貴方の狙いはそこではなかったのですか?」

「っ、違う!」

分かっていてそんなことを聞いて、何のつもりだ!?!?」

「ええ分かってますとも。」

ああ楽しいな愉快だ爽快だ解放された気分だ。

これから用意してた切り札を一枚^{カード}切るうというのにまったく悪い気がしない。

それもこれも全て貴方のおかげですよ、ディック殿。」

全員がまるで悪魔にでも会ったような顔をしていたが気にしない。

「さて、まあ早い話が貴方は私になにか要求をしたいわけですよね? その情報を盾にして。」

「……ここまで交渉を滅茶苦茶にされてしまった上に、元から気づいてた奴にもう隠す意味は全くないな。」

その通りだ。」

「ですが、それは私が捕まってしまうような状況に置かれた場合に
限る。」

だから貴方は私に豚を殺したことを認めさせたい、と。」

「そうだな。」

そこで俺は実に綺麗な笑みをつくる。

「その考えは実は破綻してるんですよ。」

仮に私が本当に豚を殺していたとしても、そして私が世界に追わ
れたとしても、私が捕まることは絶対にありえませんか。」

「どう・・・いう、ことだ・・・?」

その表情にはもはや恐れが見える。

全く未知のものに対するの恐れが。

「ところで皆さんに質問したいんですが。」

右手を顔に当てる。

そして俺は、用意しておいた切り札の1つをためらいなく切る。
カード

「私のこの顔が素顔だと一言でも言いましたっけ?」

「つつつ!!!????? (全員)」

手をどかすとその顔は、間違えてなければ金髪の白人男性のものになっっているはずだ。

顔だけではなく、瞳も、肌も、服も、目に見える部分がすべて変わる。

「こつちの犯人の特定方法って、似顔絵がせいぜいですよー」。

ですが私はこのように顔を変えることが出来ますから、なんの意味もないんですよ。

「お分かりいただけましたか？」

自分のものではない顔で笑顔でそういつてやる。

茫然自失、誰も動けない。

これを「偽装」魔法と俺は呼んでいる。

身体の表面に極めて薄い特殊な膜を張ることで、自由に外見を変えることが出来るのだ。

まあそういう方法だから、髪を伸ばせなかったり体型は変えられなかったり色々制限があるんだが。

しかしそんな些細な欠点を補いあまりある有用性があることは、ちよつと見識がある人間であれば用意に想像がつくだろう。

これは、俺の「目的」の核となる魔法なので、こんなところで使う気は本当になかったのだが、この交渉がとても有意義なものとなったことと、ディック殿に対しての敬意から後悔は微塵もしていない。

・・・そもそも、知られたからといって、どうこう出来る代物ではないしな

「さてディック殿、ご理解いただけただろうか？」

仮に私があの手にとどめをさした瞬間を見たものがいたとしても、まったく意味がないことを。」

さっきまでの顔に戻り、告げる。

ちなみに当然だが、俺の素顔はこれだ。

白人なんかではない。

だが、相手はそんなことを知るわけもないのでこれでいいのだ。

どちらの顔、あるいはどんな顔が素顔なのかの判別がつくわけがない。

「・・・そうだな。」

お主がとどめをさす瞬間を見たものには、何も言わないように言うておく。

藪をつついて竜を出してもなんの意味もない。」

もう何を信じていいのか分からなくなってるのか、意気がない。そして、

「あーあ。」

言っちゃいましたね。」

「何？」

「何だ、やっぱり貴方のはったりだったんですか。」

うわ、これまでのやり取りに何の意味もなかったとは・・・
楽しかったからいいですけど。」

この人も混乱していたのだろう、とうとうボ口を出した。本来であれば、そして俺が普通の人間であればありえないものだったが。

分かっていないこの人に、説明をする。

「いやね、仮に私があの子を殺したとしますよね。」

とりあえずもう意味もないのだがそう前置きして、クルス、エルス、ルル、セフィリアさんには聞こえないように、風魔法で真空の膜をつくり彼らを包み込む。

中には空気があるので息はできる。

何か言っているようだが無視。

「私なら直接手を下したりはしませんよ。」

「……?」

「そうですね、確かあの辺りには狼が生息していました。

私なら、生きながらあいつらに喰われてもらいますね。」

「うっ……(残り2人)」

楽しくなりながらさらに続ける。

「知ってます?」

あいつらって獲物を見つけたらまず喉に穴をあけて仲間を呼べないようにするんですよ。

そうしたら空気が喉から漏れるんでヒューヒューって音がするんです。

以前あれを聞いたことがあるんですが、なかなかいいものでし

たね。」

思い出す。

喉から必死に空気を漏らして、泣き出すことすらできずにいた奴のあの音を。

「それでも獲物は生きてるんですよー！。

あいつら噛み方が神憑ってまして、絶妙な力加減で殺さないように穴を空けるんです。

そしたら今度は生き胆を食らいます。

どんな痛みなんでしょうね、一体。

人って脳さえ残っていればある程度の時間は生きてられますから、全て喰われても生きてるんです。」

思い出す。

途中から突然大きくなった空気の抜ける音を。

恐らく叫びたかったんだろうな。

「それから手足を喰って、最後に頭です。

どうです？

あのような商人に相応しい末路だと思いませんか？」

「・・・・・・・・・・（2人）」

吐き気を必死に堪えている2人はそれどころではなかったようだ。放っておいて、彼らを解放する。

「いきなり何をするんですか！（4人）」

案の定、一斉にそう言うてくる。

「いいじゃないか、ただ動きが制限されて外の声が聞こえなくなるだけなんだから。」

「それとも、君らもああなりたかったのか？」

2人の様子を見た途端、すぐに顔を青ざめさせて首を横に振る。

「そういうわけで、「私がとどめをさす」ということはありえないし、それを見た人間も存在するはずがないのですよ。」

「まあ、貴方は今それどころではないみたいですが。」

「やってくれたものだな・・・」

最初に食事を摂らせたのはこのためか。

「何とも小さいことをしてくれる。」

「小さいですが、効果はそれなりでしょう？」

吐き気に加えて胃の中のものが出てくるのを抑えなければならぬ。

「交渉の場でそんなことになればどうなるかなんて、言うまでもありません。」

「残念ながら、今回の交渉での役には立ちませんでしたかね。」

「・・・俺、完全に無関係じゃねえかよ・・・」

「ん？、なんだ、幻聴か。」

「おい！」

俺が食事を振る舞ったことの裏の理由がそれだ。

雑音は無視。

「儂も老いたかの・・・」

こんな単純な手にも関わらず、お主の嘘を読み取れなんだとは・・・

「・・・」

「あー、それは読み取れなくて当然ですよ。

私にはあの場では嘘ついてませんから。」

「？」

「あなたがこれを使うような舞台を作り上げてくれなければ、これは使えませんからね。」

ですからあの時は、本当に単純に私の厚意だったんですよ。

使えなければ使えないで、貴方の私に対する心象が少しでも上がるでしょうから、それでもいいですね。」

「・・・ふ！、はははははは！！！！」

そう説明すると、今度は長が突然笑い出した。

「ふ、お主はどのような人生を歩んできたのだ！？

どんな経験をしたらそこまで用心深くなれるのだ！？

ああ、本当に面白い若造だ！

その年で儂を論破するとはな！

それに加えAランカー相当の力に常識外の魔法も持ち合わせてる！

お主は本当に人間なのか！？

はははははははは！！！！」

心底楽しそうに笑う。

その様子はとても晴れやかだった。

「まあ「悪魔」とか「人でなし」とか「不幸を呼ぶもの」とか、色々と呼ばれてはいましたが、一応は人間ですよ。

酷いことを言いますね。」

少し昔を思い出しながらそう言う。

仲間が少し悲しげな表情をしたが気にしない。

「しかしディック殿、1つ間違いがありますね。

私は貴方を論破なんてしてませんよ。」

「何？」

「さっきのは、自分の以上なスペックにものを言わせた論理にすらなっていないただの暴論です。

単純な言論の力では私は貴方にまったく及びません。

あんなものを論破については、世界の言語学者が怒り狂いますよ。」

「は、俺が認めてるのだ、いいではないか。」

「私が違うと言っているのです。」

「・・・なかなか頑固なものだな。

相手がお主の勝ちだと言ってるのだぞ。」

「嫌がつてるのに無理やり勝ちを押し付けてくるような人間に、頑固だなんて言われたくありませんね。」

「・・・」

27話 負け、勝ち、分かり合っ(後書き)

余裕があり、面白いと思ってくだされば是非評価を

28話 目的（前書き）

今回話が異常に多いです

関東で1人暮らしを始めて、初めて「G」を見ました。

駄目ですね、あれ。

大丈夫だと思ってた自分を殴ってやりたい・・・

鳥肌が立ちました

28話 目的

「結局のところ、私への報酬は金貨13枚ということでしょうか？」

「うむ。」

しかし、最終的にはお主の要求を飲む羽目になったな。ネストキーパーとしては、少々情けないものだ。」

「何言ってるんですか。」

私のさっきのあれ、私は「偽装」魔法と呼んでいるのですが、あれの情報の価値が金貨3枚分と釣り合うわけがないでしょう。」

本当なら金貨1000枚は上乘せして頂きたいですね。」

「・・・本当のことだと思えてしまうところが恐ろしいな・・・あれがあれば、余程のヘマや無茶をしない限りどんな犯罪だろうと成功してしまふ。」

王侯貴族が知ったら地の果てまでお主を追い続けるぞ、己の敵を消すのに利用するために。」

そんな情報を知らせるとは・・・
始末するつもりなのか、儂らを？」

「っ!」

最終的な確認をしている時にディック殿がそう言い、セフィリアさんが表情を硬くし、震える。

これさえあれば、殺した後の手間を無視して自分たちを始末することが出来るのだから、無理もない。

「そんなことをしてどうするんですか。」

私はこれを背景と同化して見えなくなつて、ルルとエルス、それとセフィリアさんの着替えを覗くことにしか使つてませんよ?」

「……………」

空気が凍る。

「いやですねえ、冗談ですよ?」

「当たり前だ(です)!!! (全員)」

一斉に突つ込まれる。

女性陣は3人とも顔を真っ赤にしていた。

「それならもつと速く突つ込んでください。」

焦りました、もしかしたら私がそんなことをするような人間だと思われてるのかと。」

「お主が言つとすべてが冗談に聞こえんだ……………」

「いきなりそんなことを言われれば誰でも返答に困るっつーの……………」

「

「僕でもなんて答えたらいいのか迷いましたよ……………」

口ぐちに言われる。

女性陣の反応が無かつたので、見てみたら、「私もういろいろと駄目ね…………嬉しいと思つてしまつたわ…………」「…………エルスさん私事です。」「そうなの…………仲間がいてくれて心強いわ、ありが

とう。「いえ……」「あ、あなたたちは全く……」「などと呟き合っていた。

仲良くなってくれて良かったよ。

「それですね、別に貴方がこのことをばらしても全く問題ありませんし。」

「？」

「見つかりなくなったら顔を隠せばいいだけですからね、大した手間ではありません。」

それに……」

俺の顔に自然と笑みが浮かぶ。

「いざとなれば、自分から嫌いな貴族のもとに私は身を寄せればいいんです。」

「嫌い？」

好きな貴族じゃなくてか？」

「ああそうだ、レオン。」

お前なら自分の敵となりそうな奴が、俺という決戦兵器級の生き物を手に入れたらどうする？」

「そりゃあ、そいつを何とかしてた、お……す……」

「ははは、そういうことだよ。」

面倒なことになれば嫌いな馬鹿貴族のもとに自分から行って、俺がここにいますということばらし、そいつが別の貴族たちに潰され

るのを待てばいい。

それを何度か続ければ、俺を手に入れることは何の利益にもなりはしないと全員が分かって、俺はもう追われることを気にすることもなくなり、さらに嫌いな貴族をいくつか潰すこともでき、実に都合がいい結果になるわけだ。

しかも、その時は潰す側の連中にも少くない被害が出る。

貴族なんて、我々平民を見下してる人間が大半ですからね。

面白いと思いませんか？、皆さん。」

その問いに答える者はいなかった。

俺はわざとらしく溜息を吐き、言う。

「いやですねえ、冗談ですよ？」

こんどはその言葉を信じるものは誰もいなかった。

「ところで、お主にはまだ聞きたいことがあるのだが。」

落ち着いて、皆で茶を飲んでいると、そう切り出された。

待っていた言葉だったので、一歩進んだ返答をする。

「待っていましたよその言葉を。」

今回の依頼の異常さの原因を何だと考えてるのか、でしょうか？」

「可愛げがないな。
その通りだ。」

苦笑しているディック殿。

俺はただ、答えのみを単純に答えた。

「他国の陰謀。」

「なっ！？（レオン、長以外）」

俺の言葉に、若者3人が愕然とする。

長はやはり予想していたようで、驚いてはいない。

「ふむ、そう答える理由は？」

「金貨1枚。」

「は？」

「ただで聞こうって言うんですか？」

「そんな世の中甘くないですよ。」

「う、だが、俺が独断で出せる金はお主の報酬で精々だぞ。」

「おや、そうなんですか。」

「それじゃあ……。」

そこで、悩む振りをしてから、本命の条件を提示する。

「貴方の所有する書物、資料、文献、あらゆる紙媒体の情報源全てを閲覧させて頂きたい。」

「それはっ!?!」

「レイさん!?!」

分かってて言っているのですか、それがどういことか!?!」

そう言つと驚愕された。
しょうがないことだが。

この条件だと、ネストの経営を根幹から揺るがすような情報も提示しなければならぬ。

支出や収入なんかの情報の価値は、使う者が使えばとんでもないほど跳ね上がる。

これでは、ネストを潰すことと同義なのだ。
だから、すぐに前言を翻す。

「では、貴方たちネストに関係するもの以外の情報源全てで結構です。」

それならどうです。」

そついうとあからさまにホツとする2人。

「初めに重い要求を提示し、後でそれよりも軽い本命の要求をする。お主は詐欺師か？」

それだけではそこまでの譲歩はできんな。」

この人にはあつさりとはれてしまっていたが。

まあ、成功すれば儲けもの程度にしか考えてはいなかったが。

だから、こちらも本当の条件を提示する。

「私の今回の件についての考察、そして予想される犯人、最後に貴方たちの直近の危機について。」

「これでもまだ足りないと言いますか？」

「!?(レオン以外)」

そう言うと誰もが固まる。

レオンにはあらかじめすべて言っておいたので、こいつは驚いていない。

「……いや、足りなくなかない。」

「それでは、交渉成立ですね。」

あ、言っておきますがこれから話す内容はすべて私個人の意見です。

これを鵜呑みにすることは無いようにお願いします。」

「分かった。」

「……分かりました。」

「君らも聞いておけよ。」

勉強になるだろうから。」

「は、はい。(3人)」

長、セフィリアさん、仲間が頷いたところで話し出す。

「まず、今回の件での分かりやすい一番目立つ異常な点は、言うまでもなく土地に合わない、しかも桁外れに強い魔獣の出現です。」

「そうですね、本来ならあんな場所に「ブレイクリザード岩砕竜」が、ましてや「ステラリザード星銀竜」がいるわけがありませんから。」

「ですがセフィリアさん、そのことに隠れていて分かり難いんですがもう一つおかしさで言えば負けていない要素があるんですよ。」

「なんだと思います?」

「え?」

「・・・分かりません・・・」

少し考えていたが、そう答えた。
ディック殿が代わりに答える。

「・・・ネストが人命に関わる事態にも関わらず、6か月も「ロック岩餓鬼」を放置していたことだ。」

「!、確かにそうですね。」

ですが、それは一応職員のミスで・・・、っ!」

「気付かれたようで何よりです。」

恐らくその職員は、気付かなかったのではなく、気付かなかったの
でしょうね。」

「それってまさか!？」

驚いたように、エルスが言う。

こっちも気付いたようだ。

「ふむ、エルスはやはり頭がいいな。

その通り、誰かが意図的に隠していたのだろう。

ネストにも、住民にもばれないようにことを進められる、実に手
際のいいやつだよ。」

「ですがそれですと・・・、！、成程、だから他国の陰謀とおっし
やったのですね。」

「ルルの想像通りだろうな。」

「どういふことですか?」

クルスが首を傾げながら言う。

「つまりだなクルス。

それだけのことが出来るほどの力を持ったものが、一個人だと思
うか?」

仮にもネストなんだぞ、自由を重んじ、実力のある者が集う場。
当然その職員だって平均以上の能力が求められる。」

「仮にもは余計だ。」

「確かに無理ですね。
それこそ国でもない限りは。
成程、納得です。」

俺がそう説明すると、長が不機嫌そうに、クルスが納得したという風に言う。

「恐らく、あいつらはあの場で成長の時間を稼がれていたのだろう。
何とも気の長い話だな。」

しかし、実際のところはいろいろな意味で成功寸前のところまで行っていた。」

「ふむ、しかし、お主の言う2体の魔獣がなんの為に育てられているのかは予想できているのか？」

この爺、分かってて言ってるやがる。

「貴方でも分かっているでしょうに。
成長し、ゴブリンという餌がなくなれば、連中は近場で食料があるこの街に来ます。」

そして、この街は近くに「魔の森」があり、しかもそれは連中がいた岩場とは正反対の位置。

森に常に注意を割いている以上、連中に気付くのは遅れます。

それならば、例え失敗して、連中が先に暴走したとしてもそれなりの打撃を与えることが出来ます。」

「……お主、さつきから妙なもの言いをしておるな。」

俺の言い回しに気付いた長が聞いてきた。

「ふむ、そうですね、これは最後に言おうと思ってたわけですが、まあいいでしょう。」

長の耳元に行き、囁く。

「つつつ!!?!??」

説明を聞いた途端、顔色をなくすディック殿。

「とまあ、これが貴方たちの直近の危機です。

ま、あと1、2か月ほどはあるでしょうが。」

「なんだ!?!、なんなのだ、お前は!?!」

何故そんなことが分かる!?!

何故そんなことが言える!?!

お前は、お前は……!?!」

混乱して、脈絡のない言葉でまくしたててくる。

「お、お爺さ……、ネストキーパー様、落ち着いてください!」

レイさん、一体何を言ったのですか貴方は!?!」

「それは後で彼から直接聞いてください。

貴方まで混乱されては話が進まなくなります。

まあ、私がこのことを知っているのは、私が「魔の森」に入り浸ってたからですけどね。」

本当は入り浸るどころではなく、住んでいたわけだが、
そう言い捨てる、直ぐに黙り込んでくれた。

「それで、その陰謀を仕掛けてきた国家ですが、これについては私はこの世界の地理を知らないので何とも言えませんね。当たりを付けてはいますか。」

「というわけで、地図を見せて頂きたいのですが？」

「・・・分かった。」

「セフィリア、頼む。」

流石、直ぐに立ち直った長が地図を取らせに向かわせた。

「は、はい。」

「へえ、立ち直るのが早いですね。」

「誰のせいだと思っている!？」

「犯人。」

そう答えると、予想外の言葉だったらしくさらに驚く。

「な!？、お前はその件まで人為的なものだというのか!？」

「偶然にしては、時期が良すぎます。」

偶然が重なった時は、それは偶然ではなく必然だと考えるべきなんですよ。」

ちなみにその件と今回の件の犯人は、同じ人間なのか、同じ組織に属している別人なのかまでは想像が付きませんが。」

「そこまで分かっていたら、僕はお主を人間扱いすることは一生ないだろうよ。」

「ま、そうですね。」

なかなか不名誉な物言いだったが、確かにその通りなので受け入れる。

「あの、私たちには教えて頂けないんでしょうか？」

「気になって仕方がないです・・・」

「エルスモルルも聞いたら何も考えられなくなるだろうから、後で教えるよ。」

レオンが。」

「俺かよ!？」

「お前だ。」

「教えたんだからできるだろ？」

「そりゃ、あの時大体のことを聞いたから・・・て、何故お前たちはそんな目で俺を見ている？」

「ずるいです。(3人)」

レオンを半眼で睨みつける仲間3人。

「いや、俺が聞いたんじゃない、こいつが勝手に言ってきた」

「それがずるいんです。(3人)」

「……………ごめんなさい。」

ものすごく納得していなさそうだったが、迫力に負けて謝るレオン。

「お待たせしました、……て何やってるんですか。」

そんな時にセフィリアさんが、地図を持って帰って来た。

「何でもいいじゃないですか。」

「これがこの世界か……」

「……………ああ、やっぱりね。」

ざっと目を通してみると、予想通りここから南にあの国があった。

「想像していた通りだったのですか？」

「人間ですか、あなたは本当に。」

この人もなかなか失礼なことを言ってくれる。

「祖父と同じようなことを仰いますね。」

あの魔獣、私はサムスさんから南に生息するものと聞いたんですが？」

首肯する長。

もう分かってることだが、念のために続けて聞く。

「この地図で言うと、もしかしてその生息域って……」

「……………エリユシオンだ。」

エリユシオン公国。

魔法の先端国で、戦士気質のデルトとはかなり仲が悪い。

エリユシオンの民はデルトの民を、戦いしか出来ない野蛮人と見下し、デルトの民はエリユシオンの民を、自分たちが居なくては戦争で魔法を使う時間が稼げず碌に戦うこともできない役立たずと軽蔑しているそうだ。

何とも分かりやすい対立構造だな。

「なるほど、あそこなら納得ですね、姉様。」

「そうかしら？」

「え？、あの国ならばこのようなことをしてくるのも納得ですけど？
デルト嫌いでも有名ですし。」

クルスの発言にエルスが疑問を唱え、ルルが不思議そうに言う。
俺はエルスが分かっていることに満足しながら言う。

「エルスは分かっているようだな。」

クルス、ルル、確かにあの国はこの国が嫌いだから、大抵の人間はこれを聞いたならそう思うだろうな。

だが、今回は嫌いだからこそありえない。」

「え？」

「どづいつことですか？」

これには、エルスが代わりに答えてくれた。

「嫌いということ、それだけ理解をしているということでもあるのよ？」

「そりゃあ、よくも知らないのにただ嫌いだ、っていう愚か者もたまにいるけど、少なくともあの国はそうではないわ。」

「エリユシオンは単体では戦争で生き残れるような国ではないのよ。魔法を主体で使うのに、詠唱の時間をカバーできるだけの戦士の数を確保出来ていないの。」

「だから、デルトが居なくなつては困るのよあの国は。」

「そんな国なのに生き残れているのは、ベグニスの脅威があるからだろう。」

「デルトとしては、さっさとエリユシオンなんて国は滅ぼしてしまいたい、と考えてることも十分に考えられるが、デルトだけではあの国に対抗できるだけの数が無い。」

「だから、魔法という圧倒的な力を自分たちも確保しておく必要があるわけだ。」

「それがエリユシオン。」

「つまり、デルトとエリユシオンという2国は、互いに互いを嫌い合っているながら依存し合っている、とてつもなく面倒な関係にあるんだよ。」

「エルスの後を継いで、そう説明する。」

「2人は仕切りに頷いていた。」

「なるほど、それでは確かにエリユシオンではありえませんか。」

「個人で何かをやってきた、という可能性は残りますが、ネストに干渉できるような人間はそうとうな大貴族でしょうし、それならば国のしがらみに密接に関わっているはず。」

「国が無関係、ということはない。」

よってエリュシオンは白、そういうわけですか。」

「ルル、君もなかなか深いところまで考えられたんだな。」

「貴方と一緒に居れば誰でも少なからず影響を受けますよ。」

予想外的に確なルルの分析に驚いてそう言つと、苦笑しながらそう返された。

「そうなりますと、考えられるのは・・・」

セフィリアさんがそう言い、

「ベグニス、だな。」

ディック殿が継いだ。

「でしょうね。」

デルトとエリュシオンが仲たがいをして一番喜ぶのはそこ。

他の2大国は、同盟にて戦力を依存している2大国が争いあつことを良しとするはずがない。

もしそんなことをして片方が潰れてしまえば、次は自分なんですから。」

「そうだろうな。」

まあ、ここまではこの人も予想できたことだろう。

「ですが、ディック殿。」

私は非常に気になることがあるんですよ。

「貴方は気付いていますか？」

「む？、なんだそれは。」

ああ、やはり気付いていなかったか。

「貴方の欠点はその常識でものを考えてしまうことです。それさえなければ私は手も足も出なかったでしょう。こつちとしては都合がいいですが。」

「・・・む？、なんだそれは。」

この爺、同じ言葉を繰り返してごまかしてきやがった。しかしごまかすということは自覚していたんだな。

「この考えてつつまり、どこかの国、もしくはそこに所属する個人が、「魔獣を操る術」を持ってるということになりますよね。」

「なっ！？（レオン以外）」

一斉に驚き、顔色をなくす。

魔獣は一般的に人間などよりもはるかに強大な生物だそれをもし戦力として保持できるようになれば、この世界の勢力図が塗り替えられてもおかしくない。

「・・・確かにその通りだ。」

どの国が黒幕だったとしても、あの岩場まで魔獣を連れて行ったということだからな。

「こんなことにも気付けないとは・・・」

少々落ち込み気味の長。

「そう気にすることもないでしょう。」

「実在してそれが魔法だとしても、恐らくはまだ試作の段階でしょうから。」

「もし完成していたら、とっくにどこかの国が戦争を始めて投入しています。」

「俺はそんなに深刻に考えてはいない。」

「まだ実戦配備には時間があるだろうし、もし使用されたとしても、その時は操られた魔獣に俺の「目的」の生贄となってももらえるからだ。」

「確かにな、気にしてもしょうがないことだ。」

「それで、犯人の件なんだが・・・」

長が気を取り直してそう切り出す。

俺はそれに答える前に、また4人を真空の防音壁で包む。

「その件は、私とレオン、そして貴方の3人だけの頭にとどめておくようお願いします。」

「さらに、これは多分に私の妄想が入っている話です。」

「それでも、よろしいですか？」

真剣な表情でそう語りかける。

長もまた真剣な表情で頷いた。

そして俺は、自分の「妄想話」を語った。

5分後、長は顔を真っ青にしてうなだれていた。

「ははっ、成程、確かに妄想だ・・・
だが、何故か筋が通っている。
そう思えてしまう。」

信じようと感じてしまう。」

そして天井を仰ぐ。

「なんだそれは・・・
僕の今までの信用はなんだったんだ。
あいつは！、あいつらは！！
僕を・・・ムぐっ！？」

少々危なくなってきたので、手持ちの精神安定作用のある丸薬を口にねじ込む。

「落ち着かれましたか？」

「ああ・・・
見苦しいところを見せた。」

そうは言っがやはり元気がない。

（無理もない、か。

俺でもいまだに半信半疑のようなものだが、これが事実だとすればかなり不味い。

色んな意味で。」

「彼らを出しますよ。」

さっきのことは他言無用です。

それと、奴には手は出さないでくださいね。

私の勘違いの線も十分にありますから。」

「そうだな。」

よし、もう大丈夫だ。」

（本当に大丈夫見たいだ。

とんでもない精神力だな。）

もう血色も元に戻り、はた目には何の異常もなくなった長に敬意を抱きながら、風の壁を解く。

「……………」

怒ってるようだ。

それもかなり。

4人とも、背景がぶれて見える。

「まあ落ち着け。」

蔑ろにした分、後で構ってやるから。」

そういうと、渋々ながら席に着く。

何を言っても無駄だと察してくれたみたいだ。

「それでは、話も終わりましたね。
ディック殿、準備も必要でしょうし、約束は明日果たしてください。
い。」

「それでは。」

そう言い席を立とうとする。

さつき座ったばかりで、直ぐに立つことになったことにまた不満そうな表情をする3人。

(レオンは今回あまり出番なかったな。

あらかじめ大体教えてたから当然だが。)

そんなことを考えていると、

「待ってくれんか、レイ。」

長に呼び止められた。

しかも、名前で。

驚きながらも聞く。

「……何でしょうか？」

「最後に1つだけ聞きたいことがある。

答えたくなければ答えなくても構わない。」

真剣なその表情と声に、俺も厳粛な気持ちになり座る。

「お主の目的はなんなのだ。

お主は、何のために動いている。

お主ほどの人間が、何の当てもなくぶらぶらと歩いているはずが

ない。

「どうか、教えてはくれまいか。」

沈黙。

何の音もしなくなる。

俺は、茶がなくなつたので、新しく淹れ直し、それを飲む。

そして、器を手でもてあそびながら、なんでもないことのように言う。

「現在の世界の、・・・・・・・・・・・・・・・・破滅」。」

28話 目的（後書き）

余裕があり、面白いとと思ってくだされば、是非評価を

29話 歪んだ世界（前書き）

今回は文字数約6000とちょっと少ないですかね。

29話 歪んだ世界

あれはいつのことだったか

そつだ、ちょうど6年前、俺が12歳だった時の春だ。
あの頃はまだ、日本にいたんだっけ。

「ねー、令。

今の夢って何?」

平日の夕食時、『あいつ』がそう突然聞いてきた。
当然、俺はまず疑問を口にする。

「突然何だよ。」

「今日の学校の授業でさ、先生が明日までに考えて作文にきなさい、
つて。」

あたしはそういうのあまり考えたことは無かったから、令のを参
考にしようと思って。」

「なるほどね。」

でも、俺の言ったことをそのまま写すつもりじゃないだろうな?」

「え!？」

そ、そんなわけないじゃん!」

「お前は・・・」

あまりにも分かりやすいその反応に溜息を吐いてしまったが、とりあえずは答える。

「俺の夢か・・・」

「そうだな、理科が好きだから、人の役に立つ発明をしたい。」

ちよつと考えたら意外なほどあっさりと見つかったその夢を、素直に口にする。

「発明？」

「そつだよ。」

よくテレビでやってるだろ、環境破壊とか。

俺はそういつたもので苦しんでる人たちの力になりたい。

そもそも今問題になってることつてさ、全部人間が引き起こしたことじゃないか。

それならそれをどうにかするのも人間の役目だとは思わないか？

だから俺がなんとかしてやる！

そつすれば助かる人も大勢いる。

人が同じ人間を助けるのは当然のことだ。

そして、人は素晴らしい可能性を持つてるんだから、少しでも多くの人が助かれればそれだけ未来の希望も広がるんだ。

そんなことをやり遂げた時のことを想像したら、わくわくしないか？」

ちよつと興奮気味に説明する。

しかし、こいつは冷めた目で俺を見てきた。

「そんなことできるわけないじゃん。」

それにあんたね、それってあたしと1つしか変わらない12歳の
子供が考えるようなこと？

頭の中どうなってるのよ、一体。

まあ、普段の行動見ると完全に老人の生活だから、特に違和感
も無いけど。」

俺はあっさりと言が否定され、率直に老けると言われたことに頭
にきながら、年上としての威厳を保つため、何とか平静を取り繕
う。

「ははは・・・！」

別にいいだろうが、この年で新聞とか科学雑誌とかを読みふけり、
植物とか猫とかを縁側で愛でることが趣味でも！

お前らみたいに漫画とかゲームにうつつを抜かすよりはるかに有
意義だろ！」

「それでいて朝起きるのが朝の5時とか6時だもんねー。

その年で町内のご老人と仲良くなってるし。

でもその分あんた、同年代の友達数えるほどしかいないんだから、
もう少し身の振り方考えたほうがいいと思っけど？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

(こいつ、気にしてることを！)

俺はさっさと夕飯を平らげて、自分の部屋に戻ろうとする。

「とにかく、俺の夢はそれだ。

だけどこれって、お前が言った通り11歳のガキが考えるような
内容じゃないから、書き写すことはできないよな。

まあ、頑張ってくれ。」

「んなっ!？」

あんたまさかこれを狙って!？」

ち、ちよっと!、もう時間がないんだけど!？」

それに今日はお父さんも仕事で帰ってこないし!？」

慌てだした『あいつ』に、溜飲を下げ、ほくそ笑む。

「それはお前の不始末だろ？」

宿題を後回しにするからだ。

自分で何とかするんだな。」

「鬼!、悪魔!、家族なんだから手伝ってくれたっていいじゃない!」

「俺は家事で忙しいんだよ。」

それ以上言うようなら、食後の特製プリンは無しだ。」

「それを持ち出すなんて!？」

「頑張れ、『』。」

一応応援はしてる。」

そんな言葉を言いながら、俺はその場を後にした。

これが俺の、『あれ』を経験するまでの、夢であり、目標であり、目的

世界について何も知らなかった、幼子の言葉

2年後、俺は『世界』に負けた。

いや、そもそも戦いにすらなつてなかった。

ただ一方的に、傷つけられ、貶され、罵倒され、否定され、絶望させられ、そして思い知らされた

世界の何よりも醜い、自分自身を

俺は何も分かっていなかった。

素晴らしい可能性をもつということは、同時に、どこまでも墮ちていく可能性もあるということも。

人の弱さ、醜さも。

どこまでも歪んだ、この『世界』のことを。

そして思った。

歪んでいるならば、何故『世界』はそのままなのだろう？

ただ歪んでいるだけならば、金属をたわめると元に戻ろうとするように、戻ろうとする力が働くはずではないのか。

そして気付く。

『世界』とは、歪んでいる姿が正しい姿なのだ

歪んでいる状態こそが、「正常」。
まっすぐな状態、平和こそが、「異常」。

その中を人は、多くは疑問に抱くこともなく生きていく。

自分に問う

こんなものでいいのか、と

『世界』がこんなものでいることを、容認するのか、と

答は、『否』

『世界』に負け、『世界』に従い、『世界』を諦める
ただ漫然と日々を過ごし、ただ糧を得、ただただ生きる

そんなもの、『世界』に飼われている奴隷にすぎないではないか

『人間』ではない

俺は、そう考えて生きてきた。
いつも、心中でお前をいつか打ち破ってやる、変えてやる、と、い
かれたことを考えながら

そして、俺は『異世界』の存在を知った。

この世界も、本質は向こうと何も変わってはいない。

人が争い、妬み、殺しあう、どこまでも歪んだ『世界』。

だが、それは、間違いなく正しいことだ。

さっきと言っていることが矛盾しているように感じるかもしれないが、
俺はそう思う。

争いの無い世界とは、つまり欲望の無い『世界』。

そんなものは地獄と変わらない。

しかし、ならば「今」の『世界』を受け入れられるのか？

答は『否』、断じて『否』

だから今の俺の、夢は、目標は、目的は、ただ一つ

現在の世界の、『破滅』

side デイック（ルツソの街・ネストキーパー）

好奇心だった。

この、儂と対等にやりあえる男が何を考えているのかに興味を持ってしまった。

だから、答えなくてもいいと前置きをした上で、聞いた。それを今は大いに後悔している。

この男の語った目的は、実に単純で、最も壊れた回答だった。

世界の『破滅』

普段ならば、笑い話にすらなりえない、ただの法螺話。

なのにこの男が口にするだけで、無視できない現実味を与えられてしまう。

実現できると、僅かでも思ってしまう。

何でもないように言ったことで、何故かこの男が本気だと分かって

しまった。

何故、聞いてしまったのだろうか。

聞かなければ、問題なくこの男と交流出来ていたのに。

儂はこの男を、この上ないほど気に入ってしまった。

ある候補として考えるほどに。

今日の会話でその思いは、もはや明確に自分の心に刻みこまれてしまったのだ。

儂に媚びへつらう軟弱ものばかりの今時、欠片も臆することなく儂と対等にやりあえる若者。

それはどれだけ稀有な存在だろうか。

この30年で、間違いなく数人しかいないだろう。

なのにこの言葉を聞いてしまった。

冒険者は自由人である。

そうは言っても、一端の正義感は当然持ち合わせて居る。

当然、儂自身も。

これからこの世界に甚大な被害を出すかもしれない目の前の存在を見逃すことは、その正義感に反してしまう。

それがいかに馬鹿げた話だとしても、何とかするべきだろう。

だがどうやって？

この、全く死ぬところを予測できない存在を、どうやって止めるといふのだ。

「心配ですか？、ディック殿。

私のこれから為そうとしていることが。」

そんな時に、まるで心を見通したかのように聞いてくるすべての元凶。

「そんなに心配しなくても、私の考える『破滅』とは貴方たちの考えるようなものではありません。」

「何？」

言っている意味が理解できない。

「貴方は、今の世界をどう思います？」

そして、真剣な表情で聞いてくる。

その顔に冷静になれたので、ゆっくりと考えた上で答えた。

「良いとは言わないが、決して悪いとも言わない。

どっちつかずの、ちょうどいい世界だと考えている。」

良いことも、悪いことも、すべてを包括してこそその世界だ。

そこに不満を持つはずもない。

いや、もてるはずもない、世界をどうこうできるはずがないのだから。

しかし、この男は違うのだ、それを理解させられた。

「私は歪み切ってると思いますね。

あまりにも歪んでいるせいで、それが正常だと思ってしまうほどに。」

誤解、妬み、偏見、差別、例を挙げればきりがない。

それでいて、そのことに誰も気づかない。

それしか知らないから。

それしか理解できないから。

そのせいで、後で絶望的な破滅が待っているとも知らずに。愚かも愚か、どうしようもなく愚かだ。」

吐き捨てるように、無表情でそう言う。

声音から、そして身に纏うその凄みから、それが決して冗談などではなく本心なのだと分かる。

「だから、この世界を壊すのか？」

自分で驚くほど冷静に、そんな物騒な言葉が口から出る。

普段ならば、恐々と聞いているはずなのに。

さっきから感じている違和感が、儂にそうさせた。

それがなんなのかは分からないが。

儂のこの言葉に、男は笑みを浮かべた。

「違いますよ。」

予想外の言葉とともに。

嫌な世界だから壊すのではないのか？

「デイツク殿、私の言葉を変えないでください。

私の望むのは、「現在」の世界の破滅です。

決して、この世のすべてを壊してやろうとかそんなものではありません。」

言ってる言葉がまるで異世界の言葉かのように、儂には全く理解できなかつた。

「私はね、おかしいことを言うようですが、世界はそういうものと認めてもいるんです。

欲望があるからこそ人は愚かになる。

だが、欲望なくして「生」はない。

そういうものだと理解はしているのですよ。
ですが。」

目を瞑り、静かに語り続ける。
僕はいつの間にか、この男の言葉に聞き入っていた。

「『世界』はそれが行き過ぎてるとは思いませんか？

誤解と偏見と無知と愚かさから差別する。

それが元でやがて大きな争いに発展する。

それがやがて、世界の崩壊につながるかも知らず。
だから。」

目を開く。

そこには、強い意志と、燃え盛る野望があるように感じられた。

「私がこの世界に問いかける。

お前はこのままでいいのかと。

自分が死ぬのをただ座して待つのかと。

この世界のすべての「人」に。」

手を握り締め、叫ぶ。

「俺がこの世界に選択肢を与えてやる！

このまま滅ぶ道と、そして、「今」の歪みきつた世界を僅かでも
正し、生き残る道を！

この世界に、すべての「人」に、与えてみせる！」

魂の叫びと呼ぶにこれほど相応しい叫びが、今まであっただろうか。
今のこの男の姿は、そんなことを素直に思い浮かべるほどの「高貴
さ」があった。

「私の言う「現在」の世界の「破滅」とは、つまりそういうことで

す。

さっきの私の2つの道のどちらを選んでも、「この世界」は終わる。

それが、「崩壊」によるものか、「変革」によるものかの違いはありますがね。」

「・・・お主は、世界が前者、滅びを選んだらどうするのだ？」

気になったことを、言葉にする。

この男が、どんな行動を取るのかに興味があったのだ。

さっきのをまったく反省していない自分に、多少呆れた。

「何もしません。」

ただ素直に、己の天寿を全うしますよ。

そんな世界に興味はありませんが、「友達」や「仲間」が居ますからね。」

笑みを浮かべながらそう告げられた。

今までとは打って変わって、あまりにも普通のその言葉に儂は固まらざるを得なかった。

そして、儂の中に疑問が生まれた。

そして、それを考えていくうちに、先ほどの違和感の正体に気が付いた。

「私の話は以上です。」

皆、行こう。」

席を立つ、男とその仲間。

その背中に儂は、言葉を投げかける。

「優しいのだな、お主は。」

その言葉に男は立ち止まり、セフィリアは驚きを、彼の仲間たちは驚きに加えて嬉しさを浮かべた。

「……今までの私の言葉のどこをとつたらそんな発言が飛び出すすんですか？」

貴方も、私の仲間も、「私」という人間を見るときだけ目が腐つてるんじゃないでしょうね。」

そんな憎まれ口も、こいつの本心を知った後なら可愛らしく感じる。

「お主の言葉を聞いたからだ。」

今までのお主のこの世界を憎むかのような言葉の数々。

それは、お主がこの世界を好きだったからこそその発言であろう？」

そっだ。

この男の言葉は恨み言ばかりだったが、何故か暖かさを感じるものだったことが儂の感じていた違和感だったのだ。

それは、世界を憎み切れていない証。

「そして、あれほどの憎しみを覚えるほどの絶望を味あわされて尚、お主はこの世界の為に動こうとしている。」

そんな人間を、優しいと言わずになんと言っただ？」

そして、この男はいまだにこの世界を救おうとしているのだ。

その手段は分からないが。

すると、溜息を吐いて言ってくる。

「「愚か者」、ですよ。」

背を向けて、そのまま喋る。

「世界に絶望させられたのに、世界にしがみつき、世界を女々しくも良くしようとする。」

誰よりも醜く、薄汚い、そして愚かな「愚か者」です。」

そして、魔獣の素材を詰めた袋を持ち、去っていく。
後には儂とセフィリアが残された。

「セフィリア、あの男はいいやつだな。」

微笑みながらそう言うと、孫娘も微笑む。

「そうですね。」

行動に惑わされてしまいそうになりますが、彼は常に自分の仲間のことを気にしていたように思います。

そして、さっきの貴方とのやり取りで、よく分かりました。

あの人は恐らく、自分の認めた相手にはとても優しいのでしょうね。

興味の尽きない人です。」

その言葉に、思うところがあったので、ためしに聞いてみる。

「お前はあの男をどう思っている?」

「まだ、興味の対象どまりですね。」

でも、これからどうなるかは分からない、そう思わせてくれる人だとは思っています。」

と、そこで急に慌てだした。

「そ、それは可能性の話ですからね!？」

無茶させないくださいよ、あの人たちに!」

恐らく、今までの儂の行動からあいつらを排除しに動くと思ったの
だろう。

こいつに近づこうとした男たちにした儂の所業の数々を考えれば、
無理もないことだが。

だが、今回は無駄な心配だ。

「心配するな。

儂はあの男が気に入っているからな。

野暮なことはせんよ。」

「え?、それって・・・」

そう言つと、驚かれた。

儂もあのような男が相手であれば安心できるのだがな。

「さあ、仕事に戻るぞ。

あいつに落とされた爆弾についても対処を考えねばならぬからな。」

全く、厄介事を持ち込んでくれたものだ。

いや、教えてもらわなければこの街は終わっていたから、感謝をす
るべきなのだろうが、何故かそんな考えしか出てこない。

「爆弾、ですか?」

「そうだ、なんでも」

セフィリアに話すと、顔を真っ青にした。
奴の話では期限は1、2か月。
それまでに何とかしなくてはな。

s i d e o u t

29話 歪んだ世界（後書き）

面白いと思ってくだされば、是非評価を

30話 黒幕（前書き）

総合評価13000突破、皆様ありがとうございます！
ですが、10月からは大学が始まるので更新頻度が下がると思います
申し訳ありません・・・

あと、次の話はこれから数日後の話となります

30話 黒幕

不覚だ。

最後の予想外の言葉に硬直してしまった、あんな言葉にあれだけ心乱されるとは。

これからはその辺にも気を付けるようにしよう。
だが、今の問題はそこではない。

「・・・さつきから何なんだ君らは。」

そう言うと、ますます笑みを深くする4人。
なにがそんなに楽しいのか。

「貴方が動揺するところなんて滅多に見れませんからね。
分かっていたことですけど、人間なんだと再確認出来て嬉しいんですよ。」

もつとも、それだけじゃありませんけど。」

クルスの言葉に、どういふことなのか分からないでいると、ルルが補足する。

「はい。」

私たち以外にも貴方が優しいということを知ってくれている人が出てきたことが嬉しいんです。

貴方は勘違いされるように動いてますからそれでいいんでしょうけど、私たちとしてはそれが不満だったんです。」

「なるほどね。」

それで全員が頬を緩ませていると。

確かに俺は誤解されるように行動していたから、そうなるのも無理はない。

だが、ちゃんと狙ってやってることなので、これでこれから動きにくくならなければいいが。

そんなことを考えていたら、エルスが表情を暗くしていた。

「それに、「仲間」と呼んでくれたこともあります。

私はあんなことをしてしまったのに、それでもそう呼ばれるんですから。」

「・・・申し訳ない気持ちもありますが・・・いたっ」

不本意な発言が飛んできたので、エルスをはたく。

軽く涙目になっていた、思ったより力が強かったようだ。

「いつまで済んだことを気にしている。」

それについてはもういい、それよりもこれからを見る。

申し訳ないと思うのなら、言葉に出さずに黙って君が成したいと思ったことの糧にしる。

過去は囚われるものではなく、乗り越えるものだ。

強くなりたいのならそれを忘れずにいることだ、分かったか？」

「あ、・・・はい！」

一瞬キョトンとした後、素直な笑みを浮かべる。

これでようやく吹っ切れたようだ。

「ところで、何で俺だけにいろいろと教えてくれるんだ？」

まさか、ただの嫌がらせじゃないだろうな、3人の嫉妬を俺に向けるっていう。」

すると、今度はレオンが当然の疑問を口にする。
いつもなら「当然だ。」と答えるところなんだが。

「友人」だからだが。」

ここはひねらずに直球で答えることにした。
すると、全員が固まる。

「「友達」は対等だ。

だから俺の考えてることで、共有すべきだと思った考えを話させてもらった。

何かまずかったか？」

そう言ってレオンの方を向くと、目頭を押さえて蹲っていた。
今回はそんな気はなかったんだが、面白いからいいか。

「そうになると、僕たちは貴方に信用されていないということでしょうか……？」

すると悲しそうな声が聞こえてきた。

周りを見てみると、3人が同じような悲しみの表情を浮かべていた。

「そういうことではない。

だが、あくまで今の君らの立場は「従者」なんだ。

そうになると、確証のないことは言えない。

今回は下手したら他人の人生に関わるようなことだから、尚更だ。

」

説明はしたが、納得しきってはいない様子。

だから言葉を付け加える。

「つまり、これからの付き合い次第ということだ。
もしかしたら、「友達」どころか「弟子」や「恋人」なんかにも
なるかもな。

「頑張れ。」

「そうなんですか!？」

「あう……。」

「が、頑張ります!！」

上からクルス、エルス、ルルの言葉。
3人ともあつさりと機嫌を良くした。
何とも扱いやすい。

(とはいえ、嘘というわけでもない。
もしそうなったら、色々と覚悟をしなければならぬ。
特に、「恋人」となると。)

心の中で、自分の言葉の責任について考える。
もしそのような関係の人間が出来るとなると、覚悟を決めておく必
要がある。

発言には、責任が伴うものなのだから。

「ん?、ルル、何だ?」

そこで、ルルがこちらを見ていることに気付く。
少しためらっている様子だったが、口を開く。

「あの、さっきから何を気にしていらっしやるのですか？」

自分が考え事をしていることを気付かれたことに驚く。

「察しがいいな、その通りだ。」

「・・・ふむ、これなら話してもいいだろう。」

目を瞑って気配察知を全開にする。

どうやら、半径2km以内で自分たちに特別な注意を払っているものはいないようだ。

辺りが夕方で人どおりが多いせいで、彼らの美貌が目立たなくなっているおかげだろう。

歩きながら、彼らと向き直る。

「さっきの会話では話さなかった可能性について考えていた。」

そう言うと、全員が首を傾げる。

「一番厄介な可能性を考慮しておくのが俺の癖だね。それだったら面倒だなー、と。」

「それって一体・・・？」

エルスが問う。

「黒幕が、デルト王国自身だった場合。」

「ええっ!？」

「それは無いですよレイさん！」

「そうですね。」

それでデルトに何の得があるというんですか？」

「ただ他の国との仲を悪くするだけだろ。」

そんなことしないって。」

クルスが驚愕し、ルルが否定し、エルスが疑問を投げかけ、レオンが纏める。

大きな声が上がったために、視線が集まるがすぐに離れていった。その反応も無理ない、まともな考え方の人間ならばありえないことだからだ。

とりあえず、利点について説明する。

「国が崩壊する。」

それが利点だ。」

全員に何とも言えない顔をされる。なので、解説を加えることにする。

「どこの国だろうと、1人は破滅願望を持つ馬鹿はいるものだ。」

そいつがそれなりの権力を持っていて、今回のことをしでかした。」

一応辻褄はあってるだろ？」

「それは合ってるのは辻褄だけで、ただの妄想ですよ？」

絶対にありえませんか。」

ルルに呆れたように返される。

そうだよな。

だから、問題なのはもう1つの場合だ。

「その通り。」

だからこれはまず無視して構わない。

問題なのはこっちだ、国の上層部に裏切り者がいる可能性。」

この可能性に、皆は動きを止めて表情を暗くした。

「・・・どうした？」

そんなに気にするほどのものか？」

「・・・俺たちの国、クリミルはまさにそんな感じで滅んだからな。」

「腐った屑貴族たちのせいで、私たちの国は亡びました・・・裏切りとは違いますが、いえ、むしろ裏切りより性質が悪いかもしませんね。」

会議の場で、誰も建設的な意見を述べなかつたんですから。」

「仕方ないですよ。」

屑には屑の考え方しか出来ないんですから。

それにあれらはほとんどが殺されたと聞いています。

いい気味ですね、まったく。」

「・・・・・・」

レオンが苦々しげに、エルスが悔しそうに、クルスが爽快そうに、そう言い、ルルは無言で身体を怒りで震わせていた。

（どれだけ酷い連中だったんだか。

クルスにさえここまで言わせるとは。(

その話の内容にある違和感を覚えたが、もう済んだことだったので無視する。

そして、レオン以外の3人を抱きしめる。

「わわっ！」

「レイ様!？」

「い、いきなりなんですか!？」

慌てる3人に微笑みながら言葉をかける。

「そんなに気にするな。

君らは今俺の仲間なんだ、そんなクズどものことは忘れる。

そして、そんな奴らを思い出して腹を立てるよりだったらこれらを存分に楽しめ。

そのためだったら、できるだけの協力はする。

だから、そんな悲しそうな顔をするな。」

「・・・はい。(3人)」

3人とも少し目が潤んでいたが、泣くことは無かった。なので話を戻す。

「この考えの場合厄介なのは、裏に大きな存在がいるということだ。しかもその人物にとっては、一国と天秤にかけたとしてもそっちが大事な、途方もなく巨大な存在。

その場合、そいつはこの国をためらいなく滅ぼすだろう。」

さらに厄介なのは、その黒幕が国ではなく組織だった場合だ。その場合は組織の特定すらできず、ただやられっぱなしになる可能性が高い。

さらに、国をどうこうできるほどの力を持っているならば、多数の国家間で大きな力を保持しているとみて間違いない。

他の国でもすでに大きな影響力を持っていることだろう。

どうだ、どれだけ厄介か理解できたか。」

そう問いかけると、皆神妙な顔付きで頷いた。

「だが、それは可能性としては低いんじゃないのか？」

「そりゃそうだ。」

それほど巨大な存在がそうポンポンいたら世界なんかとつくに終わってる。

最初に言っただろ、あくまで「一番厄介な可能性」だと。

だから、それほど気にする必要はない。」

そういうと、あからさまにホツとする皆。

（だが、可能性は0ではない・・・）

それを口に出したりはしなかったが。

「ところでレイさん、覚えてますか？」

「？、何をだ？」

クルスが突然問いかけてきた。

「忘れたとは言わせませんよ？
僕の頼みを1つ聞いてくれると言ったじゃないですか。」

「ああ、そのことか。」

確かに言ったな、あのトカゲさん改め「星銀竜」と戦う前に、その場の勢いみたいなものだったが、もちろん約束は果たす。

「ああ、構わん。

何が願いだ？」

俺はてつきり、戦い方を教えて欲しいとか、弟子にして欲しいとか、その手のものだと思っていた。

だが、クルスの頼みは完全に予想外のものだった。

「にいさま、と呼ばせてください。」

「・・・は？（俺含めた4人）」

思わず、俺でもポカンとしてしまった。
ただ呼び方を変えたいだけ？

「いや、それなら別に頼みを使わなくてもいいぞ。

ふつうに呼べばいいだろ。」

「え、いいんですか？

そんなこと言っちゃって。」

なんだろう、クルスの後ろに黒い尻尾が幻視できる。

「む……、ああ、構わん。

だから、願いは別のことにしたほうがいいんじゃないか？」

（なんだろうな、取り返しのつかないことを言ってしまったような気がする。）

そんなことを思ったが、時すでに遅し。

もう言質を与えてしまった。

クルスは黒い笑みを浮かべて言ってきた。

「そうですか、では、私たちに戦い方を教えて頂けませんか、義兄様。」

「……なあ、今君はどんな字を使った？

背筋に悪寒が走ったんだが。」

しかも、レオンは笑いを必死に堪え、エルスとルルは顔を真っ赤にしている。

「やはり、貴方は色恋に関することではその頭脳は上手く働かないんですね。」

「ご想像にお任せしますよ、僕がどんな字を使ったのかは。」

まあ、後ろの2人の様子を見れば分かると思いますが。」

「……ああ、そういうこと。」

やってくれたな、クルス……。」

ここでようやくやく意味に気付く俺。

つまり、彼は姉の援護射撃をするためにその呼び方をしたかったと。

(ホント、気付くのが遅いぞ俺。
 どれだけ時間かかってんだ。)

まあ、もうそうなってしまったものはしょうがない。
 これからなんとかして慣れるようにしよう。

「分かった、君はこれからそれで呼べ。」

それと、戦い方については明日、ディック殿から本を見せてもら
 う時に皆に教えるよ。

俺のやり方はまず知識から入るんで、な！」

最後の掛け声とともに、堪えることを止めて爆笑していたレオンを、
 持っていた袋で上から叩き潰す。

中身はあれの素材、つまり金属。

それを思いっきり叩きつけたのだ、まず無事では済まない。
 さらにかなり派手な音がしたせいで、仲間はおるか、周囲の人間も
 残らず退いていた。

音から中身が金属だと気付いたようだ。
 泣き出している子供もいる。

「ふう、すっきりした。」

そして外道な発言をする俺に、一斉に非難の視線が集まる。
 だが気にしない。

「おい、早く起きろ。」

音の割にはあまり効いてはいないだろ。」

そう言うと、レオンが何事もなかったかのようにあっさりと立ち上
 がる。

驚く人々。

「・・・なんだそれ？」

本当に金属なのか？」

驚いているレオンに満足する。

「面白いだろ？」

俺の知る限り金属の中で一番硬いののに、この特性のおかげでお前は気絶すらしなかつたわけだ。

これならば、いい武器が造れると思わないか？」

「ああ、確かにな。」

となると、これからお前はマーカスのところに行くのか？」

あそこには鍛冶場があるからな。」

「そういうこと。」

君らはこれから自由に動いてくれ。」

金は渡しとくから、買い物でもしているといい。」

そうして俺は袋から金貨一枚を取り出して、袋をレオンに渡す。

女性陣は俺に何か言おうとしていたが、クルスに止められていた。それだけならばいいのだが、クルスが女性陣と会話するにつれて、どんどん女性陣の顔が輝いていく。

(君は今度は何を企んでいる・・・?)

嫌な予感しかしないが、俺としては折れたナイフの代用を早く用意しなければならぬ。

後ろ髪引かれる思いがしながらも、その場を後にしてマーカス殿の

武器屋へ向かう。

s i d e ? ? ?

目を眺めていた。

書類仕事の最中に見ると、心が洗われるような心地よさがある。
書類の束の重圧からしばし解放されて和んでいると、ノックの音に
現実に取り戻された。

「入ってくれ。」

「失礼します。」

私が許可すると、若い男が入ってくる。

金髪の髪を短く切りそろえた、隙のない痩身の男。

私が活動を始めた当初から共に歩んできた、腹心の1人だ。

「?、どうした。」

男の顔には、私でなければ気付けないほどの微かな、悔しさが伺えた。

この男ならば、この程度の表情の変化でさえ驚きに値する。
なにせ、老若男女100人を眉1つ動かさず皆殺しにできるほど冷
酷なのだから。

「・・・私が中心となって動いていた、デルト王国での計画に支障
が発生しました。」

ルツソの街攻略のために用意していた強力な魔獣が、10日前に
討伐されたそうです。

これが詳細になります。」

差し出された書類を受け取りながら、苦笑する。
成程、不機嫌にもなるだろう。

こいつは計画通りにいかないことを、異常に気にするからな。
しかし、それを読むと私は驚愕した。

「・・・あれらを1人で仕留めたというのか？」

ブレイクリザード
「岩砕竜」だけならともかく、あれが居たというのに。」

素直な感想を口にする。

「岩砕竜」だけならば、難しいがBの中位程度の實力を持つものな
らば、急な遭遇でもなんとか倒せるだろう。

だが、もう一体はそんな生易しいものではない。

あれは例えAランカーであっても、相性が悪ければ手も足も出ない
こともある。

その硬さはあらゆる攻撃を弾き、その力は一撃で地形を変える。

ストラリザード
「星銀竜」とは、その知能の低さからランクこそBではあるが、下

手なAランクの魔獣より余程脅威的な怪物なのだ。

それを1人で倒すなど、とても信じられるものではない。
しかも。

「それを為したのがただのGランカーだと・・・
悪い冗談にも程がある。」

最高 最低
AをGが倒すなど、どんな夢物語だ。

だが、我々の諜報員の優秀さは私が一番良く知っている。
間違いではないのだろう。

「それを読んだところ、実際に倒したところを見てはいないよう
ですが、その前に見せた実際の実力と、周囲に他にそれを為せそう
な者が存在していないことからしてまず間違いないと判断したそう
ですね。」

我々の人員の報告でなければ、私は信じられませんでした。」

「私もだ。」

しかしそれが事実である以上はどう言ってもしょうがないか。
それにある意味良かったともいえる。」

私が笑みを浮かべると、追従してくれる。

「そうですね。」

あれは今回の策を補強するためのものでしかありません。
残りの2つは依然として順調に進行しております。

近いうちに、成ることでしょう。」

私はその答えに、満足げに頷く。

「そうだな。」

それに、これが失敗したことで、大国間の仲が悪くなることも十
分に考えられる。

今回の犯人として我々ではなく、エリュシオンとベグニスが挙げ

られて、双方と険悪な関係になってくれれば申し分ない。」

今回の件が失敗して、エリユシオンやベグニスが犯人として挙げられることはあっても、我々が挙げられることは絶対はない。どの国も、誰も、我々を知らないのだから。

これからのことを考えたら、むしろこれで良かったとさえ言える。大国が争ってくれれば、それだけ動きやすくなる。

「・・・そうですね。」

だが、この男は不満そうだ。

これさえなければもっと活躍できるだろうに。

だが、それがいいところでもあるので、直すことはしない。

「それで、この・・・レイという男のその後はどうなってるのだ？
監視しているのだろう。」

当然「はい」と答えると思っていて、この問いは形式的なものにすぎなかったのだが、予想外な答えが返ってきた。

「それが、監視出来ないそうです。」

「・・・は？」

「しない」、ではなく「出来ない」。

監視なんて防げるようなものではないのだから、言ってる意味が分からない。

「監視しようとする」と必ず目が合い声をかけてきて、ひどく遠回しに脅してくるそうなのです。

むきになつて、1 kmほど離れた状態から見失うこと前提で監視した場合でも同様だったとか。」

「……………」

言葉がでない。

どこの化け物だそいつは。

というかそれでは、ばれてるということではないか。

「しかし、どうやらばれているというわけではなく、依頼を受けた時の3人を徹底的に警戒しているだけのようなのです。

証拠に、その者だけではなく3人すべてに対して同じことをしているようですから。」

と思つたら、まさにそのことを教えてくれた。

「…………その方が余計に恐ろしいがな。

つまりその男は、監視されているのではなく監視しているということではないか。

しかも同時に3人も。」

そんなことが出来る「人間」が居るのだろうか？

居たとして、どんなことをすればそんなことが可能になるのか。

「あいつはその辺りのことはしっかりしてますからね。

まず、ばれてるということは無いでしょう。

ばれたとしても、「憑き人」としての力でどうにかすると思いません。」

それはそうなのだが……

「確かにそうだ。」

だが、あの男は精神面に問題がありすぎる。

この前など、力を使って何をしたか忘れたのか？」

あの男のしでかしたことは、とても人間がすることではない。

「ただ、一国を滅ぼしただけでしょう。」

それにすでにあそこは末期でした。

別に滅んで困るような国ではありません。」

「・・・その通りではある。」

だが、その動機が異常なのだ。

どこの世界に女1人を手に入れるためにその国を滅ぼす奴がいる。奴を放っておいたら次に何をしでかすか分からんぞ。」

ただ1人の人間を手に入れるために、その人間の所属する国を滅ぼす。

それをあの男はなんのためらいもなくやったのだ。

その結果、あの国では約7000の死者がでた。

犠牲を容認する人格だと自覚してはいるが、私でも流石にそれを許せるほど冷酷ではない。

我々の最終目的を考えれば尚更だ。

その点は流石にこの男も理解してはいるようで、何も言わずに黙っている。

ただ、それは良心からではなく、私へ与える印象を考えた結果のようだが。

「まあ、デルトでの計画はもうすぐ成るのだ、今更不確定要素が出てきたところで問題ない。」

その男を警戒する必要があるだろうが、考えすぎることはあるまい。」

「・・・そうですね。」

では次の報告ですが、スルスで妙な動きがあるようです。」

「妙？」

「はい。」

報告では「

結果から言えば、この時の私はレイという男を甘く見すぎていた

そのことを理解するのは、ずっと先の話。

奴が、顔を自由に変えられることを知ったときだった。

30話 黒幕（後書き）

余裕があり、面白いと思ってくだされば、是非評価を

31話 知識は大切(前書き)

話が動くのは次回になりますかね。

思いつきり主人公に遊んでもらう予定です(笑)

しかもレオンは使わずに

最近、他の作者さんの作品に触発されてしまい、今のエフルートで現代学園魔法ファンタジーやりたいなと思ったりしてます
まあ書くとしても、それはこれが終わるか一段落した後ですけど

31話 知識は大切

s i d e クルス

周りを書物に囲まれた一室。

その蔵書量は裕に10000を超えているだろう。

さすがネストキーパーの所有物だけあって、それらは綺麗に整理整頓され、誰もが利用できるような図書館には置けない代物も多数あり、義兄様はひどくご機嫌だった。

これもおそらくこの人の狙い通りだったのだろう、つくづく恐ろしい人だ。

今その部屋の中に僕たちはいる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

誰も何も言わない空間に、義兄様の本をめくる音だけが響く。

その速さは尋常ではない。

ほんの十数分で読み終え、次の本へとどんどん手を伸ばしていく。

始めは皆、そんなやり方で頭に入るとは思わなかった。なので懐疑的な視線で見えていたのだが、質問とかをして確認してみるとそんな考えは吹き飛んだ。

重要な部分はすべて暗記出来ていたのだ。

それを知った僕ら、その中でも一番勉強していた僕は、今までの人生の苦勞を根本から否定された気がして、ひどく落ち込んだものだった。

今はこの人のやることだと割り切っているが。

それに、何でそんなことが出来るのかを聞いた時、彼はこう答えた。

「例えばこういった研究論文なんかの著者つてのは、大体自分の功績を残すために虚偽の報告をしているものだからな、この時代の間は。」

その中から真実を抜き出してしまえば、実質の覚える内容は三分の一ほどなんだよ。

だから、読むのは早くて当然だ。」

あまりにもあっさりと言うのでつい頷いてしまいそうになったのだが、それには虚偽の情報と真実の情報を的確により分ける必要がある。

普通の人間には無理だ。

僕らの中で、この人の性格以外の面は人外として扱うことが決定した。

・・・性格も、「一応」人間っぽいというだけだが

それはさて置き、僕らがこの部屋に入るようになってから10日が過ぎていく。

その間僕らが何をやってるのかというと・・・

「そろそろどうだ。」

「覚えられたか？」

「僕は半分ほどですね。」

「私も同じく。」

「私は7割ほどでしょうか。」

「……………」

僕は義兄様から配られた数枚の紙とにらめっこしながら、それぞれ答えた。

僕、ルル、姉様の順に。

無言を貫いているのはレオンさんだ。

渡された紙には、手書きとは思えない精密さで人体構造が細かい解説付きで載っている。

その内容だけでも、世界の学者や医者卒倒させられそうな代物だ。

これを彼は、初日に絶対に他の人間に見せないと堅く誓わせた上で僕たちに配った。

「これを見て、どうすればより強くなれるか考えることだ。

戦いを教えるとは言ったが、俺が提示するのは言わばただの白紙の紙だけ。

人から与えられた強さに一体どれだけの価値がある？

そんなものは砂上の城よりも脆い偽りの強さだ、自分の力で得た強さを持つ本物に会えば、一瞬で崩れ落ちるような、な。

だから自分で考えろ、どうすれば強くなれるのかを考え、自力で強くなれ。

俺が渡した白紙の紙に、自分で自由に絵を描いていけ。

そうすれば必ず前に進めるはずだ。」

そう言つて義兄様は、本を読み始めた。
こちらに注意を向けるのは、分からないところを聞いた時や、どこまで学習が進んでいるのかを確かめる時ぐらい。
それ以外はずっと本を読んでいる。
と言つても特に冷たいとかそういうことは無く、時々見せる絶妙な配慮で空気を過ごしやすいものへと変える。
すごいの一言しか言えない。

「・・・なあ、なんで俺のだけ他の3人と違うんだ？

こいつらは身体の部位の名前がついてるのに、俺にはないんだが。」

と、レオンさんがそんなことを言いだす。

そして一斉に呆れた視線を向けられる、もちろん僕からも。

「・・・お前、それを今更言つのか？

もうこれ初めてから10日だぞ。

何も言わないものだから、てっきり理解しているものだと思つてたんだが。」

その言葉には反論の余地が全くない。

確かにレオンさんの紙には、僕らのものにあるような内臓や筋肉の名前が無い。

そこには、1とか2とかの記号が書き込まれている。

そのことを最初に指摘していたのなら呆れるようなことは無かつたのだが、10日もしてから言つのはどう考えてもおかしいだろう。

「う、そうなんだが、お前のやることだから何か意味があるんだろう？

だからなかなか突っ込めなくてだな、こんな遅くになってしまったんだよ。

だからそんな可哀想なものを見る目で俺を見ないでくれ・・・」

心底辛そうにそう言う。

だが、言われてみたら納得できる理由でもある。

1人だけ違うものを渡されれば大体の人は同じことを考えるだろう、特にこの人から渡された場合は。

「まあ、確かにな。

理由としては、お前の場合は部位の名称を書いても意味が無いからだ。」

「なあ、それって俺が馬鹿って言いたいのか？」

俺が馬鹿で覚えられないと思ってるからこんなことをしたのか？」

義兄様が簡潔にそう言うと、レオンさんが額に青筋を浮かべる。

その言葉に失礼ながら、僕は納得してしまっていた、そうかもしれないと。

この人は昔からの覚えが他の人より少し悪く、暗記ものは苦手だった。

名誉のために言うておくが、あくまで比較的であり、決定的に悪いわけではない。

だが、レオンさんを知っている僕たちに言わせてもらえば、これだけの量を暗記するのは不可能だと断言できる。

本人も義兄様が言った後、すぐにその考えに至ったことから、どうやらあらかじめ予想していたようだ。

しかし、この人にはどうやらもっと深い考えがあったようだ。

「それもないとは言わんが、お前の場合は名前なんか憶えても完全

に無意味なんだよ。

その紙を読んで、そういう働きをする器官があるんだ、ということとを漠然と理解するだけで十分だ。」

「どづいうことだ？」

「この前に依頼で分かったことだが、クルスとルル、そして特にエルの3人は戦闘を理性的に行っている。

ここであすればこうなるから、こうした方がいい、とかな。

だから、身体の構造は細かいところまでしつかりと覚えていた方が後々のためになる。

だが、お前は違う。

戦いの合間こそ会話ができるくらいの理性を保ってはいるが、それ以外は完全に本能に頼って戦っているんだ。

そう言う奴は詳しい知識を持ってたとしても戦闘の役には立たんよ、戦闘中は何も考えていないんだから。

だが漠然と理解しているだけなら、無意識下でその内容を思い出して行動できる。

お前にとつての理想的な姿は、恐らく本能と無意識の思考の融合。考えることをしないことで1つ1つの行動が他人よりも格段に速くなり、その上で闘気の無意識での効率的な強化が出来る、そうなればお前に敵はいなくなるさ。

ま、あくまで俺の勝手な妄想だがな。」

「………そ、そうなのか……」

本当に凄いやお前は……」

義兄様の言葉に誰もが尊敬の念を抱く。

あの時こちらを見ていてそこまで細かく観察されていた上に、その戦い方にあつた教える知識の内容を考えていたなんて。

そして。

「ちなみに部位名が書かれてない理由の比率だが、お前の頭の悪さが9割、さっきのが1割だ。」

「ほとんど俺が馬鹿なせいじゃねえか!？」

「冗談だ、本当は頭があれだからが6割だよ。」

「それでも過半数!？」

しかも微妙に現実味のある数値だし!？」

いや、俺はそんなに頭は・・・悪く・・・ない、よな・・・?」

「・・・お前、自分で認めてるようなものだろうが、その言い方は自覚が無いよりはましだがな、周りも目を合わせないようにしてることから察しろ。」

皆をそんな哀れを誘う視線で見るな。」

「・・・グスッ」

レオンさんを弄るのも忘れない。

グズリだした彼は、何とも哀れを誘うオーラに包まれていた。

何故か笑ってしまいそうになってしまったが、それは流石に自粛した。

と、そこで義兄様が突然立ち上がる。

この100日で一度も見せていない行動に、皆が疑問顔をする。

「大体覚えてきたみたいだから、そろそろ知識の応用例を見せておこうか。」

庭に出てくれ。」

そう言って歩き出した、レオンさんを片手で担いで。僕は突然の事態に驚いて行動が遅れたが、直ぐに慌てて動き出した。

さっきの書斎はディックさんの家であり、僕らはそこを一部を除いて自由に使わせてもらっている。

今立っている場所、庭も自由に使える場所その一つだ。

「レオン、テキトウに腕を強化してみる。

今まで通りに。」

そう言われると、レオンさんは首を傾げながらも素直に従い、右腕が光に包まれる。

闘気による強化が行われている証拠だ。

義兄様は満足気に頷くと右腕を掲げる。

てっきり闘気で強化するものだと思ったのだが、そんな様子は一切ない。

不思議そうに見ていると、口を開く。

「じゃ、レオン。

思いつきり地面を殴ってみる。」

表情が戸惑い一色だが、素直に彼は地面を拳で打つ。

「ふんっ！」

ドゴッ

大きな音がして、地面に拳が10cm程めり込んだ。

それなりの威力だが、本気だったなら余裕で陥没くらいはいったことだろう。

その様子を見て、今度は義兄様が動いた。

「じゃ、今度は俺がいこう。

よっ。」

そんな軽い掛け声とともに放たれた拳は

ズドムツツ

直径2メートルほどのクレーターを作り上げた

「……………」

「まあこんなもんか。

身体の構造を理解すれば、こんな芸当も可能になるわけだ。」

「いやいやいや！？」

どう考えてもおかしいですよ、何で強化してないのにこんなことが出来るんですか！？」

僕は慌てて言い募る。

光ってないのだから強化はしてないはず。
なのにこんなことをやらかしたことに、誰もが冷や汗を流す。
すると、なんでもないことのように言い放つ。

「さっきの紙でいうと・・・これとこれとこの筋肉を重点的に強化したんだ。

筋肉は皮膚の下の組織だから、闘気で強化しても光が漏れたりすることはない。

だから、はた目には強化してないように見えただろうが、実はちゃんと強化してるんだよ。

と言うよりだ、君らは俺が戦う時の様子を見てなかったのか？

あの時も同じで光が漏れてなかったはずだが。」

(い、言われてみればそうでしたが、あの時は貴方が何もかもがおかしすぎて、そこまで目が行かなかったんですよ！)

ちょっとしたパニックに陥っているために、かなり失礼な思考をしよう。

「そ、それにしたってあそこまでの威力が出るものなんですか？

庭が悲惨なことになってますが・・・」

姉様が顔をひきつらせながら言う。

その言葉の通り、流石ネストキーパーのお屋敷の庭だけあってかなりきれいに整備されている庭だったが、その中心が陥没しているために色々と台無し、さらに飛んだ岩や礫なんかで植物が滅茶苦茶になっている。

それを見て彼は一言。

「別にいいじゃないか。」

自由にしていって言ってたんだから。」

「その自由はそういう自由じゃありません（無いだろ）！！」

とんでもない発言に思わず怒鳴ってしまったが、それは誰にも責められないことだろう。

「どうするんですか！

今はあの人たちは仕事で出て行ってますが、戻ってきたら間違いなくどやされますよ！？」

ルルが涙目でそう言う。

ディックさんとセフィリアさんの2人は、今ネストに居る。

留守を他人に任せるなんて不用心だと人は言うだろうが、それはしよんがないだろう。

この人にかかれば、例え監獄だろうと自由に出入りできるのだから。まあディックさんは、僕らのことを信用しているのかそのことをおくびにもださなかったが。

・・・セフィリアさんの部屋に入ったら、己を生贄に捧げて悪魔を召喚しても殺してやると脅されはしたが

とまあ脱線してしまったが、とにかくいくらあの人信用して任せたいといっても、このようなことをされて怒らないような人間はいないだろう。

ルルが心配してるのはそこだろう。

しかしこの人にはどこまでも常識は通じないようだ。

「冗談だ。

まあ、これは後でちゃんと直しておくから心配するな。」

「・・・貴方は出来ないことがあるんですか？」

庭を直すって相当な知識と経験がないと無理ですよ。」

僕はそう言ったが、この人がこう言うということは本当にどうにかしてしまふのだろう。

だからこのことはもう気にしないことにした。皆もその方向で決定したらしい。

「それでさっきのなんだがな、あれに使った闘気の量はレオンが使ったのとほぼ同じ量だ。

あ、一応言うておくが、ここまでの惨状を作り出せたのは地面が脆かったからだからな。

岩場なんかではこうはいかん。」

そんな僕らの様子を理解して、彼は先ほどの解説を再開する。

その内容に僕はもう何度目かにならない驚きを覚える。

「俺の使う量と大体同じって・・・

ただ身体の構造を理解するだけでこんなに違うのかよ。」

啞然とした様子で言うレオンさんに、彼はとても満足そうな笑みを浮かべる。

「君らの一般的な使い方では、闘気で腕という大きいものを強化するが、それでは範囲が大きく無駄に体力を消費する。

だが、身体の構造を理解して、必要最低限の部分のみを強化することが出来れば、不要な分をさらなる強化に使えるわけだ。

仮に、お前のさっきの強化に使った闘気の量を10とするのなら、俺のやり方ならば3ほどで済む。

戦いにおいて余分な体力を消耗するとどうなるかなど言うまでもない。

これは魔法の場合は関係ないように思うかもしれないが、魔法でも構造を知ればさまざまな応用が可能になる。

これが俺が君たちに与える白紙だ、これをどう使い何を書き込んでいくかは任せるよ。」

その説明に僕は心が沸き立つのを感じた。

それならば、僕は今より比べものにならないほど強くなれる！

渴望していた強さが得られるのだ！

それで嬉しく思わないほうがどうかしている！

「ただし、これだけは言っておこう。」

しかし、その浮かれは次の言葉で治まった。

「もし仮に、仮にだが、君らがこの技術を使い間違った方向に進もうというのなら、俺は責任を持って君たちを地の果てまで追い、殺そう。」

その言葉に、僕と同じように心中で浮かれていたのだろう、嬉しそうにしていた皆がはっとする。

淡々とした、冷静そのものの声。

だが、それを言ったこの人の顔は真剣そのものだった。本気。

そう皆が信じ込むには十分だ。

皮膚が切れてしまいそうなほど重い空気が辺りを包む。

冷や汗が止まらない。

誰も動けない。

一体どれだけそうしていたのだろう。

数時間の気もするが、数秒に気もする。

突然その空気が霧散して、義兄様が笑みを浮かべる。

「だから、君らは間違っな。

今の思いを大事にし、驕らず、焦らず、前に進め。

そうすれば何も問題ない。」

さっきまでの空気を作り出していた人間とは思えないほど優しげな声で諭してくる。

その変わり身の速さに皆ついていけずにいた。

「さて、そういうわけで君らはまた勉強を頑張ってくるといい。

早く覚えればご褒美をあげよう。

頑張れ。」

そう言つと、彼はどこかに行こうとする。

「どこに行くのですか？」

「いつも通り、マーカス殿の武器屋だ。

今日こそ完成させてやるよ。」

僕が聞くと、楽しそうにそう返してきた。

まださっきの空気から立ち直れていない僕らは、それを見つめてい
ることしかできなかつた。

「……行つちやいましたね。」

そつつぶやく。

「まあいいじゃない。」

私たちには今やるべきことがあるんだから、そつちに集中しまし
よう。」

「そうですね、さつさと覚えてご褒美は私がもらいますよ、エルス
さん？」

「あら、私の方が暗記してる量は多いのにすごい自信ね？」

姉様が苦笑しながら手を引いてくる。

その言葉にルルが賛同し、姉様と軽口をたたき合っている。
レオンさんはその様子に微笑みながらついていく。

僕も、それについていく、誰よりも早くあれを覚えて強くなること
を決意して。

（あの人に殺されたくはないので、驕らずに、ね。）

そんなことを考えながら、書齋へと皆で歩く。

そして、途中で気付いた。

庭、壊れたままでは？

32話 苦手（前書き）

遅くなりました

さらに、今回話が長くなりそうだったんで2分割することになりました

ほのぼのとした場面を書いてみたかったです

次話で話が進みます

次はできるだけ早く投稿するんで、どうかお許しください

32話 苦手

あれからさらに10日、つまり依頼を終えてから20日が経過したことになる。

俺はその間、武器の作成、知識の吸収、仲間の指導の他にも力を入れていたことがある。

それは人助けである。

はつきり言っただけの柄ではないのだが、これにはちゃんとした目的、人望を集めるため、というものがある。

人に好かれるというのは重要なことだ。

好かれている人間と、嫌われている人間では、何かをした時に与える印象に天と地ほどの差がでる。

例えば、目の前に1人の老人が居たとする。

その人は重そうな荷物を持っていた。

さてここで、その荷物を持って上げようとしたらどうなるだろうか。

好かれている人間ならばそれは素直に受け入れられるだろう。

だが、嫌われている人間ならば？

答えは簡単、絶対に警戒される。

下手したら、厚意で申し出ているにも関わらず持ち物を盗もうとしてるとされ、警備に突き出される。

人望とはあつて困るものではない、だから俺は率先して人助けをするようにしている。

と言っても、慈善事業を行うほど人が良くはないので、最小限の金や金品は受け取るが。

もし無償でやったら、それは相手に何か企んでいるのではないかという無用な警戒を与えるし、純粹な厚意であり意図はないと認識されるようになったとしても、そうなると今度は俺を利用しようとする

るものが現れるようになるだろう、そんなことは御免だからだ。
ネストの冒険者にも、親切に相談にのったり、得た知識を用いて軽く講義のようなことをしているため、今ではこの街の冒険者や民の間では、俺たちはかなり人気者になっている。

初めに徹底的に恐怖を植え付けたため、いきなり親切にされたことに困惑するものばかりだったが、あの時の俺と親切な時の俺の大きな落差により、あっさりと皆好意的になっていった。

さっきは嫌われている人間は変な邪推をされると言っただが、俺の場合は嫌われているのではなく畏れられているので、そんなことはなかった。

嫌われてるならば相手に反撃を許してしまうが、畏れられているならばこちらが一方的に行動できるからだ。

いきなり親切にされて混乱してるうちに、さっさと俺の厚意を心に植え付けさせてもらった。

強引だが、損をする人間はいないので構わないだろう。

もっとも、そんなことをすれば俺を軽く見てちよっかい、具体的にはエルスとルルに粉をかけようとするなど、をかけてくる人間がいる。

当然そういう輩には断固とした手段を取りさっさと消えてもらうようにしている（殺してはいない）。

俺がただ優しい人間ではないということの効果的に示すことが出来るので、実に都合がよかった。

それなりに苦労はしたものの、今ではなかなかの成果を上げることが成功している。

さて、何故俺がいきなりこんなことを語っているのかと言つと。

今、そうしておいて良かったと心の底から思っているからだ。

朝と昼の境、皆でネストへの道を歩んでいる。

その中で俺は、顔が赤くなることを抑えられないでいる。

普段ならば気にしない周りからの視線が、非常に痛い。

周りの目は、エルスに向かい、ルルに向かい、そして最後に俺に向かう。

そして皆、何か納得したような顔をするのだ。

声高に叫びたい。

彼女らの恰好は、俺の趣味ではない！、と。

しかしこのような状況では、そんなことをしても逆効果である。

余計に誤解を深めかねないので、黙っているしかないのだ。

(油断していた・・・)

後悔の念が心を満たす。

それと同時に、俺の目がこの事態を引き起こした張本人に向かう。つまり、クルスへと。

「そんなに怖い顔しないでくださいよ、目の保養になりませんか？」

「ならん。」

むしろ目の毒だ。」

笑顔で言ってくるクルスの言葉を、微塵もためらわずに切る。

似たようなやり取りは、もう何度も繰り返し返している。

その度にクルスには笑顔で受け流される。

それは普段俺が使っている手なのだが、相手に使われるとこれほど厄介なものだとは。

いや、分かっていたからよく使っていたのだが、だからこそ性質が悪い。

もう何度目か分からない溜息を吐く。

唯一の救いは評判を高めていたことにより、周りから微笑ましいものを見る目で見られることはあっても、否定的な視線を送られることはないことか。

もし誤解を、いや誤解はされているようだから、いかがわしいような誤解をされていたらと思うとぞっとする。

改めて、自分のこれまでの素行のよさに感謝する。

と言っても、多分コイツはその辺も考慮に入れた上でこんなことをしたのであるが。

恐らく、周りから冗談ととらえられるまで俺の評判が良くなるのを待って居たために、ここまで遅くなったのだろう。

そしてここまでの間何もなかったことで、俺もネストキーパーとの話合いが終わった時に彼らが企んでいたことは、企画倒れになったのだと判断してしまっていた。

実に巧妙な男である。

まさか、俺が足元を掬われるとは。

彼女たちに再度目を向ける。

白い清潔感のある布地
そしてその穢れの無さを守るためにエプロンを着用
布の端にはフリルがふんだんに使われている
向こうの人間の、一部の者が異常なほどの熱意を向けるその服装
街中では間違いなく奇妙な服装であるのに、見た目の麗しさからか
不思議と違和感が無い。

彼女たちが着ているのは、紛うことなきメイド服である

早朝、俺は女性陣の部屋に来ていた。

前はレオンが担当したので、今日は俺。
最初のような賭けは、俺が10連勝したことで飽きたからもう止めた。

よって今は、一日交替の当番制なのだ。
ちなみに、レオンが担当した場合のあいつの致死率は堂々の8割である。
ここまでくるともう何かに憑かれてるんじゃないかと思える。
馬鹿だ。

ともかくそんなわけで今俺はここに居て、さっさと起こそうと思
まずはノックをする。

返事が無い。

再びノックをする。

返事が無い。

これをいつもは5回まで繰り返す。

多いと自分でも思うが、念のためだ。

そしてそれでも起きないときは・・・魔法を使う。

「振動」で目覚まし時計程度の音を起こすのだ、ここまでやれば流
石に誰でも起きる。

そして普段であれば、いつも魔法を使うところまで行くのだが・・・

「ど、どうぞー！」

今日は珍しく、というか初めてノックの段階で返事が来た。

こんな些細なことなのに、なにか感心してしまう自分がいることに
苦笑する。

・・・何故か、意を決した、というふうな返事であったことが気
になったが

まあそんなことはどうでもよかったので、返事が来たからには大丈
夫なのだろうと思ひ扉を開けて

すぐに閉めた

(おかしい・・・?)

妙な幻覚が見えた。)

困惑しながらも、今のは見間違いなのだと言い聞かせて再度開ける。

「あ、あの！」

レイ様どうぞ」

ドガンっつ

およそ扉を閉めたとは思えない音が響く。

とりあえず俺は深呼吸を繰り返す。

今のままだと、元凶に襲いかかってしまいそうだったからだ。

そうして落ち着いたので、呼ぶ。

「・・・これは、何の真似だ？」

クルス。」

「おや、何故僕だど？」

「貴様がそんなところで隠れて笑っているのをみて、これを仕組んだのがお前だと思わない奴はいまい。」

怒りから貴様呼ばわりになってしまった。

もう少し粘るかと思っただが、あっさりと廊下の角に隠れていたクルスが姿を現す。

次いでにニヤけたレオンも。

今すぐレオンでこのもやもやした思いを発散したい思いに駆られるが、自制する。

今は話を聞くことが先だ。

そんなことを考えていたのと、外見とは裏腹に動揺しまくっていたために、俺は情けないことに接近してくる2人に気付かなかった。

「うおお!?!」

そして見事な連携で、部屋の中に押し込まれる。直ぐに体制を立て直すのが、力のベクトルを変えることはできず、あっさり部屋の中へ入ってしまう。そして、メイド服という、嵌ってしまったら人として何か大事なものを失ってしまいそうな服を着た2人が目に入る。

「ごまじ (2人)」

「よし、それ以上言うなよ？」

「いったら俺は何をってしまうか分からんぞ。」

「もしかしたらこの街を消してしまうかもしれない。」

再び悪夢が繰り返されそうになったので、言い切る前に何とか止めさせた。

ちなみに冗談ではなく本気であった。

「それで？、何故そんな恰好をしている。」

「しかも何でよりによってそんな周りの劣情を煽るような服なんだよ……。」

「そう言うと、女性陣は顔を赤くした。」

「良かった、どうやら羞恥心を捨てたわけではないらしい。」

「向こうのメイド喫茶にあるようなスカートを短くした代物なので、抵抗なく着ていたら俺は彼女たちから離れていただろう。」

「とはいえ、その服装で顔を赤らめられると想像以上に可愛いのでやめてもらいたい。」

「いくら俺とて、決して色欲を持ち合わせていないわけではないので、完全に目の毒だ。」

「顔が赤くなるのを意志の力でねじ伏せる。」

「その、クルスがこれを着ればきつとあなたの気が引けるだろう、と。」

「それで私たちあつさり口車に乗せられて・・・」

ルルとエルスが順に答える。

「うん、確かにひけるな。」

「引く」ではなく「退く」だけだな。

君らも、俺がそういうものが嫌いなことは知っているだろうに、何故騙されるんだよ。」

「そ、そんな!？」

「クルス、話が違っわ!？」

俺が答えると、2人が悲鳴を上げる。

しかしクルスはどこ吹く風である。

「いえいえ、そんなことはありませんよ。」

義兄様も照れ隠しにそんなことを言うなんて酷いですね、そんなに動揺しているのにそんなことを言っても説得力はありませんよ?」

「ぐ・・・」

凶星を突かれたために思わず反応してしまっ。

はつきり言っつて、俺はこの手のあざといというか何というか分からないが、とにかくいろいろな意味で恥ずかしいものは嫌いだ。

嫌悪していると言っつてもいい。

だが、この2人に非常に似合っているというのもまた事実なのである。

動揺してしまったのはそういうことだ。

クルスの言葉と俺の反応から、2人の顔が羞恥と希望の色に染まる。

(求めているのは、褒め言葉なんだろうな。

しかし、服に縋ってまで容姿を褒めて欲しいものなのかね・・・?)

女心は多少分かるものの、恋心は理解できない俺としては理解に苦しむ。

まあ、言葉で済むのならさっさと終わらせてしまおう。

恥ずかしくてたまらない。

「・・・2人とも良く似合ってる、可愛いよ。」

少し迷ったが、当たり障りの無い言葉を笑顔で口にする。

そうすると2人は喜色満面になる。

まるで夢見る乙女のようなようである。

・・・いや、その通りなのか？

(何と言うか、この程度の言葉でここまで喜ぶとはね・・・)

これからはもっとこまめに褒めるとしよう、こんなことがまたあってはたまらない。(

今回のことを教訓にし、これからはもう少し感想を素直に表すようにしようと思心に決める。

だが、それは遅かった。

その後、俺はあれよあれよという間に主導権を握られ、この姿の2人とともに行くことになってしまった。

・・・まあ正直に言ってしまうえば、服のおかげで褒められたと勘違いした2人に、いつぞやの昼食時と同じように押し切られたただけなのだが

そして今の状態なわけである。

今は指導を終えた4人の慣らしの実戦のために依頼を受けようと、ネストへと向かっているところだ。

4人とも、自分なりの戦いかたの雛形のようなものを作り上げることには成功している。

それを試そうとしているのだ。

だからさっさと依頼を受けてしまい、戦闘用の服を着るように仕向けてしまえ、と考えている。

そう、考えていたのだが・・・

「お願いします！」

どうかセフィリアさんとの仲を認めて頂けませんか!？」

「駄目だと言っておるだろうが、糞餓鬼がっ！」

「さつさと還れ!！」

「そこを何とか!」

「聞こえんかったのか!？」

「さつさと土に還れ!」

「そして2度と甦ってくるな!」

「そ、そこまで言いますか!？」

今は早朝とはいかないものの、それなりに早いと言える時間だ。だというのに今ネスト内の受付で、まったく近所の迷惑を考慮に入っていない大声が響き渡っている。

暴言を吐いているのが、想像通りネストキーパーのディック殿だ。常人なら竦みあがってしまったらしい。そうなの剣幕である、流石だ。

だが、彼と口論?している人物は、それを見て冷や汗を流してはいない。耐えている。

こちらもなかなかの胆力だ。

その2人を見て、近くにいるセフィリアさんはうんざりとしていた。

「・・・なあ、あれ何なんだろうな。」

「さあ、俺に聞くな。」

「そうだな、お前に聞こうとした俺が完全に間違っていた。

まあ話から察するに、あの男がセフィリアさんに縁談を申し込んだんだろうな。

それをディック殿は断固拒否、話は平行線へ、そんなところか。」

「分かってるなら聞くなよ。」

まあいつものことだが。」

俺たちはそれを、ネストの入り口付近でどうしたらいいのか分からずに観察していた。

することもないので、レオンと軽口をたたき合いながら。

「しかし相当人目を集めていますね。

朝からあそこまで大声を出していれば当然ですが。」

「デイツクさんもあの方も、周りへの迷惑を考えてくださればいいですのに。」

「まったくな。」

「君らもだからな!？」

あれと同じくらい人目も引いてるし、俺にはあれと同じくらいの迷惑をかけてるからな!？」

「恥ずかしくてたまらないんだよさつきからさ!」

自分のことを棚に上げた発言に、思わず大声を出してしまう。

それと同時に、抑え込んでいた羞恥心がカマをもたげる。

確かにあれはかなり目立つ。

だが、正直あれよりもこっちの方が性質が悪いと思う。

何せ、絶世と言っていいほどの美貌を持っている2人がこんな服装をしているものだから、男の関心のみならず、恐ろしいことに女性の関心まで誘っているのだ。

それを率いているのが俺というのは既に周知の事実、当然俺にも視線が集まる。

(自分がここまでこの手のことに弱いとは・・・)

新たな事実には内心驚愕するしかない。
そこで、顔を赤くして俯く俺に笑いかけてくる2人。

「ふふ、すみません。」

顔を赤くするレイ様が新鮮でついやりすぎてしまいました。」

「貴方は滅多に動揺しませんからね。
ですから面白くて。」

「・・・はあ。」

笑顔に毒気を抜かれてしまった。

まあ、理由があるならばまだましか。

そう思うことにして、もうこのことは気にしないことにする。

「ま、2人とも素で綺麗なんだからそんな服に頼らんでも大丈夫だ。
それに別に今日は服のおかげで褒められたわけじゃなく、普段は
言う機会がないから言わなかっただけだ。」

だから、こういうことはもうやめてくれよ。」

「あ・・・」

「ん・・・」

そうやって2人の頭を困ったような顔をしながら撫でる。
なんかやっつといつもの自分が出せるようになった。
2人が顔を赤くしてうつととりとするのを見て、周りが歓声を上げる
が無視する。

(さつさと話終わらないかね。
依頼が受けられん。)

そう思いながらネストの中へ目を向ける。

(お・・・)

すると偶然、ディック殿と目があつた。
すると彼は考え込み始める。
そして、何かを思いついたらしい。

正直、嫌な予感しかしない。

「皆、ここに居てこれからの成り行きを見守っていてくれ。
俺はちよつと身を隠す。」

「え？(皆)」

返事を待たずにさつさと消える。
今更意味もないと思うが、なんとなくそうした方がいい気がしたのだ。

さて、面倒なことにならなければいいが

その思いが叶えられることは無かった

33話 始動（前書き）

思った以上に大学の負担になってます・・・！
甘く見ていた、これからは5日に1つになると思います。
時間があれば速まるかもしれませんが。

33話 始動

「お主にセフィリアの婚約者を演じてもらいたい。」

「いきなり何言ってやがる糞爺。」

一段落したあたりを見計らってネストへ入ると、案の定ネストキーパーに呼び出された。

そしていきなり出された言葉がこれだ。

やはり面倒なことになった。

今日はどうも自分の思うように運ばないことばかりなのでイライラしており、つい暴言を吐いてしまった。

まあ、本人は気にする余裕も無さそうだからいいだろう。

俺の両隣の2人に注意を向けていたからだ。

許可したわけでもないが、気が付いたら囲まれてた。

「デイツクさん、そんなことをレイ様に頼むのは止めて欲しいですね。」

「まったくです。」

周りに変な誤解をさせたらどうするんですか？」

「うお・・・」

「あわわ・・・」

「ぬう・・・」

エルスとルルからかなりの威圧感が放たれる。

それにレオンとクルス、信じがたいことにディック殿までもが気圧された。

(すごいな、一時的とはいえここまでの気当たりを見せるとは。)
俺としては成長は嬉しいことだしこの程度ならばこの間まで日常的に受けていたので、感心しただけだが。
なのでさっさと疑問を口にする。

「そもそも、そんなことを私に頼む意味なんてないでしょう？
貴方の権力を使いさえすれば、冒険者の1人や2人簡単に消せるでしょうに。」

それにセフィリアさんが答える。

「物騒なことをおっしゃますね。
そんなことをしてたら人望が一気になくなってしまいますよ。
そういうことは、ばれなくても噂のような形で広まるものですよ。」

「あくまで例えの話ですよ。
私はディック殿ならいくらでも対処の術を選べるだろうと言いたいんです。」

「あはは・・・
確かに普通の人ならばそんなんですけどね・・・」

「？(俺たち)」

セフィリアさんが心底困ったという風な表情に、俺を含む全員が首

を傾げる。

その疑問にディック殿が答える。

「あの糞餓鬼はサイデンハルト家の次男だ。

今のお主ならばこれだけで通じるだろう?」

「! (仲間)」

「・・・なるほどね。

そりやまた一段と面倒な。」

各国の主な家についてもほぼ完全に把握することが出来てる今ならば、確かにその言葉だけでどういいう状況か理解できた。
もと貴族の彼らも、言わずもがな。

(ちょっと聞いたただだが、丁寧な態度と物腰だったからそれなりに身分の高い人間とは思っていたが、まさか『四家』の1つとは。いくらネストキーパーでも厳しいか。)

デルト王国には、侯爵や伯爵なんかの爵位から切り離された最上位貴族が存在する。

それらは俗に『四家』と呼ばれている。
戦士の国らしく、どの家も武力に優れ、代名詞ともいえる武器を一種類もっているそうだ。

その権力は他の貴族と一線を画し、法の制定や国王への諫言の権利など、さまざまの特権を得ている。

なんでも初代デルト王の親友にして、建国時に活躍した最大の英雄たちの子孫だとか。

・・・実に取りきたりな設定だ
サイデンハルト家はその1つで、槍を司どる家。
その子息ということは、あの男もやはり槍を使うのだろうか。

ネストは国家から独立し、独自のシステムにより成り立っており、
国からの影響力はほぼ遮断されている。

しかし、流石に完全にはいかないもので、相手の家がもし本気になればなかなか面倒なことになる。

流石に潰したりなどは、デルトが世界中の冒険者から憎まれることになるのでありえないが、依頼の減少などの細かい嫌がらせならばいくらでも可能だ。

下手な扱いをすれば、少なからず打撃を受けるだろう。
しかし。

「その割にはずいぶん扱いをしていたように思えますが？
直接にはありませんが、はっきりと死ねって意味の言葉を言う
てましたよね？」

俺に頼みごとをしてくると言うことは少なからず脅威に感じてのこと
のはずのことだと思ったのだが、あの時のこの人の態度を考えれば
どうも噛み合わない。

「・・・あの男、オルトバーンはいけ好かない奴ではあるが、礼儀
正しく誠実な男だ。

破談になってもお主が考えてるような陰険な手段は使ってはこ
ないしと確信してるのでな。」

「貴方が認めるとは。」

本当に好青年みたいですね。」

ディック殿が素直に他人を褒めたことに驚く。

この人はそのオルトバーンという人物を嫌っているはずだが、その程度で見る目が曇ったりはしないだろう。

ということは、その男は本当に誠実で、しかも権力を持ち、さらに容姿までいい（俺が見たのは後ろ姿だけだったがそれだけでも端麗な容姿だと確信できた）。

「それって、断る理由が無いじゃないですか。

貴方が個人的に嫌ってるというだけですよね。

さらに言えば私を巻き込んでまで断りの理由を付ける意味までない。

いっそのこと仲を認めるのも手だと思いますがね。」

俺がそう言つと、ディック殿が目を血走らせる。

「そんなこと認められるか！

とにかくあの男は好かんのだ！

儂のたった1人の孫娘をあのような者に渡すなど耐えられ……
ぐはあ！！??？」

「いい加減にしてくださいお爺様。

感情論だけで語られても困ります。」

「うわあ……」

「ひでえな……、そこまでするか？」

「セフィリアさん、意外に行動力あるんですね……」

「ん……、まあ気持ちはわかりますが……」

「見事な一撃ですね。
的確に脳を揺らす箇所、意識を辛うじて断ち切らない程度
の力で一撃。」

恐れ入りました。」

暴走していた老人の頭を、セフィリアさんがどこから取り出した鉄製の棍棒で殴った。
周りの皆はその行動に呆気に取られていたが、俺は見事な一撃に感心していた。

この人も、なかなかの実力者らしい。

そう言えば本人の意志を聞いていなかったたので、聞くことにする。

「貴方はどう思ってるんですか？」

その人のことを。」

「正直言って良縁だとは思ってるんですが、私も……
とても素晴らしい方だとは思いますが、どこかで踏ん切りがつかないんですね。」

あの人よりだったら、貴方のほうが興味が惹かれますし。」

「私ですか？」

困ったような様子で、なんだか凄い爆弾を投下された。
両隣の2人が一気に不機嫌になる。

「ええ、貴方ほど謎めいた存在を私は知りません。」

私、好奇心がとても強いんですよ？」

色々なものを見てみたい一心で冒険者になつたくらいですから。
まあ、今は不本意ですがネストで受付嬢をやらされていますが。」

「はは、それは気が合いますね。」

私も「好奇心は猫を殺す」を地で行くような性格ですし、好奇心は人一倍強いと自負してます。

貴方とは話が合いそうだ。」

「そうですね。」

私も貴方とは仲良くしていきたいと思ってます。」

「・・・レイ様、楽しそうです。」

「私たちにはそんなこと言ってくれたことないのに・・・」

軽く会話が弾み笑顔で会話する俺とセフィリアさんを見て、エルスとルルが今度は落ち込んでいた。それを見て、この人はさらに笑みを深くする。

「ふふ、大変そうですね。」

その言葉だけ聞けば同情してるようにも聞こえるが、表情がそれを裏切っている。

だから俺も笑みを深くして返す。

「確かにそうですが、それ以上にいつも楽しませてもらってますよ。この2人といると、飽きませんからね。」

俺がそう言つと、2人は顔を赤くして黙ってしまった。

「・・・そうですか。」

羨ましいものを見るような目で見てくる。
なんだか空気が家族の団欒みたくなくなってしまった。
次の一言でぶち壊されたが。

「でも、お2人にそのような恰好をさせるのはどうかと思いますが、
どのような趣味を持とうと貴方の自由ですけど、本人に無理やり

」

「これは彼女らが勝手に着たんですよ！

俺の趣味ではありません！

というか、何故今更になってから言いますかね、せつかく気にな
らなくなってきたのに！」

今になってそのことを蒸し返されるとは思わなかった。

「そっなんですか？」

「別に隠さんでもいいぞ？」

儂らは別に気にならんからな。」

「糞爺……！」

「偽装」でお前に化けて悪さして、社会的に抹殺してやるうか！
？」

それからしばらく、切れる俺とそれを宥める仲間、誤解を解こうと
しない2人で、ぐだぐだな会話が展開された。

「それで、私としてはそのような面倒なこと御免ですね。
下手したら私まで目を付けられます。」

やっこのことで気を落ち着けることが出来たので、さっさと自分の
意見を言う。

「そこを何とか頼みたいのだがな。
報酬は金貨5枚だ。」

言っておくが、これは僕の完全なポケットマネーだ。
僕の誠意を理解してもらえと思うが。」

「・・・何故そこまで？
別に私でなくてもいいでしょうに。」

個人で金貨5枚も出すなど、いくらネストキーパーといえど相当な
出費だ。

俺としてはそこまでして俺に頼もうとすることが理解できない。

「・・・お主は途中からいなくなっていたから聞いてなかったと思
うがな、実は、婚約者がいるからという理由を付けて断ったのだ。
だがあの男も粘ってきて、それで最終的にその婚約者と決闘をし
て勝った方にセフィリアとの仲を認めると言ってしまったな。」

その言葉に驚く。

「・・・貴方らしくありませんね。」

その手の交渉は得意分野でしょうに。」

この人ならば、言論でねじ伏せることなど容易であったはずだ。ちよつとやそつとの綻びがあったとしても、それをさらに利用して相手を追い詰められるほどの経験を持っているのだから。しかし、次の言葉で俺は呆れながらも一応納得した。

「セフィリアが以前別のクズに絡まれた時に、「自分より強い人間と付き合います」と言ったのをそいつは聞いていてな。

孫の言葉を違えるわけにはいくまい。」

「この爺馬鹿が・・・」

孫が絡むとホント頼りにならん、この人は。

まあ人間、それくらい弱点があった方がいいのかもしれないが。

「それで、オルトバーンはランクで言えばBの中位の猛者だ。

そこらの連中では太刀打ちできん。

だから、俺が用意出来る最強のカードであるお主に協力してもらいたいのだ。」

「とは言いましてもね。

貴族とことを構えるなんて勘弁ですよ、はつきり言って。

どんなとばつちりを食らうか分かりません。」

いくら相手が誠実な人間だとしても、その家すべての人間がそういうやつなわけではない。

仮に俺が引き受けて、それでその男を伸ばしてしまったとしたら、顔に泥を塗られたと思って反撃してくる奴が必ずいるだろう。

その時はあらゆる手を尽くして家ごと潰させてもらおうが、そんなこ

とをいちいちしていたらきりがない。

「……さつきから気になっていたのだがな。」

そこでいきなり、ディック殿が鋭い視線を向けてくる。

「何故そこまで引き受けたがらないのだ？」

お主のその面倒なことになるという理由は建前にすぎんのだろうか？
「？」

「え？（全員）」

「……はて、何のことでしょう。」

ディック殿の言葉に、全員が疑問の声を上げる。

俺は白々とぼけてみせる。

（うーん、やはりばれたか。

孫が絡むと冷静になれないからもしかしたらと思っただが。）

「お主の魔法があれば、そんな面倒事など意識する必要がまったくない。

俺はあの男に、相手の外見をまったく伝えていなかったからな。

今の姿を変えてしまえば何の問題もないはずだ。

そして魔法を使えるように、俺が外見を教えない、という配慮をしたことを予想してないお主ではないだろうか？」

その通り。

「偽装」さえあれば今回の依頼はなんのリスクもなく達成できる。

そしてこの人ならば、それを使える舞台を整えてくれるのは予

想していた。
それなのに直ぐに引き受けなかったのは、報酬をできるだけ多くするためと。

この依頼が、俺にとって喉から手が出るほど引き受けたいものだと言うことを、悟らせないようにするため

相手が貴族、しかも四家と聞いた瞬間、この依頼は俺にとって絶対に受けなければならぬものとなった。

『目的』のために。

「私としては貴方たちのことを気に入ってますから手伝うのは吝かではありません。

ですが、引き受けてしまえばその相手に悪いですからね。

正直あまり乗り気になれないのですよ。」

そのことを知られても特に問題はないが、情報の漏えいはあらゆる意味で利点は無いので、できる限り隠しておきたい。

（何か、自然にこの依頼を引き受けることのできる因子は無いだろうか。）

先ほどの言葉は自分の本心でもあるので、嘘だと思われる心配はな

い。

なので、ディック殿は特に疑わずに受け入れてくれた。

「まあ、そうだな。」

では条件をさらに上乘せする必要があるのか。

ふむ、引き受けなければ書庫への出入りを禁止する、というのはどうだ？」

「意味ないですね。」

もうあそこにあるめばしい本はすべて読み終わりました。

もうその脅しは効きません。」

「あの蔵書量をか！？」

「本当に呆れますね。」

あの量ならばぶつづの人間は数年かけて読むものでしょうに。」

「読み終わったものはしょうがないですよ。」

「く、では、以前儂の邸宅の庭を滅茶苦茶にしたことは」

「あれもあの後すぐに直してあげたでしょうが。」

言っておきますが、壊したのは事実だろう、とか言っても無駄ですからな。」

もう跡形もなく修復が終わった以上、壊したという証拠もないのでひたすらしらを切らせてもらいます。」

「うむむ……」

俺の弱みを攻めようとしてくるが、俺は特にへマをしていない上に

人望も今ではあるのでどうしようもない。
もし妙な噂をこの人が立てようとしても、そんなことをしたら自分
の人望を失いかねないからだ。
直ぐに脅しのネタが尽きてしまい、困り果てていた。

俺としても断りたくはないので困っていたら、セフィリアさんが、
俺にとってはとても重要なことを言ってきた。

「実を言いますと私としても、出来れば貴方に引き受けてもらいた
いのですよね。」

碌に話したこともないような方とお付き合いするのは私としても
嫌で
「

「セフィリアさん、それは本当ですか？」

「え？」

いきなり空気の変わった俺に、彼女だけでなく他の皆も困惑した。
だが、今はそんなことはどうでもいい。

「貴方はその男とあまり会話したことが無いのですか？」

「え、ええ。」

最初にお会いしたのもほんの2か月前ですし、ずっと私は受付嬢
をやっておりますので空いてる時間が無いので。」

「・・・へえ。」

「そうなんですか。」

意図せず平坦な声が出る。

「ディック殿、貴方のことですからその男が来た時はいつも傍にいたのでしょうか？」

「そいつはどんな言葉を彼女にかけていたのですか？」

「そんなことを聞いてどうするのだ？」

「いいから貴方の主観を外して、覚えてる範囲で一字一句違えず教えてください。」

「わ、分かった。」

俺の気迫に若干押されながらも、彼は話してくれた。

それによると

曰く、「一目ぼれを初めて経験しました」

曰く、「貴方を一生守らせてください」

曰く、「貴方のために強くなります」

などなど齒の浮く台詞を次々と口にしていたらしい。

「私は穴があつたら入りたいです・・・」

「す、すごいですね、その方。」

「そこまで情熱的な台詞をスラスラと聞いたのですか？」

「私も言われてみたいですね。」

自分のことだけに、セフィリアさんは顔を真っ赤にして消え入りそ

うな声で答え、エルスとルルは羨ましそうにしていた。
そしてレオンとクルスは苦笑を浮かべ、ディック殿は怒りを再燃さ
せていた。

そして俺はと言うと。

「……………反吐が出る。」

その言葉に反応し、驚いた様子で皆が俺を見て

言葉を失った

「前言撤回、どこが好青年だ。」

まったくの自覚無しに他者を見下してる最低の人種だな。

まったく、本当に今回の依頼は都合がいい。

そんな奴を合法的にぶちのめせるんだから。」

俺から放たれる怒気によって。

「ど、どうしたのだ？」

「ああ、貴方は気にしなくてもいいですよ。

それと、この依頼引き受けさせて頂きます。
条件がありますが。」

「条件、だと？」

「ええ。」

放たれる怒気はそのままに、綺麗な笑みをつくる。

「条件は1つだけです。」

私とその男に決闘の場であることを、何も言わずに見ていてくれればいい。」

「お主、まさか殺したりは」

「大丈夫ですよ。」

殺したりはしません。

ただ」

さつきまでであった、引き受けた時の相手への遠慮は今も微塵もない。そして、引き受けるための理由もさつき見つかった。何故なら。

「徹底的にやらせてもらいますからね。」

その心底気に入らない糞野郎が、改心するまで。」

俺は心底嫌いな人間にあつたら、ぶちのめしてやらねば気が済まないからだ。

夜、最初の夜からずっと泊まっている宿屋で皆で集まっていた。と言っか呼び出された、他の4人に。当然議題は。

「何故あんなことを引き受けたんですか（だ）？（全員）」

それに対する答えは簡単。

「気に入らんからだ。

相手がな。」

当然皆は納得できないようだ。

「どうしてですか？

話を聞いた限りでも、そして周りの評判でも悪い人間だとは思えませんよ？」

話が終わってから今まで、相手の評判を聞いて回っていた。それによると、その評判は頗る良い。

誰もが賛辞の言葉を投げ、理想の騎士だと絶賛していた。だが、俺にとってはそのようなものどうでもいい。

俺が最も信用するのは自分の見たもの感じたものだからだ。

「それは見てくれただけだ。

いや、事実、中身も一般の基準からしたら素晴らしい人間なのだろうな。

しかし、俺にとっては一番嫌いなタイプの人間だよ。」

「そうなのか？」

「少なくとも、俺はそう確信している。」

その言葉を聞いた皆はしばらく渋い顔をしていた。

（まあしょうがないわな。

まともな感性では俺のような考え方は出来ないんだから。）

そんなことは分かっていたので、特に落胆することも無い。

「分かりました。

貴方がそういっなら私は何も言いません。」

だから、このルルの言葉には驚いた。

「貴方がすることにはいつも理由がありますからね。

今回もそうなのでしょうから、私は貴方がすることをゆっくり見させてもらいます。」

「それは、俺を無条件に信用しているということか？」

信じてくれるのはいい。

だが、それが自意識を無くした上でのただの依存だとしたら、それを許すわけにはいかない。

自意識を失った人間はいずれ破滅する。

「違います。」

だが、彼女、いや、彼女らは違ったようだ。

「それではただの依存ですからね。」

私たちは貴方の決定に疑問を持ちながら、それがどのような結果に結び着くのかを観察させて頂きます。

これならば文句もないでしょう？、レイ様。」

笑顔でそう言うエルス。

自分の意見をしっかりと持った上で、相手の意見がどういつ結果を生むのかを知ろうとする。

このような時の理想的な回答だ。

「・・・成長したな、君らは。」

俺はその成長に素直に感嘆し、喜ぶ。

「それに、貴方の狙いはそれだけではないのでしょうか？
相手を倒す以外にも、何かが。」

「ん？、そうなのか？」

今度はクルスが鋭い指摘をする。
レオンは相変わらず。

「その通り。」

別の目的があつてのことだ。

しかしレオンは本当に・・・」

「な、なんだよ。」

悪いか、察しが悪くて。」

「いや。」

むしろお前はそのままの方がいいだろうな。」

「は？、何故だ？」

「そのうち分かるぞ。」

それに、今はそんなことはどうでもいいしな。」

そこで俺は立ち上がり、窓から月を見上げる。

皆の視線が俺に集まる。

「予定はいろいろと狂うことになったが、早いに越したことは無い。計画を早めることにしよう。」

そして、両手を広げ、告げる。

「さあ始めよう、世界よ。」

俺は動き始めるぞ、お前を変えるために。

そのために先ずは

「
いったん言葉を切り、笑みをつくる。」

「 デルト王国に、楔を打ち込んで見せよう。 」

誰も気付かず、知りもしないこの出来事。
しかし、これがこの世界の、最初の歴史の変換点であった。

33話 始動（後書き）

面白いと思ってくだされば、どうか評価を

34話 決闘(笑)直前(前書き)

はい、最後に遊びました

題名通り、本格的な決闘(笑)は次回になります

34話 決闘(笑) 直前

side レオステッド

宿での会話が終わり、皆が寝静まった頃、俺はレイに文字通りたたき起こされた。

不思議なことに音が全くしなかつたので、俺は悶絶するほど苦しんでいたのに誰も起きることは無かつた。

そして何の説明も無しに、外へ連れ出された。

「・・・頼むレイ、一発だけ殴らせてくれ。

それだけで俺は明日、いや今日も生きていけると思うんだ。

このままでは憤りでどうにかなくなってしまふ。」

酷い扱いには慣れたとはいえ(自分で言ってる悲しくなるが)、これは流石にない。

だから俺は今、怒り狂っていた。

「いいぞ?」

「そうは言うがな、お前は殴られて黙っていられるのか?

しかもいい気持ちで寝ている時にだ。

これは怒っても・・・、て、は?」

信じられない言葉が聞こえた気がする。

「もともとそのために連れてきたんだよ。」

ほれ、さっさとこい。」

実に軽いノリで、指でかかってこいというポーズをとるレイ。

そう言われても、いきなり何の説明も無いとなると誰だって動けないだろう。

さっきまで殴りたいと切実に願っていた俺とて、その例外ではない。困惑している俺に説明をしてくる。

「お前がどのくらい強くなれたのか、確かめようと思ってな。」

叩き起こしたのも怒りで躊躇わずに殴れるようにするためだった。

「

・・・なるほど。」

理由、ちゃんとあったんだな。

しかしコイツ、いつも行動や言葉の順序がおかしいんだが、それは狙ってやってるのだろうか？

困惑している俺を見て楽しむために。

・・・不味い、この考え、物凄い説得力がある

このままでは落ち込んでしまいそうだったので、思考を切り上げる。

「確かに普段より心情的には殴りやすくなったが、それでも積極的に殴ろうとは思えんぞ？」

「まあそうだろうな。」

予想はしてた。」

「だろ。」

ん？・・・おい、予想してたってそれじゃあ俺が殴られ損になることも予想してたってことじゃないのか？」

俺を怒らせて攻撃させるのがコイツの目的、そのために俺を叩き起こして怒らせようとした。

だが、それだけで素直に攻撃できるようになれないことを予測していたとコイツは今言った。

つまり、叩き起こされた意味はあまりなかったのだ。

「ほう、気付いたか。

いや、そう怒るな。

意味はちゃんとあったぞ、面白かった。」

「お前だけだろうが！」

怒りのままに渾身の右ストレートを繰り出す！

暗闇の中、俺の光る右腕が奴の顔に迫り。

「ふむ、それではこんなものか。」

奴の左手にやすやすと受け止められた。

しかもまるで衝撃が吸収されたかのように衝突音すらせず、当たった瞬間さえ微動だにしていない。

「・・・自信なくすぜ、まったく。」

クリミルにいたころの連中相手ならば、今の一撃をまともに食らっていけば間違はなく痛撃になっていた。

それが片手、いや、指でも止められてしまつかもしれないぐらい意に介していない。

とことん理不尽な男だ。

「ど阿呆。」

「あだつ。」

頭を叩かれた。

「お前、俺が最初に言ってたことを守れよ。」

俺はどのくらい強くなつたのかを知りたいといったんだ。

なのに今まで通り闘気の無駄遣いで光るような強化をしてどうする。」

「あ。」

コイツに教わったのは、筋肉なんかの最小限のものを強化する方法。その場合、光が漏れることはない。

光ってたということは、いつも通りのやり方をしたということか。

「ああ、すまん。」

だがな、今までのやり方をいきなり変えろってのは無理だぞ？

これからゆっくりと馴染ませていかんと無理だ。」

確かに教わったやり方は、俺でも理解できるほど分かりやすく、そして革新的なものだ。

だが、身体に染みついた戦い方を変えるのは生半可なことではない。

「いや、お前は間違いなくもう新しいやり方で定着している。」

さっきとっさにいつも通りのやり方をしたのは、お前が出来ないと思っ込んでるからだ。

・・・仕方ない、予定通りアレで行こうか。」

それなのにレイは、こんなことを言う。
何故そんなことが分かるんだ？

「アレって何だよ。」

いつも通りの、相手に困惑を与えるような言い方に少々ぶっきらぼうな物言いになってしまう。

「コレだ。」

瞬間、濃密な死の気配が俺を襲う

レイは何もしてはいない、ただ立っているだけ。

それなのに、俺はとんでもない怖気に襲われていた。

歯の根が合わず、ガタガタと鳴る。

情けないとか、かつこ悪いとか、そんなことを考える余裕が一切ない。

俺の心にあるのは、「死」だけ。

意識が遠ざかる。

今、目の前にいるのが仲間だという意識がすべて飛んでしまう。
そして、俺は意識を失った。

「・・・素晴らしい。」

その声に、意識が覚醒する。
いつの間にか、レイが目の前にいた。
一体いつコイツは移動したのか。

「え？」

そして、違和感に気付いた。
レイの身体が。

左腕の、手首から先が無くなっていた

「出来てるじゃないか。」

本能と無意識の思考の両立。

的確に己の脅威となるものを、俺の左手だけを破壊した。」

楽しそうに、無邪気な笑みを浮かべる。

その左手から鮮血を迸らせながら。

その言葉に気付かされた。

動いたのは、レイではなく俺だったのだ。

そして、仲間を、「友人」を攻撃した。

「う、うあ……？」

「落ち着け、この程度慣れっこだ。

明日の朝には再生できる。

切り落とされたならば、その場でくっつけることも可能なくらいだしな。」

その言葉を証明するかのよういつの間にか出血が止まっていた。

「……どういふ身体をしてるんだ、お前は。」

落ち着いたあと、何故か口から出た言葉は、謝罪ではなく呆れだった。

何故か、罪悪感とか申し訳なさなんかの気持ちが全く湧かなかったのだ

「お前は今、こう思ってるだろうな。

「何故俺は謝らずにこんなことを言ってるんだ？」、と。別に気にすることじゃないさ。

お前が薄情なわけでも、気が触れたわけでもない。ただ、俺が謝罪なんか望んでないことを敏感に察しただけだ。だから絶対に気にするな。

これは俺が望んで、俺が招いたことだ。」

その言葉は俺を氣遣った故のものなのだろう。

そして、それは確かに間違っではないと思う。

だが、レイが謝罪なんか望んでない、というもの以外にも間違いない要因はあるはずだ。

そう、俺自身に。

だが、その言葉に納得したわけではないが、話が進まないのて氣にしないことにした。

「何故、俺がその強化法を体得すると分かったんだ？」

俺は無意識だったから使えてたか知らないんだが、その様子じゃあ使えてたみたいだが。」

「簡単だ、前言っただろ？、お前は本能で戦うと。」

つまり、戦いでは無意識により良い手段を取ろうとするんだ。

その結果、新しい強化法を取り入れるのは自然なことだろ。」

「そんなものか？」

「そんなものだ。」

良く分かりはしなかったが、まあいいや。

「さて、それだけでできればお前はもう心配ないだろうな。」

今のお前ならば、例え「奴」が行動を起こしても問題なく対処できるだろう。

他の3人も。」

「そのために俺を試したのか。」

「それもある。」

「それも?」

「ということはまだあるのか?」

「あと、お前に話しておきたいことがあってな。」

「またかよ。」

もう隠し事で3人に責められるのは御免だぞ?」

「それでその話なんだがな。」

「聞けよ。」

そんな軽いノリで話された内容は、2つ。

1つ目は、決闘の時に俺がどうすればいいかについて。

2つ目は、それが本当ならば、俺は「奴」を絶対に許せない
と思わせるものだった

s i d e o u t

以前の話し合いから2日、この日が約束の日となっていた。つまり、決闘の当日。後1時間ほどで予定の時刻となる。

「お爺様、何故ここまでの人が集まっているのですか？」

「今は人がいないからいいが、他人の前ではネストキーパーとして接しろよ。」

何故？、そんなの僕が知りたいわ。

騒ぎになることを恐れて、最小限の人間にしか伝えなかったはずなのだがな……」

街の中心にある、広場。

そこが決闘が行われる場所。

そこには、大量のギャラリーが集まっていた。

「一応、戦える空間は残ってるみたいですが、これでは魔法の使用が制限されてしまいかねません。」

レイさんには辛い状況になってしまいましたね……

まさか、それを狙ったのでしょうか？」

彼の戦い方は、実際見たわけではないが、魔法を併用することを前提としたものの可能性が高い。

それを知っていて、サイデンハルト家が手を回したのだろうか。

「違うだろうな。」

あの家は仮にも「四家」だ。

そんなせこいことをしたことがあればたら末代までの恥となる。

もしサイデンハルトが仕掛け人とするならば、恐らくは、家の者の力を誇示するための行動だろう。

それと、約束を反故にされないための証人といったところか。」

なるほど、そっちの方が道理に合っている。

「しかし、奴は来ないな。」

せつかく用意してやったというのに。」

無然とした様子で、お爺様が手元のカードを弄る。

「あはは・・・」

それには苦勞しましたよね。

なにせ立派な規則違反ですから。」

「あいつにはその分もきっちり働いてもらわんな。」

・・・と、噂をすればだ。」

通りの向こうから、件の人物が歩いてきた。

ただ、その表情にはいつもの落ち着きが無い。

「遅いですよレイさん。」

後50分程ですが、準備は出来ているのですか？
「偽装」とやらを使つてはいないようですが。」

「い、いや、俺は・・・」

気軽に声をかけてみるが、やはり様子がおかしい。

それにいつもの、浮世離れた妙な空気が存在しない。
さらに、風邪だろうか、声が違うように感じられた。

首を傾げていると、新たに4人がきた。

てつきり彼の従者の4人かと思つたのだが、見たことのない人がいた。

茶髪茶瞳、肌の色は一般的な白人のもの。

背は目の前のレイさんより少し低いくらい。

そして、左目に眼帯をしていた。

歳のほどは十代後半といったところか。

彼を見ると、レイさんはあからさまにホツとしていた。

「や、待たせたか？」

「そんなに待つてはいないが、これは精神的につらい・・・

これで俺は今日ずっと過ごすのか？」

「我慢しろ。」

幸いというか、エルスたちが補佐してくれる。

お前はとりあえず、黙つて立っていれば問題ない。

声までは変えられないからな。」

「・・・な！？、まさかお主がレイなのか！？」

「ええ！？」

「大きな声で言わんでください。
幸いここは人いないし、周りの喧騒で誰も聞いてはいなかったよ
うですが。」

「それは他人にも使用出来たのだな。
ほとほと恐ろしい力よ。」

つまり、こちらがレオン殿と言うわけか。
道理でいつもより背が高い気がしたわけだ。」

「僕らも驚きましたよ、完全に別人ですもん。」

「レオンをレイ様として扱わなくてはならないことは嫌ですけどね。」

「兄さん、余計なことは言わないようにお願いしますよ？
変なことをして評判が下がるのはレイさんなんですから。」

「・・・俺、信用ねえな。」

言葉だけならば険悪に感じるが、2人とも笑顔ということはただの
じゃれ合いなのだろう。

どうやら、さっきまでレイさんだと思いついていた彼が本当はレオ
ンさん、そして今来た男性がレイさんと言うことらしい。

「出来る限り私がこの人物、「グランド」と同一人物であると悟ら
れる可能性は潰しておきたいので。」

レオンに命令して、こうさせてもらいました。」

後で聞いたことだが、髪の色が茶だから土をイメージして「グラン

ド」らしい。

「声までいつもと違うようですが？」

それに、その眼帯はなんなんですか。」

「声については、私はたくさんの方の声を使い分けることができるのですよ。」

それと、眼帯はこれもカモフラージュの一種です。

人は顔にこういった特徴的なものがあると、そつちに意識がいつてしまい、顔を覚える人はいなくなりますからね。

精々覚えられても髪の色ぐらいに抑えられるんです。

私の「偽装」は、顔の形とかは変えられませんからね、念には念を、と言っわけです。」

「はあー、そこまでやりますか。」

正直、過剰としか思えない周到さだ。

だが、そこまで警戒するに足るとこの人が考えてるのならば、私が口にすることではないだろう。

「ところでディック殿、頼んでいたものは出来てるのですか？」

「ほれ、これだ。」

まったく無理を言ってくれるものだ、ばれたら僕は確実に降格だぞ。」

「はは、私がそんなへマをされるとお思いですか？」

馬鹿も休み休み言ってくださいよ。」

「ふ、そうだな。」

「まあ、自分からばらすことはあると思いますが。」

「おい!？」

「本当に頼むぞ!？」

「忘れるまで覚えておきましょう。」

そんな会話を彼らは繰り返していた。

お爺様は、言葉とは裏腹にとても楽しそうにしていた。

それを眺めて微笑む、私を含めた皆さん。

そして2人を眺めながら聞いてくる。

「あのカードは、ネストの登録カードでしょうか？」

「そうですねよクルス君。」

「え?、レイ様はもう持ってますよね。」

「2枚目を発行してもらえるものなのですか?」

「そんなわけないじゃないですか。」

「当然、完璧な規則違反です。」

「さつき言っていたように、ばれたらお爺様は降格、私は首でしようね。」

「それも、しばらくは冒険者としてのネストの使用を禁止されるかもしれません。」

「おいおいそりゃ不味いだろ。」

「そんな無茶をあの手鹿は言ったのかよ……」

「貴方だけには言われたくはないでしょうね。（私含む4人）」

「セフィリアさん!？」

「あんたまで何故!？」

「いえ、なんだか言わなければならぬような気がしまして。」

まるで長年の友人のように、スラスラと話が進む。

それがとても気持ちがいい。

「それで、何故こんなものが必要なのだ？」

「必要ないように思えるが。」

「簡単ですよ。」

私が「グランド」であるという確証が欲しかったんです。

それと、「グランド」がGランカーであるという証拠も。」

「?、身分証明のためならともかく、最低ランクの証明などして何の意味があるんですか?」

私がそう聞くと、彼はとても楽しそうな笑みを浮かべ。

「Gランカーだと甘く見て心中で馬鹿にしていた奴に、スタボロにされる貴族やその他の高位ランカーたち。

実に楽しい光景だと思いませんか?」

そう言った。

「……………（全員）」

しばらく沈黙が続く。

「……まさか、そんなことのためだけに儼に創らせたのか？」

「失敬な、さつき言ったように一応身分証明も兼ねてるんですが。」

「つまり、相手に屈辱を与えるのが主目的ということじゃないですか。」

お爺様が呆然としながら聞き、クルス君が突っ込む。

「……ぶ、あははは！」

「なんですかその理由は！」

本来なら私は怒ってもおかしくないのだろうけど、何故がおかしくてならなかった。

その私の様子を見て、レ……グランドさんは笑みを浮かべ、他の方たちは呆気に取られていた。

と、そこでグランドさんがいきなり真剣な顔をする。

「皆、「お客様」が来なさった。

「ちょっと隠れていてくれ。」

「あ、分かりました。」

その突然の言葉に困惑する私とお爺様を残し、あらかじめ話を合わせていたのか、さっさと隠れてしまった彼ら。

そして、彼らの言う「お客様」が誰なのか、私もすぐに分かった。

「セフィリアさん。」

お久しぶりです、お元気でしたでしょうか？」

声の方に顔を向けると、輝かんばかりの金髪を身に着け碧眼をした、素晴らしく綺麗な顔立ちの20台前半の男性がいた。

「オルトバーン様、さっきまでこちらにいらっしやっただのに何故こちらに？」

それと久しぶりと申しましても、以前お会いしてから2日しかたつてませんよ。」

私がそう言うと、女性ならば誰もが見とれそうな笑顔を見せる。

不思議と私には綺麗な、と言う以外の感想は浮かばなかったが。

「様づけなどよしてください。」

私は貴方と対等な関係を築きたいのです。

そしてこの決闘を貴方のために捧げ、相手を打倒した後に貴方を一生守りとおして見せますよ。

「この世界のすべてから。」

世の女性ならば一度は言われてみたい言葉かもしれないのに、何も感じない。

相手から誠意が感じられないわけでも、嘘だと感じるわけでもないのに。

「それとディック殿、ご挨拶が遅れて申し訳ありません。」

「死ね。」

「……相も変わらず容赦がないですね。」

貴方とはこれから末長いお付き合いになりそうですから、仲良く

したいのですが。」

お爺様の暴言を苦笑して流す彼。

「もう勝ったつもりになっているのか？、糞餓鬼。
気が早すぎるな。」

「私は真剣にセフィリアさんのことを思って、今回の決闘を提案しました。」

この思いの強さにかかれば、貴方が即席で用意した有象無象などものの数ではありません。

想いの強さは、大きな力ですから。」

「有象無象ね。」

好き勝手言ってくれろ。」

そこで初めて彼は、グランド・・・面倒なのでやっぱりレイさんで、
に気が付いたらしい。
ずっといたのだが。」

「君が私の対戦相手かい？」

「いかにも。」

名をグランドといいますお坊ちやま。」

妙に芝居がかった仕草で一礼しながらそう言う彼に、眉間を寄せる
オルトバーン様。

「その呼び方は止めて欲しいものだね。」

ところで、私はBランカーなのだが、君は？」

その手の情報は一切無くてね。」

「Gですが？」

「は？」

レイさんの言葉に、絶句する彼。

そして確認のためにお爺様視線を向ける。

そしてお爺様が無言で頷いたのを見ると、剣呑な空気を醸し出す。

「貴方はふざけているのですか？」

どうせ婚約者など咄嗟に思いついたことを言ってみただけだと思っ
ていましたが、素人を呼ぶなんて何のつもりです。

しかも神聖な決闘に。」

そしてレイさんの方を向く。

「君、悪いことは言わない、時間が来る前に帰りたまえ。

ネストキーパーから命令されて仕方なく来たのだろうか？」

私の家の力を使って、誰にも文句は言わせない。

今ならば間に合うぞ、始まってしまったら、私は全力を出さねば
ならない。

決闘とはそういうもの」

「黙れよ糞野郎。」

彼は親切から言っていたのだろうが、レイさんの言葉で止められた。

「予想通りの奴で何よりだ。

これならばボロクソにすることに何のためらいもいらぬ。

行きましようお2人さん。

こんな馬鹿と一緒に居ては馬鹿が移ります。」

そして、啞然としているオルトバーン様を残して、話はこれで終わりとはかりに強引に連れ出された。

「レイ様、本当にそれを使うのですか？」

決闘数分前、控え室になっている小屋で全員集まって会話していた。会場からの人には分からないような位置に立っているの、小屋のまわりに人はいない。

「不満か？」

そう言つて、武器を入れた袋を持ち上げる彼。

その様子に彼の従者たちは顔をひきつらせている。

「いえ、不満とかそう言うんではなくてですね。

うーん、なんて言うんでしょう？」

「正直言つて突っ込みどころが多すぎてどこから突っ込めばいいのか……」

「相手がとんでもなく哀れだな。
完全にピエロに成り下がっちゃう。」

クルス君、ルルちゃん、レオンさんが困ったように言う。
煮え切らない返事しか返せていない彼ら。
何か、危険な武器なのだろうか？

この人ならばどんなものが出てきてもおかしくない。

「言っただろ？」

徹底的にやるって。

「当然精神的にもやるさ。」

その妙なやり取りに、何とも言えない空気が流れる。

「・・・そろそろ時間だな。」

君たちは下がちなさい。

私も出ていく、セフィリア、後は任せた。」

「あ、はい。」

「レイ様、頑張ってくださいね。」

「心配するだけ無駄でしょうけどね。」

「ほどほどにしてやれよ。」

「まあ無理だろうが。」

そう言って彼らとお爺様は出ていき、レイさんと2人だけが残される。

しばらくの沈黙が続いた後、彼が聞いてきた。

「前から聞きたいことがあったんですが。」

「何でしょう?」

「貴方のご両親はどうなされたんですか?」

「1度も姿は愚か、存在をほのめかす言葉すらありませんでしたが。」

「

「・・・亡くなりました、1年前に2人とも。」

もう慣れた質問だったので、それを答えること自体にはもう何も感じない。

本当に傷つくのは、その後に見せる反応だからだ。

誰もが同じ反応しか見せない。

「へえ、そうなんですか。」

それでディック殿はあんななんですね。

過保護も理由がちゃんとあったということですか。」

しかしこの人の反応は、他の誰もが見せないものだった。私は驚いて聞く。

「同情しないのですか?」

「何故貴方が望まない反応をしなければならぬのですか。」

それに、人が死ぬのは珍しいことではない。

私も似たようなものですね。」

「そう、ですか。」

このことを話すと、誰もが同情するかのような目で見てくる。私はそれが、泣きたくなるほど嫌だった。みじめな気持ちになるだけならばいい。だが、中には両親を馬鹿にするようなことを言うものもいるのだ。オルトバーン様のように。本人に悪気は間違いなくない。だが、それで許せるものではない。

「・・・なるほど。」

これがあの方を好きになれない理由だったのですね。」

今ようやく気付いた。

両親を馬鹿にされたことを、私は大人げなくも根に持っていたのだ。

「私の両親は、冒険者として仕事をしている最中に亡くなりました。それも、高額の依頼を達成するために実力に見合わないランクのものを受けて。」

これを聞いた者の反応もまた、1つだけだった。

つまり、なんて馬鹿なことを、と。

どんな状況だったかも知らないで、ただそのことだけを聞いてすべてを分かったかのようにそう言うのだ。私はおそらく期待していたのだろう。

さつきと同様に、他の人とまったく違うことを言ってくれるのではないかと。

そして、その想いは叶えられた

「・・・素晴らしい人たちだったのですね。」

その言葉に、私は心を揺さぶられた。

「貴方を助けるためだったのでしょうか？」

そんなことをしたのは。

大切なもののために、命を懸ける。

私には出来なかった、簡単でありながら何よりも難しいこと。

私は彼らを尊敬します。」

「何故、分かるのですか？」

声が震える。

「あのディック殿が、そんなことを許すような教育をするわけがありません。」

絶対に厳しく約束させていたはずです。

それを破るといふことはつまり、親との約束を破るほどの重要なものと天秤にかけたということ。

そんな大切なものを私は、貴方以外に思い浮かびませんからね。」

その言葉に私は、抑えられない歓喜を感じていた。そして、気が付いたら何もかもを話してしまっていた。今までため込んでいたものをすべて。お爺様に伝えていないことさえも。

この人ならば、すべてを受け入れてくれる

そんな、自分勝手なことを信じることが出来たから。

s i d e o u t

俺はセフィリアさんに胸の内を吐き出された後、直ぐに武器を入れた袋を持って会場へ向かった。

俺が到着すると、会場が割れんばかりの歓声上がる。

因みにその中の半分は、糞野郎を応援する婦女子の方々の黄色い声援だった。

まあそれが男どもは気に食わないのだろう、俺の方には野太い声援

が送られる。

まあ俺としては、声援を向けてくれるなら男女どちらでもいいのでそのことに不満などないのだが、「殺せー！」だの「奴の顔をぐちゃぐちゃにしてやれ！」だのは流石にどうかと思うのだが。

そして、中心に着くと目の前には糞があつた。

「君、すごく失礼なことを考えてはいないか？」

「失礼な。」

私は何故広場のど真ん中に汚物があるのかと至極当然の疑問を思っただけですよ。」

「……まったく君には呆れる。」

GでBに勝てるわけなどないのに、逃げるチャンスを与えられてそれをくだらない意地で台無しにするとは。

君の望んだことだ、一生残るような怪我をしても恨まないでくれよ？

まあ、ただ立っていてくれれば大怪我をすることもないだろうが、気が付いたら終わってるだろうから、妙な心配はしないでくれていいよ。」

「よく回る舌、いや糞だな。」

いや、汚物が音を出せるだけでそれは大した進化ですか。

確かに貴方は糞の中でも最上位なのでしょうね。

まあ所詮は汚物でしかありませんが。」

「……始まつたら2秒で方を付けさせてもらつよ。」

私とて、格下相手に馬鹿にされれば腹が立つ。」

）は、どこまでも上から目線か。

実にいいね、その顔が屈辱に染まる様をじっくり見せてもらおう。

）
そしてお互いに距離を取る。

そして審判の壮年の男が口を開く。

「両者、武器を取り出して構えてください！」

その言葉を聞くと、糞が綺麗な銀の槍を構える。

完全に突くことのみの特化しているらしく、そのフォームはほとんど針そのものだ。

だが、その余計な虚飾の無さに好感が持てる。

まったく、武器だけはいいものを使ってやがる。

「どうした。」

「抜かずに負けを認めるか？」

いっちょ前に挑発してくる糞に触発されたわけではないが、俺も袋から今回の武器を取り出す。

その武器の姿に、誰もが言葉を失った

怒号がルツソの街全体に響き渡った。

34話 決闘（笑）直前（後書き）

面白いと思ってくだされば是非評価を

新武装の登場を期待して下さっていた方には申し訳ありません
サブウエポンは次回か次々回出ますが、メインはまだ先になります

35話 決闘(笑)(前書き)

さあ、貴族さん最初から最後までフルボッコの回です
これずっとやりたかったんですよねー、やっと書いて満足です
学校そっちのけでさっさと書いてしまいました・・・

反省

あと、武器の名前は、感想に多かったアレにしたかったんですが、
著作権に引っかけりそうだったんで、自作のものにしてもらいました

・・・やりすぎてないか心配ですね

35話 決闘（笑）

喧々囂々、非難の嵐。

野次がそこから中から聞こえてくる。

しかし、そんなことを気にする俺ではない。

「き、貴様は、まさか本気でそれと戦おうと言うのか・・・？」

糞野郎が顔を引き攣らせながら、怒りで震える声で聞いてくる。

「当然じゃないですか。」

これは我が家に伝わる家宝、『聖剣 ダーウィンコーン』です。」

「そのどこが家宝だ！」

しかも無駄に気取ったような名前まで付けて！」

「日夜大地の恵みを受けて素晴らしく製錬されたこのフォルム。

そして恵みの雨により育まれたこの瑞々しい緑の羽衣。

聖剣と呼ぶにふさわしいではありませんか。」

「婉曲にいったただけで要するにただの野菜なのではないか！」

「武器にもなり、しかも有事の際は食料にもなるという兵隊垂涎の逸品です。」

これさえあれば戦争にわざわざかさばる兵糧を持っていく必要がなくなるのですよ？」

「どこがただのダイコンだというのですか。」

「その言い方ではダイコンだと認めてるぞ！？」

「大自然の力をご覧あれ。」

「人の話を聞け、上手いことを言っただつもりか！？
そもそもそれで私をどうするというのだ！？」

「貴方をおいしく料理して差し上げます。」

「ぐう……！」

「おや、今のは上手いことを言っていましたか。」

「うるさい！！！」

俺の挑発の数々に、怒りで完全に我を失いつつある糞。
いい感じになってきたので、笑いを必死で噛み殺しながらとどめの
一撃を放つ。

「そう怒らないでくださいな。」

悪かったですって、ちゃんと別の武器も用意してますから。」

困った弟に言い聞かせるかのような口調で告げる。

相手はもともと怒りでどうにかなりそうになっているところ、その
口調で語られたことで、血管が切れるんじゃないかと俺が心配する
ほど顔をしかめたが、何とか耐えていた。

「それならば早くそれを出せ！」

もう待てんぞ！」

「せっかちですねえ。」

えーと確かこの辺に・・・あ、あつたあつた。」

そう言つて俺は再度袋をまさぐると、武器その2を取り出す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ギャラリィ）」

それを見て観客たちはどんな反応をしたらいいのか困つたような表情を見せ、糞は怒りで顔を、血塗れになつたかのように真っ赤に染めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ゴボウ。（観客A）」

誰かがようやくそれだけを絞り出した。

そう、俺が取り出したのは1.4mほどの長さのゴボウである。

明らかに袋に入る大きさではなかつたのに、周りの人間でそれを突つ込む者はいない。

いや、突つ込める者はいない、の間違いか、あまりの展開にそれどころではない様子だ。

「名付けて、家宝『魔槍　ゴンボー』」

見た目が似てるんで、棍棒とかけてみました。

名付けてと言つてる時点で分かるように、もう家宝でもなんでもないことを隠す気はない。

そもそも信じてる者など皆無だつたらうが。

しかしこの世界の食べ物は何れも色がおかしかつたんだが、何故こ

の2つは向こうと変わらないんだろう？

「審判、開始の合図を！」

今すぐ私を虚仮にしたことを後悔させてやる……！」

「は、はい！」

始め！」

審判が焦ったように開始の合図を告げる。

「その身で償え！」

愚か者が！」

そう言つて、かなりの速さで、そして無駄のない動作で槍を繰り出してくる。

闘気での槍の強化も、光つてはいるがなかなかと見える。

ガキイイン

「あー、愚か者つて点は否定できませんね。

自覚してますから。」

「は？（相手含む全員）」

俺はそれをじっくりと見物しながら、闘気を送ったダイコンを前に出した。

その位置には高速で槍が迫っていたので、そのまま事態が進行した結果。

ダイコンにより金属の槍が受け止められるという、世にも奇妙な光景が展開された。

「は？・・・え？、これは・・・え？」

「おーい。」

呆けてる場合ですかー？」

事態についてこれず、ただただ呆然とする奴に、俺は綺麗な笑みを作って言う。

「とりあえず、歯あ食い縛れや。」

そして左手のごぼうで槍を払いのけ、ダイコンを振りかぶる。

「これぞ、大自然の力！」

そう叫んで思いっきり振り抜いた。

ゴツツツ！！！！

ダイコンが空気を切り裂く音と、鈍器で殴ったような音が響く。

哀れ、奴は左側頭部に直撃を受け、錐揉み描いて吹き飛んだ。

「ぎゃあああああ！！！！?????」（男衆）

そして男たちが集まっていた一角に直撃し、野太い悲鳴が上がる。大体20mは飛んだだろうか、まあ死人は出ていないだろう。

「たーまやー。」

ん？、これは違うか？

ま、いいか。」

今の状況を作り出した俺に、それとダイコンに視線が集まる。

比較的によくで観戦していたディック殿とセフィリアさん、そしてレオンたちも俺を見ていた。

と言っても、初めて俺の非常識さを目の当たりにした2人は目を大きく見開き、見慣れてきている仲間3人は呆れたように見ている、という違いはあったが。

「が！？、は、ぐ・・・あ・・・！」

「おお、起きた起きた。」

いやーよかった、これで終わったらどうしようかと思ってたんですよ。」

糞野郎は苦悶の声を上げ、ふらふらとしているがしっかりと立ち上がりこちらに歩いてきた。

）・・・あれ？

そう言えばコイツの名前って何だっけ？

一瞬そんな考えが頭をよぎるが、気にする価値もないことだったので頭のごみ箱に投げ捨てる。

「何だそれは・・・！」

何故私の槍を受け止められる、これは堅さだけで言えば最高の部類に入る「剛銀」製だぞ！？

それがたかが食物ごときに！？」

混乱しているのだろう、そんな聞いたところで何の得にもならないことを、決闘の最中に聞いてくるといふ愚行を行う糞。その問いを俺は鼻で笑ってやった。まあどうせだから答えておこうか。と言つても決して親切心などではなく、相手に俺との差を教えるためだったが。

「逆に聞こうか。」

何故食物、この場合は植物か、が金属より劣っているなんて思つたんだ？」

「そんなものは常し」

「常識とは何だ？」

戦いという生死を分けるような事態に常識がどれだけの影響力を持っているというのだ？」

そもそも、常識が絶対のものだとも思っているのか？
だとしたら貴様は愚かを通り越して哀れだな。」

「貴様！」

「常識など俺にとっては何の価値もない。」

己の行動を制限し、可能性を縛り付けるただの鎖だ。
そんなものに縋らなくては生きていけないほど、何かを頼りにしなくては生きていけないほど、お前は、そして人は弱い存在か？」

「そ、そんなことはない……！」

「……ふむ、話が脱線してしまっていたな。」

質問に答えよう。

理由は単純、闘気の使用による硬度・強度の上昇。
ただそれだけだ。」

俺がそう答えると、今度は周りから非難ではなく否定の言葉が飛び交う。

「馬鹿を言つな、それなら私だつてしている。

そもそも元の硬さで圧倒的に植物が負けてるんだ、同じ強化をしたところで結果が変わることは無い。

それが
「

「それが常識、そう言いたいのか？」

俺がそう言つと、糞と奴の意見に賛意を示していたものが黙り込む。さっき俺が言っていた言葉を思い出したのだろう。

「そもそも、闘気とは生命力を物体に干渉できるようエネルギー化したものだ。

これがどういうことを意味するか分かるか？

つまり、もともと生命体に存在するものを外に出しただけ、ということだ。」

「・・・それがどうした。

そんなこと、子供だつて知っている。」

奴がそう言つと、周りからも当然だ、という声上がる。

この世界には魔獣という実に分かりやすい脅威が存在する。

人は生きるための最小限の条件として、身体能力で圧倒的に勝る魔獣に打ち勝つ術が必要だった。

それが「闘気」、そして「魔法」。

この世界では、このどちらかを習得しなければまともに生きていくことが出来ない。

もちろんすべての民間人が戦えるわけではないのだが、そう言う環境だということもあり、その2つについての知識は学び舎でなくとも親などから徹底的に教え込まれるらしい。

だからわざわざ確認せずとも、知らない人間は滅多に存在しない。

だが、得てして「知る」と「理解」は違うものだということを、分かっている者はいないのだ

だから俺はそのことを嘲笑う。

自分の知ることが世界のすべてと思っ込んでいる愚者を。

「違うんだな、それが。」

それは「知っている」というだけで「理解」ではない。

お前は10あるものを1知っただけで満足しているだけだ。」

「馬鹿にしているのか・・・!」

幾分落ち着きを取り戻しているようで怒鳴ったりはもうしてこないが、怒ってはいるようだ。

「してるぞ。」

そのことを知っているのに、闘気の「親和性」が生命体の方が圧倒的に高いと言うことを「理解」出来ていないのだからな。」

「親和性、だと？」

完全に予想外の言葉だったようで、素っ頓狂な声を上げる。

「闘気はもともと、生命体に存在するものだ。」

つまり金属のような非生命体よりも、植物のような生命体のほうが、闘気を込められる量が圧倒的に多くなるのは自明のことだと思うが？

「な！？」

俺の言葉に辺りがどよめく。

誰もこのことに気付いていなかったらしい。

それも当然。

わざわざ軟らかいものに大量の闘気を込めるよりも、もともと硬いものに闘気を込めた方が普通は効率がいいからだ。

だが、それで固定観念として定着してしまえば、それは成長の可能性を消してしまう。

人は何時だって、試行錯誤の末に新しいものを生み出してきた。

その未来を、消してしまっていることに気付いていた者はいなかったようだ。

「だ、だが、大量の闘気を送り込んでしまえばそんな脆いものなど許容量を簡単に超えて壊れてしまうではないか！？」

それもまた事実。

植物は脆い。

そんなものに闘気を無理やり詰め込んでしまえば、その送り込まれた物体は崩壊してしまう。

それもまた、「常識」であった。

「お前はあることを忘れているな。」

「何？」

「我々人間の身体が闘気を全開にしたときのその量は、その許容量の比ではない。

しかし、人の身体は植物などよりも脆く軟らかいぞ？

何故身体を保っていられると思ってたんだ？」

その俺の問いに、黙り込んでしまう。

人は体内の闘気を全開にして、疲労の極致に達することはあっても身体が壊れることは無い。

この男はそれが何故か深く考えたことは無かったらしい。

「答えは、人は無意識の内に体内の闘気を循環させているからだ。

あたかも心臓から送り出される血液のように。

闘気はただ送り込むだけでは、風船に延々と空気を送り続けるようなものなのだ。

そんなことをすれば簡単に割れてしまう。

しかし、循環させればそんなことは無くなる。

その結果がさっきの光景ということだな。」

「そんなことが・・・」

啞然とすることしかできていない。

しかし随分と話し込んでしまったな、そろそろ再開するでしょう。

そう思い、俺はダイコンの先を相手に向けて、意地悪気な笑みを浮かべる。

「さて、話はもう終わりだ。
来いよ、格の違いを教えてやる。
食物にズタボロにされるといっ、実に屈辱的な方法で、ね？」

俺の話で呆気に取られていたギャラリーがその言葉で我に返り、辺りが再び喧騒に包まれる。

「くそっ！」

その中で先に動いたのは相手。
まあ俺は今能動的に動く気はないから仕方がない。
さっきの会話の最中、ずっと体力の回復に努めていたようで、その速度は始めの突きと比べて遜色ない。
まあ、俺は知っていて見逃していたわけだが。
それを俺は左手のゴボウで易々と受け流す。
槍は俺の左目を掠るかどうかがギリギリのところを通り過ぎて行った。
そのまま俺は右手のダイコンで腹を突く。

「うおおあ!？」

それを身を捻ることで辛うじて躲すが、今度はゴボウがその顔面を突きで狙う。

これも頭を捻り躲す。
そのまま転がるようにして俺から距離を取り、顔を上げて槍を俺に向けて構え、

一瞬で目の前まで来た俺にダイコンで腹を突かれる。

「がはっ!?!」

立ち上がるうとしたのにすぐさま再び地面を転がる。

それを追い、ゴボウで顔を狙って突きまくる。

それを転がり続けて必死に躲し続ける糞野郎。

突く度に地面に綺麗な細い穴が空く。

「どうした？」

軍部の名門、槍のサイデンハルトが得意の突きで完全に負けているじゃないか？」

「だ、黙れ！」

俺が突きばかり多用しているのは、相手の得意分野で思いつき打ち負かしてやるため。

案の定、糞野郎は実にそそられる屈辱の表情を浮かべる。

そのまましばらく遊んでいたが、そろそろ次の遊びをするために動きを止める。

相手は自分が全く相手にされていないことに気付いたようで、血が流れるほど唇を噛みしめている。

「貴様は本当にGランカーなのか!?!」

「当然。」

ほら証拠だつてありますよー。」

そう言つて俺は、新しく手に入れたカードを投げて渡す。
それを見て、本当だと知つた奴は俺に乱暴にカードを叩きつけるよ
うに返してきた。

「調子に乗るなよ！」

さっきは油断していたせいであんなことになつたが、一度体制を
立て直してしまえばこつちのものだ。

本当の槍捌きを見せてやる……！」

（ははは、油断ね。

まあ今はいいか、後で追い詰めるネタが増えたし。）

「槍捌きつて……」

俺の使つてるものはゴボウなんだが？」

「あ、確かに。（ギャラリィ）」

俺のその言葉に、ギャラリィは納得する。

それを聞いて今度は羞恥で真っ赤になる糞野郎。

まったく、コロコロと顔色を変えて忙しいやつだ。

「うるさい！」

今度はさっきまでの大振りではなく、コンパクトに槍を振る。

流石に今までので学習したらしい。

大振りでは俺は捉えられない。

身体を逸らし、捻り、跳び、避け続ける。

その様子に段々調子を取り戻してきたらしい、表情に自信を取り戻

す。

「どうだ、これがサイデンハルトの槍だ！」

「へえ、そうなのか。」

しかしそうだとするなら

「

そして相手の調子が上がったところで俺は、その表情を壊すために動く。

ガンッ

「随分と軽いな。」

「そ、んな・・・」

俺の行ったことに、相手は信じられないといった様子で呆然と呟き、周囲は息を呑む。

ゴボウの先端で、槍の穂先を受け止めているのだ。

因みにこんな芸当ができたのは、このゴボウが先端を直角に切り落としていて面になっているからである。

まあそれでも普通は出来ないが。

「うあああああ！！？？」

ほとんど錯乱状態になりながら、高速で槍を連続で突いてくる。しかし、その速度は並ではない。

俺の感覚から言っても、それなりに速いと言えるものだった。

しかし所詮それなり。

俺はさつきと同様に、ゴボウの先端でその突きを受け続ける。

辺りに、速すぎてほとんど繋がっている衝突音が響く。

その様子を周囲の人間はただ見守っていた。

理由は単純。

戦っているのが野菜と槍なので、どんな反応をすればいいのかわからないのだ

それも当然と言える。

いくら名勝負に見えても、片方が野菜という非常識極まり無いもので戦っているのだ。

これで困惑しない方がおかしい。

それは相手も同じ。

その表情に、大きな屈辱が見てとれる。

同時に、少量の恐怖もあったが。

(そろそろゴボウの出番はお終いかね?)

そう思い、俺は演出としてゴボウが弾かれた風を装い未練なく手放す。

相手はもう、どんな小さな勝機でももう見逃したくないのだろう、焦りから大振りの一撃を繰り出してくる。

「悪手だね。」

俺はそう眩き、ダイコンを構えてその身で受け流す。
そのまま直進し、先端で胸を打つ。

「かっっっ!?!」

肺を一撃したので、相手の口から空気が漏れる音がした。
三度転がる糞野郎。

そのまましばらく寝転んでいる奴を、俺は欠伸をしながら立ち上がるのをゆっくり待つ。
そのままどのくらいたったか、おそらく数分だろう、奴が立ち上がる。

どう見ても、その様子は疲労困憊だったが。

まあ、これから今度は満身創痍になってもらう予定だが。

「もうしばらく休んだ方がいいんじゃないのか？」

碌に動けそうにないみたいだし。

いつそのこともう降参したら?」

一応、善意から忠告してやる。

まあ当然、その答えは。

「黙れ、降参などという生き恥をさらしてたまるか……!」

これだった。

俺はこれ見よがしに溜息を吐く。

そしてダイコンを構える。

いつも通りに、白い身と葉の境ではなく、身の方を持ち葉の方を前にする。

「はあー！」

「よ。」

ピシィッ

という乾いた音と、槍が地面に落ちる音が響く。

「う、お、あああぁ・・・！」

相手は両手を押えて悶絶していた。

俺が葉で手を打ったのである。

手は、ズタズタになり血が流れていた。

たかがダイコンの葉と侮るなかれ、闘気で強化した葉は下手な鞭より遥かに丈夫な存在である。

さらに、ダイコンの葉はギザギザしているので、おろし金のような効果も発揮する。

(これが本当のダイコンおろし、とか考えてみたり。)

そんなくだらないことはさっさと忘れ、とりあえず奴の身体めがけて一振り。

「~~~~~!!!!!!???」

もはや声すら出せない痛みらしい。

騎士と言われていた癖に、鎧を付けていなかったことで身体は一振りで傷だらけになった。

そのまま俯き続けている奴。

「・・・おや？」

気付くのが遅れてしまったが、コイツ、息を整えている。そして身体のだの部分か動くのかゆっくりと確認しているようだ。そしてその点検が終わった瞬間。

「ぐうっおああああっ！！！！！」

(速い！)

俺が本気でそう思うほどの勢いで、裂帛の気合いで以って打ち込んでくる。

もはや、先のことを考えていないのだろう、身体と槍が眩しいほど輝いている。

まだこれほどの体力が残っていたとは驚きだ。俺はダイコンに循環させている闘気を加速させ、硬度を一気に高める。

「ずあああああ！！！」

今日初めての叫びを上げ、相手と相對する。そして身体が交差し

キイイイイイン

甲高い音を響かせ、槍が砕け散った。

俺のダイコンも、ごっそりと抉れてしまっていたが。そして、相手は呆然と折れた槍を眺めている。傍から見れば、かなりシリアスな光景だろうが。

（やはり野菜ってのが全部ぶち壊してるよなー。）

俺は苦笑しながらそう思う。

自分が望んだ結果なので、後悔はしていないが。

（さて、これで身体的にヤルのはもういいだろ。

それにコイツのチンケなプライドも粉々にできただろうし。）

最後の段取りに向かうとしよう

「納得できるか・・・！」

「おや？」

突然何かを言ってくる糞野郎。

「納得できるかと言ったんだ！」

決闘の場に食物を持ってくるような、ダイコンとゴボウを持ってくるようなふざけた男に、セフィリアさんを渡せというのか!？」

実際、完全な八つ当たりであるが、それは事実でもある。

俺はコイツを精神的に参らせるために、野菜などと言う誰が見ても明らかにふざけていると分かる術を取ったのだから。

それは、コイツにこういうことを言わせるためでもあったので、完全に俺の思惑通りになっているのだが

「そんなふざけた男に、こんなことをして人を貶めるような男に、愛する人を幸せにできるわけがない！」

おい、お前はセフィリアさんを幸せにできるのか!？」

私にはその自信がある！

必ず幸せにしてみせる！

お前は、が、ふ!？」

皆まで言わせる前に、俺はその首を捻り上げていた。

（ああ、駄目だ。

こういうことを言わせるために俺はコイツを焚き付けるようなことをずっとしてきていたのに、やはり腹が立つ。

どうしても、その言葉を許容することが出来ない。）

自分の思惑通りに進んでいたのだ、ついさっきまでは。

だが、先ほどの言葉に俺は頭が熱せられたこのような怒りを感じていた。

「ク、ふ、ははハ・・・」

意図せず不気味な笑い声と笑みが漏れてしまう。

「糞野郎、幸せに『する』だと？」

貴様はそれがどれだけ傲慢で非道な言葉か分かってて言っているのか……？」

さあ、最後の仕上げといこう

この男を改心させるのだ

35話 決闘(笑)(後書き)

面白いと思ってくだされば、是非評価を

36話 改心、そして再戦（前書き）

はい、題名通りまだ続きます

次で終わると思いますので、どうかお願いします

今回かなり書きにくかったんで変な部分が無いか心配です

36話 改心、そして再戦

「傲、慢だ、と・・・？」

ど、う言っ、とだ。」

俺に喉を圧迫されているため碌に言葉を発せなくなっている男が、
やっとそれだけを口にする。

「どうも何も、そのままの意味だ。」

そう言っ、て男の拘束を解く。

酸素を求めて荒く息をしている糞野郎。

俺はそれを興味の無い目で見ながら、続きを口にする。

「それは他者の人生の支配だと気付かないのか？」

お前は口で綺麗ごとを言っているようだが、その実、ただセフィ
リアさんを支配したいだけだ。

それも、ただのステイタスとして。」

何時の時代も、見栄えのいい女性を侍らせることは男にとって、私
はこれだけ身分が高いんですよ、という事実を周囲に示すステイタ
スとなる。

はつきり言っ、て虫唾の走る話ではあるが。

そして、この男もその例に漏れない。

意識してではなく、感情の暴走の結果なのが唯一の救いか。

「貴様！」

私を侮辱するのもいい加減にしろ。

私は本心からあの人を欲しているのだ、そのようなことを言っ、て

私を貶めるか・・・！」

怒りを押し殺した声でそう言ってくる。

そして、周りの女性陣からも批難の声が飛んでくる。

(コイツ、本当に人気あるな。)

自分が批難されているのにどこか他人事のような気分でそれを聞くだが、このままでは詰め寄って来そうだったので、拘束はしておくことにする。

右手人差し指を空中ですらすらと動かす。

すると、奴の足元に魔法陣が浮かび上がる。

奴は驚いて飛びのこうとしたが、その前に身体に岩が張り付き行動不能に陥る。

タイムラグのほとんどない魔法の行使に、そして俺が魔法を扱えたという事実そのものに、周囲がどよめく。

相手が動けなくなったことに満足し、相手が何か言ってくる前に言葉が続ける。

「話は変わるがお前、今までセフィリアさんとまともに会話したことが無いそうだな。

長くてもせいぜい数分、しかも必ず縁談の話から始めるとか。

いくら一目惚れだからってねえ。」

「・・・それがどうした。

好きになった人がいるなら、何とかして添い遂げようと努力するのは当然のことだ。」

自信満々にそう言ってくる。

俺は冷めた視線を奴に向ける。

恐らくその考えは、この時代としては極普通のことなのだろう。

魔獣や戦争の脅威がある以上、さまざまなことに性急な行動を取る
ことが求められる。

そして、恋愛事にもそれは当てはまってしまった。

少しでも気に入った人間が居たら、その人と添い遂げようと必死に
アプローチする。

それが普通なのだ。

だからこそ、セフィリアさんも、ディック殿も、この男が気に入ら
ない理由が分からなかった。

あまりにもありふれたことだから。

「当然ね。」

自覚が無いというのは本当に救いようが無いものだな。

ここまで来ると、俺も無意識に似たようなことをやってるんじゃないかと心配になる。」

俺はそれで同情する気になどなれない。

気に入らないことがあったら、他人のことなど気にせずそれを正さ
せてもらう。

何を言いたいのか分かっていない奴に、言葉を放つ。

「お前がやっているそれ、「昆虫採集」と同じだろうが。」

「なっ!?!」

あまりにデリカシーの無いその発言に奴は絶句し、周囲の主に女性
から罵声が飛んでくる。

まあ当然だろう、要するに俺は女性を虫と同列視する発言をしたわ

けだから。

実際にそう見ているのは糞野郎なんだがな。

「貴様は私がそんな不純な動機でセフィリアさんに交際を申し込んでいたと言いたいのか!？」

「違うのか？」

珍しい虫を見つけたら、それを捕まえようとして必死に追いかける子供。

見目麗しい女性が居たら、それを口説こうと必死に追いかける男。その2つにどんな差があるというんだ？

あるなら是非教えてくれ、それで俺が納得出来たら喜んで負けを認めて、お前の軍門に下ろうじゃないか。」

そう俺が言つてやると、奴は何かを言おうとしてすぐに止め、そのまま少し考え込む。

そして顔色を険しくしていく。

まったく反論の余地が無いことに気が付いたのだろう。

今までの自分の行為がどんなものなのかにようやく気付いたようだ。

(当然だな。

今までは「一目ぼれ」という聞こえのいいオブラートに包まれていたから気づかず済んでいた。

だが、一度それを崩されてしまえば、それまでの蓄積が一気に押し寄せてくる。

それに耐えるのは難しいだろう。(

「そんな・・・私は・・・そんな恥知らずなことをしてきたというのか・・・?」

「・・・うう、いや違う!」

認められるかそんなものは詭弁だろう！

お前の言つとおりだとしても、私のあの人が好きだと思つ気持ちは本物だったんだ。

それが間違いなものか！」

「まあ確かにね。

一目惚れだろうとなんだらうと、その中に愛情の一種があることには変わりはないわな。

お前は周囲の評判では人格者だったみたいだし、そこまで否定する気はない。」

ここで俺は一度相手を持ち上げる。

本当にこの男は、行ってきたことそのものは騎士と評するに申し分ないものなのだ。

単身で他人を助けるために魔獣を討伐したことや、汚職を行つていた為政者を捕まえたことが何度もあるらしい。

ディック殿が誠実だと言つて居たのも、その点では間違いではない。そう言つと、奴の顔色が正常と言える程度には良くなった。

すぐに落とすけど

「だが、お前は勘違いしているようだがな、俺は別に一目惚れそのものを否定しているわけじゃないぞ。

俺が否定してるのはお前だよ。

一目惚れそのものは、その後で自分たちなりに仲を進展させていくことが出来るならば、それは素晴らしいことだと思つ。

だがお前は行動を間違えてしまった。
セフィリアさんと仲を深めることをせずに、性急な行動をしてしまっている。

そんなもので仮に恋仲になったとしても、それは絶対にろくなことにはならないね。

これが俺がお前を嫌いになった理由その1だ。
そしてそれ以外にもある。」

奴は俺の言葉を黙って聞いていた。
俺の言葉を受け入れ初めているのならいいが。

「もう1つはお前のセフィリアさんに語った言葉だ。
「守る」「救う」「幸せにする」。

それらの言葉の裏に潜む無自覚の悪意に欠片も気づいていない。」

奴が何かを言い出す前に、続ける。

「どこが悪いというのだ？
いいことではないか、その3つは。」

確かに、世間の見方ではそうなのだろう。

だが、俺の見方ではそれらはたちまち醜いものとなる。
そして同時に、とても尊いものにも。

「「守る」「も」「救う」も、それは見かけ上だけは綺麗だがその本質は酷いものだ。

どんな高潔な精神の持ち主だろうと、どんな聖人君子だろうと、
どちらも他者を見下した上での行動になってしまふのだから。

「貴方」は「私」よりも弱い、だから「私」は「貴方」を「守ろう」「救おう」。

無自覚の見下し、批難、嘲笑。

そんな形に絶対になつてしまう。

何とも皮肉なことだよな、誰よりも人を守ろうとする者は、誰よりも傲慢に、身勝手に、そして否定的な人間にならねばならないのだから。」

「・・・お前は、過去の偉人に何か恨みでもあるのか・・・！」

それはお前の偏見だ！

すべての人間がそんなものわけがないだろう！」

言葉と同様に皮肉気な笑みを浮かべる俺に、尊敬している人間を侮辱された気分にもなったのだろう。

鋭い視線を飛ばしてくる。

「俺は過去の偉人の方々に敬意をもつてるさ。

そのことを理解した上で彼らは行動を起こす。

自分のしていることがエゴの塊だということを自覚し、苦しみ、それでもなお進もうとする。

自分勝手でもいいから他者を「守り」、「救う」ことが出来る。

この上なく素晴らしい人たちじゃないか。

そして、これは確かにお前の言うとおり俺の偏見でしかないさ。だが、その上で聞こう。

お前は俺の言葉を、完全に否定できるのか？」

「それは・・・」

「出来ないのだろう？」

偏見ではあつても、これは俺という1人の「人間」の意見であり考え方だ。

同じ人間である以上、ある程度は考え方は同じなんだ。

まあ俺の場合は、そのある程度は僅かなものだと思うが。それでも、俺の考えたことが他人の感性と完全にずれることはありえない。

俺が考えたことは、間違いなくわずかなりともお前は理解できるはずだ。

そこで言いよどむのが何よりの証拠だしな。」

俺がそう言つと、さらに顔を俯けてしまう。

「俺は、誰かを「守る」とか「救つ」と言つ行為を否定する気は断じてない。

だがそれには条件がある。」

そこで言葉を切り、続ける

「自分のその行為がどういふものなのかを、理解していることだ。」

「私は違つと、そう言いたいのか？」

「違わないのか？」

お前がセフィリアさんに言っていた言葉は、ある共通点がある。

それは彼女の主観が全く入っていないことだ。」

「何？」

「例えばさっきの「幸せにする」。

これは聞こえはいいだろうが、その実、自分がその人物に一方的に何かを「する」という一方通行の考え方が生み出すものだ。

それは、一種の他者の支配と言い換えることもできる。

一方的ということは、他者の意志を気にせず行つということなの

だから。

それを望んでいる者相手ならば、それもいいだろう。

だが、彼女はそれを望んでいると思うのか？」

「・・・無い、な。」

素直に認める目の前の男。

恐らく、これが彼の地なのだろう。

自分のした間違いを、素直に認めることが出来るのだ。

「そう言うことだ。」

この場合、彼女に言うべき言葉だったのは「幸せになろう」「だったろうな。」

これならば、彼女の意思を尊重する言葉だし。

「守る」とか「救う」にも同様のことが言えるのは今のお前ならばもう分かってるだろう。

どちらも相手のことを考えず、自身の一方的な感情の発露だ。

そもそも人間に、一人前になるのすら難しい人間に、自分以外の人間をもう1人どうにかするなんて、傲慢な考えだとは思わないか？
少なくとも俺はそう思うね。」

「はは、確かにな。」

なるほど、君の言いたかったことがよく理解出来たよ。

私は本当にセフィリアさんのことを、無意識の内に支配したがっていたのか・・・

恋心とは、ままならないものだ・・・

そんなことをしようとしていたことに気が付かなかったのだから。

「

穏やかな表情になり、そう口にした。

大分応えてるようで、その表情は苦渋なものだ。

そして、そのまま俺にとって一種の爆弾を投下してきやがった。

「しかしまあ、君ならば出来るんじゃないのか？」

人を「救う」ことも「守る」ことも。

その強さがあれば。」

「へ？」

俺は一瞬、何を言われたか分からず、思わず間抜けな声を出してしまった。

そして、どういう意味なのかを考えてみる。

（「すくう」、「掬う」？

ああ「救う」か、成程ね。

でも誰が？、俺が？

何を？、他人を？

どうやって？、この力を使って？

どうして？、この力を持つてるから？）

そして意味を理解した途端。

「ぶー、く、はー！

あははははははは！……！……！

思わず爆笑していた。
それを変なものを見るような目で見る周囲の人々。
だが、俺にはおかしくてたまらなかったのだ、奴のその言葉が。
だって。

俺が誰かを救えるなど、微塵も考えたことがなかったから

「おかしいことを言うなあんたは……！」

俺が救う？、人を？

冗談でも笑えん……て笑ってるか。

ははは！」

ひとしきり笑った後、俺は困惑している奴に向き直る。

「俺は誰も救えんよ。」

少なくとも結果的にそう見えるようなことはあるかもしれんが、
自分から望んでするようなことは絶対にありえない。

何故か分かるか？」

その質問に答える者はいなかったので、しょうがないから答えを言う。
う。

「俺がその光景を想像できないからだ。」

人は自分の考え、想像が及ぶ範囲のことしか出来んからな。」

思わず思い出す、『あれ』を。

滅多に会えず、だが会えた時は精一杯の愛情を注いでくれた『母』。
その人を俺は、守りたいと思っていた。

最期、彼女は俺の目の前で劫火に包まれて灰になった。

いつも忙しく仕事をして、俺たちの生活費を稼いでくれた『父』。
その人を俺は、支えたいと思っていた。

最期、彼は俺の目の前で生ごみ以下の奇怪なオブジェに成り下がった。

生意気なことを言いながらも、いつも俺を頼り、俺自身も憎からず
思っていた『』。

そいつを俺は、救いたいと願った。

その結果があんなこととはな。

そんなことがあったからだろう。

俺は、誰かを「守る」ということも、「支える」ということも、「
救う」ということも。

それらをすべて、微塵も想像できなくなってしまうていた。

だから俺には出来るはずもないのだ、そんなことは。

だが。

だからといって、ね。

「まあそんなことは今どうでもいいわな。」

自分の思考を切り上げ、俺は困惑している彼を見る。

「それで、お前はとうするんだ？」

俺はそれを聞いた。

今の自分が最も知りたいことだった。

「……素直に私は身を引くさ。」

私は今、敗北感で一杯だからね。」

想像通りの反応。

よって俺も予定通りの言葉を返す。

「足りないね。」

「は？」

「足りない、と言ったんだ。」

大馬鹿者。」

俺は若干の怒りを含んだ視線で彼を見る。

「どういうことだ？」

まさか君は私に何か要求でもするのか？」

「要求と言えは言えなくもない。
だが、少し違うな。」

「では・・・そうか。」

セフィリアさんには謝罪しよう、それとディック殿にも。
今まで間違ってたことをしていたのだからな。」

少し考えて、彼は模範的な解答をしてくる。

間違っただことを認め、謝罪をするのは権力を持った者には難しい。
それをさも当然のように言うことが出来るとは。

「間違いか。」

あれは確かに俺の基準からすればそうだが、一般的にはそうではないんだが。

まあそう思ってるなら謝るといいだろう。

「だけどそれも外れだ。」

「では何だというのだね・・・?」

困惑する彼。

だが俺はその前に聞いておきたいことがあった。

「ところでお前の名前って?」

「は!?!」

さっきまで戦ってたのに知らないのか!?!」

「はいな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・オルトバーン・ロス・サイデンハルトだ・・・」

何かものすごくショックを受けた様子でそう名乗った。

てか、フルネームを聞いたのは初めてだな、そういう点ではドイツ殿にも責任があるのではないかと思う。

まあそれは置いて、言う。

「俺はお前に対して、相当な怒りという立ちを感じていたんだ。

それはお前の行動によるものでもあったさ。

だが、一番の理由は別だ。」

何を言いたいのか分かっていない奴に、俺はその理由を言う。

「お前は、もっ...たいないんだよ。」

「・・・は？」

間抜けな声を上げるのを聞く。
周囲も何を言いたいのか分かっていないようだ。
それを意に介さず、告げる。

「もつたいないと言っただ。」

何故お前はそんな風になってしまった。」

「え、いや？」

何故って・・・」

俺の言葉はあまりにも理不尽な言葉だろう。
だが、言わずにはいられない。

何故お前はそんな風になってしまったのだ、と

この男は、まっすぐなのだ。

この男の周囲の評判がその証拠。

しかし、その方向を間違えてしまった。

他者からの名声、評価、賞賛。

それらを得るために行動を起こすようになってしまったのだ。
でなければ、今回のようなことは起きなかつただろう。
それが、もつたいなくてならない。

「お前は、それだけまっすぐな気性を持っていながらどうして・・・

方向さえ間違わなければ・・・」

顔を俯けてしまう。

「本当の意味で人を救えるようになっていたはずなのに・・・」

俺は、さっきも思ったように人を「救う」など出来るとは思えない。

だが、だからと言って、憧れないわけではない

「俺がいくら焦がれても、欲しても、決して出来ない行為・・・！
それをお前は出来るようになっていたはずなんだ！
なのに何故そんなことになってるんだよ・・・！！」

悔しい。

俺は力を手に入れたのに、どうしてもそれが出来ないことが。
いや、そもそもそこから間違ってるのだろうか。

失うことで得た力で、人を救おうという考え方そのものが

だから、俺はどうしてもコイツがむかつてならない。
俺が出来ないことをできる立場にいながら、それを出来ないでいる
ことが。

「なあ、貴族様。」

だから俺は、やらせてもらう

顔を上げ、奴の目を覗き込む。

気圧されて冷や汗を流す奴の顔が見える。

「思い出せ。」

お前がしたかったことは何だ。」

その歪んでしまった方向を力尽くで捻じ曲げる！

「思い出せ、オルトバーン・ロス・サイデンハルト！
貴様の最初の願いは何だった！」

そう聞いた途端、奴の目が大きく見開かれた。

s i d e オルトバーン

「思い出せ、オルトバーン・ロス・サイデンハルト！
貴様の最初の願いは何だった！」

目の前の、自分より若い青年の言葉に、私は考えさせられた。

いつからだっただろう。

始めは嬉しかった賞賛の言葉を、どこかで当たり前のことのように
考えるようになったのは。

いつからだっただろう。

気付かぬ内に、行動の動機が名声を得るためという不純なものに成
り下がっていたのは。

サイデンハルト家

この国において、最上位に位置する貴族

その家に生まれるものには、生まれた時から騎士になることが宿命

づけられる。

それは次男として生まれた私でも例外ではない。しかし、それを不満に思ったことなどなかった。むしろ感謝したものだ。

人を、救うことが出来るのだから

今でも、行動そのものは人助けと言えるものではある。しかし、実際はその動機が全く違う。

純粹な思いと、不純な名誉欲。

どちらがいいかなど、言うまでもない。

そのことに何故気付かなかったのか。簡単だ。

周りに誰もそれを指摘してくれる人がいなかったのだ。だれもが、私と同じだった。

成長する内に、心が腐ってしまうのだ。社会に穢されて。

汚いことに慣らされて。

そうして、心が摩耗してしまうのだ。

中にはあの方のような人もいたが、大抵の人間はそうして段々と壊れてしまっていたのだろう。

今、それを彼に気付かされた。

私はそのことに気付かされると、凄まじい爽快感を味わっていた。視界が広がり、今まで見えなかったものが見える。まるで、殻を破ったかのような心持ちだ。生まれ変わったというのはこういうことを言うのだろうか。

私は彼に、感謝の念と、ある欲求を抱いた。

s i d e o u t

しばらくの間呆然としていた彼が、目に光を取り戻す。今までのものとは違う、とても澄んだ色の光だ。

（成功、と言っているのかね？）

俺には判別がつかない。

これからの行動で判断するしかないだろう。

「グランド君。」

頼みがあるんだが聞いてもらえないだろうか？」

そんなことを考えていたら、言葉をかけられた。

「頼み？」

「もう一度戦ってもらいたい。」

その言葉に周囲がどよめく。

「いいんで？」

もう戦える身体ではないでしょうに。」

俺がそう伝えると、澄んだ笑みを浮かべて言う。

「いいんだ、セフィリアさんのことももういい。」

不思議なことに今はとてもいい気分だね。

私はただ君と戦いたい。

勝ち負けもどうでもよくね。」

俺はその言葉を聞き、しばらく考える。

そして手を振り岩の拘束を解き、そのまま彼に近づく。

「戦ってもらえるのだろうか？」

「ええ構いません。」

ただ、ちよつと準備がいらしますが。」

そう言いながら俺は、また右手の人差し指を動かす。
そして再度出現する魔法陣に彼は身体を強張らせるが、それは無用な心配だ。

光に包まれて、彼の怪我は少なくとも見かけ上は綺麗に無くなった。

その結果に目を丸くする様を苦笑しながら見ながら、今度は手で彼に触れる。

そして自身の身体……の呼吸を彼のものと同調させる。

瞬間、身体から急速に力が抜けていくのを感じる。

そして彼は逆に、力を取り戻していく。

「ふーむ、これにはやはり慣れないな。」

「これは一体……？
何故体力が戻ったんだ？」

その質問に対し、俺は淡々と事実を口にする。

「生命力の譲渡。

戦いはフェアでないといかんよね、やっぱり。

まあ基礎能力で相当の差が出てしまってるから、フェアという言葉は当てはまらんかもしれんが。」

「……君は本当に私の常識を覆してくれるな。」

驚くことなく、呆れることを選んだらしい。

まあ気持ちも分かる、普通ならば絶対に無理なことだからな。

そのことはまあ今はいいか。

「ところで、貴方の武器は無いようですがどうするんです？
私はあるものを使わせてもらいますが？」

「問題無いよ。」

私の家の者が替えを持っているらね。

しかし武器って、また野菜かい？」

流石にまたあんなもので戦われたくはないのだろう、いやな顔を隠せない彼。

俺は笑って否定する。

「いえいえ。」

それはもういいですよ。

ちゃんとしたのを使わせてもらいます。」

「分かった。」

では少し間をおこうか、お互い持っておかなければならないだろうし。」

「了解。」

一旦別れ、お互いに装備を手に入れに行く。

そして数分後、再度対峙する俺たち。

彼が持っているのは、形は同じだがその身はほのかな青みを帯びている。

恐らく、あれが本来の得物なのだろう。
それに対して俺が持つてるのは袋。
しかも動かす度にジャラジャラと音がし、泥棒がもつ袋のように大きく膨らんでいる。

「・・・また珍妙なものが出てきそうだね。」

「ははは、期待してくださいな。」

「まともなものであることを祈るよ。」

俺は困っている彼を尻目に、綴じている紐を外し袋をひっくり返す。

ガシヤガシヤガシヤ

細かい破片と、11本の持ち手の無い刃が音を立て地面に広がる

見ようによつては、子供のおもちゃのように見える。

だからか、多少の敵意を向けられた。

俺は苦笑を浮かべ、その破片に魔力を込める。

そして、周囲全員が目を見張る

欠片と刃が、独りでに組みあがり、2つの形を作り上げる。

一言で言えば、輪

欠片が2つの輪を形成し、それにそれぞれ6本、5本の刃がぶら下がっている

キーホルダーのような形状で、刃には尻の部分に小さな輪がついており、それと輪がつながっていて、自由に動けるようになっていて。そのため今は重力に従い、すべてが輪の下の方に集まっている。輪の大きさは直径45cm、刃の長さは約60cm。その色は綺麗な銀色である。

その様子を見て俺は満足しながら、構える。

「さあ初陣だ。」

《戦輪魔書・グリモワール》。

そして、高らかにその装備の名称を口にする。
とびっきりの笑みを浮かべて。

36話 改心、そして再戦（後書き）

やっと出せた新装備。

以前言いました通り、メインウエポンはまだ先になります
しかし今回は難産でした

面白いと思ってくだされば是非評価を

37話 完成形(前書き)

書きたかったことが一気に消火されました
満足です

学校蔑ろにしていますが
後、終わると言っていて少しオーバーしてしまいましたすみません

37話 完成形

「良いですか？

始めてしまつて。」

俺が両手のグリモワールを弄びながらそう聞くと、驚いていた彼は2、3度深呼吸をした後、はっきりとした口調で答えた。

「構わない。」

それを合図に、俺は動く。

「起動。」

そう告げると、両手のグリモワール、右手の刃が6本の《ダビデ》、左手の5本の《キキヨウ》が、輪本体に刻まれた魔法陣を発光させて、俺の手から僅かに離れた位置を高速回転し始める。

遠心力により刃はすべて外側を向き、直径160cm程の巨大な2つの丸鋸が出来上がる。

辺りに、虫の羽音のような音が満ちる。

その様子を油断のない目で見るオルト殿。

それを満足気に見て、そして意地悪気に告げる。

「今度はさつき見たいに油断しないのですね。

もししてたらまた地面に転がしてやろうと思つてたんですが。」

「う、それは言わないでくれ・・・

思えば、あれも何とも情けないものだな。

戦いの場で油断する時点でもう騎士としては落第もいいところだ。

戦いで油断などする者がこの先生に残れるわけがないのに、私はそれに気付かず言い訳に使うなどと言う大恥を晒してしまったわけだ。」

「……分かってるならいいですよ。」

バツが悪いそうにしながらそう言う彼に、俺は若干の不満を感じた。

「せつかくそのことで弄ってやろうと思ったのに……」

「……何かものすごく不穏な言葉が聞こえたんだが。」

自分で気付けて良かったよ……」

「じゃあ行きますよ。」

俺は彼の言葉を無視して動き始める。

「せいっ!」

右手のダビデを投げる。

投げる等と軽く言っではいるが、その速度は異常だ。メジャーリーガーの剛速球よりも確実に速い。

だが、その視認が難しい速度に、彼はついてきていた。槍を構えてそれを打ち落とそうとする。しかし。

ドガガガガガッ

「う、ぐおおお!?!」

連続した音が響き、苦悶の声を上げる。

しかし何とか彼はダビデを弾くことに成功して、ダビデは横に飛んでいく。

そして行きとは遥かに遅いものの、それなりの速度で俺の手元へと舞い戻る。

因みに、回転しているのも戻ってきたのも、魔法のお蔭である。

もつとも、魔法陣によるものと俺自身が行使したもの、という違いはあるが。

「凄まじい衝撃だ・・・」

数秒は痺れてまともに動かせないな。」

「弾けただけで私は驚きですが。」

私は貴方が吹き飛んでそのままダビデがざっくり、と言っ想像をしていたんですがね。」

「・・・ぞつとしない話だな。」

ダビデとはその右手のものの名前か。

何か意味がありそうだな。」

「ええ、ありますよ。」

こっちの左手の装備はキキョウと言います。

それと安心してください。

半分は冗談です。」

「半分は本気だったと?」

「ええ。」

ざっくりの部分が。」

「そこは一番駄目だろう・・・」

軽い言葉を交わしてはいるが、その実俺は大分驚いていた。

高速回転することにより発生する巨大な「遠心力」

それだけでも相当なものだというのに、それに加えてグリモワールは刃が自由に動くようになっていた

そのため回転している時に刃を受け止めた場合、受け止めたところとまったく同じ個所に5、6回の衝撃がくることになる

同じ箇所と言ったところが肝で、そこに一気にダメージが蓄積されるのだ

痺れるで済めば十分御の字であり、普通ならば骨折、悪ければ武器ごと輪切りである

そして、さつき戦っていた時の強さのままだったら、彼は間違いなく骨折、油断などしていたら輪切りになっていたはずなのだ

武器の面もちろんあるだろうが、それだけでは説明が付かない。それなのに受け止めたということは、そういうことなのだろう。

「一皮剥けたみたいですね。」

「どづいづことだ？」

俺が笑みを浮かべながら言うと、不思議そうな顔をされる。

「闘気による強化はおおよそ、3つの要素で強さが決定します。何か分かりますか？」

彼は少し考えてから答える。

「私は「量」しか思い浮かばないな。

いや、さっきの君を考えれば使い方も関係あるか。

・・・どのみち全部は分からないが。」

「正解は「量」と「運用法」、そして「質」です。」

「質？」

「ええ。」

心拍数や脳波、体温、呼吸、病気の有無。

それら無数のバイオリズムにより決定する要素です。

これは厄介ですね。

量と運用法は自分の意思で制御が可能なのですが、これは無理な
んですよ。

私のように呼吸なんかの生理現象を自由に制御するのは常人には
不可能ですから。」

「・・・つまり君はそれが出来ていると？」

「はいな。」

さっきの生命力の譲渡もこれの応用ですから。」

生命力、闘気が他人に譲渡出来ないとされているのは当然である。

生命力は十人十色で、まったく同じものなど存在しないからだ。だが、俺の場合は森での生活でバイオリズムの調節が可能になっている。

そうでもしないと体内のエネルギーを無駄に消費してしまい、生きてられなかったのだ。

そう言うわけで、体の活動を調節し、相手のものに近づけることが出来る。

その状態で相手に触れると、後は闘気が勝手に高いところから低いところへ流れる水のように、体力の多い者から少ない者へと流れ込むのである。

さっきのはそうして行っていたわけだ。

「・・・君は仙人か？」

「へえ。

こっちでもそう言う存在は伝えられてるんですね。

ホントどこまでが通じるのか分からんな。

ああ、話が完全にそれてましたが、私が言いたいのは貴方の闘気の質が大幅に向上しているということです。」

そう言うとオルト殿は目を丸くする。

「そうなのか！？」

しかし何故？

私は特に何もしてないが。」

「貴方の精神性の変化が原因ですよ。

肉体は精神と密接に関わってます。

具合が悪いと思えば込んだら本当に具合が悪くなるとか聞いたことありません？」

「ああ、確かによく聞く。
しかし、あれは本当の話だったのか。」

「貴方は先ほどのことが原因で精神性が大幅に変化したんでしょ
ね。」

「そのおかげでさっきまでのヘタレ具合が嘘のような質になっ
てます。」

「ヘタレって・・・」

「まあ言われてもしょうがないのだが。」

「しかしそれでか、さっきからやたらと調子がいいのは、
本当に君には世話になってるな。」

「感謝してもしきれない。」

「私が望んでやったことです。ですからそんなもの要りませ
ん。ですが、これだけは覚えておいて頂きたい。」

真剣な目を向けると彼は黙ってこっちを見た。

「闘気の質の向上が必ずしもいい成長ではありません。
善意や誠意でなく、悪意や欲望でも質は向上します。」

「ここで重要になるのは感情の種類ではなく量、思いの強さ
です。ですから強さを得たとしても、それを何故得たのかを考
えるようにしてください。」

「そうでなければ貴方はいずれ、力に溺れ身を滅ぼすでしょ
う。」

「・・・肝に銘じておく。」

「軽い気持ちを一切感じさせないその表情と言葉に満足す
る。」

「さて、続けますか。」

「話ばかりでは観客さんも飽きてしまつてしょうしね。」

「そうだな。」

「しかし敬語は止めてくれないか、さっきまでの君とのギャップが大きすぎて違和感がすごい。」

「嫌ですよ。」

「私は認めた相手が年上の時は敬語で接するようにしてるんです。貴方にそんなことまで指図される謂れはありませんね。」

「評価されてると考えるべきか、遠回しにお前如きが指図するなど馬鹿にされてるのか判別に困るな。」

「どう捉えるべきか悩んでいる彼を無視。」

「今度は俺ごと移動してグリモワールによる連続攻撃を行う。」

「ダビデで縦から切りかかり、キキョウで彼の逃げようとするであろう方向を塞ぐ。」

「それを見て、避けるのは無理と判断したらしく槍で突きを放つ。」

「普通ならばさっきのようにまた腕が痺れることになるのだが、今の彼は視野が広がっているようだ。」

「はあ！」

「ダビデが弾かれてしまったので、深追いせずに距離を取る。」

「そして、今度は速力を生かして後ろに回り込んで両方で切りかかる。それを片方は最小限の動きで避け、もう片方はさっきと同じ方法で受け、弾く。」

「そのまま激しく打ち合いながら話かける。」

「本当、さつきとは目に見えて動きが良くなってますよ。」

闘気によるものだけでなく、動きそのものが数段洗練されてる。」

「君に言われると嬉しいのだがっ！」

この状態でそこまで余裕を保たれてるとっ、とてもそうは思えない、な！」

「御謙遜を。」

グリモワールの刃を受け止めずに、内側の輪の部分を叩いて攻撃を逸らすことにもう気付いたではありませんか。

そうすれば刃の連撃を受けずに済みますからね。」

「軽く言ってくれるものだ・・・！」

一撃受ける度にこちらは精神を削られる思いだというのに！」

彼は俺のグリモワールによる攻撃を、輪本体を攻撃することで効果的に防いでいる。

言葉で言うのは容易いのだが、これは彼自身が言ったように相当の集中力と勇気があるので精神的につらい。

輪を狙うということは、刃の部分を受け止めようとするよりもある程度近づかなくてはならない。

高速で回転している、生半可な武器なら真っ二つにできる脅威に。それが出来るだけでこの男の度量がうかがえる。

（さつきまでは俺が挑発したこともあって、視野が狭かったんだろっな。

視野が広がったことで戦略に幅が出来、さらに考える余裕も出来ている。

これはやった甲斐があった。）

話してる間も、考えてる間も、ひたすらに装備を繰り出す俺とそれを必死に受け止める彼。

その様を見て周りは盛り上がっている。

俺の攻撃を受けながらも、目の光を失わずに機会をうかがっている
オルト殿。

俺はちよつと、サービスすることにした。
手を止めず話しかける。

「オルト殿。

次には気を付けてくださいね。」

「オルト殿って。

まあ別に構わないが。

私の名前は長いか？」

「ええ。

と言うより貴方も結構余裕ですね。

まだ話す余裕がありますか。」

彼は捌きながらも苦笑した。

「これは空元気だよ。

こうでもしないとやってられない。」

(そうして、余裕を見せよう思えることが余裕なんだがね。)

それは悪いことではない。

戦いにおいてメンタルは非常に重要だ。

空元気で、そうすることで戦いに向けての気構えが生まれ、切り

抜けようという意志が生まれる。

それがどれだけ大事なものか、理解できるのもそう遠くはないだろう、この様子ならば。

「では行きますか。」

回転しているキキョウを振りぬき槍を弾いて距離を取り、足元に魔法陣を展開する。

「魔闘技《かしゃきり火車切》。」

ダビデとキキョウが真紅の炎に包まれる。

因みにこれは、以前言った定義で言えば魔闘技に入らない。

ある理由から、「ストラリザード星銀竜」の素材で出来たグリモワールには闘気をこめるわけにはいかないのである。

だが、それでも十分な硬度と強度、具体的には以前のナイフの数倍を誇っているので、魔法を込めても全く問題ない。

だから魔闘技と呼んでもいいほどの威力を持っている。

余談だが、日本刀の火車切とは違い、火車を切ったから火車切ではなく、火車で切るから火車切である。

「避けた方がいいですよ。」

これは。」

そう前置きして投擲する。

オルト殿は怪訝そうにしながらも、さっきまでのように弾く方が効率がいいところを、助言に従い強引に身を捻って躲す。

それが彼を救うこととなる。

彼の後ろの床に炎の刃が触れた瞬間、その床が爆発する。

「んなっ!？」

爆発による土煙が晴れるとそこには2つ、爆発でごっそりと抉れた地面と、その抉れよりも大きい回転の方向に沿った裂け目が存在していた。

それを見て思わず顔色を青くする彼と観客たち。

「とんでもないことをしてくれるものだ・・・

もし受けてたら木端微塵だったぞ。」

「だから忠告したでしょうが。

怪我もしてないんだから文句言わない。」

「そうだな。

もし当たってたら怪我とか言う以前に死んでたからな。」

「・・・おお。

あはは。

上手いことを仰る。」

「笑いごとではないぞ!？」

気にしないで俺は再度魔法陣を展開。

手元にグリモワールが戻ってきたところで、もう一度。

「魔闘技《雷切》らいきり」。

ダビデが今度は、閃電を迸らせる。

キキョウはそのまま回転している。

「じゃあもう一丁行きますか。」

「おい!？」

君は私を殺そうとしてるのか!？」

まさかさつきまで馬鹿にしたことを根に持つてるのか!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「凶星!？」

「行けグリモワール!

奴の口を塞げ!」

「それは死人に口無しってことか!？」

て、うおお!？」

俺が投げたグリモワールを、彼は慌てながらも上の方を狙ったダビデを屈んで躲す。

そして一手遅れて飛んできたキキョウを槍で弾こうとする。

だが、それは悪手である

先を飛んでいたダビデに溜まっていた電気が、後ろを飛んでいるキキョウへ槍のように飛んでいく!

「いぎや ああああああ！！？？」

結果、2つの間に居た彼は盛大に電流を浴びてしまいましたとさ。
電位差を利用した、後方からの不意打ち。
先ほどの《火車切》で、避けなければならぬという認識を刷り込
ませたことにより、不意打ちの成功率は跳ね上がる。

「おい。

まだやれますかー？」

まあ答えなんか分かり切ってるのだが。

「・・・無論だ！」

相当な痛みだったろうに、まるで何事も無かったかのように立ち上
がった。

その表情は苦痛に染まってはいるものの。

とても楽しそうだ

「了解！」

その様子に俺も楽しくなっていた。
そして、また切り結ぶ。

今度はグリモワールによる斬撃だけでなく、足技や体術も併用する。
いきなりスタイルが変わりやりづらくなり、グリモワールは何とか

防げているが、何度か蹴りを食らう。
しかし、それでも楽しそうな表情を崩さない。
そして、今度は彼の戦い方が変わる。
さっきまでの槍の穂先だけを使った戦い方から、石突きを使った受け、払い、流しを行う。
それにより、目に見えて被弾は減っていく。
なので事態は俺が若干優勢であるものの、大差がつくことは無く進行していく。

その中、頭の片隅で俺は思う。

（ああ、そうだ。）

さっきの同一人物とは思えないほどの手応え、そして意志の強さ。

（これだった。）

その変化を目の当たりにし、俺は思い出す。

（忘れてた、いや、思い出さないようにしていたのか。）

ほんの些細なこと、俺がちょっと背中を押してやっただけだった。

（こんな大事なことだったのにな。）

過去の絶望を味わってから、蓋をしていた思い。

(ほんの些細なことで、どちらの天秤にも傾く。)

あれだけのことで変わるなど、不安定もいいところだ。

(だが、それゆえに尊い、そして価値がある。)

万感の思いを込めて呟く。

「これが、『人』。」

思い出すのは、過去、俺が言っていた言葉。

『人は素晴らしい可能性を持つてるんだから、少しでも多くの人が助かればそれだけ未来の希望も広がるんだ。』

すっかり忘れていたその言葉の意味。

俺が、過去の思いの一部を取り戻した瞬間だった。

(状況は間違いなく私に不利だ。)

今はある程度拮抗しているものの、それはもうすぐ崩れる。

その理由は簡単、闘気の使い方だ。

さっきの彼の行動で、回復はしたのだが使い方に差がありすぎる。彼の言い分では私の闘気は質がかなり向上したようなのだが、かといって私の運用法そのものは変わっていない。

つまり、彼のものと比べて効率が悪すぎるのだ。

その状態では、どちらが先に力尽きるかなと言つまでもない。

このままでは、負ける。

そのはずなのに。

(何故、ここまで楽しいのだろうか・・・)

楽しい。

まるで童心に帰ったかのように、見るもの聞くもの感じるものが新鮮に感じられる。

いつもは堅実な戦い方を好んでいた私が、セオリーに無い石突きを使った戦い方を始めたこともそれが関係しているだろう。

しかも、直ぐにそれに慣れることが出来、今ではそれが普通だった

かのように戦えている。
心が沸き立つ。

(このままでは終われないな！)

せめて、一太刀！

それが今の私の思い。

幸い、私はまだ一度も切り札を使っ^ててはいない。

それでも勝てる気はしないのだが、一撃浴びせるのには十分！

相手の猛攻を捌き続けながら、隙をうかがう。

だが、相手が相手か、隙など微塵も存在しない。

逆に、私が見せた僅かな隙に、強引に割って入ろうとしてきた。

(凄まじい・・・！)

あんな些細な綻びを狙えるものなのか！

これでは・・・ん？)

ふとある考えが思い浮かんだ。

それは、普通の人間だったら通じないもの。

「だが、やってみる価値はある！」

猛攻に合間を縫って、槍で弾き距離を取る。

そして、一瞬で手順を練る。

(間違えば負け。

だが成功すれば。)

一矢を報いることが出来る

「うおおおおおおお！！！！」

咆哮を上げて、闘気を全開にする。

もはや、後のことなど考えず、ただ全力を振り絞る。
私の様子を、彼は油断なく見ている。

(これほどの実力差があつたら普通は油断するだろうに。)

心の中で苦笑する。

私は分かっていた、彼が全く本気ではないということ。

彼からは何か、そう確信させる気配がするのだ。
だが、それを怒りはしない。

彼は私のために再戦を受けてくれたのだ。

その立場でどうして、文句など言えようか。

「はあああああ！！！！」

そして突っ込む。

再度、先ほどのまき直しのような光景が展開される。

私が若干押しているという形で。
だが、所詮は若干。

このままでは私が圧倒する前に、私が力尽きるだろう。
だから、その前に！

私とその思いで槍を操った瞬間。

「うあ！？」

私が声を上げて、一瞬だが体勢が崩れる。
槍が僅かに彼の武器の刃に触れてしまい、それに釣られた形だ。
そして彼はその隙を見逃さない。

「せあつ！」

槍を振るい弾かれたことで、距離が空いていた。
そのため彼は、武器を両方投擲してきた。
そして私に彼の兇刃が迫る！
私はそれを見て。

予定通り全力で避けることに成功した。

「何!？」

今日初めての驚愕に声を彼が上げる。
私が思いついたのは簡単。
彼はどんな些細な隙も見逃さない。
ならば、自分から隙をつくってしまえばいい。
そうして相手を誘い込むのだ。
怪しく思われないように、闘気を全開にし、相手に余裕をなくさせ
て考える余裕を奪った。
そして隙が出来てもおかしくない、刃に触れて体制が崩れるという
隙の作りかたを選んだ。
そして、成功した。

今彼は武器を持っていない。

まさしく、千載一遇の好機！

私はすぐさま彼に向かい、切り札を使うための準備、思考を纏め始める。

「我が求めるのは風！

すべてを削り引き裂く至高の刃！」

私の切り札、それは「魔法」。

それも、戦闘用に特化させて、詠唱の時間もその威力も申し分のない一撃となっている。

それを武器に乗せて放つ！

そうすることでさらに威力は跳ね上がる！

「風の神シルフィード！

我に力を貸し与えたまえ！」

そして、完成する。

まだ、避けてからほとんど時間は経過してはいない。

そのため、まだ彼の手元に武器は

何故、武器を投げた？

そこで気付く。

あそこで武器を投げる意味など無かったではないか。

彼の速さならば、手で持って攻撃してきてもほとんど時間は変わらない。

なのに何故、自身が危険に晒されるかもしれない術をとったのだ？
瞬間、いやな想像が頭をよぎる。

（まさか、読まれていた？）

だが、だとしたら何故投げる。

その時、頭に彼があたりの武器を取り出した時の光景が何故か過ぎた。

11本の刃

バラバラになっている輪

・・・バラバラ？

電流が奔ったかのような衝撃を受ける。

（まさか！？）

後ろを見る。

そこには、後ろへ飛んでいく彼の武器が。
いや、おかしな点に気付く。

武器が、光っている！

「解散！」

そんな彼の声が響く。

途端、輪の部分が弾けてバラバラになり、刃が飛び出してきた！

「く、あああああ！！！！」

自分に刃が複数迫る。

明らかな直撃コース。

それを俺は、避けようと必死になる。

永遠とも思える瞬間。

結果。

私は避けることが出来た

まさしく言葉通りの紙一重。

そして、奇蹟と呼ぶにふさわしい運の良さ。

全てを私は何とか避けることができて、わずかに当たる位置を通り過ぎていった。

弾ける一瞬先に気付けたことも大きかった。

いくつもの要素が重なり、私は賭けに勝つことが出来たのだ。

(運も実力のうちだ！)

私は歓喜し、彼に向き直る。

彼は目を見開き驚愕していた。

私が今日、ずっとしていたその表情を彼がしていることに笑いそうになってしまいが、それも後だ。

魔法を起動し、槍に纏わせる。

「ゲイルシュトローム!!!」

槍が、さらに竜巻の槍を纏い、彼に向かう！

そして、轟音が響き渡った。

凄まじい土煙が舞う。

因みに、観客の人たちは私の一撃を知っていたので、私が詠唱を開始した辺りからすでに避難していたため問題無い。

いくら彼とはいえ、この一撃を受けては無傷では居られない。倒せはしないだろうが、手傷は与えられるはずなのだ。

そう、直撃していれば

「……………そんな……………」

そして土煙が晴れる。

「……………素晴らしい一撃でした。

皮肉もなにも無しに、今のは賞賛に値します。

……………惜しむらくは、後一步踏み込んだ想像をしていなかったことですね。」

彼は、無傷で立っていた。

「何故だ……………」

呆然と呟く。

その理由は簡単。

「何故外れたんだ！」

そう。

今の一撃は防がれたのでも、失敗したのでもない。

逸らされたのだ。

何かによって槍が動かされ、結果、私の魔法は外されてしまった。

「君は一体何をしたんだ!？」

思わず叫んでしまう。

それを見て彼は、少し申し訳なさそうにした。

「これですよ。」

そう言っただけは、足元に刺さっている彼の武器の刃を抜く。

そして、その尻の方の空間を弾いた。

すると、私の槍が動く。

そこで気付いた、私の槍を逸らしたものの正体に。

「糸!？」

「そう。」

ダラン下フォーム
「地蚕」の糸です。

カーボンナノファイバーの数倍の強度を誇る強靱極まりない糸。

まあそれは通じないでしょうけど。」

「君はそんなものまで仕込んでいたのか・・・」

最早、脱帽するしかない。

彼はいつたどこまで周到なのだ。

「そんなものまで仕込んでいるとは・・・」

その武器は本当になんというか。」

私がそう言つと彼は、面白そうに、そして申し訳なさそうに笑つ。

「うーん。

まずそこから誤解があるみたいですね。」

「？、誤解とは？」

私がそう言つと、彼は信じられない言葉を口にした。

「私はこれが武器だつて、一言でも言いましたか？」

思考が止まる。

どう言つことなのか、理解できない。

だが、鈍った頭で考える。

確かに彼は、「あるもの」「や」「装備」だとは言っていたが、武器とは一言も言っていない。

「これは私が本来の役割だけだと味気ないので、オプションとして攻撃機能を付けただけなんですよ。」

ですから、本来はこれは武器ではないんです。」

「・・・では、それはなんなのだ？」

やっとそれだけを口にする。

するとからかうように言われる。

「ヒントはこの装備の名前です。」

あ、2つまとめたのほうですからね。」

あの装備の名前。

《戦輪魔書・グリモワール》

そこで気付く。

「戦輪」はあの形そのままだろう。

だが「魔書」とは？

思考を重ねる。

魔書とは一般的に、魔法について書かれた書物を指す。

しかし、それが当てはまるとは思えない。

そのまま考える。

そして、あることを思い出した。

以前軽く聞いたただけだが、魔書にはある機能があると昔は信じられていた。

それは

「どうやら、気付かれたようで。」

笑顔でそう言って来る。

「そう。」

このグリモワールの本来の役割は

「

そして気付く

先ほど弾けて地面に刺さっていた刃が、綺麗な円形に、そして等間隔に並んでいることに

「魔法の補助装置ですよ。」

その6本の刃、ダビデのものと思われる刃が、輝きを放つ！

「オルト殿。」

貴方に敬意を評し、私の力をお見せしましょう。」

先ほどの刃が私から外れる位置を飛んだのは、狙っていたのだ！
この状況を作り上げるために！
いつの間にか、私はキキヨウのものと思われる糸で縛られて身動き
が取れないようになっていた。

「攻性六芒星《ダビデの新星》完全展開。
出力50パーセントで固定。
上位魔法起動準備。」

私の周囲で見たことのない魔法陣が浮かび上がる。

「さあ、ご覧あれ！
これが俺の『究理式』、その完成形だ！」

そして叫ぶ。

「《^{バベル}摩天楼》！！！！」

周囲が闇に包まれる。

37話 完成形（後書き）

面白いと思っていたただければ是非評価を

ところで、《^{バベル}魔天楼》と《魔天楼 バベル》はどっちがいいでしょう？

出来ればお答え頂きたいです

38話 ただ、欲望のままに（前書き）

今回最後の方ちょっとグロいシーンがあります。

駄目な方はお気を付け下さい。

あと今回ほとんど説明回です、すみません

前回の質問の結果、上位魔法にはルビを振る形に固定したいと思
います

意見くださった方々、大変ありがとうございました！

38話 ただ、欲望のままに

魔法陣とは何か。

自分で研究を始める前に、この問いをエルスに聞いてみたことがある。

その時の回答は、「魔法を補助するもの」だった。

調べてみたところ、魔法陣の形は使う魔法により決まるものだそう
だ。

そして人によってその効果は変わらず、汎用性が高いものとされて
いるらしい。

つまり、火を熾したいと思った時は、皆が同じ「火の魔法陣」を使
って火を熾すのだ。

だが、それはおかしい。

魔法を使用する時に使う「魔力」は、人の精神力だ。

人の思考なんてそれぞれ、つまり、普通に考えれば魔力にも個人差
が出てくるはず。

実際、これは俺の私見でしかないのだが、俺とエルスとフルートさ
ん、そしてさっきのオルト殿の魔力にも、それぞれ個性のようなも
のが存在していた。

それが果たして、全て同じ魔法陣で上手く機能するものだろうか？
書物を読んで、魔法陣により行使される魔法について考察を進める
うちに、心の中の疑念はどんどん膨らんでいった。

同時に、この世界の魔法自体にも違和感が出てきた。

俺が使用している魔法とこの世界の魔法は、結果は同じであっても
どこか「ずれ」を感じるのだ。

それがなんなのか、直ぐには分からなかった。

そんな疑念を抱きながらも、とりあえず考えを巡らせながら知識を得ていくことにした。

そしてある日、書庫に籠もるようになってから十数日後に、ある「仮説」に行きつく。

それは自分の考えていた「恩寵式」とはかけ離れた、この世界の魔法の姿。

この世界に來た当初に見つけた事実と組み合わせで生まれた、俺の想像を超えた超常現象の可能性。

そして、その仮説を確かめるために、その後はひたすら魔法陣の研究に明け暮れた。

感じた魔法の「ずれ」は、魔法陣が原因だと考えたからだ。と言っても、決して楽な作業ではない。

俺はさっき言ったように、魔法陣の常識そのものに疑問を感じていたので、全てを1から組み立てる必要があった。

それは、この世界の魔法に携わった過去の魔導師たちに、真っ向から喧嘩を挑む行為。

有史から存在していた、魔法の数千年の積み重ねをぶち壊すもの。

まあ、そんなこと知ったことじゃない

そんなわけで、途方もなく地道な作業が始まった。

まずは紙に、基本であるう円を描く。

それに思いつく限りの線、円、三角などの図形をひたすら描き込んでいく。

描いては魔力を送り検証し、他の思いつく限りの組み合わせを試し

ては魔力を送り検証し、そして消してまた描くの繰り返し。

はたから見れば、気が狂ったのではないかと取られかねない行為だ。実際レオンたちに何度も止められそうになり、エルスとルルに1回ずつの計2回、「もう止めて下さい！」と本気で泣きつかれた。あの時はその泣き顔に危うく止めてしまいそうになったものだ。

それでも続ける内、3日ほど徹夜した時に、ある大きな発見があった。

魔法陣を描いてると、文字通りの胸騒ぎを感じるようになったのだ。変な言い方なのだが、それしか言い方が浮かばない。

それはある箇所に線を引いた時は感じずに、その箇所に円を描いたら感じた

別箇所に円を描いた時は感じず、その箇所に四角を描いたら感じた

699

その胸騒ぎは初めは実に弱いもので、始めはやりすぎて頭がおかしくなったのかと本気で疑った。

しかし試しにその胸騒ぎに従い、感じたものを描くようにしていくと、胸のざわめきはだんだん大きくなっていった。

まるで、自分がその図形を描かれた魔法陣を求めているかのように

その思いに突き動かされ、それからは何かに憑りつかれたかのよう

に、作業を進めることが出来た。

その結果生まれたものが、ある1つの魔法陣だった。

そして、その魔法陣を使い検証することで、この世界の魔法の力を正しく理解した。

その時は思わず大笑いしてしまった。

ディック殿の屋敷の外にも届きそうな音量で、そして狂喜の声で。

まったく、よくもまあ「恩籠式」を時代遅れだと皮肉ることが出来たものだ

俺はまったく理解できていなかったのに、あんな賢しらにレオンたちと語ってしまったって、蓋を開けてみたらどうだ

見方によつては、「究理式」の方が時代遅れではないか

ああ恥ずかしい

だが、そんなことはもうどうでもいい

大きな発見があったのだから

俺の「目的」を、極めて円滑に進めることが出来そうな『鍵』をもっとも、それはいろいろと問題がありそうなので最後の手段となりそうだ

結果として、俺が発見した魔法陣の効果は2つ。

1つは、魔法のストック。

魔法陣には魔法を込めることが可能で、込めた魔法は魔力を注ぐことで解放される。

例えば、魔法陣で水の魔法を行使したいと考えた場合、先ずはその魔法陣に水魔法を使用するプロセスを具体的に思い浮かべながら魔力をこめる。

後はその魔法陣に念じると、水の魔法を初めに込めた魔力の分だけ起こすことが出来る。

魔力の込められる量は、魔法陣が描かれた物体と、魔法陣自体の形により決まる。

このことは人々に知られていない。

それは、魔法陣とは魔法を使用する時に使うものであり、それに魔法を込めるといふ発想に至らないということもあるだろう。

だが、それだけが理由であれば長い歴史の中で誰かが気付くはずだ。最大の理由は魔法陣の理解の浅さにある。

魔法陣は、全ての人間に共通のものではなかったのだ。

魔法陣は、1人の人間に最適な魔法陣が1つだけ存在する

それが俺のたどり着いた結論。

その人物の心の状態を具現化した、唯一無二の魔法陣。

自分の相棒とも言えるそれを用いてこそ、人は魔法の真価を発揮できるのだ。

と言っても、俺以外に被験者は存在しないので、向こうから来た住人にのみ言えることかもしれないのだが。

そして2つ目は既に周知の事実である、魔法の補助。

魔法陣を使ったほうが、魔力の削減、イメージのし易さなど、様々な恩恵が得られる。
しかし逆に言えば、その程度の効果しかない。

だが、それは物理と科学の力が存在しないこの世界であればのことだ。

俺にとっては、魔法陣を使って引き起こされる魔法のプロセス自体に莫大な価値があった。

そして、それと組み合わせることで俺の「究理式」は「完成形」を迎えた

「^{バベル}《魔天楼》……！」

そう宣言すると、辺りが突然暗くなる。

それも薄暗いという程度ではなく、まさしく一寸先は闇と言える状態の。

周囲から戸惑いの声が聞こえる。

中にはこれから何が起こるのかの恐怖の声も。

しかしそんな反応も、頭上に存在するものを見るとなくなってしまう

う。

上空数十m程の高さ。

そこには、光の塊が存在していた

広場を飲み込んでしまえそうなほどの大きさを誇る、太陽のような球体。

だが、それはどこか不気味な存在として皆には映ったことだろう。光っていないのだ。

光の塊だと一目で理解できるにも関わらず、その光は広場を照らすことなく存在している。

頭上に太陽があるのに地上が照らされることが無いなど、何も知らないものにとっては恐怖を感じることだろう。

そして、その光は突如、巨大な光の柱と化して広場を飲み込んだ。

音も何も無く、光により蹂躪された広場。

辺りは広場の石畳が気化することで生まれた、蒸気に包まれている。範囲を広場の戦闘区域だけに絞ったので、観客に被害はない。

まあ、直ぐ傍を当たれば致死間違いなしの暴力が通り過ぎたことで大半の人間が腰を抜かしていたが。

俺はその様子を蒸気で見えないので聞くことで推測し、上手くいったとほくそ笑んでいた。

そんな中、混乱した声が届く。

「れ・・・グラントさん!？」

「こ、これオルトバーン様死、死、死んじやいましたよ間違いないか!？」

「落ち着いてください、セフィリアさん。」

ほら深呼吸。」

「え、あ、はい。」

すー、はー、すー、はー・・・」

(本当にやり出しちゃったよ、ほんの冗談だったのに。まあそれだけ衝撃的だったってことか。)

だとしたら、成功だな。

「ですからグラントさん、貴方初めに殺しはしないと仰いましたよね!？」

どうするんですか、彼は貴族で、「四家」で、槍使いで」

まだ混乱してるようだが、これ以上付き合うことに意義を見いだせなかったので止める。」

「ええ。」

その約束を守って私はちゃんと誰も殺さずに収めましたよ。

ほらあれ。」

「え？」

・・・・・・・・・・嘘・・・・・・・・!？」

しばらくして蒸気が晴れる。

俺が指差した先に、オルト殿は無傷で呆然と佇んでいた。光が直撃した地面は、深さ数mに渡って綺麗な円形に削り取られている。

ただし、オルト殿と俺が居る地面を除いて。

「あれだけの威力のものを食らって何故・・・？」

「いやいや。

地面見れば分かるようにそもそも食らってませんから。

それに私もさっきの範囲の中にいたのに生きてるんですから、そんなに不思議なことではないでしょう？」

さっきの《魔天楼》は俺ごと広場を蹂躪していた。

オルト殿のそれなりに近くに居たのでそうなったのもあるが、別の狙いもある。

「で、ですが確かに光に呑みこまれてましたよ？」

あれだけの規模になれば、貴方たちだけに影響を及ぼさないようにすることなんて不可能です。」

確かにね。

魔法は大規模になればなるほど精密な操作が難しくなる。

そのために、総じて大規模の魔法というのはすべて、仲間がいる場で使われるものではないという認識をされている。

仲間ごと焼き尽くす魔法など、倫理的にも常識的にもとても容認できるものではない。

俺のさっきの魔法もそう言う認識をされたようだ。

現に、この前までの俺だったらその通りだったのだから、その認識で正しいだろう。

「セフィリアさん、私は「完成形」と言いましたよ？
つまり、その問題点は既に解決済みと言うことです。」

完成とは何を指すのか。

それは人によつて異なるだろう。

「威力」を求める者、「特殊性」を求める者、「秘匿性」を求める者、様々だ。

そして俺にとつての完成とは、魔法の「完全な制御」だった。

と言うよりは、もう問題点がそれしかなかったというのが正しいか。「威力」は「究理式」なので当然問題なし、「特殊性」と「秘匿性」など、物理と科学を知らないこの世界の人々にとって完全に未知のものなのだから余りある。

あとは、指定した範囲以外にまつたく影響を及ぼさないように「制御」するぐらいしか改良の余地が無い。

それが最も難しいことだったのだが。

上位魔法は頭の演算領域をすべて使う必要がある。

しかし、単純に威力だけを求めるのであればそこまでの負担にはならない。

負担の大部分は、使った時の余波を自分が巻き込まれないよう散らすために、さらに複数の魔法が必要だからだ。

それでも力尽くで強引に抑え込むために、「制御」と呼ぶにはお粗末過ぎる代物だった。

しかしそんな問題も、魔法陣を使うことで解消された。

攻性六芒星《ダビデの新星》

攻撃用の上位魔法専用に組み上げ直した、劣化版の魔法陣。

名前からも分かるように、形は向こうの「ダビデの星」の六芒星を

基本とし、自分なりのアレンジを加えたものとなっている。

《グリモワール》の《ダビデ》の名の由来もそれだ。

ダビデの刃には、《ダビデの新星》を刻み込んであり、6本の刃は糸により魔力が繋がれている。

そして地面なり何なりに魔法陣を展開させてしまえば、後は俺の意思ひとつで自由に上位魔法が行使できる。

一度使ってしまうえば魔法陣に込められた魔力はすべて消費されてしまい、ただの刃となってしまうが、そんなものは弱点足りえないほどの利便性があるのだ。

因みに糸が斬られた場合でも、数秒程度であれば魔力が繋がったままなので問題が無かったりする。

「・・・まあそこまで説明する義理はないか。」

「何か仰いましたか？」

「いえいえ何も。」

ただ私がこういうことが可能な存在だと理解してもらえればいいですよ。

現に出来てるんですから。」

「うーそうなんですけど・・・」

やはり気になると言いますか・・・」

知りたくて仕方がないといった様子の彼女に思わず苦笑しなくなつた。

（本当に好奇心が強いんだな、面白い人だ。

だが教えるのは不味いだろうな、やっぱり。）

これらを教えるとこれからのことに支障が出るし、下手したら世が乱れかねない。

魔法陣に魔法をストックさせるということは、魔法に詠唱が必要と考えられているこの世界の魔法のデメリットが無効になってしまう。そんなことになったら、大国間の戦力図が塗り替わってしまうだろう。

それに、次の国ではこれに役立つてもらおうと考えてるので尚更だ。

「まあ、気にしないでください。

死にたくなければね。」

「う、は、はい・・・」

だから薄く笑みを浮かべてそう言うことで、軽く脅させてもらった。セフィリアさんが退いたところで、オルト殿の元へ向かう。

俺とオルト殿が居た場所以外は数m陥没しているので、少し苦労しながらたどり着き、とりあえず身体を縛りあげていた《キキヨウ》の糸を外す。

「うわあ!？」

身体を支えていた糸が急に無くなったことで体勢を崩し、落ちた。頭から。

（なかなか痛そうだな。）

「オルト殿大丈夫ですか？

そうですか大丈夫ですかそれは良かったです。

それでは私は失礼します。」

「待て。」

勝手に自己完結して帰ろうとするな。」

さっさと話しを切り上げて帰ろうと踵を返すと、腕を掴まれた。

「ちっ。」

何ですかなんか用ですか。

言っておきますが先ほどの魔法については何も答えませんよ。」

「そこまで露骨な舌打ちを私は初めて聞いたよ。

それと、魔法についても教えてもらおうなどは考えていない。

ただ、言わせて欲しいことがあったのでね。」

「？、なんででしょう。」

俺がそう言つと、彼は姿勢を正して深々と頭を下げてきた。

「ありがとう、私の我儘に付き合ってくれて。

しかもここまで思いっきり打ち負かしてくれたからか、気分も頗る良い。」

戦う前の淀んでいた気持ち嘘のようだ。」

「……それこそ気にするようなことはありませんね。

私のしたいようにしていただけですから。」

「そうか。」

顔を上げたオルト殿は、実に晴れやかな笑みを浮かべていた。

「もう分かり切ってることだが、改めて言わせてもらおう。
この勝負、私の負けだ。」

もうセフィリアさんのことは諦めることを誓う。」

「勘違いするなど阿呆。」

誰が何時何処でそんなことを求めた。」

「え？」

驚いた様子の彼に続ける。

「この決闘の趣旨は、勝った方がセフィリアさんの婚約者となる、
というものです。」

どこに彼女を諦めるという言葉があっただんで？」

「いや、そこは普通に考えればそうなるんでは……。」

「私が貴方を徹底的に叩きのめしたのは、貴方が色々ととんでもない勘違いをされていてむかついたからです。」

それがなくなった今の貴方なら別に不満もない。」

「そうなのか？」

だが、婚約者がいるのなら諦めなければなるまい。」

「本当に彼女が好きだというのなら、そんなもの気にしないでアタククすればいいじゃないですか。」

私としては、彼女が貴方と一緒に居たいと願うのであれば、それを邪魔する気もありませんしね。」

頑張ってください。」

彼女の意見を捻じ曲げてまで、私はともに居ようとは思いません。

「

「・・・そうなのか。」

まったく、敵わないよ君には・・・」

「それはどうも。」

俺はそこで今度こそ踵を返し、周囲の人々に向き直る。

「それでは皆さん。」

この度の舞台はご満足頂けましたでしょうか。

これでこの序章は終演でございます。

では、これにて御免。」

そう言い一礼すると、魔法でゆっくりと自らの姿を消していく。

それを呆然と人々が眺める中、俺はその場を後にした。

俺が姿を消してしばらくの後、広場に歓声が響いた。

ルツソの街のとある路地裏、そこで俺は魔法を解く。

「ふむ。」

これもうまく機能していたな。

まあ《摩天楼》が問題なく制御出来たから当然か。」

光の「屈折」「回折」「反射」により、姿を消すことのできる利便性の高い魔法。

先ほどの《摩天楼》も同じく、光を利用したものだ。

周囲の光をひたすら集めて固め、それを一気に解放する魔法。

「発光」という、光を発することによるエネルギーの減少すらさせずに集めた純粹の光の奔流は、人の想像を超えた威力を発揮する。

（この暗がりなら大丈夫か。）

そう考え、「偽装」魔法を解除し、付けていた眼帯を外す。

そして笑みを浮かべる。

「……かくして、舞台の幕は揚がり切る。

次の演目はもう間もなく。」

俺はどうやら、深く付き合った人間には「良い奴」とか「優しい」といった評価をされやすいようだ。

さっきのオルト殿もそんな反応だった。

こんなことを計画してるというのに。

（そんなわけがないと思うんだがな。）

オルト殿に投げかけた疑問。

縋らなくては生きていけないほど、何かを頼りにしなくては生きていけないほど、お前は、そして人は弱い存在か？

答えは『是』。

人は必ず何かを抛り所とし、それに縋ることで生きていく。

それは当然のこと、俺もそうなのだから。

しかし、俺にとってのそれは他人とは違う。

他の人は常識だったり、友人だったり、家族だったりするのだろう。俺の抛り所は

「よお、兄ちゃん。

こんなところ一人で歩いてると危ないよお？」

「そうそう。

俺らみたいな悪い男たちにつかまっちゃうからさ？」

「まあ、もう遅いんだけどね、ギャハハ！」

考え事をしてるところで、耳障りな声がある。

近づいてることは認識してたのだが、もしかしたらただの通りすがりかもしれないので放っておいたのだ。

気が付けば、クズが5ついた。

(こういうことにならないように、評判を上げて、実力を見せてきたんだがな。)

「ここは薄暗いし、そもそもコイツらその手の話に疎そつだ。

「おいおい、怖くて声すら出せないってのか？」

「持ち物全部差し出してくれれば何もしないよ？
良心的でしょー？」

その馬鹿さ加減に溜息を吐く。

「一度だけ言つところか。」

消えろ、死にたくなければ。」

「ああ！？」

てめえこの状況が見えね

「はい残念。」

それではまた来世、て会いたくもないな。」

言った言葉には責任を持たないとね。
宣言通り、殺すために動く。

「な、なんだこれ！？」

「動けねえ！動けねえよ！？」

「てめえこんなことしてただで済むとでも思ってたのか！？」

「た、助けてくれマツちゃん！」

「無理言つなよ!？」
俺もだ!」

「なかなか個性ある面々だな。
それではまずこつちのから行こうか。」

キキョウの糸で縛り上げたクスどももの端、小太りの男に近づく。

「な、何をする気だ?」

表面を取り繕ってはいるが、顔は恐怖で染まっている。
俺は何も言わずにその男の頭を鷲掴みにする。
そして、ゆっくりと力を込めていく。

「お、おい?」

力を込めていく。

「おい!？」

止めてくれ、死んじまうよ!？」

力を込めていく。

「頼む!、なんでも言つことを聞くから!？」
だからお願いですからどうか、ああアアアアア!？」

パキヨッ

小気味のいい音を上げ、男の頭が砕け散った。
辺りに血と脳漿、頭がい骨が飛び散る。

「何だよ、お前・・・？」

誰かが呆然と呟いた。

俺は吹き出す血を浴びながら。

「さて、次は誰にしようか。」

淡々と作業を続けていった。

「ふむ、若干気が紛れたな。

あんな「もの」でも幾分かは役に立つらしい。」

浴びた大量の血を、以前のように魔法で洗い流しながらひとりごちる。

眼下に、5つの頭の無い死体を目にしながら。

情報収集も兼ねていたので、コイツ等がなんなのか少しは分かった人を捕まえて、奴隷として売り飛ばすのを生業としていたようなので、それなりの蓄えがありそうだ。

さつき聞きだした資金の隠し場所に、後で回収に向かうとしよう。奴隷の方は、既に売り払った後のようらしいので居ないだろうが。

(一応この国では禁止されているはずなのにね。

闘はどこにでもある。(と)

そんなことを考えながら、思考を戻す。

俺の拠り所とするもの。

それは『自分』

何のことは無い、ただ全ての行動の起点が「自分」であるだけ。

だから気に入らないことは全力で駆逐する

気に入ることだけをひたすらし続ける

ただ、己の欲望のままに

今までの行動も、全てその信念の基のもの

(さて、果たしてこんな考えの人間が「優しい」などということがあるのかな、皆さん。)

だからこそ俺は今回の決闘を引き受けた。

気に入らないことを排除するために。

その結果、想像以上に有意義なものとなった。

気に入らない糞野郎をぶちのめした

その男の人格を、自分が気に入らないということに改心させた

「グランド」の強さを観客たちに刻み込んだ
「グランド」がまつすくな気質であることを示した
グリモワールの動作確認が出来た
《ダビデの新星》の効果を実証出来た
上位魔法という脅威を印象付けさせた
その上位魔法に巻き込まれておきながら無傷で居られたことから、
「グランド」がそう簡単に傷つけることが出来ない存在なのではな
いかという疑念を持たせた
最後に、どこかコミカルな印象を与えることでウケを良くした
何より、貴族、それも「四家」というビッグネーム相手に大立ち回
りを演じた

(ここまでですれば、後は勝手にことが進んでくれる・・・)
そこまで思考を纏めたところで、不吉な笑みを浮かべる。

「さあ、ここに極めて有用な駒がいる。
貴方の立場ならすることは決まってるよな。」

ここにはいない、その人物へと言葉を贈る。
決して届きはしないにも関わらず。

「貴方からのお誘い、楽しみにさせて頂きます。
デルト王、ガイアス・デルト・エルデルフィア様。」

そこで一つ、疑問が浮かぶ。

もし誘いがなかったらどうするか。

愚問だ。

答えなど分かり切ってる。

(その時はこの国が滅びるし、滅びなくてもそんな無能な王などが滅ぼす。

ただそれだけのこと。)

そう、ただ、俺の「自分」の欲望のままに

そして、俺は顔を見せないように、決闘が終わったら隠れるように
言っておいたレオンたちと合流するために歩き出す。

嫌いなクズ連中だったからという身勝手な理由で生み出した、凄惨
な死体を残して。

38話 ただ、欲望のままに（後書き）

面白いと思ってくだされば、どうか評価を

39話 準備(前書き)

王都には次々回向かいます。

39話 準備

ダダダダダダッ

階段を駆け上がる足音が聞こえたので読んでいた本を中断し、ドアの前に立つ。

そしてそのドアが勢いよく開く。

「おいレイ！、何勝手に宿に帰ってやがんだ！

しかも王都か

」

「他のお客様のご迷惑ですっ！」

「ぐふおっ!?!」

部屋の中へ飛び込んできたレオンの腹に蹴りをぶち込んで、無理やり後退させる。

レオンは数歩ふらふらと後退し、仰向けに倒れた。

「まったく、こんなところで大声を出したら営業妨害で苦情が来るぞ。」

「俺はお前に抗議がしたい・・・」

「そんな権限お前にやっとならん。

諦める。」

今俺たちが居るのはいつもの宿屋。

あの決闘から3日が経っている。

その間俺は、色々と下準備を整えていた。そしていつもの漫才を繰り広げていると、残り3人が姿を現す。

「レイ様、王都から兵士が来たと聞きましたが何をしたんですか？」

「うっかり誰かを殺したところを見られでもしましたか？」

「義兄様なら影で数えきれない程の死人を出しても不思議ではありませんし。」

「私は貴方があくどい貴族から資金を強奪したと踏んでますが。」

「君ら、清々しいくらい俺が悪事を働いたと決めつけてるな。」

まあ殺したし、資金も貴族からではないが巻き上げたので否定しようがないんだが。

因みにあの後回収したクスどもの資金は金貨で13枚。

かなりの臨時収入となった。

もっとも、それは俺が密かに行っていた研究にもう半分使い切ってしまったが。

そのおかげで、なかなか面白いものがいくつかできた。

今は関係ないのでそれは後に置いといて、倒れたレオンを無視して皆で備え付けられたソファアに座る。

ここは2人部屋なのだが、ソファアは人が何とか寝られるぐらいの大きさのものが2つ備えられている。

そして俺が片方に座ると、当然のようにエルスとルルが両隣に陣取る。

よって向かいのソファアはクルス1人が悠々と使っている。

もう慣れたので何も言うまい。

好かれて嬉しくないわけでもないのだし。

そして話を再開する。

「ただ、王都への招集令がかかったただけだ。」

「へえ、つまりやはり貴方を捕まえに来たということでしょうか？」

「違う、ルル。」

そもそもそれだとわざわざ王都から来なくても、この兵士に捕まえさせればいいだろ。

それに招集がかかったのも俺ではなくグランドだ。

君らにレイが呼ばれた、と伝えたのはディック殿だろうが、彼は君らに分かりやすいようにそう言ったんだろ。

だからそんな剣呑な空気を出すな、今の君が暴れたらそこそこの実力者が出張らなきゃならん。」

もしそうなら兵士に対して実力行使も辞さない、ということを経験で示すルルを苦笑しながら宥める。

今の彼女ならランカー以上でないと相手にもならないだろう。

まあ、実際のところは実戦経験が不足してるので、そう上手くはいかないだろうが。

しかしそれでも、この辺ではなかなかの脅威だ。

「王都への招集の目的は王が会いたがってるから。」

それにより、デルト王国正規軍中央部第五部隊の隊長が、部下数人を引き連れてついさっきネストまで来ていた。」

「王様がですか！？」

王が直接、一介の冒険者に会おうとするなど前代未聞です。」

エルスが驚きを隠せない様子で言う。

王はこの世界において、絶対の存在だ。」

それがただの冒険者に興味を持つなど普通はありえないことだ。

「……ついさっきということつまり、僕たちが貴方から買い物頼まれた時と同じころですね。」

気付いて僕らを会わせないようにしましたね？」

クルスが拗ねたように言ってきた。
可愛い反応をしてくれる。

「お察しの通り。」

もし居たら俺がグランドでも過剰に反応するかも知れなかったかな。

悪いがあれらと君らを離させてもらった。」

「もう少し私たちを信用してくれてもいいではありませんか。
少し悲しくなります。」

「ふむ、別にこれは信用がどうこうという話ではないぞ。
だからそう落ち込むな。」

悲しそうに言うエルスの頭を撫でる。

これだけで機嫌が大抵良くなるから楽でいい。
目論見通り、釈然としてはいなさそうだがエルスは嬉しそうな顔をする。

「それで、いつ招集に応じるのですか？」

まさか明日にでも出るのでしょうか。」

ルルが王都に行く日を聞いて来た。

それに対して俺はなんでもないように答える。

「ああそれなんだが、予定通り拒否した。」

「え！？（レオン含む全員）」

「だから拒否したんだよ。」

「もともとそのつもりだったし。」

これに最も反応したのはレオンだった。

「どういうことだよそれ！？」

「お前以前言ってたことと話が違っぞ！」

いつの間にか復活していたレオンが詰め寄ってくる。

俺はとりあえず向かいのソファに座らせる。

レオンにはこれからの大まかなシナリオを予め伝えてある。

その時、王と会話することを当面の目的とすることも言っていたので、俺の今回の行動は矛盾してるように感じたようだ。

「勘違いするなよレオン。」

「前言った通り、王に会うのが今の目標なのは変わらない。」

「だが、それには前提条件があるんだ。」

「前提条件ですか？」

「というか僕らはそんな目的を持ってたことを初めて聞きましたが。」

「クルスが聞いてくる。」

「俺の目論見を達成するには、王とは対等の立場で会話しなければ。」

ならない。

招集令という「命令」に従ってしまえば、二度と対等な関係を築くことは不可能となる。」

「命令」とは言うまでも無く、下位の立場の者に対するものだ。

それに従うということは、自覚があるうとなかろうと、その人物の下に位置することを認めたと公言することになる。

そうなってしまうばもう挽回出来ない。

だから、絶対に応じるわけにはいかなかったのだ。

「でもそれだと、王と会話することがほぼ不可能になりませんか？

王族は事実、その国で最も地位が高い者たちです。

彼らが、レイ様はその認識でいいのかはわかりませんが、平民を立場が自分と同じだと認めるとは思えません。」

「そこを認められる者を器量の大きい者というんだよ。

俺が求めるのはそういう王だ。

そつでないのならこつちがお断りだね。」

エルスの発言に、不敵な笑みを浮かべ答える。

平民という先入観で物事を杓子定規にしか見れない王など、必要ない。

俺にも、そして世界にも

「ですが、それを相手にどうやって伝えるのですか？

話をしようがない以上、そもそも貴方がそついうことを望んでることを知らせることも出来ないのでは？」

「その点は心配いらぬ。

「ネストに来た隊長殿にしっかりと手紙のお使いを頼んだからな。いずれ、良かれど悪しかれどなんらかのアクションがあるはずだ。」

「ルルが尤もなことを聞いてくる。」

「それについては手紙をあいっぴりに渡すという方法で解決しておいた。」

「隊長が？」

「俺みたいな田舎の隊長ならともかく、デルトのような大国の隊長ともなれば相当増長してると思ってるが。」

「よく引き受けてくれたな。」

「・・・義兄様、まさか・・・」

「レオンがズバリ本当のことを言うと、クルスが俺がどうやって引き受けさせたのかの想像が出来たらしい。表情に呆れの色が見える。」

「ああ、お前の予想通り相当なクズだったぞ。」

「恐れ多いことにも下賤な貴様のような者に陛下がご下命してくださった。」とか。

「さつさと用意を整えろ、このノロマが！」とか。

「まったく、何故私のような選ばれた者が役立たずの平民の招集などを・・・」とか散々言ってくれたからな。

「クルスはもう分かってるようだが、ちょっと弄らせてもらった。」

「げ。」

「やっぱり・・・」

「別に良いと思いますよ。

貴方にそんなことを言う愚か者など、どうなるかと文句は言えませんが。」

「貴方らしいと言えば貴方らしいですね。」

笑顔でそう言うと、それぞれ思い思いの感想を述べる。

レオンが顔を顰め、クルスが軽く溜息を吐き、エルスが笑みを浮かべながら俺を擁護し、ルルが楽しそうな顔をする。

「具体的には、そのクズの周りに居た兵士をまず《グリモワール》で縛り、そしてクズを素手でねじ伏せた。

最初はギヤーギヤーうるさかったんだが、指の骨を一本一本潰していいたら情けないことに5本で根を上げたんだよな。

まったく根性のない。

最後に地面にうつ伏せに倒れた「それ」の頭を踏みつけて、素直に尻尾巻いて帰って王にこの手紙を渡すか、今この場で生ゴミになるかを選べって言ったらペコペコしながらすごい低姿勢で馬より早く帰って行った。

最後に治療してやった上に、ディック殿の協力もありあれには箝口令が敷かれたから証拠もないし、報復はあまり心配しなくてもいいだろう。」

「外道ですね。」

クルスが苦笑しながらそれだけ言った。

まさしくその言葉が、その時の俺の印象を最も的確に表してるだろう。

ネスト内の人たち、皆物凄い恐怖の目で見てたからな。

クズは愚かにもセフィリアさんに声かけてたから、ディック殿から

はむしる声援をもらったが。
そして、こっちの女性陣もどうやら悪感情を感じてはいないようだった。

苦笑してはいるが、嫌悪の感情は見えない。
因みにあのクズは貴族だった。

デルト王国の隊長格の者たちは、ほとんどが貴族で占められている。これは別に鼻屑とかそう言うことは無く、単純に奴らが強いからだ。この国に限らず、貴族は家伝統の技術や武器、固有魔法を持つてることが多いので、自然と上の者たちは貴族の比重が高くなる。

この国は実力主義で平民でも登用される機会が多いので、まだまだしな方だが。
話を戻す。

「褒め言葉ども。」

それに、まだ準備も整って無かったんでね。

たとえ今回のが命令で無かったとしても、まだしばらくはこの街に留まることになっただろう。」

「準備って何だ？」

「一番重要なのが、レイという人間の始末だな。」

グランドがしばらく王都に行ってる間ずっとレイが消えていたら、怪しまれるかもしれない。

だからディック殿に頼んで、長期の依頼に出ている、という形に偽装してもらえようにして置いた。

それも誰にも気取られないよう、秘密裏に。

それには後2、3日かかるようなんでな。

後は、色々と入用のものを揃えよう。

《グリモワール》を内密に運べるように服を改造したり、《アロ
ンダイト》に使えそうな巻き布を用意したり。」

「アロンドイトって何です?」

クルスが耳慣れないその言葉に反応する。

「あれ。」

俺は部屋の隅に置いてある武器を指差す。

全員がそれには入ってきた時から気づいてただろうが、改めてそれを見て困惑した顔をする。

「……あれって……武器の分類としては何なんでしょう?」

エルスが聞いてくる。

それに俺は、少し考えてから答える。

「むづ、……剣?」

「何で疑問形なんですか。」

ルルが呆れたように言う。

「じゃあ君らに逆に聞こう。」

あれは何に見える?」

「………剣?」(全員)

「だろう?」

「成程、納得です。」

「まあ、グリモワールと違ってあれは見た目通りの機能しかないからそう答えるしかないんだよな。」

ルルが納得出来たようなので、これでその話はお終い。

「ところで、エルス、ルル、そのネックレスを少し貸してくれないか。」

「これですか？」

「どうしてです？」

急に不安そうな顔をする2人。

「別に返せというわけじゃない。

確かめたいことがあってな。」

俺がそう言つて安心させると、ネックレスを渡される。それらを手で弄つて調べてから一言。

「・・・君ら、これをどれだけ大事にしてるんだよ。」

ここまでのもとは正直思っておらず、呆れてしまう。たったひと月足らずでここまでになるものなのだろうか。

「？、どういふことですか？」

「何か問題でも？」

「まあ問題と言えば問題だろうが。
嬉しい誤算だからいいけど。
ちよっと数日貸して欲しいんだがいいか？」

「ええ。」

「後で返して頂けるのなら。」

「ありがとう。」

ネックレスをしまい、今度は護符のような紙を4枚取り出す。

「さて次だ。」

レオン、これを持って外に出てくれ。」

そう言っつて、俺は2枚の護符を渡す。

「何だこれ？」

さつき2人からネックレスを預かったことと何か関係でもあるのか？」

「いや、まったくの無関係だ。」

とにかく外に出てくれ、なるべく周りの人がいないところがいい。」

「ん、分かった。」

不思議そうにしていたが、指示に従ってくれる。
そして数分が経ち、頃合いになった。

「実験開始。」

そう言い俺は、残った2枚の護符に魔力を籠める。すると描かれた魔法陣が光り出し。

『うわ!？』

なんだいきなり!』

「え!？」

「ひゃつ!？」

「誰ですか!？」

いきなり聞こえた声に驚く3人。それを見て笑いを押えるのに苦労する。

「心配するな。」

さっきの声はこれからだよ。」

『な、その声はレイか!？』

何なんだよこれ!』

「見ての、いや聞いての通り、遠くの者と会話が出来る道具だ。お前の持つてる声が聞こえる方が「受信」、逆の方が「送信」を担当している。」

しかし想像以上に上手くいったものだ。」

『・・・軽くいうものじゃないぞ。』

これにどれだけの価値があるか・・・』

「兄さんの言うとおりです！」

「これはすごいですよー！」

「これがあれば何時でも好きな時に会話ができるということですか。」

「軍ではその需要が計り知れませんが。」

「連絡に時間がかかることは大きなネックでしたから。」

レオンが向こうから呆然とした声で、ルル、エルス、クルスが目を丸くして答える。

電話が無いこの世界では、遠くの人と会話ができるという発想が無いのだから。

火を出す、という漠然としたイメージでは、一つの魔法陣に込められる魔法は一つだ。

だが、籠めるものを「燃焼」や「放電」といった、細かい現象に絞ることで、籠められる魔法の数は増える。

この護符に描かれているものには、それぞれが電話の送信機と受信機として機能するように、複数の魔法を籠めた。

これで、離れて行動することが可能となる。

通信範囲は詳しくは分からないが、知識を総動員してかなり弄ったから、それなりに広いと考えていいだろう。

今までは「奴」を警戒してなかなか離れて行動できなかったからな。

「とりあえず実験は成功だ。」

「帰ってきてくれ。」

『ええーもう少し遊びたいんだが。』

「阿呆。」

これは遊びのために造ったんじゃないんだよ。
早くしろ。」

『はいはい。』

魔力を籠めるのを止めると、光が収まる。
再び数分後、レオンが帰ってきた。

「凄いなこれは。」

初めての経験だったぜ。」

「そうか。」

何はともあれ、これで君らと俺の別行動が可能になったわけだ。」

そう言うと、全員の動きが止まり、一気に捲し立ててきた。

「レイ様、どういふことですかそれは!?!」

「まさか別れるつもりなんですか!?!」

特に過剰に反応してきたのは女性陣2人。
冷静な声で諭す。

「落ち着け、別にずっとつてわけじゃない。」

王が判断を下して、俺が王都に行った場合の話だ。
精々長くても1月にも満たない。」

「それにしたって決して短いわけではないだろう。」

別に俺たちもお前についていけばいいだけじゃないか。」

「そうですね。」

僕も王都に行ってみたいですし。」

レオンとクルスの意見に、エルスとルルも必死に頷いている。

（本当に別れたくないんだな。）

そんなことを思いながら、理由を説明する。

「これにはちゃんと理由がある。」

1つは例によって、グランドのカモフラージュ。

同時に行動したら怪しまれかねん。」

「それだけでばれるとは思えませんが。」

クルスが言う。

「そうだな。」

だが、まだある。

2つ、最近は大分マシになってはいたが、レオンを除いて君らは俺に頼りすぎだ。

この辺りで自分たちで行動して、俺無しでも動けるようになっておけ。」

これは自覚があったらしく、レオン以外は黙り込んだ。

彼らの行動の起点は常に俺だ。

今はいいが、世の中なにか起こるか分からない。

もし俺と離れてしまつて、無いとは思うがパニックにでもなられた

ら目も当てられない。
だから、しばらく俺と別行動を取ったほうがいい。
そうすれば、また彼らは成長するだろう。

「・・・分かりました。」

そう言うことであれば仕方ありませんね。」

「ええ、私たちのことを思ってください。結果のことであれば、文句などありません。」

「僕らは僕らで頑張ります。」

エルスが言うと、他の2人も納得してくれる。

(これで、彼ら関係で済ませておくべきことは後1つだけ。)

そう考えながら、ルルを見る。

(果たして、素直に教えてくれるかね。)

そこでレオンが気付いたことを聞いてきた。

「ところでレイ。」

お前王都なんて場所に行って大丈夫なのか？

あそこはかなり広いから土地勘のないおまえじゃどうなるか。」

最もな質問だったので、素直に答える。

「それについては心配いらない。」

セフィリアさんがついてきてくれることになってるからな。

彼女にいろいろと頼む予定だ。」

そして、言ってからそれが爆弾だったことに気付く。
両隣から両腕をがっしりと掴まれる。

目を向けてみると、2人が実に綺麗な笑みを浮かべていた。
背筋が凍るような笑みを。

「へえ、私たちを捨ててセフィリアさんを連れて行くというのですか。」

「それは酷くありませんか？

私たちはこんなに貴方を慕っていると言つのに、他の女に手を出そうなんて。」

「・・・・・・・・」

色々と突っ込みたいことがある。

捨てるってどういうことだ、とか、他の女ってなんだよ、とか。

とりあえず、これからに遺恨を残さないよう穏便に場を納める方法をゆっくりと考えることにした。

夜中。

あの後、何とかあの場を収め、しばらくの間雑談に花を咲かせた。そして今、いつも通り宿屋近くの木の上に陣取り、人を待っていた。そして耳が足音を捉える。

「レイさん、話とはなんでしょう?」

「先に言っておくが、浮ついた話ではないからな。」

「……………分かってましたよそんなことは。」

「……………それにしちゃ随分と長い沈黙だったな。」

そして木から降り、向き合つ。

銀髪が月光に照らされ、どこか幻想的な美しさを感じる。
一瞬見惚れそうになったがなんとか自粛する。

「これから聞くことは、君のプライベートに大きく入り込むものだ。
怒ってくれても、蔑んでくれても構わない。
だが、嘘だけは吐かないで欲しい。」

「……………分かりました。」

俺の言葉に顔を引き締め、まっすぐ俺を見る。

そんなルルを、しばらく瞑目してから真っ直ぐ見つめ、問う。

「君は、『憑き人』か？」

ルルの身体が、大きく震えた。

39話 準備(後書き)

面白いと思ってくだされば、是非評価を

40話 『憑き人』（前書き）

今回はこの物語の「魔法」、「闘気」に並んで重要になる「憑き人」についての解説になります

長くなりそうだったので分割しました、今回短めです

これから文化祭の時期ですので、更新が遅めになるかもしれませんが出来るだけ、5日以内に出そうとは思いますが

40話 『憑き人』

我ながらずるい聞き方だと思っ。

予め正直に答えるという言質をとってからこんなことを聞いているのだから。

しかも、恋心まで利用して。

好きな相手の前で、前言を翻すことなど並の人間にはまず無理。

そんなことをしたら嫌われるのではないかという危機感がその人を襲っ。

ルルは逃げ道を塞がれ、答える以外に道が無い。

そしてその答えは。

「・・・何故、お気づきになったのでしょうか。」

遠回しな肯定だった。

その表情には諦めが見て取れる。

「以前君が戦ってるのを見ていたら、ロッキコブリン「岩餓鬼」の動きが不自然に止まった場面があった。

魔力も感じなかったし初めはただの偶然かと思ったんだが、それでも頭の片隅に留めて置いてたんだよ。

そして本を見てたら『憑き人』に関しての記述を見つけて、その力の内容がぴったり当てはまるものだったからそうじゃないかと考えた。」

「ふう・・・。」

あの場面でそこまでじっくり見ている余裕があるとは思いませんでしたし、慣れない実戦だったので身の危険を感じて咄嗟に使ってしまったのですが、駄目でしたか。」

質問に正直に答えると、弱弱しい笑みを浮かべながらそう返された。

「確かに普通の人間であれば気付かない一瞬のことだったからな。相手が悪かったただけだろ。」

現に、俺よりも近くに居たレオンたちに気付かれなかったのだから。」

「兄さんの場合はあの人が鈍いだけだと思いますけどね。」

「確かにな。」

さて」

軽く笑い合ったところで本題に入る。

「手っ取り早く済ませようか。」

君の力は何だ？」

「……『束縛』です。」

条件は「対象を視認する」こと。

目を向け、相手を縛りたいと望めば数秒ほど動きを止められます。まあ力の差がありすぎますと効かなかったりもしますが。」

大方想像通りの力だ。

だが、条件が思ったよりもずっと軽い。

「ほう。」

言うては何だが相当強力だな。

何より条件が想像以上に軽い。

1対1の場面であれば、余程の差が無い限り無敵だ。」

これはかなり酷い言葉だ。

力の強さにより、苦しむことが多い彼女たちにとっては、それでも言わずにはいられなかった。

目の前の敵のみに集中すればいい決闘において、これ以上のアドバンテージはないだろう。

後は動けないところを斬ればいいのだから。

「ええ、とても強い力です。

他人を怯えさせるくらいに。」

予想通り、ルルはその力を疎んでいるようだが。

「だろうな。

人は良く知らないものを遠ざける。

それが自分に害成せそうなものならば尚更だ。」

『憑き人』とは、不可思議な力を持った人間たちの総称。

発動してる時に外見が、まるで何かか憑りついてるかのように感じることからそう名付けられたとか。

力の種類は多様で、1つとして同じものはないという。

ただ不可思議な現象を起こすだけなら、「固有魔法」も同じなのだが、そこには決定的な差がある。

『憑き人』の力は体質、つまり力の使用によるデメリットが基本存在しない。

「固有魔法」に限らず、「魔法」は「魔力」である「精神力」を、「闘気」は「体力」を、それぞれ消耗する。

これにより、無制限に行使できる力ではない有限の力となっている。

しかし、『憑き人』の力にはそれが無い。
無制限とまではいかず、それぞれになにかしらの戒律のようなものが存在するようなのだが、言ってしまうえばそれだけのこと。
「魔法」よりも遥かに優秀な力と言える。

そしてそれ故、迫害を受ける

その力を人々は恐れ、排斥した。

『憑き人』たちはばれてしまえば最期、世界から追われ次々と処刑されていった。

たとえ、どれほど清廉潔白な人間だろうと、その宿命から逃れられなかった。

酷いところでは年端もいかない子供が、仲の良かったはずの親を殺すことすらあったそう。

しかもその子供は世間に賞賛された、その年であの悪魔を殺すなどなんと素晴らしい者だ、と。

その子供は、その後で親すら殺す悪魔の子として処刑されたそうだが。

まんま、向こうの「魔女狩り」のようなことが行われたという。

ここまで迫害が進んだことには、当然理由が存在する。

『憑き人』の力は、人に仇成すものしか存在しないのだ。

ルルの「束縛」も然り。

人の自由を縛り、自由にすることが出来る。

それを人が恐れるのも当然だろう。

だが、それだけならばまだ良かった。

それだけならば、素手でも武器を持った人間程度の認識しかされなかっただろうが、あることが彼らの運命を決定づけた。

魔獣にも、似たような力を持つものが存在するのだ。

それは極一部にすぎないのだが、確かに存在する。

さて、果たしてそんな存在が居たら、彼らはどうみられるか。

『憑き人』は魔獣が化けた存在ではないのか

そんな考えが、あつという間に広まった。

それにより、ずっと彼らは迫害と弾圧を受けてきた。

今は見つかったもすぐに処刑とまではいかないし、大分穏やかになつてはいる。

それでもその歴史は人々の意識に歪みを与えていった。

彼らに対する恐れはいまだに根強く残っている。

『憑き人』はいまだに深い闇の中に居るのだ。

「はつきり仰いますね、貴方は。」

そこまで面と向かって言われると傷つく気持ちにもなれません。」

苦笑しながら言ってくるルル。

その顔には、何かをこらえているように見える。

「君の場合は、変に取り繕うよりもこう言った方が堪えないだろう？」

それに下手に取り繕うのは俺の趣味ではない。

あ、ここ後で重要だから覚えておくといい。」

俺は木に縁りかかりながら気楽に告げる。

すると、ルルが俯いた。

「……んで……すか……」

そして何事かを呟く。

それは俺でも聞き取れないほど微かなものだった。そして顔を両手で押さえ、今度ははつきりと言う。

「何で、気付いてしまったんですか・・・」

「・・・・・・・・」

黙って聞く。

「私は貴方に嫌われたくないのに！

あんなことはもう嫌なのに！

どうして貴方は私の力に気付いてしまったんですか！」

すすり泣く声がある。

「こんなに貴方が好きなのに・・・！」

これじゃあ私は貴方に嫌われるんじゃないかと疑ってしまっ！」

そんなの、嫌、なのに・・・！」

「必要なことだったんでね。

君らとの関係を保つていくためには。」

彼女に近づく。

「酷いですよ、こんな・・・！」

苦しいです・・・

辛いです・・・

痛いです・・・」

ルルをそっと抱きしめる。

「壊れそうですね．．．心が．．．」

そのまましばらくの間、そのままでした。
ルルが落ち着きを取り戻すまで。

「やはりというか、過去に何かあったんだな。」

未だ俺の胸に顔をうずめていたが、泣き止む程度には回復したようなので話しかける。

「．．．．．ええ。」

かなりの沈黙の後、そう答えた。

予想はついていた。

レオンが知らなかったことがその理由。

以前それとなく聞いてみたが、奴は微塵も反応しなかった。

あの直情径行な生き物がごまかせるわけも無し、つまりルルは兄にも隠していたことになる。

そして、最も接する時間の多いレオンが知らないというのはおかしい。

人は何かを支えにして生きようとする。

家族はその対象として最適な存在だ。

そして、子供のころにはさらに輪を掛けて何かに頼ろうとするものだ。

それなのに、ルルは家族にすら教えなかった。

それはなぜか。

教えられなかったと考えるべきだろう。

その原因となりえるもので最も可能性が高いのは恐怖。

あれだけ溺愛されてるレオンにすら頼ることが出来ず、嫌われてしまつと考える恐怖。

過去に何かあった結果、そのような考えに至つたと考えるのは自然だろう。

そう考えてたところに、先ほどの「あんなこと」と言つ言葉、もう間違い無い。

「貴方がこのことを知つたところで、どうも思わない人だというのは分かつてました。

でも、どうしても知られたら嫌われてしまつのではないかという恐怖が先行してしまつんです。

それで、言い出せませんでした・・・」

「それは別に悪いことではないな。

気にすることじゃない。」

このような知られたくない秘密を言つような場合、親密な関係であることは何の救いにもならない。

むしろ親密であればあるほど恐怖は増える。

信頼してるからこそその、拒絶された時の恐怖。

それが人を縛り付け、言い出せなくさせる。

だから、別に言い出せなかったことを怒るつもりはなかった。

「・・・お聞きしたいことがあるんですが、よろしいでしょうか？」

「何だ。」

ルルの質問に、了承の意を込めた言葉を口にする。そして、ルルは震えた声で聞いてきた。

「私は……う、『化け物』、なのでしょうか？」

途中でつまりながら、必死に紡いだその言葉に俺は答えを返さなかった。

とりあえず情報が少なすぎるので、どうしようもない。だから聞く。

「何故そんなことを聞く？」

「……昔話をしなければなりません、よろしいですか？」

「ああ。」

そして彼女は、彼女の『事件』を語り出す。

「私には、5歳のころ友達が居ました。

テールという名の男の子です。

その頃は私も活発で、人見知りではありませんでした。

貴族の家系だっただけに友達の少ない私の数少ない友人。

性格も優しかったので、直ぐに仲良くなれました。

クルスよりも仲が良かったです。」

「その頃はまだ、力を発現してなかったのか？」

俺がそう聞くと首肯した。

（と言うことは、『憑き人』は遺伝ではなく突然変異体なのか？

兄妹のレオンも力を持つてはいないようだったし。

ある日突然恐ろしい力を手に入れる、怖いものだ。）

いきなり力が発現するのなら、慣れていなく暴走してしまうことも十分に考えられる。

危険視される理由が、また1つ理解できた。

ルルは言葉を続ける。

「当時はいつも、彼とともに遊んでましたね。

彼は平民でしたが、貴族子息の私相手でも臆さず会話してくれたので一緒に居て楽しかった。

こっそり屋敷を抜け出して、一緒に野原を探索することが日課でした。」

「今の君では考えられないことだな。

そんなやんちゃな時があったとは。」

茶かすように口にしてみるが、それに言葉を返す元気もないようだった。

なので、これ以降はしばらく黙って聞くことにする。

「その時、色々と約束したりもしたんですよ。

最初はずっと友達でいよう。」

中には将来結婚するというのもありましたね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

（何だろうなこの釈然としない気持ちは。）

何となく不愉快になった。

彼女に恋愛感情は持っていないと断言できるが、他の人間にちよっかいを出されて軽い嫉妬を覚えるくらいは大事だと思ってるようだ。

『』と重ねてしまってる部分もあるのだろうか

「そのことが兄さんにばれた時は、あの人を止めるのが大変でした。一般人に剣を持ち出して対抗しようとしたんですから。」

何とか一発殴るだけで治めることが出来ました。」

（よくやったレオン。）

レオンを密かに賞賛する。

「そんなある日のことです。」

いつものように野原に出て遊んでいるのですが、気が付いたら行っではいけないと言われている場所に出てしまっていたんです。

そこは崖もありますし、何より弱いとはいえ魔獣が出てくることから立ち入りを禁止されました。

私たちはすぐに帰ろうとしたのですがもう手遅れ。

目の前に「餓鬼^{ゴブリン}」が現れて、私たちは必死に逃げました。」

たかが「餓鬼^{ゴブリン}」と言えど、年端もいかない子供にとっては脅威以外の何物でもない。

逃げるのは当然の選択だろう。

「その末に崖に追い込まれてしまい、もう駄目だと思わせてテールだけでもと。」

敵を睨み付けてそう強く願った……」

（それが　　）

「力を初めて使った瞬間。」

俺の考えていたことを、ルルが補完した。

「動きが止まった魔獣を、私は無我夢中で崖に突き落とした。」

その目論見は成功し、何とか落とせたました。

そして、好きな男の子を助けられたという喜びを抱いてテールを見たら……」

「……恐怖の視線を向けていた、か。」

言いたくないことだろうと思ひ、俺が言葉を継いだ。

「私が恐る恐る近づくと、彼は後ずさっていった。」

そして、こう、言った……」

次の言葉を、必死になって紡ごうとしている。

そしてより強く俺の胸に顔を押し付けて言う。

「『来るな「化け物」!』と……」

「・・・約束を破った上にそれか。
クズが。」

子供だろうとなんだだろうと俺にとっては関係ない。
子供だからと言って、罪が消えることなどない。
だから、心の底からの憎しみを籠めてそのガキを吐き捨ててやった。
だがそこで疑問が浮かぶ。

「つまり、「それ」は君が『憑き人』だと知ったということではないのか？」

何故レオンに伝わってないんだ？」

子供は何かあったらすぐに頼る人に伝えるものだ。
そうなれば、高確率でレオンまで話が及ぶと思うのだが。

「簡単ですよ。」

今にも消えてしまいそうな笑みを浮かべて言う。

「テールは崖から落ちて死んだんです。
そのすぐ後に。」

私から逃げようとパニックになって、崖の方に走って行った・・・

「・・・救いが無い話だな。」

助けようとした人に怖がられ、そして助けられたと思っただけなら自分の目の

前で死なれた。
ただ怖がられるよりも、ただ目の前で死なれるよりも、ずっと堪える話だ。

（それをこの子は、今までため込んでいたのか。
誰にも打ち明けられず。）

今日の前にそのガキが居たら、最上の苦しみを与えて殺してやりたい。

「レイさん、教えてください・・・！」

泣きながら、再度聞いてくる。

「私は、「化け物」なんですか!？」

「人」とともにいてはいけない存在なんですか!？」

今まで誰も、『憑わたしき人』の存在を認めてはくれなかった!

『憑わたしき人』についてどう思うかと聞いたら、誰もが、誰もが・・・
!」

今まで、一体どれだけ辛い思いをしてきたのだろう。
この小さな身体で。

「教えてください・・・！」

私は『化け物』なんですか!？」

俺はその問いに答える。

「まあ君がそう思うんならそうなんじゃね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・軽い!？」

答えたら長い沈黙の末、突っ込まれた。

「だから下手に取り繕うのは俺の趣味ではない」って予め言ったのに。
思ったことをそのまま口にするんだよな、俺は。

さて、君のその悩みを軽くするとしますか

40話 『憑き人』（後書き）

面白いと思ってくだされば、是非評価を

今回こんな終わりですみません

ちゃんと次につながるんで、待ってください

41話 『自分』（前書き）

王都は次回です！

何度も予定変更してすみません

今回も結構なやんだんですが、その分好きな話です
楽しんでいただけると幸いです

41話 『自分』

「あ、あの、私の予想の遥かななめ上、いえ下に行く答えが返ってきたのですけど？」

「思ったことを言ったただけだ。

そう深い意味はない。

言葉のまま受け入れる。」

しかし、浅い意味はある。

人は深刻に悩んでいると、考え方が凝り固まってしまうものだ。

つまり、いくら諭されようと理屈で説明されようと、自分の考えに囚われて、頑なに信じようとしなくなるのである。

それを防ぐために、まずは先ほどの深刻な空気をぶち壊す必要があった。

なので、わざと軽いノリで答えさせてもらった。

今のルルは予想外の反応をされて混乱してるので、これならば俺の言葉をありのままに聞くことが出来る。

(さて、ここからは真面目な話。)

気持ちを切り替えて、ルルに語る。

「君はどうやら「化け物」と呼ばれることを嫌ってるみたいだが、それはそんなに悪いことか？」

俺は別に言われてもどうとも思わんが。」

慣れてるからな。

「な!？」

貴方のような人外染みた存在と比較しないでください!

私は絶対に嫌です!」

ルルが怒りだす、わざと勘に障る言い方をしたので狙い通りの反応だ。

しかし人外って、まあ「染みた」ということはまだ「人」と認識してるようだからいいか。

「君は物事の一面しか見てないだろう?」

「化け物」であることのメリットを一度でも考えたことがあるか?」

「メリットなんて、そんなもの・・・!」

苦渋の表情で無い、と言おうとしたところで口をはさむ。

「あるぞ、絶対に。」

この世に存在するすべてのものは必ず二面性を持つ。

それも、究極に矛盾した相反するもの、『正』と『負』の面を。」

「え?、その、貴方の言葉が矛盾だらけでさっぱりなのですが・・・」

疑問符を大量に浮かべるルルに、分かりやすく説明する。

「そうだな、それでは楽しい講義の時間だ。

先ずはこれを見てくれ。」

軽く手を挙げ、魔法を使う。

円の上に三角や四角がいくつか載っただけの、極めて単純な下位魔法用の魔法陣が、無数に夜空に浮かび上がる。下位と中位用の魔法陣は、上位のものと違い単純な構成なので念じるだけで簡単に起動でき、グリモワールの補助は必要ない。そして、様々な色の光球が山の様に宙に浮かぶ。

「うわあ・・・！」

ルルが感嘆の息を吐く。

光ってはいるものの、決して目を焼くことのない穏やかな光を放つ色とりどりの光球。

それが無数に、まるでホタルのように夜空を漂う。

これでルルの様な反応をしないのは、精神に異常のある者だけだろう。

（俺もそれに含まれることが多いがね・・・
いつもではないが。）

自分の精神性を少し自虐したところで、聞く。

「君はこれを見て、どう思った？」

「綺麗、と。」

「ここまで幻想的なものは初めて見ました・・・」

うつとりとした、だが未だに影を引きずった表情で彼女は答えた。

「そうだろうな、俺もこれは美しいとは思う。」

自分で創っておいて、自画自賛するようではあるが。」

「ここまでのものを創っておいてそう思わないのは、むしろその方が嫌味と取られてしまいますよ?」

「それもそうか。」

「いやしかし、ホントに綺麗だ。」

そこで言葉を切り、夜空を見上げながら言う。

「一軍を殺しつくせる、殺戮の光なのにな。」

「……え?」

ルルが何を言われたのか分からない様子で、呆然と呟いた。

「これら1つ1つが、人1人を容易く殺せる威力を持っている。それが数百。」

「小さな部隊なら全滅させてもおつりがくる。」

「あ……」

ここで初めて、これが殺傷を目的とした「魔法」であることにルルが気付く。

「これの主目的は殺傷だ。」

なのに君がこれに対して抱いた感情は、危機への「恐怖」ではなく美しさへの「賛美」。

これは矛盾だとは思わないか？」

「そ、そうですね・・・」

「人に「美しさ」という『正』の感情を与える反面、同時にその「存在が脅威である」という『負』の面も持ち合わせる。

まったくベクトルの異なる性質。

相反する究極の矛盾した二面性。

それをこれが、すべてのものが持っている。」

「すべて、ですか・・・？」

ルルの恐々とした言葉に、頷く。

「剣は斬つて「殺す」こと、殺すことでなにかを「助ける」こと。

水は喉を「癒す」こと、氾濫してすべてを「押し潰す」こと。

食料でさえも、餓えを「満たす」ことと不足により「戦争」の引き金になりえる可能性をもつ。

この世に相反する2つの性質を持たないものは存在しない。

いい面があれば悪い面が、その逆も然り。

そしてそれは、正負の性質のどちらかが大きければ大きいほど、その反対の性質もまた大きくなる。」

ルルを見る。

こちらを真っ直ぐ見ていた。

「「化け物」にもそれは当てはまるぞ。

そして、君が目を囚われていた『負』の面。

それがあるなら、その逆の『正』の面が必ず存在する。

それも、今まで君が苦しんでいた分、それだけ強大な『正』が。」

「『正』・・・、私に・・・？」

「そうだ。」

要は考え方、使い方次第と言うことだよ、どんなものも。

一面が辛いものならその逆の面も見る。

そうすれば、自分を恐れる必要など何も無い。」

「・・・・・・・・」

ルルは辛そうな表情で考え込む。

俺の話を認めてはいるようだが、やはり自身を「化け物」と思うことには抵抗があるようだ。

俺の今までの言い方では、「君は化け物だがそんなことは気にするな。」と言ってるのと同義なのだから仕方がない。

今まで辛い思いをしてきたのに、そう言われることを素直に受け入れられたらそれはそれで問題だ。

（では次に進もうか。）

ルルが、俺の言葉を額面通りにそのまま受け入れない自意識のある「人」であることを確信したところで、次に進む。

もしここでルルが自身を「化け物」と認めてしまうようなら、見捨ててしまう腹積もりだったが、これなら問題ない。

「そもそもルル。」

君の考える「化け物」とは何だ？」

「へ？」

いきなり質問をされキョトンとしていたが、直ぐに考えを纏めて発言する。

「・・・私は「憑き人」のように、他の人と逸脱した存在だと思いません。

力でも、能力でも、何でもいいから他人と大きく離れたものを持つ存在だと。」

「く、はははっ！」

その言葉に、思わず笑ってしまふ。

ルルは自分の考えを笑われて機嫌を少し悪くした。儼然とした様子で聞いてくる。

「笑い事ですか？」

今の私の真面目な話は。」

「そりゃな。

その基準でいったら俺はどうなるんだ？」

「え？」

「・・・・・・・・あ。」

言ってみてから、自分が俺のことをリツパな「化け物」だと言ったことに気付いたようだ。

「俺の力、技術、性格、それらはどれも他者から大きく離れている。君は一応従者の身分なのにな。」

俺は「化け物」と、そう言いたいのかね？」

「あー、その……」

バツが悪そうに視線をさ迷わせるルル。
そんなルルに笑いかける。

「そんなことは無いだろう？」

君らは俺の異常性を認識しても、あくまで人間として扱っている。
つまり、君の考えは間違ってる。」

俺のことを人外「染みた」存在と呼んだことから、彼らは俺のことを人として認識していることが分かる。

「では、何が「化け物」だというのですか。

私には分かりません。

今まで「憑き人」は「化け物」だと、「人」ではないと言われ続けてきた私には……」

今までの自分の考え方を否定され、前後不覚になり沈んだ声を漏らす。

それを見ながら語り出す。

「ルル、俺はな、例え君らが、世間が、世界が、俺を「化け物」だと呼ぼうとまったく気にしない。

それはなぜ分かるか？」

「……いえ。」

俺が何を言いたいのか分かっていないルルに言う。

俺のこの上なく自己中心の考えを。

これ以上ないほどの不敵な笑みを浮かべて。

「俺」がその意見を決して認めないからだ。」

「・・・はい!？」

「俺」という存在が、自身を「化け物」だとは認めない。
ただそれだけのことで俺は「人」で居られる。」

「そ、そんな我が儘なことを言いましても!？」

「おや、否定出来るか？」

「これは結構な真理だと思うが。」

不敵な笑みを崩さないまま続ける。

「そもそも君は何故俺に疑問を投げかけた？」

「化け物」と言っただけで欲しかったからか？」

「人」と認めて欲しかったからか？」

それとも他の何かを求めていたのか？」

ルルはいきなりの質問に初めは面食らっていたが、直ぐに考えを纏めて言う。

この切り替えの早さはルルの長所だろう。

「恐らく、「人」だと言っただけで欲しかったのだと思います。」

恥ずかしいことに、貴方に認めてもらうことで安心したかったの

だと。」

「それだよ。」

君はつまり俺の言葉を聞きたかったのではなく、その先にある「自身の感情」を得たかったんだ。

周りの意見も、俺の意見も関係なく、ただ自身の「安心」を得たかった。

そこにあるのは「自分」だけで、他者の割り込む余地は存在しない。」

「そ、それは！」

・・・そうですね、貴方の言うとおりなのかもしれません・・・」

否定しようとしたものの、それが事実であるので認める発言をする。表情が陰るルルに言う。

「そう落ち込むな、それは悪いことでもなんでもなく自然なことだ。

人は自身を中心としてしか物事を見ることはできない。

どんな出来た人間でもな。

人のために尽くす人が居る。

その人は人を助けることによる「充実感」を「自分」が得たいからそんな行動をする。

人を貶す人が居る。

そいつは人を貶めることによる「快感」を「自分」が得たいからそうする。

人とはそんなものだ。

誰もが最終的には、「自分」のために行動する。」

それは見方によっては酷く醜い姿。

だが、紛れもない事実。

そのまま俺は続ける。

「要するに結局のところ「人」が重要視するのは「自分」がどう考
えるか、感じるかということだ。

ならば、「人」なのか「化け物」なのか、という問いの答えもそ
うだと俺は考える。」

「自分の意思一つで「人」にも「化け物」にもなるというのはですか？
それはあまりにも暴論が過ぎるのでは・・・

確かに貴方の意見が正しいのだと理性では理解してます。

ですが、感情がそれを許しません。

それでは人の良心や善意を全否定してしまいます。

私はそれを認めたくありません・・・」

俺の意見を聞いて、ルルはそう返してくる。

自分の意見を否定をされたにも関わらず、抱いた感情は喜び。

理路整然とした言葉に惑わされながらも、「自分」の意思を優先し

た末の言葉なのだ。

俺にとってこれ以上嬉しいことは無い。

「そう思うのも仕方ないのだが、別に否定してるわけではないさ。

良心や善意は決して無意味ではなく、とても大事なものだ。

人は良心、善意、悪意、そういったものを「基準」として「自分」
の行動を決める。

それらが無ければ人は迷い、動けなくなる。

まあ、無理に納得してもらわなくても構わない、これはあくまで
俺個人の考えなのだから。」

なので、そう優しげに言った。

自分の意見を持つのはいいことだと言外に告げる形で。

そして、言葉を続ける。

「自分で「人」だと思い込んでいれば、その人物はどこまで行っても「人」という思いが防波堤となり、最後の一线を越えずに済む。

逆に自分で「化け物」だと思っていれば、普段どれだけ温厚な人柄だろうといつかボロが出てしまい「化け物」となるだろう。

そう言うわけで俺は、「化け物」とは自分でそう思い込んでしまふようになった「もの」だと考えている。」

そう言ったところで、ルルの目を見る。

「そこで聞こうか。

ルルライン・エル・エクセリア。」

「！」

その驚きは、自分の家名を知られていたことによるものか、それともそれ以外の何かか。

そんなことには頓着せず、ルルの額に右手の人差し指を当てる。

「君は、「人」か？、「化け物」か？」

「それは・・・」

「世間の評価がどうか、過去の経験が辛いとか、そう言うのは今の瞬間だけ忘れる。

そして純粹に、君の「意志」のままに選ぶ。

自分の呼ばれたい方を。

己の欲望のままに。」

ルルは呆然と俺を見つめる。
俺もまた、ルルを見つめ続ける。

「君が選んだ方の存在として俺は君を扱おう。

そしてそこにも世間の評価も、過去の経験も関係ない。

君が望むようにおれは君を呼ぶ。

世間がどう思おうと。

過去のガキが君を罵ろうと。

権力者が君をのけ者にしようと。

理が君を断じようと。

家族が君を否定しようと。

俺は君を、その存在として呼び続ける。」

ルルの瞳が潤みだす。

「そして、もし世界が君に望まぬ道を強いるうとするならば。」

言葉を切り、続ける。

己の「意志」を。

「世界を相手に戦いを挑む。」

「つつ！！？？」

ルルが涙を流し、手で口を覆う。

「君のためではなく、ただ己の欲望のために。
俺は仲間の君にそんなことを強いる世界を認めない。
どんな相手だろうと滅ぼそう。」

俺は、君という存在を絶対に否定しない。」

そこで言葉を切り、息を吐く。
そして問う。

「君は、「人」で在りたいか？」

s i d e ルルライン

『来るな、化け物!』

そう言われた時、足場が崩れていく感覚がした。
子供だった。

特に深い意味も知らず、様々な約束をしていただけのこと。

それでも、初恋の相手には違いなかった

その相手に、怖がられた。
何かの間違い。

そう思つて、震える脚で彼に近づいた。

彼が、落ちた

私から逃げた末に。

私が、殺した。

そのことは私の心を深く抉った。

遊んでいて、魔獣を恐れて足を踏み外した結果だとして、事故として片づけられた。

それはほとんど間違つていない。

「魔獣」の部分を「私」に変えるだけで、完全な事実となるのだから。

それから、私はずっと「憑き人」の力をどうしても使わなければならぬ事態を除いて使わなかった。

嫌われたくないから。

もう二度と怖がられたくないから。

兄にさえも、告げなかった。

もし言つて否定されれば、壊れてしまつていただろうから。

そのまま、墓まで持つていこうと思つていた。

今、この時までには

誰も認めてくれなかった。

誰もが「憑き人」を忌避していた。

「化け物」と言っていた。

だから、私も自分が「化け物」なんだ、と漠然と思っていた。

「君が選んだ方の存在として俺は君を扱う。」

そしてそこにも世間の評価も、過去の経験も関係ない。

君が望むようにおれは君を呼ぶ。

たとえ世間がどう思おうと。

過去のガキが君を罵ろうと。

権力者が君をのけ者にしようと。

理が君を断じようと。

家族が君を否定しようと。

俺は君を、その存在として呼び続ける。」

目の前のこの人が、こう言ってくれるまでは。

初めてだった。

そんなことを言ってくれる人は。

初めてだった。

「憑き人」を「人」だと言ってくれた人は。

初めてだった。

選択肢を与えてくれた人は。

この人は、あくまで私の意見を尊重しているのだ。

本人の望まぬことはいない。

ただ、己は道を選ぶための道具を手渡すだけ。

そして後は、相手に任せる。

その結果が、自分にとって望まぬものだろうと。自分の欲望に照らし合わせて、自分の意見を無理やり与えるよりも、相手が自分で選んだ選択をしてくれるほうが嬉しいから。私は彼が、自分のことを優しい人間ではないと言っていた理由をようやく理解した。

究極の独善思考。

それがこの人の真実。

自分の考えを、他の何よりも尊重する。

ああ、確かに優しくなどなかった。

この人は。

凄い人だ

言葉にしてみると、何と陳腐な言葉だろうか。

だが、それ以外なんと言えればいいだろう？

「優しい」などと言うありふれたカビの生えたような言葉など、この人にはふさわしくない。

これ以外にいくら言葉を並べようと、それはこの人を貶めるだけ。だからこれだけで十分。

「凄い」人なんだ。

今、私の心をここまでの喜びと感動で満たしてくれているのだから。

「そして、もし世界が君に望まぬ道を強いるうとするならば。

世界を相手に戦いを挑む。」

もう、涙で前が見えない。

ここまでの激しい感情、今まで味わったことが無い。
愛しさで心がどうにかなくなってしまいそうだ。

この感情の前には、過去の子供などどうでも良くなってしまう。
だから私は。

「君は、「人」で在りたいか？」

この問いに、全身全霊で、諦めていた言葉を返す。

「私、は。

「人」でありたい、です……！」

兄さんと、エルスさんと、と、クルスト。

そして何より……！

貴方と同じ、「人」に……！！」

涙をポロポロと流しながら、愛しい人に飛び込む。

その人は、さつきと同じように優しく抱きしめてくれた。

「了解した。

では、俺は以後君を「人」として扱う。

異存はないな？」

その事務的な言葉とは裏腹な優しげな声に、叫ぶ。

「あるわけがありません！」

「そうか。」

では今後ともよろしく。」

「はい！」

満面の笑みで、涙を拭かず答える。

そのまま私はしばらくの間、しがみつき続けた。

後ろの茂みの中に居る、泣いている男性と、不機嫌そうな女性と、それらを必死に宥めている少年に気付かずに。

s i d e o u t

s i d e ? ? ? ?

王城の謁見の間。

今そこに、国の重鎮たちが集まり報告と情報の共有をしていた。その会議も終わりが近づき、最後の報告に入る。

玉座に座る俺の前に、1人の隊長が顔面蒼白で立つ。

その様子を、俺も含め他の全員で怪訝な表情で眺める。

既にサイデンハルト家の二男を下した冒険者の招集には失敗したと報告は受けている。

それに伴い、周囲から冒険者の1人まともに連れてこれない無能者だと誹りを受けていることも知っている。

だが、それにしても顔色が悪すぎる。

「どうしたゴツッ。

体調でも悪いのか？」

気遣う言葉を投げかけると。

「ヒイイイイ！?!??」

奇声を上げた。

「……………」

不審者を見るような目を誰もが向ける。

「……貴方、気は確か？」

隣にいる娘が全員の言いたいことを代弁する。

「な、ななな、何でもないですとも!？」

ちよつと最近悪夢を見続けているだけですから!

あ、あの時のことを・・・」

この男は軽薄な面はあるものの、豪胆な人物として知られていたはずである。

なのに今は、葉の擦れる音を聞いただけで逃げだしそうなほど弱弱しい。

それがどうしたらこうなるのか。

考えられるのは、件の冒険者が何かをしたということか。

「それでは、報告を頼む。」

気にしても答えが出ないので、さっさと進める。

「は、はい。」

私は2日前にルツソの街に到着。

その後ネストへと向かい、例の冒険者と接触を持つとしました。

そうしたところ、運よくネストにその冒険者、「グランド」を、

発見・・・

せ、接触、を・・・」

段々声が弱くなり、聞こえなくなる。

その様子に多くの者がいら立ちを募らせる。

俺が叫ぼうとしたところで、言葉をつづけた。

「「グランド」は王都への招集令を拒否。」

その後、私に手紙を渡して、私はその場を後に・・・」

「何故、無理やりにも連れ出さなかったのだ。」

高々1人だぞ。

Bランカーを下したとはいえ我が愚弟如きだ。」

力づくでどうにかすればいいだろう。」

その口にしたのは、サイデンハルト家の長男であるオルダインだった。

どうもこの男は弟を見下しているところがあり、度々このような言動を繰り返している。

いつもはそこで、弟のオルトバーンの諫める声があるのだが。

「・・・・・・・・」

意外なことに、微塵も動揺せずじっとゴツツを見ていた。

何も言わない弟に兄はどうやら負けを認めたと勘違いしたらしく得意げな表情をするが、私と私の周りにいる5人はそうは受け取らなかった。

（成長してるな。）

この男はただ、このような些事に気を留めなかっただけなのだ。

今まではどこか頑固で融通の利かない男だったのだが、その面が薄れている。

考えられるのは、やはりグランドという男の影響か。

（どんな者なのだろうか。）

これほど人に影響を与えるほどの人間がどのような男なのか、興味が尽きない。

だがそれは置いておこう。

「手紙を受け取ったといったな。

見せよ。」

「え、あ、はい。」

俺の前まで歩いてきて、恭しく手紙を差し出す。
そしてその内容に目を通していく。

室内すべての人間の目が、今度は自分に向かうのを感じる。
そんなことに今更動じるようなことはないが。

そして目を通し終わると。

「クツクツク・・・」

怪訝な目を向けられる。

しかしそんなことは気にせず。

「グワツハツハツハハハハ！！！」

大笑いしてしまっていた。

全員の目が点になっている。

だが、そんなことはどうでもいい。
可笑しくてたまらない。

「父上、どうされたのですか？」

「これが笑わずにいられるか！

見てみる、最高だぞ？」

まだ笑いながら、手紙を娘へ差し出す。
そして数秒の後。

「な、何ですかこれは！
笑いごとですか！？」

顔を真っ赤にして叫んだ。

そして、疑問顔をする他の者たちに手紙をまわしていく。

そして、様々な反応を見せる。

苦笑するもの、憤慨するもの、大笑いするもの。

手紙の内容はこのようなものだった。

我、冒険者、即ち自由人なり

故に汝の命令、聞くこと能わず

されど、命令にあらず、懇願なれば話は別なり

さすれば我、疾く汝が元に参上す

尚、我害為そうすならば、器小さき者の所業と心得られよ

良き返し、切に願う

直訳すれば、

私は冒険者で自由が好きだから、命令に従いたくない

なので、貴方の命令は聞くことができない

だが、命令ではなく、お願いであれば話は別

それならば私は、急いで貴方の元に現れよう

なお、私に害を与えようとするならば、それは器量の小さな者の行

いと考えよ

よい返事を、切実に願う

こんなところか。

明らかに俺のことを挑発している。

さらに言えば、こちらの器を図ろうとしている。

もしこのようなことを言われ、憤慨して刺客を差し向けようものならば、それはこの手紙の通り小さな人間だということを自白したことになる。

挑発すると同時に、反撃されることの防護策も講じているのだ。

これを書いた者は、相当の切れ者だろう。

全員が手紙を見たところで、宣言する。

「使者を出すぞ。

今度はこの手紙の通り、「命令」ではなく「懇願」として、だ。

オルハウスト、お前がグランドという男と一番年が近そうだ、頼めるか？」

「お任せください。

陛下。」

腹心の1人が素直に従ってくれたことに笑みをこぼす。

「な、言いなりになるといいますか!？」

「たかが冒険者の1人にそこまでする必要がどこにあるのです!？」

「しかも『四剣』が使者など!？」

「皆の言つとおりです!」

「こんな無礼者にそこまでする必要があるとでも言つのですか父上
!」

だが外野がうるさい。
だが言ってることももつともではある。

「黙れ。」

だが俺には関係ない。

自分の勘が、この男は只者ではないと告げていた。
だからそれに従う。

今まで何度もそれに助けられてきたのだから。

俺が静かに告げると、誰もが息を呑み、静かになる。

「貴様らがなんと言おうと、この俺、デルト王ガイエスが決めたことだ。」

何を言おうと覆らん。」

誰も何も言わなくなった。

「では頼んだぞ。」

弓のカズルエル家当主、オルハウスト・アル・カズルエル。
失礼のないよう丁重にな。

言っておくが、丁重の意味をはき違えるんじゃないぞ?」

「分かっております。」

吉報をお待ちください。」

「では今日はこれで解散だ。」

皆、職務に戻れ。」

そろそろと部屋を出ていく家臣たち。

それを見ながら思う。

「さあ、果たして俺の悩みを解消してくれる人間であろうか。
なぜかそんな気がする。」

最近の俺の悩みがこれで解決してしまいそんな予感を感じながら、
ひとりごちた。

41話 『自分』（後書き）

面白いと思ってくだされば是非評価を

古文苦手なんで、手紙に不自然なところがあったら教えて頂きたい
です

42話 誘い(前書き)

今回1日遅れました
すみません

42話 誘い

何も見えない

日光も、人工の光も存在しない暗闇

あまりに絶望的な状況のためか、むしろ冷静になっっている自分がいることを自覚する

自分の今の状況を確かめる

瓦礫の中に横たわっている

視覚は役に立たない

全身を強かに打ったはずなのに、痛みも感じない

いや、意識する余裕が無い

嗅覚

その一点に意識が集中しているために

この上ないと断言できるほどの、濃密な『死』の香り

体臭とも腐臭とも違い、まったく不快感を感じるようなことはなく、むしろ心惹かれる香り

死にかけているためか、それとも生物は本能的に『死』を求めるのか、それにしがみつきたくなる

死んで楽になってしまいたくなる

だが、それは無理だろう

『母』が、最初に発生した炎で焼かれた

『父』が、落下してきた瓦礫に弄ばれ原型をなくした

その後どのくらい時間が経ったか

初めのころは周りから呻き声や罵声や神への祈りなんか聞いて

いた

それも今は聞こえない

不思議と確信できた

今、ここで生き残ってるのは、俺たち2人だけなのだ

碌に周囲の状況が分かるはずもないのに、何故か確信があった

家族が死んだ

友好関係の少ない俺にとって、家族は絶対の存在

何物にも勝る、かけがえのないもの

故に

今俺の腕の中にいる『』を死なせるなどということは、俺にと

って絶対に考えられないことだった

俺が死ねば、誰が『』を守る？

身寄りのない俺に、唯一残されたもの

それを残して、無責任に逝ってなるものか

そう考えていたはずなのに

目を覚ます。

いつもの木の上ではなく、街に着いた初めのころに月契約でテキト

ウに借りた納屋の中。

そこで研究をしていて、一定の成果を上げた安心感からいつの間にか寝てしまっていた。

『あの時』のような体勢で、床に。

この納屋は研究に適した環境とは口が裂けても言えないのだが、周囲にどんなことをしてるのかばれなければいいので問題ない。

しかしベッドも無く、床に寝ていた体勢が原因なのか、久しぶりに『あれ』を夢に見た。

「マズイな・・・」

思っていたことが、思わず口から漏れる。

不味いと思ったのは、感傷に浸ってしまうからとか、悲しくなるからとかではない。

「こんなに冷静で居られるなんて・・・」

快復した初めのころは、毎晩夢に見た。

悪夢として。

毎晩叫びを上げながら飛び起き、時には幻痛に襲われ、そして自らの情けなさに狂った嗤いを上げた。

それなのに、今は冷静にただの「事実」としか認識できなくなっている。

(人で居られなくなっている?)

俺の考え方では、自分を「人」だと思ってさえいればそれは「人」と言える。

だがそれは同時に、逆に言えば容易く「人」以外の「何か」になってしまう可能性もあるということ。

自覚するだけでそうなってしまうのだから。
そして、俺は人としての感覚が、だんだん麻痺しているように感じている。

このままでは取り返しのつかないことになる。
真剣にしばらく考えたが、一向に改善策が思いつかない。
すると。

「おーい。」

お前が遅いなんて珍しいな。

待つても来ないものだから来たぞ。」

そう言つてレオンが納屋の扉を開けて入ってきた。
ノックもせずに。

そしてザクツという、気持ちのいい朝にどう考えても相応しくない音が響く。

「だ、か、ら・・・!!」

何故貴方はノックをしないの!

それで何度私たちから制裁されたか忘れた!?

貴方は鳥頭なの!?!、3歩歩いたら忘れるのかしら!?!」

「エルスさん、もうこの人には何を言つても無駄だと思えますよ。

この前なんかレイさんに「その紙に触るなよ」と言われて「分かった」と答えたのに、1秒後転んで台無しにしてみましたから。

この人の場合、天才的に間が悪いです。

自覚や記憶がどうこう以前の問題なんですよ。」

「そうですね。」

今もノックを忘れたんではなく、ただしなかつたんでしょうし。

親しい関係だからなんて甘えがあるせいで、する必要がないと思

い込んでるんでしよう。

それでいつも酷い目に会っているのに。」

「お前ら容赦ねえな!？」

「というかエルス!、お前何でナイフで突っ込んでんだ!?
下手したら死んでたぞ!」

「貴方のそれはもう死ななきや治らないでしょう?」

「………かもしれないな。」

「……兄さん、そこは男として、いえ人として否定するべきです。」

「ルルも大変ですね、こんな兄で。」

「まったくよ。」

「ルル!？」

朝っぱらからコントが始まり、俺はそれを呆然と眺めていた。
レオンが泣きながら妹に縋りついている。

何とも情けない、兄の威厳を微塵も感じさせない光景だ。

これを見て、呆気を取られない人間はいないだろう。

(おや。)

しかし、そこで気付いた。

さっきまでの重い気分が、吹き飛んでいることに。

(・・・助けられた、か。)

自然と穏やかな笑みが浮かぶ。

どうも、彼らには思いもよらないところで救われることが多い。

「おいおい、君ら。」

とりあえず、未だに騒いでいた彼らに声をかける。

すると、今までどんなことをしていたのか自覚してエルスとルルは顔を赤くし、クルスは気にしないでくださいと語るような笑みを浮かべ、レオンは話がそれて助かったという安堵の息を吐く。そして、表情はそのままに、彼らに一言。

「レオンを弄るなら俺も交せてくれ。」

そして再開するレオン弄り。

鶏の代わりにレオンの叫び声がある、穏やかな朝だった。

いじめている間、彼らには感謝の念が絶えなかった。

数分後、真っ白の灰となったレオンを後目に、ルルに聞く。

「まだ怒ってるか？」

ルルは苦笑して答える。

「いいえ、もう怒ってなどいません。

結果的にはいいほうに進みましたからね。」

「それは良かった。」

3日経ってようやく機嫌が直ったことに安堵していると、エルスが拗ねたように言う。

「貴方が気にする必要ありませんよ。

あんないい目を見たんですから、それくらいのことがあったっていいじゃないですか。」

「あら、エルスさん拗ねてます?」

「くっ、その余裕が腹立つ・・・!」

「姉様もこの前抱きしめられたんだから、そんなに気にすることではないと思いますが。」

クルスが言わずとも良いことを口にしてしまう。

それにエルスが敏感に反応する。

「クルス?

女の嫉妬にそんなことは関係ないのよ?」

「は、はい・・・」

底冷えのする笑みに、クルスが震えた。

かなり迫力があつたから無理もない。

あのルルを呼び出した時、密かに他の3人も呼んでおき、後ろの茂みに隠れさせておいた。

なので、もう全員がルルが「憑き人」だということを知っている。ルルからすれば酷いことだったが、それでもしなければ踏ん切りがつかず、いつまでもだらだらと話せないままだったろうからそうさせてもらった。

その結果は彼らの様子から分かるように、大成功だった。

ルルが俺に抱きついていていたことで、レオンが泣き、エルスが嫉妬し、クルスがその2人の対処による心労でぐったりとしていたが、当然その程度のことでは彼らの絆が切れることもなく、素直にルルは受け入れられた。

ルルが黙っていたことを、3人が助けになれなかったことを互いに謝り、最終的には抱き合ったりしていた。

黙ってこんなことをしていたことにルルは3日も無然とした表情を崩さなかったが、今は特にそんな様子も無くなっていた。

上手くいったようで何よりである。

「ところでルル、もう一度確認がしたいんだが、頼めるか？」

俺がそう言うと、ルルは一瞬躊躇いを見せるがすぐに頷く。

そして、ルルの両目が赤く染まる。

「憑き人」の力を使用する前兆だ。

まるで何かに憑りつかれたかのようなこの様子こそ、「憑き人」の名の由来。

どうやら彼女らは、力を発動するとき目の色が変わるようなのだ。そして俺の身体に違和感が。

「む・・・」

身体が動かなくなる。

まさに、『束縛』されている。

因みに俺なら力尽くで破れることはすでに検証してある。

今の目的はそれでないので、今回はやらない。

軽く、ある魔法を周囲に展開する。

「あ。」

ルルが驚きの声を上げ、あっさりと呪縛が解かれる。

「やはり、その力は運動神経に作用して相手の動きを封じるものなんだな。

救いなのは脳神経でなかったことか。

もしそうだったら俺でも危なかった。」

淡々と告げると、ルルは呆れたように言う。

「まさかたった3日で力を解明してしまうとは思いませんでしたよ。

こうなると今までの私の心労はなんだったのか・・・」

あれから3日がたち、その間ルルの力にどんな制限があり、どんな仕組みで発動してるのか検証していた。

それにより、力の仕組みは解明され、さらに力は「同じ人間には連続してかけられない」ことも分かった。

インターバルは全くの不規則で、数時間の時もあれば数十分の時も

あり、かなり曖昧なものだった。

ルルは力を恐れていたために極力使わないようにしていて、それらをほとんど知らなかったのだ。

未知の力ほど恐ろしいものはない。

だから、それらを知ることが極めて重要なことだった。

「まあ過去のことを気にしてもしょうがないさ。

さて、急な話だが君らに渡すものがあるんだ。」

「？、なんですか？」

力の仕組みを改めて確認したところで、本題を切り出す。

エルスがいきなりの話題変換に不思議そうな顔をする。

それを無視して、物を渡す。

ルルとエルスには、預かっていたネックレスとリボンを、クルスには折られた「刃虎^{ザンタイガー}」製のナイフから作った、ナイフの機能を保持したお守りを。

因みにレオンにもクルスと同じものを用意している。

「このネックレスは分かりますが、このリボンはなんですか？」

ルルの質問に、真意を隠して答える。

「なに、以前エルスを泣かせた時に後で何か手作りのものをプレゼントすると約束してね。

それでせっかくだからとルルにも同じものを作ろうと思ったわけだ。」

そのリボンには、不規則な線が何本もある。

しかしそれが返って、不可思議な魅力を見る者に与える。

「そうなんですか。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

ルルにも渡されたのは少しずるい気がしますが、とても嬉しいです。」

「僕ももらえらるとは意外でしたね。」

「しかもこんな高価なものを。」

全員嬉しそうな顔をする。

だが、エルスは自分への謝罪の品なのにルルにまで贈られたことがほんの少しだけ不満そうだった。だから続けて。

「ああ、エルスはそう言うだろうからこれも用意しておいたほれ。」

「え、はい。」

「・・・て、レイ様こ、これ!？」

そう言って投げて渡した物を見て、エルスは顔を真っ赤に染めあわわした。

あまりに予想通りの反応に、可笑しくなる。

他2人は不思議そうにしていたが。

「そう慌てるな、別に他意はない。」

さて、ここで君らに言うておくことがある。

よく聞けよ。」

そう言うと、皆が浮ついていた様子を消し、真剣な表情になる。そして一言。

「それを常に身につけて、絶対に外すな。」

「え？」

「どづいつことでしょうか？」

「それだけですか？」

クルス、エルス、ルルが拍子抜けしたように顔を弛緩させる。

「もう一度言う。」

それを常に身につけて、絶対に外すな。」

だが、念を押すようにもう一度言うと、今度は気圧されたように頷いた。

その様子に満足し、これからどうするか考える。

だが、その必要はすぐに無くなった。

「レイさん！」

大変なことになりましたよ！」

物凄く慌てた様子のセフィリアさんが駆け込んできたことによって。

グラウンドとしてネストを訪れる。

ここに来る過程で何があつたのか聞こうとしたのだが、慌てすぎていて言語としてまともに機能していなかったのになにかあつたのかは知らない。

到着すると、周囲の視線が一気に集まってきた。

そして、ディック殿の前に居る男がこちらを向く。

その男の気配に息を飲む。

存在感が段違いだ。

この空間が、この男に支配されているような錯覚を周囲の人間は感じていたことだろう。

この前のオルト殿に引けを取らないほどの美丈夫。

長い金髪にエメラルド色の瞳を持つ、穏やかな雰囲気のある男。

年は恐らく俺と同年代。

背中に大きな弓を背負っている。

その武器からはどこか神聖な雰囲気を感じるので、生半かな代物ではないだろう。

不思議なことに何処にも矢は見当たらないのだが。

この前の使者がクズだっただけに、この存在の高貴さが余計大きく感じられる。

（まさか、それを狙ってあんな男を送ってきたのか？）

そんな突拍子のない考えが一瞬頭を過ぎるが、直ぐに思い直す。

そんなことをして利点があるわけがない。

とりあえず、話を聞くために男の前にでる。

「始めまして。

俺が「Gランカー」のグラントだが、貴方は？
どこぞの貴族とみえるが。」

失礼ではないが、決して友好的ともいえない声音で語りかける。

Gランカーの部分で、人となりを試してみるためにわざと強調して言った。

もしそのことで俺を侮るような男ならば、その程度の男だということ。

しかし、この男は穏やかな笑みを浮かべただけ。

「こちらこそはじめまして。

私はカズルエル家当主、オルハウスト・アル・カズルエルと申します。

若輩者ではありますが、デルト王国最高戦士、『四剣』を拝命している者です。

貴方とはこれから親しくなりそうですね、よろしくお願いします。

「

そう、静かに言ってきた。

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

だが、この場で嘘をついても意味などなく、あの時のセフィリアさんの慌てようと周りの反応からまぎれない事実なのだと推測できる。

『四剣』とは、デルト王国の王族を除いた最強にして最高の4人に与えられる称号。

それを持つ者は、王以外の何ものにも束縛されず、罰せられない。例え任命者が元奴隷の者であろうとも、その者に逆らうことは許されない。

その常識はずれの特権故に、戦士としての腕以外に高潔な精神が求

められるが故に、「最高」の戦士と称される。
下手をしたら『二つ名』よりも名誉な称号の持ち主たち。

(これは・・・想像以上に大物が釣れたものだ。)

前回のやり取りの結果としては、そこらの貴族が友好的に接して来るのが最高の結果だと踏んでいたもので、これはイレギュラーすぎる。しかも、ここから王都までは往復4日はかかるのに、この男はあれから3日で来た。

このことから、王が話を聞いた途端迷わずに『四剣』という手札を用いたことが容易に想像できる。

王に必要な決断力を有する男であり、そして侵略した国とすぐさま友好的になれる程の外交の知識、もしくは手駒も持っている。

(会つのが俄然楽しみになってきたな。)

だが、まだどんな用件で来たのか聞いてなかったので、警戒しながら聞く。

「なるほど、貴方が何者なのかはよく分かった。

それで何のためにわざわざこんなところまで？」

周りが今度はぎよつとした視線を向けてくる。

『四家』で、しかも『四剣』のものとしてなほ不遜な態度を崩さないことが信じられないらしい。

セフィリアさんは顔を青くし、ディック殿は冷や汗を流している。この俺の問いに、オルハウスト殿は耐えきれないという風に、だが上品な笑みを浮かべる。

「私の素性を知ってなほそのような態度を取ってくれた者は初めてですね。」

しかし、「何のために」などとは分かり切ったことを。貴方が手紙で我が王を挑発したのでしょうか。」

その返答に今度は周囲から敵意が向けられる。

王はどうかやら国民にも好かれていたようだ。

周りの様子から冷静に情報を得ていく。

そして。オルハウスト殿は用件を告げる。

「貴方を国賓として、我が王のもとへのご案内いたします。

これは命令ではなく王の個人的なお願いですので、受けるも受けないも自由です。

どうなさいますか？」

「と云うことがあったわけだ。

よって俺はすぐにこの街を出る。

留守の間は金を金貨5枚、それと連絡用の魔符を置いていくから自由にするといい。」

「・・・私はもう何も突っ込みませんよ、いちいち気にしてたら身が持ちません。」

「貴方は本当に凄いですね。」

どうやったらそこまで王に気に入られることが出来るのですか。
・・・いつか、僕も・・・」

「事前に言われていたことですが、また急な話ですね。
まあ何を言っても貴方は行ってしまおうのでしょうから、何も言いません。」

「俺が意識を失ってる間にそんなことに・・・」

出立の準備を整えながら言った俺の言葉に、皆それぞれの反応を見せたが、どれも俺の行動を容認していた。

オルハウストの話聞いて大騒ぎになっていたネストの人たちとは大違いだ。

セフィリアさんは気絶してたし、ディック殿は青を通り越して白くなっていた。

因みに、オルハウストは同い年ということが分かったので敬語を使うことは止めた。

そして数分後、《アロンドイト》も背負い、装備を整えて出立の準備が整った。

「じゃ、行ってくる。」

「おい。」

「何で俺の襟首を掴んでいる。」

宿から出て行くこうとしたところで、襟首を掴んでいたレオンから不満の声が上がる。

それに俺は当然のことのように答える。

「いや。」

これからしばらく会えないとなるとどうもレオンを弄り倒したくなっ
てな。

それでオルハウストと合流する前にヤッとおこつと。」

「なんじゃそりゃあ!?!」

「はい、いってらっしゃいです。」

「お土産期待してますよ。」

義兄様。」

「ふふ、出来るだけ早く帰ってくることを祈ってますね。」

「お前ら止めないのかよ!?!」

て、おいレイ!?!」

うわああああ!?!」

そしてレオンを暗い路地裏へ連れ込んだ。

気分はまさに処刑執行前の囚人だ。
親父もこんな気分を味わったんだろうか。
そして歩いていたレイが立ち止まる。

「ふむ、ここなら問題ないみたいだな。」

そして執行の言葉を告げる。

（ああ、俺の人生はここまでみたいだな。）

どこか達観した心で、既に受け入れる覚悟を決めた。
だが。

「レオン、これから話すことを良く聞けよ。」

「・・・は？」

予想してたこととずれたことを言ってきたので、呆然としてしまう。

「さっきのはあの3人を誤魔化すためのフェイクだ。

本題は今から話すこと。」

「え、ああ・・・そうなのか・・・

それで話つてのは？」

まだ動揺から立ち直り切れていなかったが、そう聞いた。

「俺が居ない間、お前は自分の思うとおりに行動するといい。

いざと言う時ならば、結果がどんなことになるかと構わない。

ただ自分の本能を信じて行動しろ。」

その言葉を聞き、俺の中で何かスイッチのようなものが切り替わった。

「……つまり、俺の独断で「奴」を仕留めてしまってもいいんだな？」

「あくまでお前がそうするのが最善だと判断した場合の限り、だがな。」

俺というある種の抑止力が無くなる以上、「奴」は必ず動きだす。お前たちと接触しようとするだろう。

お前はライガン、サムス、フルートの3人と話をして、その内容を逐一俺に報告してくれ。

その内容から、俺が「奴」を突き止める。」

「随分行き当たりばつたりな作戦だな。」

それに俺たちをダシにしようとするなんてお前らしくないぞ。」

コイツはいつも俺に対して厳しいが、それでも大抵の場合俺たちの身の安全を第一に行動してくれている。

そんな男が俺たちを「奴」と接触させる罠に使うなんて、不可解過ぎた。

それを指摘すると、レイは苦い顔をする。

「俺としても、本来ならこんなことしたくない……」

だが、何やら嫌な予感がするんだよ。

このまま放っておいたら、取り返しのつかないことが起こってしまいそうな予感が。」

「……お前がそう言つと、本当にそうなりそうで恐ろしいな。」

「それに出るだけの安全策は取らせてもらった。
万全とはいかないまでも、まず安全と断言できる。
お前もこれを肌身離さず持つてる、絶対だぞ。」

そう言っつて、ナイフを渡してきた。

一目で高級品だと分かる代物だ。

「お前がそう言っつからには、何か意味があるんだろうな。
そうさせてもらっつぞ。」

俺はそれを素直に受け取る。

そして、さっきから気になっていたことを聞く。

「ところで、そんな話を俺にしたってことは俺は「信頼」されたと
考えていいのか？」

冗談めかしているものの、かなりの期待を込めて聞いた。
俺の今の目標の1つが、この男に信頼されることだからだ。

「悪いが、そう言っつわけではない。

今回のことは絶対に必要と言っつわけでは無く、お前が何もしなく
ても特に問題は無いんだ。

別にいろいろと動いてるからな。

お前にこれを言っつたのは、やってくれればある程度楽になるから
だ。

気が進まなければ、動かなくてもいい。」

だからこの言葉には、少しがっくりと来た。

だが気にしてもしょうがないし、何より。

「まあいいさ。」

俺の手で「奴」を仕留める許可がもらえるんならな。」

それだけで俺にとって動く理由は十分だからだ。

「……言うておくが、俺が前言ったように「あれ」はあくまで可能性の話だぞ？」

そこをちゃんと理解しているのか？」

「俺にとっては、その可能性があるというだけで十分だ。」

正直自分で自分が止められそうに無いんだよ。

お前の静止が無かったら、今にも3人とも皆殺しにしてしまいうなほどだ。」

「俺ができるだけ早く「奴」を突き止める。」

だからそれまで待つてほしいんだが。」

お前らの身に危険が迫った時以外は出来るだけ自重してくれ。」

「善処するさ。」

俺としても、率先として無関係の人を殺したいと思う程落ちぶれちゃいない。

だが、レイの言っていたことが本当で、また俺の家族を奪おうとするようならば、容赦しない。」

「とりあえず、俺の言いたいことはそれだけだ。」

それじゃあ行ってくる。」

「ああ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・レオン！」

背を向けた男が、歩き出そうとしたところで、再び声をかけてくる。そして何やら言おうかどうか迷っているようだ。俺はいつも即断即決のこの男が迷っていることに驚いた。

「気をつけるよ。」

だが、次に出たこの言葉にはもつと驚かされた。そしておかしくなる。

この男は、俺たちを自ら危険にさらそうとしていることを、本当に嫌だと思っていることが分かったから。

俺たちを、心配してくれていることが分かったから。だから、言葉を返す。

「ああ、こつちは任せろ！」

そう告げるころにはレイは、「偽装」を展開して走りだしていたが、あいつなら問題なく聞こえたことだろう。

そしてそれを見送った後、まだスイッチの入ったままの俺は思ったことを口にしてしまう。

「もし「奴」が、レイの言つとおり俺の国を滅ぼした奴ならば、俺が必ずその喉笛を噛み千切つてやる・・・

覚悟しやがれ。」

そのまま俺は宿へと戻った。

五体満足で戻ってきた俺を見て、3人から不思議そうな目を向けられたのは言つまでもない。

42話 誘い（後書き）

面白いと思ってくだされば是非評価を

43話 2人目(前書き)

とうとう累計ランキング50位達成です！

そして総合評価18000突破！

ここまで来るとは・・・

皆さん真にありがとうございます！

今回短めです。

文化祭が始まるので、次も遅れるかもしれません。

それと、レオンがしばらく脱退するので弄られ役が交代しますw

43話 2人目

「オルハウスト。」

あの木でそろそろ休憩にした方がいいんじゃないか？

そろそろセフィリアさんが限界みたいだ。」

ちょうど良さそうな木を見つけたので、俺は休憩を切り出した。

オルハウストがその言葉を聞き、セフィリアさんを見て頷いたので、木の下へ向かう。

セフィリアさんも何とかついてくる。

そしてその木に着いた途端、彼女はへたり込んだ。

それを視界の隅に納めながらオルハウストに聞く。

「やっぱり相当速いんだなああなたは。」

今までこんな人間いなかったからなかなか新鮮だ。

まったく世界は広い。

まさか馬車を使わずに、徒歩で王都から1日で着ける人間がいるとは。」

「私も市井の者で付いてこれる者を見たのは初めてだよ。」

こんな人がまだ居たのかと感心している。」

「はあっ、げほっ、げほっ・・・」

それ、あ、貴方が言うことじゃないでしょう・・・

今こんな、普通じゃ考えられない非常識な移動をして、息1つ切らしてないんですから・・・

しかも、そんな馬鹿でかい武器を持って・・・」

セフィリアさんが息を切らせながら半眼で言ってきた。

明らかに機嫌が悪い。

馬鹿でかい武器というのは間違いなく《アロンドイト》のことだろう。

長さ2m20cm、幅20cmの平たい物体が、布を巻かれて俺の背にある。

傍から見れば、まるで建築用の板でも担いでいるように見えるだろう。

そんなものを担いで平然としてるのが信じられないらしい。

俺たちは今、王都への道を進んでいる。

徒歩で。

闘気で強化した足ならば、馬車で丸2日の道でも丸1日で着けるとオルハウストに聞いたので、そうすることにした。

因みに、セフィリアさんが起きるのを待つのも面倒だったし、起きたら徒歩で行くことに反対されるのも目に見えているので

「何ですか。

まだ気絶してるところを連れてきたことを怒ってるんで？

あらかじめ行動を共にすることは決めてあったことですし、そもそもそれを提案してきたのは貴方でしょうに。」

「それにしたって私にだって準備があるんです！

それに久しぶりの王都だったから見栄えのいいものを着ていこうと思っていたのに・・・

着の身着のまま連れてこられて怒らない人がいるとでも思ってるんですか！

しかも何故に徒歩！？

ここまでの4時間全力疾走で、闘気を使ってももう限界ですよ！」

怒られた。

まあしょうがないことだろう、今回は本当に俺が悪い。
こんな反応をされるのも分かっていたことだ。
気が付いたら街を出てて、自分は持ち物無し。
しかもそれから有無を言わされず長距離マラソン開始。
4時間走って今は疲労困憊でまったく動けず。
これで怒らない人間はいないだろう。
しかも、こんなことをした理由はいつもの如く・・・

「だってその方が面白いじゃないですか。

何と言うか・・・こう・・・人が疲れ切ってる姿って見ててぞくぞくしますよね？

動けないところを足でつつきたくなる。

ていてい。」

「そんなのは貴方のような外道だけです!!!」

「おお、速い。」

動けなくなつたところを足で小突いてると、セフィリアさんが切れて襲いかかって来た。

疲れ切った状態で振られてきた片手剣ほどの長さの金属の棒を、強化した右手で受け止める。

なかなかの速さだ。

何だ、まだ動けるじゃないか。

湿った音が響いたものの、受け止めた手に被害は全くない。

「前から思ってたんですが、貴方のランクは何なんですか？

結構高いものと見受けませんが。」

「・・・」

そんなに高くはないでしょう？」

「Gの私と比べたら十分高いですね。」

「へー、貴方がそんなこと言っても嫌味にしか聞こえませんか。
本当に1回殴らせて欲しいんですが。」

「断固拒否します。」

軽く？からかっていたらセフィリアさんが眉間に青筋を浮かべだし、
今にも襲い掛かってきそうな様子になったのでそろそろやめる。
なんだか女性を弄るのは新鮮なので、少々やりすぎてしまったかも
しれない。

エルスやルルは、従者で立場が下のためにあまり弄る気が起きない
から、セフィリアさんのような対等の関係の者と一緒になれたのは
なかなか嬉しいのだ。

「貴方たちは仲がいいですね、流石婚約者同士です。」

これは、私はお邪魔でしたでしょうか？」

そうしてたら取り残されていたオルハウストが、苦笑しながら会話
に参加してきた。

「これのどこが仲が良さそうに見えるっていうんですか！
て、ああ・・・私は『四剣』の方になんて口を・・・」

「まあ、気にすんなって。」

「貴方が原因でしょうがぁー！！！！！」

それに対してセフィリアさんが思わず怒鳴り返してしまい、上の者に暴言を吐いてしまったことに落ち込んだので慰めたら、今までで一番の音量で怒鳴られた。

因みに今の彼の言葉から分かるように、今の俺とセフィリアさんの立場は一応婚約者のままである。

その方が共に行動するに当たって、色々と融通が利くのでディック殿がそうしてくれていた。

（尤も、あの人このままなし崩しに関係を進めようとしてる節があるから、注意は必要だがな。）

どうも最近あの老人は、俺とセフィリアさんの仲を取り持とうとしてる気がする。

「お2人の様子を見て仲が良くないと思う人はいないと思いますよ。お互い気兼ねなく本音で話し合える関係というのは素晴らしいと思います。」

「・・・私のような、普段から無条件で敬われてしまう者からすれば余計に。」

「こんな関係の夫婦ばかりの世の中だったら、碌な子供が育ちませんね。」

「・・・まあ、悪い気はしませんが。」

オルハウストの言葉に、セフィリアさんは半眼でそう言った。

しかし、最後の表情は満更でもなさそうだった。

俺には今のオルハウストの言葉と表情の方が気になったので深く突っ込むことはしなかったが。

（この男・・・）

最初見た時から思ってたが、貴族であることを疎んでるのか・・・？)

街で見た時、この男は周りから避けられていた。その立場からすればそれは仕方がないことだ。

普通の貴族ならばそこでただ、平民となれ合いになる気が無いのでまったく気にしない。

だが、この男は、ほんのわずかに、表情に寂しさを滲ませていた。それに、ネストでも「私の素性を知ってなおそのような態度を取ってくれた者」と言っていたし。

そうだとすれば、かなり好みの性格だ。もちろん、友人として、だが。

「ここからあとのくらいで着けそうか分かるか？」

心中で様々なことを考えながら、それをおくびにも出さず聞く。

オルハウストは少し考えた後、答える。

「さっきの速度を維持すれば、後6時間といったところか。

しかしもう夕方だし、もう2時間走ったら後は明日の朝にした方がいい。

それでも明日の昼には着けるだろう。」

「分かった、それじゃあ走りましょうかセフィリアさん？」

「貴方は鬼ですか!？」

イイ顔でそう言うと、セフィリアさんが半泣きで叫ぶ。

そろそろいいか、十分遊んだし。

「冗談ですよ。」

「ここからは私が貴方を背負うんで、貴方は走らなくて結構です。」

「え？」

「そ、それはありがたいですけどそこまでしていただくわけには」

「別に気にしなくてもいいですよ、そもそも貴方が今こんな目に会ってるのも元は私のせいなんですし。」

「ちょっとからかいが過ぎましたね、王都に着いたらお詫びに服やアクセサリーを買わせてください。」

「それに加えて、私がこれからの移動中の足になるのでそれでご勘弁を。」

「あ、はい・・・」

いきなり態度を変えた俺に目を白黒させ、流れのままに答えてしま
う彼女。

これで、後にかかったことを引きずる可能性は無くなった。
遊んだあとは、ちゃんとケアをしないとね。

「君は悪い人だね。」

「全部確信犯かい？」

こいつはすべてお見通しだったようだが。

その問いには、笑みを浮かべることで返した。

2時間周りの景色を置き去りにするような速度で走り、辺りが暗くなつたところで野営の準備をする。
魔法で火を熾し、夕食の準備をしていると、オルハウストが近寄ってくる。

「なかなかの手際だ。」

そこらの店よりもおいしいものが食べられそうだよ。」

「嬉しい言葉をどうも。」

お世辞でない分素直に嬉しいよ。」

さっきの表情の動きと声の質から、言葉が本音だと分かる。
取り繕わない素直な言い方は好きなので、軽く笑みを浮かべて答えた。

因みに今セフィリアさんは、日課だとか言う鍛錬のために今少し離れたところで長めの棍を振るっている。

ここから見ても、動きが相当洗練されていることが分かる。

本人はクランカーと言っていたが、今鍛錬している彼女からはそれ以上の実力に感じられる。

尤も、実戦の場合はどうなのか分からないが。

「綺麗なものだね。」

青い髪が動きとともに揺れて、まるで戦女神のようだ。」

「否定はしない。」

しかしお前、言いたいことがあるなら回りくどいことは言わずに直接聞いたほうがいいぞ。

俺のような人間には。」

「……どういことかな？」

「早い話、俺の技術について探るように言われてるんだろ？
王様にさ。」

「っ!？」

（凶星か。）

まあ当然のことだろう。（

俺のような並外れた力を持つ者が居たら、それを利用しようとする人間はまずいない。

居るとしたら、力に恐れを為し怯えている者だろうか。

この国の王は本人も実力者らしいので、それには当てはまらない。となると、俺の力の秘密、特に決闘で使った武器と魔法について知ろうとするはず。

オルハウストがそれを探るように命令されていることは十分に考えられた。

「ばれてたか。」

君は底が知れないね、本当に。」

こいつは俺の言葉を聞くと、苦笑を浮かべていた。

だが、その顔には苦悩から解き放たれた安堵の色が見て取れた。諜報関係の仕事は、どうやらこの男は嫌いらしい。

人となりはいいし、普通は人と距離を取りがちの俺にこの短時間で気に入られる性格の持ち主だから、その気になればどんな情報でも聞き出せそうなものなのに。

難儀な男だ。

そんなところも気に入ってるのだが。
そんなわけで

「俺の魔法は、基本的には他の者が使うものと変わらない。
ただ、物事の様々な理を組み込むことで基本性能は飛び抜けてる
が。」

それに加え、独自解釈を加えた魔法陣を使用することで、魔法の
高速化と簡易化、脳への負担の軽減、魔力効率の大幅上昇など様々
な利点を得ている。」

「は？」

啞然とする男に、さらに続ける。

「それと闘気だが、俺の決闘の情報は知ってることを前提に言わせ
てもらうが、普通の人間には野菜で金属と張り合うなど出来はしな
い。」

あれをやるには植物などの生命体の構造を細かく理解し、その上
で闘気をその構造に逆らわないように流す必要がある。

血管だとか維管束だとかに沿うようにしないと駄目なんだよ。

そうしなければ、物質が闘気に耐えきれずいかれてしまう。

そんなわけで、あれははつきり言って俺以外は使えない技術だな。

「

ち、ちよつと待て！

何故いきなりそんなべらべらと喋り出してるんだ！？」

我慢できなくなったオルハウストが慌てた様子で言う。
それに対して平然と答える。

「何だよ、元はこれが目的だったろうが。素直に聞いてればいいじゃないか。」

「それはそうだが、私は君の機嫌を損ねないように決して無理に聞き出そうとするな、とも言われている。」

「だから君が黙っていてもなんの問題も無かったんだぞ?」

無理に聞き出そうとすれば、誰だって機嫌を損ねてしまう。

国賓として招いている人間に、そんなことをするわけにはいかないだろう。

相手は実力に訴えることが出来ない以上、別に喋る必要もない。

恐らくはこういうことなのだろう。

それに、この男としてはそもそも命令内容自体に納得していたわけじゃないから、俺にばれたことで命令に従う必要が無くなり安堵してる部分もあったのだろう。

「さっき言った内容は別に隠すようなことでもないからな。」

それに今の説明ならば、俺以外に不可能な技術ばかりだということが良く分かるだろう?」

これは教えて置いた方が、後で技術狙いの下心満載な輩の相手をしなくて済むようになるから都合がいい。

「納得できたか?」

俺としては、あの程度の情報であれば教えてしまった方が後の遺恨が減らせてむしろありがたいのだ。

だから、王のその命令にはむしろ感謝している。

尤も、本当に重要な情報は与えていないし、教えることで人に対する戦略が増える、という下心もあるのだが

「・・・成程ね、それならばいいか。

私としては君とは仲良くしたいから、君が私に嫌気がさして自棄になったのかと思って焦ったよ。」

説明を終えると、こいつはあからさまにホッとしていた。

「そうなのか、それに関しては同感だ。

俺もお前と仲良くやっていきたい。」

そして俺が笑みを浮かべてそう言うと、オルハウストは顔をまるで少年のように輝かせた。

その外見とは裏腹の、子供っぽい仕草に苦笑してしまう。

「お2人とも、何やら仲良くなってるみたいですね。」

気が付くと、セフィリアさんが布で汗を拭きながらこっちに歩いてきていた。

その顔はとても嬉しそうだ。

「私たち2人が嬉しい気分になるのは分かりますが、貴方まで嬉しがることですか？」

「短い間とはいえ、旅の仲間が良好な関係を築いていくことが嬉しくないわけがないでしょう。」

「成程、それもそつだ。」

湧いた疑問を口にし、答えを聞き納得する。

と、セフィリアさんが汗を拭いている姿を見て、ある提案をすることにした。

「ところでセフィリアさん、入浴でもしますか？
私の魔法で結構簡単に作れるんですが。
もちろん覗き防止用の壁も作ります。」

「っ本当ですか！

是非お願いします！」

その提案に、途端に飛びついてくるセフィリアさん。

その様子に、思わずオルハウストと2人で笑い声をあげてしまう。

その間ずっと、彼女は恥ずかしそうにしていた。

こうして、俺はこの世界2人目の友を得た。

この出会いが招くことになる、・・・を知らずに

43話 2人目(後書き)

面白いと思ってくだされば、是非評価を

44話 生贄（前書き）

投稿遅れました、申し訳ない！

44話 生贄

翌日の昼、予定通り王都「デルトライン」へとたどり着く。

ここから見た限りは全く分からないが、この王都はその名の通り、巨大な三角形の形をしている。

三角にすることで、外壁の門が三角の頂点部にある3つで済み、敵の侵攻を限定する。

さらに例え門を奪われたとしても、その時は侵攻側は両脇を外壁に挟まれていることにより部隊の展開がし辛く、防衛側は敵よりも広く部隊を展開することが出来る。

止めに、四角の時よりも中心部、つまり王城への距離も遠くなるので防衛がしやすくなっている。

これらの利点があり、この王都は建国以来難攻不落を誇っている。

しかしこの利点はあくまで、敵が王国の中枢である王都まで迫ってきたという最悪の事態に対してのみ有効だ。

普段の国民や商人にとっては、はつきり言って邪魔な構造である。

出入り口が少ないので、出入りに無駄に時間がかかるのだ。

もちろん、王都がこのような形となる前にそのことを指摘するものは大勢いた。

それに対して、デルト初代王は会議の場で言った。

『安全を軽視して国が守れるか。』

この一言に誰も何も言えなくなり、そのまま押し切ったらしい。

国を最優先に考える王として、もしもの事態に備えることは大事なこと。

それが分からないほど愚鈍な者は当時居なかったので、反論できなかったのだろう。

何とも『戦士の国』であるデルト王国らしい意見と構造である。

「大きいな。」

「随分と率直な意見だね。」

「まあ気持ちはよく分かるよ。」

王都の門の1つを見て素直な言葉を述べると、オルハウストが笑みを浮かべながら言う。

門は出来るだけ多くの人や物資を運べるように、かなり大きくなっている。

大雑把な見識だが、大体一辺が20mはある。恐らく門の少なさを考慮した結果なのだろう。

これではせっかく門の数を減らした意味が無く、本末転倒な気がしたが、よく見たら近くに狭い門があり、それと切り替えが可能になっているようだ。

これならば敵が攻めてきた時に狭い方に切り替え、侵攻を防ぐことが出来る。

門を観察しているとセフィリアさんが話しかけて来た。

「この門を見て呆然するのもよく分かります。」

私も初めて来た時はしばらく固まってしまいましたし。」

その言葉を聞き、嗜虐心が首をもたげる。

それに抗わず、意地悪気な笑みを浮かべて言う。

「その後はしゃいでたら親とはぐれて、泣きながら衛兵に保護されただんですよね。」

「可愛いものですなー。」

「ええ!？」

「な、何故そのことを!？」

「ディック殿に王都がどういうところか聞いてみたら、嬉々として貴方とここに来た時のことを語ってくれましたので。」

初めはお互いに腹の探り合いをしながらの会話だった。

その中話の切り替えのためにセフィリアさんの話題を出したら、物凄いい勢いで引つ掛かった。

入れ食いどころか、水に針をつける前に自分から飛んで食いついてきたという感じだ。

その後、こちらもすっかり毒気を抜かれてしまっただけで黒いことをする気になれず、極普通の歓談になってしまった。

(楽しかったから良かったがな。)

あんな経験、久しぶりだった。

レオンたちが居る時も似たようなことは良くしたが、それは同年代同士のもの。

ディック殿のような、遠く歳の離れた人との会話は、12歳のころが最後だった。

だからとても楽しかった、含蓄ある人との話は。

「貴方が他の人を自分の親と間違えてしまい、拳句『私のお母さんはもっときれい。』と言って、物凄く気まずい空気が流れたりもしたそうですね。」

「あ、あうう・・・。」

こんなことも聞けたし。

「さらに！、物凄く綺麗な人とお世辞にも美形とは言えないカップルを見て」

「わー！？

もう許してください！

何でも言うこと聞きますから！」

涙目で口を塞いで来た。

楽しんだのもう止める。

思わぬ収穫もあったことだし。

「その言葉、忘れないでくださいね？」

「うう、分かりました・・・

無理なお願いは止めて下さいね・・・？」

「ええ、そんなことにはならないと思いますよ、多分。」

この約束（かなり強引なものだが）が、いつか役に立つ日が来ないことを祈る。

恐らく、俺が願うことなんて

「こんなところで話むよりも、さっさと中に入った方がいいのではないでしょうか？」

後もつかえてるようですし。」

「あ、それもそうだな。」

オルハウストにそう言われて後ろを見ると、大勢の人が迷惑そうにしていたので言葉に従う。

門の前に行き、衛兵にオルハウストが話しかける。

オルハウストの姿を見て、すっかり固まっていたが。

その兵士にオルハウストは、冒険者のカードとは別のカードを取り出して渡す。

「失礼。」

カズルエル家当主、オルハウスト・アル・カズルエルです。

王の命による任務を達成し、本日帰還致しました。

門の通過の許可と、城への報告をお願いしたい。

「任務は無事達成、これより城へ赴く」と。

「はい!？」

こ、これはどうも。

おい!、急いで城に使者を出せ!

失礼、お疲れ様です、門を通過してくださって結構です。」

初めは呆気にとられていたものの、予想以上に早く我を取り戻して部下に指示を出す。

戦士の国と言われるだけあって、かなりの練度だ。

「ありがとうございます。」

行きましよう皆さん。」

「あ、あの。」

そちらのお2人は一体?」

「こちらは私の、ひいては国の客人です。」

決して怪しいものではありませんので、気にしなくて結構ですよ。

「はっ！」

了解致しました。」

敬礼した兵士に見送られながら、門をくぐる。
歩きながら会話を交わす。

「やはり有名人なんだな。」

あんな末端の人間にまで知られているとは。」

「そりゃあ仮にも『四剣』だからね。」

基本的にはあんな扱いだよ。」

でも、それもずっと続くと嫌気がする。」

だから、君のような存在はとても嬉しいんだ。」

まったくの邪気を感じられない笑みを向けてくる。

その笑みを、とても眩しく思う。

この国は実力主義を謳ってはいるが、はっきり言ってそれがまとも
に機能してるとは言い難い。」

身分の違い故の、訓練の密度の違いも当然あるのだろうが、それに
したって上を貴族が占め過ぎている。」

つまり、貴族と平民による確執があるのだろう。」

貴族が平民が上の地位を占めるのを嫌うのはよくあることだ。」

この辺は後で実際に確かめられそうだから、今は細かい推測は置い
ておこう。」

ここで重要なのは、そのような環境にありながらこの男がそれらに
まったく毒されていないことだ。」

醜い腹の探り合い、他者への嘲笑、権力への陰謀、それらをこの男は間近で見えてきたはずなのに。

それは、一体どれだけ素晴らしいことか。

それが、一体どれだけ尊いことか。

汚いものを見てきたのに、この男は自分を保ち続けて、俺にとって眩しすぎて目を逸らしてしまいそうなことを平然と口にする。

俺は、綺麗事を抜かす奴が嫌いだ。

ただ口先だけものを言い、自分は何もしない、変わらない、それで自分が正しいと思いついてる。

うっかり、殺して足蹴にして唾を吐き捨ててしまいそうになる。だが、それに当てはまらない条件がある。

この世の『負』を知り、それでも意見を曲げない者

自分の意見がどういうものかを正しく理解し、それが夢物語であることを理解し、その上で理想を語る者。

俺の理想の人間像の1つ。

それが今、目の前にあるのだ。

(さしづめ俺は、街灯に引き寄せられた羽虫と言ったところか。)

眩しさに酔い、自分を見失いそうになっている愚か者。

それでいい。

愚かでもいい。

理想の姿を目の当たりにし、理想を持ち続ける。

何時の日か、己の理想、願い、目的を実現するために

「その言葉、ありがたく受け取っておくよ。」

目を細めながらオルハウストを見つめ、言う。

その姿を、目に焼き付ける。

それを糧とするために。

「ところでオルハウスト様。

貴方は城へ報告に行かなくてもよろしいのですか？

先ほどそのようなことを言っておりましたが。」

「あ。」

セフィリアさんがそう言うと、彼が思い出したようにつぶやく。

「そういえば着いたら寄り道せずに来いと言われてたんだった。

うーん、だけどまだ話はしたいし……。」

頭を両手で押さえ、考え込んでいる。

ところどころでこいつはこんな子供っぽい仕草をする。

(・・・前言撤回。

ここまで純粹すぎるのは行き過ぎだ。)

ちよっと自分の中でオルハウストの評価を下方修正する。

それでも、以前かなり高いのだが。

だが、流石に公私を分ける分別くらいはつくようだ。

「仕方がない、私はこれで失礼しますね。」

予定では、謁見は明日の昼となっておりますので、その時にまたお会いしましょう。」

それまで、王都「デルトライン」をじっくりお楽しみください。」

多少申し訳なさそうな顔で、軽くおどけながら言う。

そしてここからでも見える、巨大な城へと歩いて行った。

（さて、どうするか。）

とりあえずまず。

「とりあえず貴方の服とか買っておきますか。」

その服はもう汗でべたついてるでしょうし。」

「う、お願いします・・・」

マラソン級の距離を走って、それを1日中着たのだ。

相当汗を吸ってることだろう。

セフィリアさんは顔を赤くして俯いた。

別に俺のせいだから気にしなくていいと思うんだがな。

「あれなんかどうですか？」

貴方に似合うと思います。」

商店街をセフィリアさんと歩く。

流石王都だけあり、「ルッソ」とは比べものにならない規模だ。その中で、あるものを見つけ、冗談交じりで言ってみた。

「悪ふざけは止めて下さいね？」

案の定、怒りが籠もった笑みで返された。だがよく見ると、若干頬が赤くなっている。

「いや、半分は本気だったんですが。

実際に似合うと思いますよ？」

「完つ全にTPOにあつてないでしょうが！」

「ですよね。」

俺が指した先にあつたのは、ウエディングドレスだった。

この人が来たら、青い髪と白い生地が物凄く合いそうだったんで、似合うという点では本気で言ってみたのだ。

尤も、俺としても「ではそうしましょう」とか言われたら非常に対処に困ったのだが。

しかしこんなことを言ったのにも理由があり。

「ディック殿が貴方の晴れ姿を早く見たいってうるさいんですよ。だからちよつと着て、その姿を見せてあげれば少しはおとなしくなるんじゃないかと。」

毎回あう度に愚痴を聞かされる身にもなっってくださいよ。」

「あの人はまたそんなことを・・・！
何故そんなに気にするのよ。」

何故って、そりゃあ。

「いき遅れになりそうだからじゃないですか？」

「はっ！？」

俺が素直に思ったことを言うと、胸を押えて崩れ落ちた。

今のこの人の年齢は21歳。

この世界では、一般的に20前、遅くとも23歳には結婚するのが普通らしい。

つまり、この人はもう少して適齢期を過ぎてしまつのである。

「仕方無いじゃないですか・・・」

そもそも私にいい人がいないのだからお爺様が妨害をするからで

「

「貴方のお眼鏡に敵うような人間が今まで居たんですか？」

それは完全に言い訳だったので、ちょっと意地の悪いことを言わせてもらった。

確かにそれも要因の1つであるだろうが、あの老人がこの人が本当に好きな人が居たら、本人の幸せを優先させるだろう。

あの人は、セフィリアさんによってくる馬鹿どもを追い払うためにあんなことをしていただけなのだ。

だから俺は、反論を封じる意味を込めてこう言ったのだが。

「・・・・・・・・」

何か、じつと見られてる。
恥ずかしげな表情とともに

（不味い。

地雷踏んだ。）

失敗した。

この人が恋愛感情に近い感情を俺に抱いていることは理解していた。
だが、それはあくまで「近い」と言うものであり、本格的なものではなかった。

そこに俺はこんな言い方をしてしまった。

人は、指摘されることに弱い。

よく分からないものに出くわした時、人は安心感を得るために人の意見に縋ろうとするのだ。

今のようなもの言いをしたことで、セフィリアさんが抱いている「好意よりの親愛」を、「恋愛」と誤認させてしまったかもしれない。

この失敗を、どうごまかしたものと、なんとなく居心地の悪くなった空気の中で考えていると。

「申し訳ありません！

どうかお許してください！」

切羽詰まった叫び声が聞こえた。

その方向を向いてみると、子連れの女性が、鎧を着た騎士風の大男に必死に謝っていた。

それを人々は遠巻きに見ている。

その視線にあるのは、男に対する憤りと、恐怖。

「あの人は・・・オルダイン様？」

「お知り合いですか？」

正直、話を逸らすことが出来たことにホッとしていた。

そんな俺の様子に気付かぬまま、セフィリアさんは言葉を続ける。

「はい。」

あの方はサイデンハルト家の長男、オルトバーン様の兄君であるオルダイン様です。」

「なんだか最近、「四家」の人間ばかり見ますね。」

一応彼らって、ほんの一握りしかないはずなのに。」

そんなことを呆れながら言うと、セフィリアさんに苦笑された。

「貴方はどうも、厄介ごとに好かれるようですね。」

本来ならば、年に1度会えばいい方の彼らに連続で会うなんて、相当ですよ。」

余計なお世話だと言いたい。

尤も、厄介ごとは大歓迎だが。

「しかし、貴族には「オル」と付く人が多いんですか？」

オルトバーン、オルハウスト、拳句にオルダインって。」

「知らなかったんですか？」

「オル」というのは「黄金」を表すので、金の髪を持つ貴族の方が良くつけるんです。」

ですからそれなりに多いですね、もちろん全員ではありませんが。

「(そうだったのか。

本ではそんなところまでは見てなかったから知らなかった。)

しかしあの男。

「随分嫌われてるようですね。

周りからあんな目で見られるなんて。」

セフィリアさんは、暗い顔をして答えてくれた。

「あの人は、素行が悪いことで有名なんです。

別に汚職とかを行ってるわけでは無いんですが、いえ、むしろその方が性質が悪いかもしれません。

平民によく暴力を振るってるんですが、決して深手を負わせることも無く、そこまで騒げるような内容でもないの、王まで話が伝わらないことが多いんですよ。

ですからお咎め無しになることも多く、皆迷惑してるんです。」

「そりゃまた。

弟さんとは正反対ですね。」

恐らく、弟への劣等感からの八つ当たりなんだろうな。

本人は殴る理由が出来れば何でもいいのだろう。

これは、使えるか？

そんなことを考えてたら、オルダインが女性の子供らしき少年に向かって足を振り上げた。

どう見ても蹴ろうとしている。

「グランドさん!？」

背後から呼ぶ声が聞こえるが、無視。

一足で彼女らの元へ割り込み、その蹴りを受け止める。周りからどよめきが巻き起こる。

「何だお前は？」

不機嫌そうに言ってくるオルダイン。

「何故蹴ろうとした？」

いや、そもそも何が原因でお前はそんなに苛立っている？」

「無礼な口を聞くな平民風情が。」

まあいい、恐れ多くも教えてやる。

この平民どもが、私に不快な思いをさせたのだ。」

「不快？」

俺にはこの2人がそんなことをする人間には見えないがっ!」

掛け声とともに、掴んでいた足を押す。

男は踏鞴を踏んだが、転ぶようなことは無かった。結構残念。

「貴様！」

私はサイデンハルト家の長男だぞ、その私に」

「話続けるよ。」

彼女らが何をしたというのだ？」

何かを喚こうとしたオルダインに言葉をかぶせてやると、怒りを顔に見せる。

それでも一応は説明してきた。

まったく、何の説明にもなっていなかったが。

「笑っていたのだ。」

「は？」

何言ってるんだコイツ？

「笑っていたのだよこいつらは。」

私が仕事で嫌な気分になっていたにも関わらず。

底抜けに楽しそうに笑って、私を不快にさせたのだ。

これを罪と言わずしてなんと言う。」

まだこの男は偉そうにべらべらとくっちゃべってたが、俺はそんなことはどうでもいい。

ああ。

今分かった。

この男は、クズだ。

ならば、何の躊躇いもいらぬ

「合格ー！」

俺がそう言つと、周りが一斉に呆気に取られた。

そのまま続ける。

「おめでとうございます！」

貴方は見事、明日の「生贄」に選ばれました！

今日はぜひとも、おいしいお食事を摂り、ぐっすりと眠ることを
お勧めいたします！

何故なら

言葉を切り、表情を作る。

「もう2度と、そんなことは味わえなくなるでしょうから。」

そこで俺が作った表情を見て、怒りに顔歪んでいたクズが一步引く。
今自分がどんな顔をしているかは分からない。
だが、相当の迫力があるはずだ。

（いやー、良かった。

俺が明日やるうとしてることは、生贄が必要だったんだよな。

それを誰にしようか考えてたんだが、よもやここまであっさりと
見つかるとは。）

困惑してるクズに、最後に告げる。

「明日が貴様の落日だ。

精々今のうちに楽しむんだな。

」

44話 生贄（後書き）

面白いと思ってくだされば是非評価を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2724v/>

異世界の異常者 ~世界よ変われ~

2011年11月26日01時26分発行